Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

明治四十四年八月廿八日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）明治四十四年九月一日發行第一巻第一號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

四十四年九月一日
第一巻第一號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜第一卷第一號内容

そぞろごと（詩）……一……與謝野晶子
死の家（小說）……一〇……森しげ女
百日紅（俳句）……二〇……白雨
生血（小說）……二一……田村とし子
元始女性は太陽であつた（感想）……三七……らいてう
猫の蚤（小品）……五二……國木田治子
影（散文詩、飜譯）……五七……ポオ
陽神の戯れ（戯曲）……六三……荒木郁子
磯のひろ（短歌）……八〇……淑子
七夕の夜（小說）……九三……物集和子
ヘッダガブラ論（飜譯）……一一〇……メレジュコウスキー
表紙繪……長沼智惠子

そぞろごと

與謝野晶子

○

山の動く日來る、
かく云へども人われを信ぜじ。
山は姑く眠りしのみ。
その昔に於て
山は皆火に燃えて動きしものを、
されど、そは信ぜずともよし。
人よ、ああ、唯これを信ぜよ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

すべて眠りし女今ぞ目覺めて動くなる、

○

一人稱にてのみ物書かばや。
われは女ぞ。
一人稱にてのみ物書かばや、
われは。われは、

○

額にも肩にも
わが髮ぞほつるる。
しをたれて湯瀧に打たるるこころもち、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ほとつくため息は火の如く且つ狂ほし。
かかること知らぬ男、
われを褒め、やがてまた譏るらん。

○

われは愛づ。新しき薄手の玻璃の鉢を。
水もこれに湛ふれば涙と流れ。
花もこれに投げ入るれば火とぞ燃ゆる。
愁ふるは、若し粗忽なる男の手に砕け去らば。——
素焼の土器より更に脆く、かよわく。

○

青く、且つ白く、
剃刀の刄のこころよきかな。
暑き草いきれにきりぎりす啼き、
ハモニカを近所の下宿に吹くは懶けれども。
わが油じみし櫛笥の底をかき探れば、
陸奥紙に包まれし細身の剃刀こそ出づるなれ。

○

にがきか、からきか。煙草の味は。
煙草の味は云ひがたし、
甘しと云はば、かの粗忽者
砂糖の如く甘しとや思はん。

われは近頃煙草を喫(の)み習へど、
喫むことを人に秘めぬ。
蔭口に男に似ると云はるるもよし、
唯おそる。 かの粗忽者こそいと多(さは)なれ。

○

「鞭を忘るな」と
ツアラツストラは云ひけり。
女こそ牛なれ、 また羊なれ。
附け足して我は云はまし。
「野に放てよ。」

○

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

わが祖母の母はわが知らぬ人なれど、
すべてに華奢を好みしとよ
水晶の珠數にも倦き、珊瑚の珠數にも倦き、
この青玉の珠數を爪繰りしとよ。
我はこの青玉の珠數を解して、
貧しさに與ふべき玩具なきまま、
一つ一つ兒等の手に置くなり。

○

わが歌の短ければ
言葉を省くと人おもへり
わが歌に省くべきもの無かりき。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

また何を附け足さん、
わが心は魚ならねば鰓を有たず、
ただ一息にこそ歌ふなれ。

○

すいつちよ、すいつちよ、
初秋の小さき篳篥を吹くすいつちよよ。
蚊帳にとまれるすいつちよよ、
汝が聲に青き蚊帳は更に青し。
すいつちよよ、なぜに聲をば途切すぞ。
初秋の夜の蚊帳は水銀の如く冷きを、
すいつちよよ、すいつちよ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

○

油蟬のじじ、じじと啼くは、
アルボオス石鹸の泡なり、
慳貪なる男の方形に開く大口なり、
手握みの二錢銅貨なり、
近頃の藝術の批評なり、
誇りかに語るかの若き人等の戀なり。

○

夏の夜のどしや降の雨、
わが家は泥田の底となるらん、
柱みな草の如く撓み、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

そを傳ふ雨漏の水は蛇の如し。
寢汗の香、かなしさよ。よわき子の齒ぎしり。
青き蚊帳は蛙の喉の如く脹れ、
肩なる髮は鹿子菜の如く戰ぐ。
この中に青白きわが顔こそ
芥に流れて寄れる月見草なれ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

死の家

森　しげ女

今年の梅雨は例年にまして、雨が多かつた。雨ばかりではない。風さへ加はつて、秋のあらしの様になつて、風をきらふ弓子を、厭がらせた。

久しぶりで今日は、晴々とした、好い天氣になつた。丁度日曜日である。毎朝きまつて六時になると起しに來る小間使の初が、日曜日だけは、弓子の室の雨戸さへ、起き出るまでは開けずに置くのである。

弓子は四疊半の化粧部屋へ這入つて、初の持つて來てくれる一ばいの桶の湯と水指の水と空虚のバケツとで、朝の身じまひをする。髪を解かしてかなり手數の掛かる庇髪に結つて、齒を磨く。それから西洋お白粉で薄化粧をして、學校行の着物を着て、袴を穿いてしまふまで、凡四十分程は掛かる。今朝は母あ様が亂れ箱の中に入れて置いて下さつた着物を着た。薄青に白上がりで、匹田の青海波を出した友仙絽縮緬の單へに、長襦袢は肉色無

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

地縮緬の襟を掛けたクリイムの紹縮緬に着物と同じ模樣の友仙てある。帶は白地に銀糸て荒い手綱の出してある、金春式唐織の丸帶である。ぱちんを締めるのに、緩過ぎたり長過ぎたりするのを、幾度も直してゐるうちに、結んだ帶が解けてしまふ。弓子はじれてゐたが、やつとの事て支度は出來上がつた。

茶の間へ出て見ると、自分のお膳が一つ丈出てゐて、初がお給仕に來てゐた。小さい時お父う樣に別れて、一人のお兄い樣は今京都の大學に行つてお出でなので、東京の住まひは、母あ樣と二人切りてある。

「わたし一人なの。そんなに遲いかね。今日一日潰すのだと思つて、ゆうべ十二時迄起きて復習をしたもんだから、すつかり寐過したわ。かあ樣は。」

「福島の奧樣がお出になりまして、お二階に入らつしやいます。」

「福島の奧樣。」

弓子は此間中から度々言ひ込んで來る自分の緣談に違ないと思つた。やうやう學校を卒業する迄は、結婚はさせないと、極めて下さつた母あ樣を、又迷はせにお出になつたのか。誰がおよめになんか行くものか。今日見舞に行く筈になつてゐる、鵠沼て死に掛かつてゐるばあやだつて、およめにさへ行かなかつたら、肺病になんかならずに濟んだかも知れない。內に奉公してゐる間は、風を引いたことも稀てあつたぢやないかなどと思ふ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

弓子は長年自分を育ててくれた乳母が、丁度七年程前に急によめに行つてしまつたのが、不思議でならない。いつまでもお嬢様のお傍におりますと、口癖のやうに云つてゐた乳母が、俄に人の女房になつて、今迄の倍もある大きな丸髷に結つて、お白粉をこて〳〵塗つたのを見たときは、弓子は子供心に可笑しく思つた。

乳母の夫は結婚後間もなく大阪の郵便局へ赴任した。乳母が泣きの涙で弓子に別れてから、もう七年立つた。長い間來る手紙も〳〵、自分の體の弱くなつたことばかりが書いてあつた。とう〳〵二月程前に、子供を連れて、夫に送られて、鵠沼在の實家へ歸つて來た。安心したせいか、汽車の旅に疲れたのか、めき〳〵病氣が重つた。母あ様がお醫者を頼んで、鵠沼まで診察に行つて貰つたが、肺結核のひどいので、お醫者にも見限られてしまつたのである。

此頃は日々お嬢樣々々とばかり云ひ暮らしてゐる。或る日なんぞは便所へも行かれぬやうになつてゐる體で、どうしても一遍東京まで出て、弓子に逢つて來ると云ひ出して、家中を騷した。そこで乳母の兄がおとつひわざ〳〵弓子の内へ來て、母あ様にその話をしたのを、弓子が聞いて、今日執事の山尾を連れて、九時十分新橋發の汽車で、鵠沼へ行く事になつたのである。

弓子は御飯を濟まして、母あ様の二階から降りて入らつしやるのを、新聞を讀みながら

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

待つてゐた。そのうち八時が過ぎたので、二階へ上がつて行つて、母あ様に挨拶して出掛けることにした。

弓子の乘り込んだ二等室は、かなり込んでゐた。連れが男なので話もなく、人形の様におとなしく兩手を膝に載せて、發車を待つてゐた。後れ馳せに、若い一人の紳士が這入つて來て、弓子の眞向ひに腰を掛けた。見るともなしに見合せた紳士の顏は、はち切れさうに肉附いた頰と頰の間に、赤子の口のやうな極く小さい口が附いてゐる。ちよいと見て、弓子は可笑しいと思つた。こんな事が好くあるので、噴き出してはならないと、一しよう懸命我慢してゐる。折々山尾の話し掛けるのに簡單に答へて、只脣を噬んで體に力を入れて我慢してゐる。丁度横濱へ着いた。二三人連の外國人が立ち上がつて車を出しなに、出し拔に赤い薔薇の花束を弓子の手に渡して行つた。弓子は不意の事て、美しい花に氣を取られて、少し可笑しさが薄らいだ。やれ嬉しいと、はつと息を衝く暇もなく、眞向ひの男は空氣枕をかばんの中から取り出して、息を入れ始めた。空氣枕は段々ふくらむが、頰つぺたは小さくはならない。却てますます〳〵ふくれて來て、今にも枕も頰も一齊にはち切れさうに思はれる。弓子は目を瞑つて見まいと思つたが、幻のやうに空想の畫き出す頰と枕とは、實際より一層ふくらんでゐる。殆ど停止する所を知らない。とう〳〵ぶつと噴き出して、ハンケチで顏を掩つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

藤澤に着いたのは十一時少し過ぎてあつた。停車場前の茶屋で休んで、弓子は東京から持つて來たサレドキチッや西洋菓子や果物を取り出して食べて、山尾にも分けて遣つた。結核の病人のゐる所で、物を食べない用心をして、こゝでいろんな物を食べたのである。

そこで車を傭つて、道のでこぼこした田舍道をがた〳〵ゆられて出掛けた。線路を通り越して横へ曲ると、まだ餘程遠いのに、乳母の家の大きな松の木が見える。弓子は子供の頃兩親に連れられて乳母の家へ來たことがある。松の木の多い鵠沼村でも、此松は優れて大きく高いので、乳母は自慢してゐたのである。傍に少し背の低いのが二本並んでゐてそれに注連繩が張つてあつた。此の松が元からある、その下へ乳母は、弓子の家を下がる時貰つた一時金と、それ迄の貯金とを合せて、二階建ての家を立てた。その頃乳母の云ふには、不斷は兄に貸して置きますが、海水浴にお出になる時には、婆あやの內へお出下さいと云ふことであつた。今思へばあの家は乳母が死所に立てた樣なものだ。弓子はさう思ふので、乳母の家へ近寄る心持が、いつか遊びに來た時とは丸で違ふ。

松の木は目の前に見えてゐても、がた〳〵車が乳母の家に着くまでには、かなり時が立つた。最初に弓子を見附けたのは、土間で爲事をしてゐた乳母の母親で、それが飛んで出て來た。そして「好く來て下さいました」を續けざまに言つて、二階建ての乳母の家へ案內した。戶口の內は廣い土間である。そこへ這入つて覗き込むと、六疊と八疊との下座敷

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

があつて、その奧の方の間に自分の知つてゐた其人とは思はれぬ樣に瘦せ衰へた乳母がゐた。

乳母は弓子の來るのを知つてゐたか起き上がつてゐた。そして「お孃樣ですか」と云つたぎりで、泣いてゐる。それを見ると、弓子の目からも涙が出た。これは全く豫期してゐない涙であつた。けふ死に掛かつてゐる乳母を見舞ふと云ふことは、弓子が爲めに果さなくてはならない義務に過ぎなかつた。そして乳母になんと云はうかと思つて考へるのが苦になつた。泣かれようなんぞとは思はなかつた。その目に涙が出た。弓子は重荷を卸したやうな氣がした。もう別に何も言ふ必要はないのである。

暫くハンケチを顏に當ててゐた弓子は顏を上げて云つた。「ばあやお土產があつてよ。これはかあ樣とわたしとで拵へたのよ。掛けて御覽。」

紫絣の銘仙に、クリイム色の絹の裏を附けた下掛である。それを乳母に着せ掛けて遣つた。

「それからばあやの食べられさうなお菓子を色々持つて來てよ。牛乳の中へ入れる樣にと思つて、ココアもあるのよ。それから婆あやが寢てゐて眺める樣にと思つて、造花を持つて來たの。まだ稽古し立てだから隨分まづいわよ。ほら、つづき茨に菊に桔梗に朝顏に蓮。これて習つた丈みんなよ。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「お出を願ひました上に、色々頂戴物をいたしましては濟みません。早く直つてお禮に東京のお邸へ伺ひたいと思ひますが。」

十日持つか持たぬかだと、醫者に宣告せられてゐる、窶れ果てた乳母を、弓子はどう慰め樣もなかつた。

乳母の枕元には、弓子のかぶきりで被布を着た寫眞が飾つてあつた。その後も庇髮やら高島田やら、幾らも寫眞を送つた筈だが、乳母にはやつぱり自分が手なづけた頃の弓子が戀しいのと見える。弓子の寫眞の隣に六つ許の、目の醒める樣に美しい男の子の寫眞が並べて立ててある。乳母には今年此位の年頃の男の子が出來てゐるのだが、寫眞は乳母の子にしては餘り美し過ぎる樣である。

「この子供は婆あやの子なの。なんといふ好い子だらう。」

「大阪に居りました頃、好く御主人のお子樣と人に間違へられましたが、やつぱりお孃樣を大切にお扱した癖が拔けないと見えると云つて、好く宅でも笑ひました。」

乳母は寂しい笑顏をした。

「子供は連れて來てゐるのね。」

「はい。今しがた母屋の人達が宿へまゐりますのに附いて行きましたが、もう歸る頃でございます。お孃樣がお嫁にいらしやるまでにはあの子が十四になります。それ迄はわたく

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

しは石にかぶりついても死にはいたしません。」
乳母の青い顔は薄赤くなつた。そして目が異樣に光つてゐる。詞とそれを言つてゐる人との矛盾とでも云はうか、何か不合理なやうな處のあるのが、弓子には不快に思はれた。
次の間では山尾が乳母の母親に頻に御飯の支度をことわつてゐる。それを聞いて弓子は云つた。
「病人のあるところへ來て騷がせては濟まないと思つて、途中で食べて來たの。ほんとよ。」
「わたくしが病氣でないと、詰まらない物でも、お孃樣のお口に合ふ物を拵へますのに。それでもお薩の新を先程掘らせたのが、ふかしてある筈でございます。どうぞあちらで少しでも召し上がつて戴きたうございますが。」
「薩摩芋は相變らず結構よ。では御馳走になつて來るわ。」
薩摩芋なら皮があるから好いと弓子は思つたのである。そして山尾と一しよに母屋の奥座敷へ行つた。切角支度をしてあるのだからと云つて、山尾は色々の物を一人で食べてゐる。給仕に出て來た母親は、病人の事を云つては泣く。それを山尾が旨い事を言つて慰めてゐる。母親は涙がばら〳〵こぼれるのに、兩手を顏に當てるでもなく前掛で拭くでもなく、全くの手放しで泣くのである。弓子はこの今迄見たことのない泣き方を妙だと思つて、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

皺だらけの老人の顏を見てゐたが、ふいと可笑しくなりさうになつたので、さつき汽車の中の空氣枕の紳士を笑つた樣な事になつてはならないと、唇を噛んで餘所見をしてゐたが、とう〱席を遁れて、病室へ歸つて行つた。

丁度乳母の子供が歸つて來てゐた。寫眞にもまして美しい子である。乳母はくれ〲も母を失ふ此子の事を弓子に賴んだ。

後に乳母が亡くつてから、此子は京橋で待合を出してゐる、父親の妹の内へ引き取られた。その家へ遊びに來る羽左衞門や高麗藏が役者にしたいから、養子にくれろと、度々望んだが、子供が聽かなかつたさうである。

山尾に促されて、弓子は歸支度を始めた。實は「死」の家を離れるのが嬉しかつた。そして堪へがたさうに名殘を惜む乳母を見て、自分を一瞬間不滿足に感じた。

乳母は緣側迄這ひ出て來て、見送つた。もう四時近いのである。片蔭がすつかり出來て、一面の靑い畑の上を涼しい風が吹いてゐる。車の廻りには近所の子供が珍らしさうに集まつて來た。「東京の女は妙だなあ。夏首卷をしてゐらあ」なんぞと顏を見て云ふ。きたない子等の中に乳母の子は別物の樣に美しく見えた。

弓子は「さよなら」と云つて車に乘つた。鼻を垂らして、赤いくしや〱した目をした子供達も聲を合せて「さよなら」と云ふ。乳母の家の人達はみんな出て來て見送つた。車はが

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たく／＼と細いくね／＼した道をうごき出した。弓子が振り返つて見ると、乳母はどうして登つたか二階の窓から幽靈の樣な顏を出して、こつちを見送つてゐる。弓子は「死」の影が自分に附いて來るやうな心持がした。

――完――

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

百日紅

白雨

耳聾いて愚なる子や百日紅

蟬ねらふ鳥に智あり雲の峯

鳴神や今蛟龍の雲を得て

薫風や五山にまかる朝の人

遠雷を釣らて苫屋に人語など

腑の病遠雷きくも夢心地

立秋や惱み覺ゆる虫の毒

松原に網あむ漁夫や雲の峯

胡軍過く蹕塵千里雲の峰

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

生血

田村とし子

一

安藝治はだまつて顔を洗ひに出て行つた。ゆう子はその足音を耳にしながら矢つ張りぼんやりと椽側に立つてゐた。紫紺縮緬をしぼつた單衣の裾がしつくりと踵を包んで褄先がしやくれて流れてゐる。

昨夜寢るとき引き被いだ薄ものをまだ剝ぎ切らない樣な空の光りの下に、庭の隅々の赤い花白い花がうつとりと瞼をおもくしてゐる。

ゆう子の椽から片足踏み出した足の裏へ、しめつた土から吹いてくる練絹のやうな風が、そつと忍ぶやうにしてさわつてゆく。

ゆう子は足許の金魚鉢を見た。ふつと、興の湧いたやうな顔をすると其所にしやがんて、

「紅しぼり――

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

緋鹿の子――
あけぼの――
あられごもん――」

と一とつ〱指でさして金魚に名をつけた。明け方の空が鉢に映つて、白い光りがところどころ銀箔を落したやうに水のおもてをちらつかしてゐる。緋鹿の子がお俠に水をきつてついと走つた。

ゆう子は鉢のわきに並べてあつた紫のシネラリヤの花を、一とつ摘んで水の中にこぼした。眞つ赤な――まだ名を付けなかつた金魚が、小さなお壺口を花片にふれると、すぐ驚いたやうに大きな尾鰭を振り動かして底の方へ沈んでゆく。銀箔があちこちと、ちろ〱と搖れた。

ゆう子は立てた膝の上へ左の腕をのせて、それへ右の肱をかつて掌で額をおさへた。垂れた頭の重みに堪へないやうに手首が他愛なくしなつて見へる。眼尻のところへ拇指があたつて眼が險しくつれた。

――緋縮緬の蚊帳の裾をかんで女が泣いてゐる。男は風に吹きあほられる伊豫簾に肩の上をたゝかれながら、町の灯を窓からながめてゐる。男はふいと笑つた。そうして、

「仕方がないぢやないか。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と云つた。――

生臭い金魚の匂ひがぼんやりとした。何の匂ひとも知らず、ゆう子はぢつとその匂ひを嗅いだ。いつまでも、いつまでも、嗅いだ。

「男の匂ひ。」

ふと思つてゆう子はぞつとした。そうして指先から爪先までちり〳〵と何かゞ傳はつてゆく樣に震へた。

「いやだ。いやだ。いやだ。」

刄を握つて何かに立向ひたい樣な心持――昨夜からそんな心持に幾度自分の身體を掴みしめられるだらう。

ゆう子は片手を金魚鉢の中にずいと差入れて、憎いものゝやうに金魚をつかんだ。

「目ざしにしてやれ。」

然う思ひながら、素て着た單衣の襟を合はせた金のピンをぬきながら、掴んだ金魚を水から上げた。白金の線が亂れみだれるやうに硝子鉢の水がうごく。

胡麻粒のやうな目の玉をねらつてピンの先きを突きさすと、丁度手首のところで金魚は尾鰭をばた〳〵させる。生臭い水のしぶきがゆう子の藤鼠色の帶へちつた。金魚をピンの

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

奥へよせる時、ピンの尖きでゆう子は自分の人差指の先きを突いた。爪ぎはに、ルビーのやうな小さい血の玉がぽつとふくらんだ。

金魚の鱗が青く光つてゐる。赤いまだらが乾いて艶が消へた。金魚は上向きに口をぽんと丸くあけて死んでゐる。花の模樣の踊り扇をひろげた樣だつた尾鰭は、すぼんだやうにだらりと萎れついてさがつてゐる。

ゆう子は其れをしばらく翳して見てゐたが、庭へ抛り投げてしまつた。丁度飛石の上へ乘つた金魚の骸へ、一と瞬きづゝ明けてゆく空の光りが、薄白く金魚をつつんでは擴がるやうに四方へちらけてゆく。

ゆう子は座敷へはいつた。まだ消さずにある電氣の光りが薄樺色の反射にみなぎつてゆう子の額を熱ばませる。ゆう子は窓の下の大きい姿見の前へ行つてぴつたり座ると、傷づいた人差指を口に含んだ。――ぢりりと滲み出すやうに涙が兩の眼をあふれた。

ゆう子は袂を顔にあてゝ泣いた。泣いても、泣いても悲しい。然し、自分の頰をひつたりとなつかしい人の胸に押あてゝゐる時のやうな、そんな甘つたるさが涙に薄すりと色を着けてながれる。

「いま指を含んだとき、自分の指に自分の唇のあたゝかさを感じた、それが何故かうも悲しいのであらう。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ゆう子は然う思ひながら、喘ぐやうに泣いた。

いくらでも泣ける。ありたけの涙が出きつてしまふと、ふつつと息が絶えるのぢやないか、息が絶へやうとして出るだけの涙が流れつくすのぢやないか。と思ふほど。

泣くだけ泣いて、涙が出るだけ出て、蓮花に包まれて眠るやうに花の露に息をふさがれて死ぬるものなら嬉しからう。涙の熱さ！たとへ肌がやきつくす程の熱い涙で身體を洗つても、自分の身體はもとに返らない。もう舊に返りはしない。——

ゆう子は唇を嚙みながら、ふと顔を上げて鏡の内を見た。物の形をはつきりと映したまま鏡のおもての光りが搖がずにゐる。紫紺の膝がくづれて赤いものが見えてゐた。

ゆう子は其れを凝と見た。そのちりめんの一と重下のわが肌を思つた。

毛孔に一本々々針を突きさして、こまかい肉を一と片づゝ抉りだしても、自分の一度侵つた汚れは削りとることができない。——

顔を洗ひに行つた安藝治が手拭をさげてかへつて來た。ゆう子を見るとだまつて隣りの部屋へはいつて行つた。何時の間にか女中が來てゐたと見えて、女と話する安藝治の聲がした。

女中は直ぐ床を片付けに入つて來た。ゆう子を見ると笑ひ顔で挨拶したけれど、ゆう子は振向きもしなかつた。そうして、根深く食ひこんだやうな疲れた夢の覺めぎはのやうに、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

力のない身體をだらしもなく横座りしながら、頭をふつて小供のやうに啜り上げた。
　硝子戸を開け閉てする宿屋の朝の掃除のやかましい音がひゞいてくる。電車のおとがぎひと鳴つて通つたとき、ゆう子はこの宿が大通りの内に家並を向けてゐることを思ひだして恐しくなつた。此家を出るのに何所から出たらいゝだらう、女中に賴んで裏口から出して貰はうか、ゆう子はそんな事を考へながら袂から半紙をだして、細く引き裂いて傷ついた指を卷いた。

二

　二人は水色の洋傘と生つ白いパナマの帽子をならべて、日盛りの町をあるいてゐた。まるで强烈な日光にすべての色氣を奪はれ盡してゞもしまつたやうに、着くづれた皺だらけの二人の着物にあざやかな色彩も見えなかつた。熱い日に叩き立てられるやうに、やくざな恰好をして二人は眞晝の炎天をたゞ素直にあるいてゆく。燒き鏝を當てられるやうに二人の頸元はぢり／＼と照らされる、白い足袋はもう乾き切つた埃で薄い代赭色に染まつてゐる。
　二人は路次をはいつた。
　狹い庇間の下を風が眞つ直ぐに通して、地面が穴の底のやうに濕つてゐる。井戸の向ふ角の家の眞つ暗な土間で、汚れた手拭を頸に捲きつけた女が機を織つてゐた。二人は突き

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

當りの石段を上つて行つた。上り切ると、ゆう子は柵のところへ行つて向島の堤をながめた。

河も堤も熱さにうんざりしたやうに、金色の光りを投げだした儘何の影も動かさなかつた。透き間もなく照りこんだ夏の日光を、彈き返すやうなトタン家根の上に、黑い煙りが這ひ付いてる暑苦しい町並を眼の先に見つけると、ゆう子は直ぐ眼を眩しくさせて日蔭の方を振返つた。安藝治は敷石の上に立つて、社の前に鈴をがら〳〵云はせてゐる雛妓らしい娘の後姿を見てゐた。

聖天の御堂の奥は黑い幕をはつた樣に薄暗い。ところ〳〵器物の銀の色が何かの暗示のやうに、神秘めいて白く光つてゐる中に、蠟燭が大きな燭臺の輪をめぐつて何本も上下左右にちろ〳〵と灯つてゐる。それが丁度、今の炎天を呪ふ祈りの灯のやうに見える。荒行で斷食した坊さんが眼にだけ一念をひそめた輝きのやうな光りを、よわ〳〵した蠟燭の焰の先きに一とすぢ閃かしてゐる。

其所に二三人の人の影が見えた。

二人は表の石段をおりた。ちつとも日蔭のない照りはしやいだ通りは、燒けた銅板をはり詰めたやうに見る目も吐く息も切ない。ゆう子は洋傘を低くさした。

「もう別れなければ。もう別れなければ。」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ゆう子は幾度も然う思つた。男と離れて、昨夜の事を唯一人しみ〴〵と考へなければならないやうな焦慮つた思ひもする。けれどゆう子は何うしても自分から男へ口がきけなかつた。兩手も兩足もきつい鐵輪をはめられたやうに、少しも身體が自由にならなかつた。

「自分に蹂躪された女が震へてゐる。口もきゝ得ずにゐる。そうして炎天を引ずり廻されてゐる。女は何所まで附いてくるつもりだらう。」

だまつてる人は其樣ことを考へてゐるのぢやないかとゆう子は不意と思つた。ゆう子はそつと額の汗をふいた。

いまの雛妓らしい娘が二人を通り越してとつとと歩いてゆく。繪模樣の朱の日傘の下から、俯向いて衣紋をぬいた細い頸筋が解けそうに透き通つて白々と見える。荒い矢羽根がすりの紺すきやの裾掛けが、眞つ白な素足をからんではほつれ、からんではほつれしてゆく。貝の口にむすんだ紫博多の帶のかけがきりりと上をむいてゐる。

薄い長い袂が引ずるやうな、美しい初々しひ姿をゆう子はぎらつく空の下でしみ〴〵と眺めた。そうして羨しかつた。かうして昨夜の身體をその儘炎天にさらして行く自分には、日光に腐爛してゆく魚のやうな臭氣も思はれた。ゆう子は自分の身體を誰かに摘みあげて抛り出してもらい度いやうな氣がした。

二人はだまつて歩いて行く。廣い通りが盡きると、狹い裏通りへまがつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

赤い風鈴を下げた氷屋が葭簀のかげを濡らしてゐる。ちやん／＼の繻袢一枚て、黒い腕をだした女が小供に義太夫を敎へてゐるのが、表からすつかり見えた家があつた。椽の低い小間物店から、熟んだやうな油の匂いがした。安藝治が先きに立つて、蕎麥屋の裏から公園へ拔け道した。

きつい日に照りつけられて、阿彌陀堂の赤い丹塗りの色が土器色に變つて見へた。龍頭觀音の噴水がぴたりととまつてゐた。如露の水ほども落ちてゐなかつた。炎天に水を乾しつくされ、銅像の全身をきら／＼と焦きなぶられて高いところに据へられた觀音の立像を見上げてゐると、ゆう子は頭の髮の毛を火の炎でやき拂はれるやうな氣持がした。

潮染めの浴衣を着て赤い帶をしめた、眞つ白な顏をした女たちが、汗の足にまつはり付いたやうな浴衣の裾のわれ目から赤い蹴出しをちらつかして通つてゆく。肌をぬいて繻袢一とつになつた男が扇子を使ひながら通つてゆく。水の出ない噴水のまわりにもいろ／＼な人が集つてゐた。

二人は然うした人だちにおべ／＼とながめられた。安藝治はそれを厭はしさうにして目を避けてゐた。ゆう子は然うした卑しい表情で自分たちを見て行く人と、今の自分と云ふものの上とにそれ程の隔だたりがあるやうに見へなかつた。いくらでも覗きたいほど自分を見せてやれと思つた。どうせ自分は、その人たちには珍らしくないたつ張り衒つた肉に

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

包まれてるやうな人間だと思つた。

安藝治はまた歩きだした。ゆう子は何となく自分の身體を何かに投げかけたいやうな氣がした。太たことが云つて見たいやうな氣がした。然し矢つ張り男に口をきくのはいやであつた。

花屋敷の前の人混みを通つて、玉乘りの前までくると安藝治は、

「はいつて見やう。」

と云つてゆう子に構はずづん／＼入らうとした。ゆう子は默つて隨いてはいつた。

高い小屋がけの二階が眞つ暗だつた。柱も薄緣も蒲團も、寐汗でぬれたものを摑むやうな、粘つた濕り氣をふくんでゐる。

二階にはまばらに五六人ほど人がゐた。その人たちがみんな、叉と見付け得られない寶ものに執着したやうな顏付をして、手欄にしつかりとつかまつて下の演伎をながめてゐる。安藝治はさも居やすい所を見出したやうな樣子で、薄い蒲團を腰の下に入れた。そうしてゆう子の顏を見て微笑した。

何か鈴のやうなものがから／＼となつた。肉色の襯衣を着た男の子が、太い聲で次ぎの演技の口上を云つてゐる。外に垂れた廣告幕が少し上つたり下つたりする度に、表に立つた仰向いた人の顏がかくれて舞臺が薄暗くなる。小さな銀杏返しに引つ詰めて結いた、赤い

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

顔におしろいを塗つた女の子が桃色の襯衣を着て兩手を兩腋に挾んで四五人立つてゐる。それが紅白で綯つた輪をもつて玉に乘つてあるきだした。

輪を足から手へくゞらせたり、肩へ抜かしたりしながら乘つた玉をまわしてゆく。その白粉のついた小さい耳のわきがゆう子は悲しかつた。ゆう子は後の、棧敷のやうな高いところへ行つて其所へ腰をかけながら、塗骨の扇子を帶からぬいた。

扇ぐときに生ぬるいやうな香水の匂ひがなつかしく泌みる。外へ垂れた幕がわづか上がる時、其所に群集した人の頭から後の池の面へかけて、投げつけたやうな鋭い晝の光りがゆう子の目にぱつと映る。演伎の間々にその藝を演じる娘たちや大きな男たちが、だまつて茫然とその外の群集を見てゐるのが、薄暗い小屋に倦怠の氣がしみ通つてゆく樣な氣がした。

ふと氣が付くと淺黄の袴をはいた振袖の娘が舞臺に現はれてゐた。大きなふつさりした潰しの島田に紫の鹿の子がかゝつてゐた。

その娘は臺の上に仰向に寢て足の先で傘をまわした。眞つ白な手甲が細い手首を括つてゐた。臺の兩脇に長い袂が垂れてゐた。窄んだ傘を足でひろけて、傘のふちを足に受けてくる〳〵と風車のやうにまわしてまわしぬく。その脛當ても眞つ白かつた。そうして小さな白足袋――淺黄繻子の男袴が時々ひだを亂して、垂れた長い袂が搖れる。その時の下座

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の三味線の、糸を手繰つては縺らせ、縺らせては手繰りよせるやうな曲がゆう子の胸をきつと絞つた。

娘は臺から下りるとにつこり笑つて會釋しながら直ぐ奥へ入つてしまつた。髭がつぶれてゐた。熨斗目の長い袖が目に殘つた。安藝治は他の人のやうに手摺りに縋りついて下を見てゐる。その細い頸筋をゆう子はぢつと見つめた。女の子の足の上へ澤山に桶を積み上げて、その上へのせた天水桶の中へ男の子がはいつたり、水藝をやつたりまだ〳〵幾つもそれに似たことを幾人もの子が代る〳〵やつてゐる。ゆう子は倦みつかれて自分の身體が汗の中へ溶け込んでゆくやうな氣持がした。自分は何か悲しまなければならないことがあつたのにと思ふ傍から、

「何うにでもなれ。何うにでもなれ。」

と云ひ度い氣がする。何所まで落ち込んで行つたところで、落ち込んだ先きには矢つ張り人の影は見える。――と思つてゆう子は小屋の中の人たちがなつかしかつた。淺黄繻子の男袴――それがゆう子の眼先をはなれなかつた。

安藝治は演伎が番組を繰り返して同じ事をやる樣になつても歸らうと云はなかつた。ゆう子もこの小屋を出たくはなかつた。折角暗い巣を見付けながら、又明るい光りを眞面に浴びるのは辛かつた。いつまでも、夜るになるまで居られるものならかうして居たいと思

Digitized by Google	Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つた。ゆう子は高いところに腰をかけて何も考へる力もなく、唯ぼんやりと半分は眠つてゐた。

蒸すやうな、臭い空氣が、時々ゆう子の身體を撫でまわしてゆく。ばた〳〵とまばらな拍手が下の土間の方から、氣の無い響きを持つてくる。その間にゆう子はふと、かさつと云つた羽搏きのやうな音を耳近く聞いた。

うつとりしてゐた瞼がかつきりと反つたやうな氣がした。ゆう子は後を見まわしながら遂立上つだけれども、何も見えなかつた。

後向きになつて、ゆう子は煤けた柱から、汚れが垢のやうに積つた薄縁をぢつと見た。ふと、その後の羽目板に、大きな魚の尾鰭のやうな黒いものの動いてるのが目に付いた。ゆう子はぢつとして其の動くものを眺めてゐた。動かなくなるとゆう子は扇子でその黒いものをぢつと抑へて見た。扇子をひく儘にその黒いものがだん〳〵羽目板の外へ引摺られて出てくる。何とも付かず一尺ほど引きてた時、その輪廓をぐるりと見て——それが蝙蝠の片々の翼だと知れた。

ゆう子はぱたりと扇子を落した。そうして驅けよるやうにして安藝治の坐つてゐる傍へ立つたが、安藝治は氣が付かなかつた。ゆう子は身體の血が冷え付いたやうな思ひをしながら、もう一度羽目板の方を振返つて見た。もう黒い翼は見えなかつた。その傍の壁の隙間

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

から夕暮れらしい薄黄いな日射しが流れこんでゐた。

二人は小屋を出た。もう白地の浴衣に水の底のやうな涼しい影が見える夕方になつてゐた。安藝治は矢つ張りだまつて歩いて行く。ゆう子は目眩いがするほど空腹くなつたのに氣が付いた。男に默つて中途から別れて了はう。そんな事も考へながら、膝のうしろにべた〳〵と觸る汗にしみた着物が氣味がわるくてならなかつた。

「この女は何所まで附いてくるんだらう。」

男の樣子にそんな所が見えると、ゆう子が思つたとき、

「何か食べなくちや。」

と男が云つた。

「私は歸りたい。」

「歸る？」

「ええ。」

男は又默つて歩いて行つた。二人は池の橋を渡つて山へあがると、其所の端の氷店の腰かけへ云ひ合はしたやうに腰をかけた。二人の前の植え込みが打水の雫をちらしてゐた。

二人はまた何時までも〳〵其所を立たなかつた。

日の入る頃になつて汗を洗ひ流した連中が、折目の見える浴衣と着かへて、もう其方此

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

方と歩いてゐた。二人は一日の汗になへ切つた身體を又仁王門から馬道の方へはこんだ。
二人は河岸をあるいて砂利置場から宵暗の被せかける隅田川の流れをながめた。
ゆう子はもう、自分の身體を男が引つ抱へて何所へでもいいから連れてつて來ればいいと思ひながら砂利置場の杭へよりかゝつた。
「蝙蝠が、淺黄繻子の男袴を穿いた娘の、生血を吸つてる、生血を吸つてる――」
男に手を取られてはつとした。その時人差指の先きに卷いてあつた紙がいつの間にか取れてしまつたのに氣が付いた。生臭い匂いがぷんとした――完――

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

元始女性は太陽であつた。―青鞜發刊に際して―

らいてう

元始、女性は實に太陽であつた。眞正の人であつた。

今、女性は月である。他に依つて生き、他の光によつて輝く、病人のやうな蒼白い顏の月である。

偖てこゝに「青鞜」は初聲を上げた。

現代の日本の女性の頭腦と手によつて始めて出來た「青鞜」は初聲を上げた。

女性のなすことは今は只嘲りの笑を招くばかりである。

私はよく知つてゐる、嘲りの笑の下に隱れたる或ものを。

そして私は少しも恐れない。

併し、どうしやう女性みづからがみづからの上に更に新にした羞恥と汚辱の慘ましさを。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

女性とは斯くも嘔吐に價するものだらうか、

否々、眞正の人とは――

私共は今日の女性として出來る丈のことをした。心の總てを盡してそして産み上げた子供がこの「青鞜」なのだ。よし、それは低能兒だらうが、奇形兒だらうが、早生兒だらうが仕方がない、暫くこれで滿足すべきだ、と。

果して心の總てを盡したらうか。あゝ、誰か、誰か滿足しやう。

私はこゝに更により多くの不滿足を女性みづからの上に新にした。

女性とは斯くも力なきものだらうか、

否々、眞正の人とは――

併し私とて此眞夏の日盛の中から生れた「青鞜」が極熱をもよく熱殺するだけ、それだけ猛烈な熱誠を有つてゐると云ふことを見逃すものではない。

熱誠！　熱誠！　私共は只これによるのだ。

熱誠とは祈禱力である。意志の力である。禪定力である、神道力である。云ひ換へれば

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

精神集注力である。

神秘に通ずる唯一の門を精神集注と云ふ。

今、私は神秘と云つた。併しともすれば云はれるかの現實の上に、或は現實を離れて、手の先て、頭の先て、はた神經によつて描き出された拵へもの丶神秘ではない。夢ではない。私共の主觀のどん底に於て、人間の深さ瞑想の奧に於てのみ見られる現實其儘の神秘だと云ふことを斷つて置く。

私は精神集注の只中に天才を求めやうと思ふ。

天才とは神秘そのものである。眞正の人てある。

天才は男性にあらず、女性にあらず。

男性と云ひ、女性と云ふ性的差別は精神集注の階段に於て中層乃至下層の我、死すべく、滅ぶべき假現の我に屬するもの、最上層の我、不死不滅の眞我に於てはありやうもない。

私は曾て此世に女性あることを知らなかつた。男性あることを知らなかつた。

多くの男女は常によく私の心に映じてゐた、併し私は男性として、はた女性として見てゐたことはなかつた。

然るに過剩な精神力の自からに溢れた無法な行爲の數々は遂に治しがたく、救ひがたき迄の疲勞に陷れた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

人格の衰弱！　實にこれが私に女性と云ふものを始めて示した。と同時に男性と云ふものを。

かくて私は死と云ふ言葉をこの世に學んだ。

死！　死の恐怖！　曾て天地をあげて我とし生死の岸頭に遊びしもの、此時、ああ、死の面前に足のよろめくもの、滅ぶべきもの、女性と呼ぶもの。

曾て統一界に住みしもの、此時雜多界にあつて途切れ、途切れの息を胸でするもの、不純なるもの、女性と呼ぶもの。

そして、運命は我れ自から造るものなるを知らざるかの腑甲斐なき宿命論者の群にあやふく歩調を合せやうとしたことを、ああ思ふさへ冷たい汗は私の膚へを流れる。

私は泣いた、苦々しくも泣いた、日夜に奏でゝ來た私の竪琴の糸の弛んだことを、調子の低くなつたことを。

性格と云ふものゝ自分に出來たのを知つた時、私は天才に見棄てられた、天翔る羽衣を奪はれた天女のやうに、陸に上げられた人魚のやうに。

私は歎いた、傷々しくも歎いた。私の恍惚を、最後の希望を失つたことを。

とは云へ、苦悶、損失、困憊、亂心、破滅總て是等を支配する主人も亦常に私てあつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

た。

私は常に主人であつた自己の權利を以て、我れを支配する自主自由の人なることを滿足し、自滅に陷れる我れをも悔ゆることなく、如何なる事件が次ぎ次ぎと起り來る時でも我の我たる道を休みなく步んで來た。

ああ、我が故鄕の暗黑よ、絕對の光明よ。

自から溢れる光輝と、溫熱によつて全世界を照覽し、萬物を成育する太陽は天才なるかな。眞正の人なるかな。

元始、女性は實に太陽でなつた。眞正の人であつた。

今、女性は月である。他に依つて生き、他の光によつて輝く病人のやうな蒼白い顏の月である。

私共は隱されて仕舞つた我が太陽を今や取戾さねばならぬ。

「隱れたる我が太陽を、潛める天才を發現せよ、」こは私共の內に向つての不斷の叫聲、押へがたく消しがたき渴望、一切の雜多な部分的本能の統一せられたる最終の全人格的の唯一本能である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

此叫聲、此渇望、此最終本能こそ熱烈なる精神集注とはなるのだ。

そしてその極るところ、そこに天才の高き王座は輝く。

青鞜社規則の第一條に他日女性の天才を生むを目的とすると云ふ意味のことが書いてある。

私共女性も亦一人殘らず潜める天才だ。天才の可能性だ。可能性はやがて實際の事實と變ずるに相違ない。只精神集注の缺乏の爲、偉大なる能力をして、いつまでも空しく潜在せしめ、終に顯在能力とすることなしに生涯を終るのはあまりに遺憾に堪へない。

「女性の心情は表面なり、淺き水に泛ぶ輕佻浮噪の泡沫なり。されど男性の心情は深し、其水は地中の凹窩を疾走す」とツアラトゥストラは云つた。久しく家事に從事すべく極め付けられてゐた女性はかくて其精神の集注力を全く鈍らして仕舞つた。

家事は注意の分配と不得要領によつて出來る。

注意の集注に、潜める天才を發現するに不適當の境遇なるが故に私は、家事一切の煩瑣を厭ふ。

煩瑣な生活は性格を多方面にし、複雜にする、けれども其多方面や、複雜は天才の發現

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と多くの場合反比例して行く。

潜める天才に就て、疑ひを抱く人はよもあるまい。

今日の精神科學でさへこれを實證してゐるではないか。總ての宗教にも哲學にも何等の接觸を有たない人でも最早かの催眠術、十八世紀の中葉、墺國のアントン、メスメル氏に起原を發し、彼の熱誠と忍耐の結果、遂に今日學者達の眞面目な研究問題となつたかの催眠術を多少の理解あるものは疑ふことは出來まい。いかに繊弱(かよわ)い女性でも一度催眠狀態にはいる時、或暗示に感ずることによつて、無中有を生じ、死中活を生じ忽然として靈妙不可思議とも云ふべき偉大な力を現すことや、無學文盲の田舍女が外國語を能く話したり、詩歌を作つたりすることなどは屢々私共の目前で實驗された。また非常時の場合、火事、地震戰爭などの時、日常思ひ至らないやうな働をすることは誰れでも經驗することだ。

完全な催眠狀態とは一切の自發的活動の全く休息して無念無想となりたる精神狀態であると學者は云ふ。

然らば私の云ふところの潜める天才の發現せらるべき狀態と同一のやうだ。私は催眠術に掛れないので遺憾ながら斷言は出來ないが、少くとも類似の境界だとは云へる。

無念無想とは一體何だらう。祈禱の極、精神集注の極に於て到達し得らるゝ自己忘却で

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

はないか。無爲、恍惚ではないか。虛無ではないか。眞空ではないか。

實にこゝは眞空である。眞空なるが故に無盡藏の智惠の寶の大倉庫である。一切の活力の源泉である。無始以來植物、動物、人類を經て無終に傳へらるべき一切の能力の福田である。

こゝは過去も未來もない、あるものは只これ現在。

ああ、潛める天才よ。我々の心の底の、奥底の情意の火焰の中なる「自然」の智惠の卵よ。全智全能性の「自然」の子供よ。

「フランスに我がロダンあり。」

ロダンは顯れたる天才だ。彼は偉大なる精神集注力を有つてゐる。一分の隙なき非常時の心を平常時の心として生きてゐる。彼は精神生活のリズムにせよ、肉體生活のリズムにせよ、立所に自由に變ずることの出來る人に相違ない。むべなる哉、インスピレーションを待つかの奴隷のやうな藝術の徒を彼は笑つた。

其意志の命ずる時、そこに何時でもインスピレーションがある彼こそ天才となるの唯一の鍵を握つてゐる人と云ふべきだらう。

三度の箸の上下にも、夕涼の談笑にも非常時の心で常にありたいと希ふ私は曾て白樺の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ロダン號を見て多くの暗示を受けたものだ、物知らずの私にはロダンの名さへ初耳であつた。そしてそこに自分の多くを見出した時、共鳴するものあるをいたく感じた時、私はいかに歡喜に堪へなかつたか。

以來、戸を閉じたる密室に獨座の夜々、小さき燈火が白く、次第に音高く、嵐のやうに、しかもいよいよ單調に、瞬もなく燃える時、私の五羽の白鳩が、優しい赤い眼も、黒い眼も同じ薄絹の膜に蔽はれて寄木の上にぷつと彫れて安らかに眠る時、私は大海の底に獨り醒めてゆく、私の筋は緊張し、渾身に血潮は漲る。其時、「フランスに我がロダンあり。」と云ふ思ひが何處からともなく私の心に浮ぶ。そして私はいつか彼と共に「自然」の音樂を――かの失はれたる高調の「自然」の音樂を奏でゝゐるのであつた。

私はかの「接吻」を思ふ。あらゆるものを情熱の坩堝に鎔す接吻を、私の接吻を。接吻は實に「一」である。全靈よ、全肉よ、緊張の極の圓かなる恍惚よ、安息よ、安息の美よ。感激の涙は金色の光に輝くてあらう。

日本アルプスの上に灼熱に燃えてくる〱と廻轉する日沒前の太陽よ。孤峯頂上に獨り立つ私の靜けき慟哭よ。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

弱い、そして疲れた、何ものとも正體の知れぬ、把束し難き恐怖と不安に絶えず戰慄する魂。頭腦の底の動搖、銀線をへし折るやうな其響、寢醒時に襲つて來る黑い翅の死の强迫觀念。けれど、けれど、一度自奮する時、潛める天才はまだ私を指導してくれる。まだ私を全く見棄はしない。そして何處から來るともなし私の總身に力が漲つてくる、私は只々强き者となるのだ。私の心は大きくなり、深くなり、平になり、明るくなり、視野は其範圍を增し、個々のものを別々に見ることとなしに全世界が一目に映じてくる。あの重かつた魂は輕く、輕く、私の肉體から拔け出して空にかゝつてゐるのだらうか。否、哭は目方なきものとなつて氣散して仕舞つたのだらうか。私はもう全く身も心も忘れ果てて云ふべからざる統一と調和の感に醉つて仕舞ふのだ。

生も知らない。死も知らない。

敢て云へば、そこに久遠の「生」がある。熱鐵の意志がある。

この時ナポレオンはアルプス何あらむやと叫ぶ。實に何ものの障碍も其前にはない。

眞の自由、眞の解放、私の心身は何等の壓迫も、拘束も、恐怖も、不安も感じない。そして無感覺な右手が筆を執つて何事かをなほ書きつける。

私は潛める天才を信せずには居られない。私の混亂した內的生活が僅に統一を保つて行けるのは只これあるが爲めだと信ぜずにはゐられない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

自由解放！　女性の自由解放と云ふ聲は隨分久しい以前から私共の耳邊にざわめいてゐる。併しそれが何だらう。思ふに自由と云ひ、解放と云ふ意味が甚しく誤解されてゐはしなかつらうか。尤も單に女性解放問題と云つても其中には多くの問題が包まれてゐたらう。併し只外界の壓迫や、拘束から脫せしめ、所謂高等敎育を授け、廣く一般の職業に就かせ、參政權をも與へ、家庭と云ふ小天地から、親と云ひ、夫と云ふ保護者の手から離れて所謂獨立の生活をさせたからとてそれが何で私共女性の自由解放であらう。成程それも眞の自由解放の域に達せしめるによき境遇と機會とを與へるものかも知れない。併し到底方便である。手段である。目的ではない。理想ではない。

とは云へ私は日本の多くの識者のやうな女子高等敎育不必要論者では勿論ない。「自然」より同一の本質を受けて生れた男女に一はこれを必要とし、一はこれを不必要とするなどのことは或國、或時代に於て暫くは許せるにせよ、少しく根本的に考へればこんな不合理なことはあるまい。

私は日本に唯一つの私立女子大學があるばかり、男子の大學は容易に女性の前に門戶を開くの寬大を示さない現狀を悲しむ。併し一旦にして我々女性の智識の水平線が男性のそれと同一になつたとしたところでそれが何だらう。抑も智識を求めるのは無智、無明の闇

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

脱して自己を解放せむが爲に外ならぬ。然るにアミイバのやうに貪り取つた智識も一度眼を拭つて見れば殻ばかりなのに驚くではないか。そして又我々は其殻から脱する爲め多くの苦闘を余儀なくせねばならないではないか。一切の思想は我々の眞の智恵を暗まし、自然から遠ざける。智識を弄んで生きる徒は學者かも知れないが到底智者ではない。否、却て眼前の事物其儘の眞を見ることの最も困難な盲に近い徒である。

釋迦は雪山に入つて端座六年一夜大悟して、「奇哉、一切衆生具有如來智惠德相、又曰、一佛成道觀見法界草木國土悉皆成佛」と。彼は始めて事物其儘の眞を徹見し、自然の完全に驚嘆したのだ。かくて釋迦は眞の現實家になつた。眞の自然主義者になつた。空想家ではない。實に全自我を解放した大自覺者となつたのだ。

私共は釋迦に於て、眞の現實家は神秘家でなければならぬことを、眞の自然主義者は理想家でなければならぬことを見る。

我がロダンも亦さうだ。彼は現實に徹底することによつてそこに現實と全く相合する理想を見出した。

「自然は常に完全なり、彼女は一つの誤謬をも作らず」と云つたではないか。自からの意力によつて自然に從ひ、自然に從ふことによつて自然を我ものとした彼は自から自然主義者と云つてゐる。

日本の自然主義者と云はれる人達の眼は現實其儘の理想を見る迄に未だ徹してゐない。集注力の缺乏した彼等の心には自然は決して其全き姿を現はさないのだ。人間の瞑想の奥底に於てのみ見られる現實即理想の天地は彼等の前に未だ容易に開けさうもない。

彼等のどこに自由解放があらう。あの首械、手械、足械はいつ落ちやう。彼等こそ自縛の徒、我れみづからの奴隷たる境界に苦しむ憐れむべき徒ではあるまいか。

私は無暗と男性を羨み、男性に眞似て、彼等の歩んだ同じ道を少しく遅れて歩まうとする女性を見るに忍びない。

女性よ、芥の山を心に築かむよりも空虚に充實することによつて自然のいかに全きかを知れ。

然らば私の希ふ眞の自由解放とは何だらう、云ふ迄もなく潜める天才を、偉大なる潜在能力を十二分に發揮させることに外ならぬ。それには發展の防害となるものゝ總てをまづ取除かねばならぬ。それは外的の壓迫だらうか、はたまた智識の不足だらうか、否、それらも全くなくはあるまい、併し其主たるものは矢張り我そのもの、天才の所有者、天才の宿れる宮なる我そのものである。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

我れ我を遊離する時、潜める天才は發現する。私共は我がうちなる潜める天才の爲めに我を犠牲にせねばならぬ。所謂無我にならねばならぬ。（無我とは自己擴大の極致である。）

只私共の内なる潜める天才を信ずることによつて、天才に對する不斷の叫聲と、渇望と、最終の本能とによつて、祈禱に熱中し、精神を集注し以て我を忘れるより外道はない。

そしてこの道の極るところ、そこに天才の玉座は高く輝く。

私は總ての女性と共に潜める天才を確信したい。只唯一の能性に信賴し、女性としてこの世に生れ來つて我等の幸を心から喜びたい。

私共の救主は只私共の内なる天才そのものだ。最早私共は寺院や、教會に佛や神を求むるものではない。

私共は最早、天啓を待つものではない。我れ自からの努力によつて、我が内なる自然の秘密を曝露し、自から天啓たらむとするものだ。

私共は奇蹟を求め、遠き彼方の神秘に憧れるものではない、我れ自からの努力によつて我が内なる自然の秘密を曝露し、自から奇蹟たり、神秘たらむとするものだ。

私共をして熱烈なる祈禱を、精神集注を不斷に繼續せしめよ。かくて飽迄も徹底せしめ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

よ。潜める天才を産む日まで、隠れたる太陽の輝く日まで。
其日私共は全世界を、一切のものを、我ものとするのである。
其日私共は唯我獨存の王者として我が踵もて自然の心核に自存自立する反省の要なき眞正の人となるのである。
そして孤獨、寂寥のいかに樂しく、豐かなるかを知るであらう。

最早女性は月ではない。
其日、女性は矢張り元始の太陽である。眞正の人である。

私共は日出づる國の東（ひんがし）の水晶の山の上に目映ゆる黄金の大圓宮殿を營まうとするものだ。
女性よ、汝の肖像を描くに常に金色の圓天井を撰ぶことを忘れてはならぬ。
よし、私は半途にして斃るとも、よし、私は破船の水夫として海底に沈むとも、なほ麻痺せる雙手を舉げて「女性よ、進め、進め。」と最後の息は叫ぶであらう。
今私の眼から涙が溢れる。涙が溢れる。
私はもう筆を擱かねばならぬ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

併しなほ一言云ひたい。私は「青鞜」の發刊と云ふことを女性のなかの潜める天才を、殊に藝術に志した女性の中なる潜める天才を發現しむるによき機會を與へるものとして、又その爲の機關として多くの意味を認めるものだと云ふことを、よしこゝ暫らくの「青鞜」は天才の發現を防害する私共の心のなかなる塵埃や、滓滓や、籾殼を吐出すことによつて僅に存在の意義ある位のものであらうとも。

私は又思ふ、私共の怠慢によらずして努力の結果「青鞜」の失はれる日、私共の目的は幾分か達せられるのであらう、と。

最後に今一つ、青鞜社の社員は私と同じやうに若い社員は一人殘らず各自の潜める天才を發現し、自己一人に限られたる特性を尊重し、他人の犯すことの出來ない各自の天職を全うせむ爲に只管に精神を集中する熱烈な、誠實な眞面目な、純朴な、天眞な、寧ろ幼稚な女性であつて他の多くの世間の女性の團體にともすれば見るやうな有名無實な腰掛つぶしは斷じてないことを切望して止まぬ私はまたこれを信じて疑はぬものだと云ふことを云つて置く。

烈しく欲求することは事實を産む最も確實な眞原因である。——完——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

猫の蚤

國木田治子

「また始まつた、秋ちやん！　およしよ、嫌だと云ふものを無理に取るには及ばないわね。」と母親は嫌がる猫の蚤を取つて居る末娘の秋子に斯う言つた。
「母さんが其様な事を仰しやるから尚猫が嫌がるのだわ」。と言つて秋子はなか〳〵止めやうとはしなかつた。
「また怪我をしやうと思つて」、と母親は讀み掛けの新聞に目を落した。
猫は體に觸られるのが煩さいと見えて尾を振つたり、ニヤア！と云つて口を開いて秋子の手に喰ひ付きさうな樣子を見せた。其度に秋子は大急ぎて手を引込ませるが、白い毛の間にチヨロ〳〵する蚤を見ると又直ぐ手を出した。寢むり掛けて居た猫はまた觸られたので、ニヤア！と言つて首を持ち上げたが、ころりと寢返りを打つた。すると今迄より尚蚤が居るので、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「赤ちゃん、此樣に澤山居るじやあないか。」と言つて又取りに掛つた、其聲を聞いた母親は。

「およしと言ふのに。」と言つた聲は强かつた。左樣云はれると秋子は腹立たしげに猫の毛を逆なでにして、

「馬鹿め、お蔭で叱られた。」と言ひながら猫の頭を打つた。猫は素早く秋子の手を引搔いた。

「アッ！。」と思はず秋子は聲を立てたが、無言で立ち上つて往來の見える二疊の窓の所に行つて、座敷の方を背にして立つた。手の甲を見ると二筋許りの蚯蚓腫れが出來て血が滲み出して居た。

「馬鹿猫め、覺えて居ろ。」と呟いて疵を覗詰めた。

座敷で裁縫をしながら、チョイ〳〵秋子の樣子を見て居た姉の濱子は、「アッー」と言つたまゝ二疊の方へ行く秋子の後姿を「可い氣味だ一と言ひたげの目で見送つた。

今年高等小學を卒業した十六歲の秋子は、急に大人びて、髮の結び方を氣にしたり白粉をつけて氣取つたりするが、長の日を爲す事もなく格子の外に立つて近所の小供達の遊ぶ樣を眺めたり、家に居れば鏡に向ふか、小女雜誌を讀むか、二人の姉がせつせと裁縫をして居る側へ來てはくだらぬ事を言ふので、姉達にまぜつ返へされたり、愚弄はれたりする

のを口惜しがつて居る位が一日のお役目なのである。嫁に行つて居る姉などは來る度に「秋子を遊ばせて許り置かずに裁縫の稽古にでもやつたらば。」と氣にするが、何んとか、彼とか、理窟をつけては其度毎に母親は言譯する許り。

之が又家に居る二人の姉達には癪に觸つてたまらないので、詰らぬ事にも大袈裟に秋子に愚弄つて口惜がるのを見て少しは溜飮を下げて居た。然し秋子とて中々强情者だから姉さん達に敗けては居ない、時によると中の姉と立ち廻りさへ始める事があるが、結局二人掛りの姉達には適はない。濱子が我子の樣に可愛がつて居る猫を目の敵の樣にして嫌がる蚤を取つて腹癒せをするのだ。猫も嫌がつて秋子の側へは決して寄つ付かない。

高い所や一寸眼に付かぬ場所を探し出しては氣持よく寢て居る、滅多に疊の上などでは寢ないのであつた。

猫は秋子を引搔くと高い所へ飛び上つた。中の姉が居たら「赤や出來した〳〵」とお褒め言葉が出る所だが、濱子は流石に無言で裁縫をして居た。

秋子は蚯蚓腫れから出る血を袖から紙を出して抑へたが、中々止まらないので紙が眞赤に染つた。

もう誰れが何んと言つたつて聞くものか、「彼の猫を打ち殺すか、捨てゝ仕舞はなくつては、」と、姉に聞えよがしに言ひながら、足音荒ら〳〵母親の側へ行つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「母さん、繃帯と絆創膏を頂戴。」と突慳貪に言つた。
「そら御覧、だから言はない事ではない。母さんの言ふ事を聞かない罰だ」。と言つたが其れでも茶簞笥の引出しから兼ねて用意の品を出した。
「マアお見せ！」と秋子の手を取つて膏薬を張つた。
「繃帯にも及ぶまいじやないか。」
「でも巻いて頂戴。」と秋子は半分泣き聲て、「オヽ痛い〳〵」と、騒ぎ立てゝ言つた。所へ髪結ひに行つて歸つて來た中の姉が此有様を見て、
「またやられたの、萬歳！」と嬉しそうに言つた。
「ワッ！」と言つて秋子は口惜相に聲を立てゝ泣き出した。
其の聲に驚かされた赤猫は周章てゝ飛び下りて外へ馳け出して了つた。——完——

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

影 ― 比喩

ポオ

たとひ我れ死の影の谷を歩むとも―ダビデの聖詩(うた)。

讀者は常に生の國に住むが作者の私はずつと以前に影の國と歩んで居る筈だ。それは實に不思議な事が起り神密な事が知られやうとも、これ等の記念が人間に見られる先きに幾世紀も幾世紀も經ねばならぬので。然し其が、見られた時、信じない者や疑ふ者があるだらう。しかも尙多少の人は鐵筆を以つて彫られた文字に就て默思すべき多くのものを見出すであらう。

其年は恐ろしい一年であつた、とても人間世界では名狀する事の出來ぬ程、恐ろしいよりも寧ろ感動の一年であつた。と云ふのは種々奇怪な現象が起り、變んな前兆が現はれた

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

が、遂に黒い翅を以つて何處も彼處も蔽ひかぶせて仕舞つた恐ろしい疫病は海外迄も廣がつた。

星に精通した人々も、決して天が凶事の前兆を現して居る事は知らなかつた。然し特に希臘人のオイノスなる自分には白羊宮の入口で木星が、彼の恐ろしい土星の赤い輪に威壓される七百九十四年の更替期が今來て居た事は明かに分つた。

若し自分の考へが餘り間違はないとすれば、天の特別なる啓示は確かに現れるものである、啻に地球と云ふこの一つの土塊に現れる許りでなく、人類の魂、人類の想像其他深い瞑想に於て顯はれるのである。

トレミイスと呼ぶ薄暗い市の、とある立派な廣間の中に赤きキアンの酒瓶を前にして吾々七人は夜の酒宴を開いた。此廣間には外からの入口は一つもなく、唯名工コリノスが稀代の意匠を蓄つた黄銅の扉が内からしつかと閉ぢられて居た。同じ樣に陰氣な室内では黒い掛幕が月をも、蒼白く光る星をも、又人通りのない街をも悉く吾々の眼から遮つて居る。然し凶事の兆や、記念はさうは蔽ひ隱されなかつた。吾々の周圍には種々のものがあつた、物質的のもの、精神的のもの、大氣の中の憂愁、窒息の感覺、懸念など、就中、官能の過敏に働く時、思想の力が潜伏して居る間に、神經が經驗する存在の恐ろしい狀態、とても一々はつきりと數へ上げることは出來ない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

死の重さは次第に吾々の上に蔽ひかぶさつて來た。吾々の手足の上に、廣間のあらゆる器具の上に、吾々が酒くみはわした其杯の上にまでも。そうして總てのものは欝々として壓迫された。

唯吾々の宴樂の席を照した七個の鐵の燭臺の焰のみはこの壓迫を免れて、細長い光線となり皆蒼白く搖ぎもせずに燃えて居た。七人で取りかこんだ黑檀の丸卓子が燭臺の光に照り返された鏡の中に、私は自身の蒼白い貌と仲間の俯向き勝の穩かならぬ眼の光りを認めた。

然かも吾々はいつもの樣に笑ひ興じた——つまりヒステリー的に、そしてアナクレオンの歌をうたつた——、これ又狂的に、たとへ紫色の葡萄酒は血潮を思はせたけれども尙盛んに飮んだ。

扨其廣間には我々の外になほ他の借り間人なる若きゾオイラスがゐた。彼の屍は經帷子に包まれて延び〳〵と橫たつて居る、——此舞臺の守護神で、魔だ。ア、彼は苦痛に歪んだ其の面貌の外は吾等の宴樂に對して少しも仲間にならない。

死のために只疫病の火を半ば消された其の眼は、死人が恐らく死に瀕して居る人々と喜びを共にする樣に、吾々の觀樂に同じく興味を有つて居るやうに見えた。併しオイノスなる自分は此の死人の眼が自分の上に注がれて居ると感じたけれども、なほ其眼の忌はしい

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

表情を會得しない樣にわざと努めた。で、黑檀の鏡の中をぢつと見下しながら、テオスの子等の歌を朗々と聲高く唱つた。然し次第々々に私の歌は止んだ。歌の響は室内の黑き掛幕の間に漂ひながら、やがて弱く微かになり、聞き取れぬ樣になり、かくて遂に消え失せた。

おゝ見よ！、見よ！、歌聲の消え去つた黑い掛幕の間から、驚くべき黑き朦朧たる影は前へ動き出した。大空高くまだ登らない月が人間の姿から思ひ付いたやうな影。だが其は人の影でもない。神の影でもない。且又目なれたものゝ影でもない。

室の暗間を暫く漂つた一團の影は遂に黃銅の扉の表面に充分認められる樣にはつきりと止つた。併し影は朦朧として、形なく、定りなく、人でもなく、神でもなく、乃至はギリシヤ、カルデア、又はエヂプトの神でもない。

影は眞鍮の戶に、其長押の弓門の下に止まつて動きもしなければ一言も發しない。しかも遂に其處にぢつと止つて仕舞つた。自分の記憶にもし誤がないとすれば影が止つた其戶は經帷子に被れた若きオイラスの足と向ひ合つて居た。

併しこゝに集る吾々七人は黑い掛幕の間から影の來たのを見た時、敢て其を見詰めやうともしなかつた。併し伏目になつて黑檀の鏡の底を見詰め通した、オイノスなる自分は遂にいくらか低い聲で影に其住家と姓名とを尋ねた。「我こそ影と呼ぶものの住家はトレミイス

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の榮窟に近きあたり、いまはしきカロニア溝渠に境せるヘリニージオンの薄暗き平野に近きあたり」と答へた。

七人は恐れの餘り椅子を蹴つておどおどと又わなわなと震へながら仰天して突立つた。影の聲音は人一人のそれではなく、恰も一團の人々のやうに。そして一言は一言と其抑揚を變へて吾々の耳を死んだ數知れぬ友の思ひあたりのある親し氣な調子で無氣味に褒つたし

——完——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

喜劇 陽神の戯れ

荒木郁子

第一場

人名

晴雄　學生　二十二歳

浦子　晴雄の許嫁　十八歳

守也　會社員　三十三歳

美子　守也の妻　二十四歳

他に

百合姫、第一の侍女、第二の侍女、第三の侍女、

時と場所

或る山中の低地、双方から深く立込んでゐる樹木が屋根のやうに被さつて居る、眠の居

く限り一面に、薔薇薊百合など、美くしく色彩られてゐる。然し、カーテンの上げられた時は、初夏の曉方──午前四時頃──であるから、舞臺一體に冷たく薄暗い心持。從つて總ての色彩は殆ど各自の個性を失ひ、一様に溶合つて居る。

山蔭を微に水の流れる響が聞えて來る。

美子。（身丈高く、優れて美くしい女、眼に温味の缺けた女、華美な服裝。右手から顔を顰めながら出て來る。）あーあ、足勞た、足勞た。（嘆息）何だつて私は恁那山奥へ來たのだらう、晴雄さんは私を恁那場所へ引張つて來て奈何する氣なんだらう。（間）來なけりや好かつた、私は山奥なんかに住む女ぢやないのだ、何も山の中なんかに住まうとつて晴雄さんに戀したのぢやない。考へて見れば私も隨分好人物だつたわ。あゝ莫迦らしい、何方を眺めても木と山許り。（間）だが彼の人は眞個に奈何して居るのだらう、あんな弱い足なら初めつから來ないが宜いんだわ、（間）いや直きに歸りたくなる、ひよつとかすると、もう今頃は心の奥底でそんな秘密を、希望を、訴へて居るかも知れない、まだ言葉に出して云へない丈嘸胸の中が苦しからう。（冷笑）全然蛇がのたくるやうに、ぐづら〳〵してゐて……加之に私の世話迄燒くのだもの、大抵な苦勞ぢやない。（稍々長い沈默。ふと寂しさに襲はれたといふことなし、烈しく身を震はす。）晴雄さん、晴雄さあん。

晴雄。（──間──山陰から）其邊で一休みしませう。そんなに急がないだつて宜いぢやありませんか。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

美子。（突立つたまゝ身を動かさないで）私はもう足勞て居ますの、どうせ歩けつて仰有つたつて歩けやしませんわ。（仰山に）あゝ疲れた、疲れた。もう足でも手でも持つて行かうと云ふものがあつたら、皆遣つちまひたいわ。

晴雄。（山蔭から）美子さん、貴女が餘り急ぎなさつたから疲れたのでせう。ね乾度さうですよ。

美子。だつて又、貴方のやうに足の遲い人も有りませんわ。

晴雄。（右手から登場。山を降りてきた心持。女持の傘、毛布、提鞄などで全身を掩うて居る。年齢よりは稍老けてみえる。亂れかゝつてゐる長い髮の下から白い額が覗いてゐる。それ程額は狹いけれど黑く窪んだ眼射と、通つた鼻と、紅い唇からは若い女の心を奪ふ強いものが流れてゐる、弱々しいが何かに觸れると、平常の習慣を破つて了ひさうな氣質。いたく疲れた樣子。莞爾やかに美子の側に寄り優しく勞はる。）疲れたでせう、隨分歩きましたものね（毛布を草の上に敷き、手提の中から葡萄酒の瓶を取出して美子に飲ませる）。これを飲んで、いつもの貴方の元氣を出して下さい。

美子。（毛布の上に座る、多少感情の讓歩を示す。）何だかねえ、道々呼吸が詰りやしないかと心配しましたの、あんまり駈けた故かも知れませんわね。私苦かつたのですわ、もうそれは大變に。

晴雄　左樣でしたか、僕は毫とも知らなかつた。そんな時は何時でも僕に云つて下さらなくては不可ません。でないと氣が附かずに、ずん〳〵歩いて了つて、後から頭が痛く

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なつたり、胸がむかついたりしては困りますからね。（覗込むやうに）今でも未だ不快ん
ですか。

美子。いゝえ、もう全然。

晴雄。そんならよいが氣の毒な事をしました。（美子の手を取り）一緒に疲れたのだから、一緒に癒さうぢやありませんか、ねえ美子さん。（美子の手に接吻する）もう全然癒つたでせう、ね、もう今度は好い筈だ。

美子。又今日も山の中に寢なければならないのですか。

晴雄。えゝ（間）山の中は厭ですか。

美子。（淡々と）いゝえ。

晴雄。ぢや宜いぢやありませんか。私達二人居れば、怖ろしい事も氣味の惡い事も有りません。草を褥にし、お月樣を天井に頂いたつて樂しい時を送れます。私達は他のあらゆる煩はしさから超越して居るのです。何者の侵入をも許さぬ強い力が虹のやうに二人の身を包んで居ます。戀と云ふ力。是れ程強い力のあるものは、現世に二つとはありますまい、ね、美子さんはさうは思ひませんか。

美子。思はない事もありません。

晴雄。左樣でせう。僕は何故斯んな幸福を享る事が出來たのでせう。僕はもう嬉しくて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

〳〵堪らない。あらゆる女性の中で特に、貴女を、美くしい貴女を與へ給はつた神様に、感謝の辭を捧げなくてはならない。（跪いて禮拜をしようとして）それよりも貴女に、（美子の兩手を取つて見入る）

美子。（少し五月蝿さうな氣味で）私は奈何も貴方のやうに幸福を感じる事が出來ません。と云ふのは山の生活（間）私には如何にも住み慣れないせいか、歩き馴れないせいか、堪へられさうにもありませんの、

晴雄。そりや、僕だつて山の中にや住み慣れては居ない、けれど夫れはお互に前以つて覺悟があつたんぢやありませんか、なに、これ許りの事で挫けちや詰らない、こんな小さな事で考へるやうぢや仕方がない、さ、お互に戀の力といふものを、しつかり摑んで居ませう。而したら何も案じる事も、くよ〳〵する事もないといふものです。ね、左樣ぢやありませんか。

美子。だけれども、貴方は眞個に、一生涯此の山に住むおつもり……………

晴雄。（不審さうに、美子の顔を見守りながら）左樣です。

美子。これ程思ひ切つた事を、貴方がなさらうとは思はなかつた。今でも未だ信じられません。奈何しても私には信じられませんの、晴雄さん、貴方は此寂しい山の中に一生をお送りなさるのですか、見る限り、山と木許り、聞えるものは、風の音、鳥の聲、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

光のない、艶のない、町の響の聞えない、暗い杜の中なんかに、若さといふ幸福を埋めてお了ひなさるのですか。

晴雄。私達は此の暗い杜に咲く美くしい百合だとは思ひませんか、静かに人知れず咲いてゐる百合は幸福なものです。ソロモンの榮華の極の時にだつて、此の花のやうな幸福はないと云ふぢやありませんか、それ程、幸福者の百合と、私達とは同じなのです。人は見ない、知らない、けれど張切つた美くしい滿足の情は迚も現世の人の味へない程度に私達の周圍を包んでゐます。ね美子さん、（間）それに付けても其の滿足を與へて下さつた貴女に感謝をせねばならない。

美子。そんなに仰有ると私困ります。歸れなくなるぢやありませんか。

晴雄。（烈しい驚の色）えつ。歸るつ。

美子。（極く平氣に）えゝ私考へて見ると、何だか大變に心細くなるのよ、こんな山の中で若しか病氣にでもなるとしたら…………

晴雄。（稍安心したやうに、輕く笑ひながら）何だ、そんな事、子供のやうぢやありませんか小さい子供か譯の解ない人の云ふ事ぢやありませんか。そんな心配なら私が獨りでします、萬一も貴女が病氣にでもなるやうな事があれば、其時こそ、どんなにしても看護をします。鳥渡だつて苦しい思や、悲しい氣持なんかさせるものですか、…………それと

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

も僕ては不足なのてすか、僕ぢや物足らないのてすか、え。
美子。さういふ譯ぢやないのですが…………此所は隨分暗いわね。
晴雄。未だ陽が上らないからでせう。（間）もう直きに明るくなります。此度、こんな薄暗い雲は私達の眼の届かない處へ行つて了ひます。だから貴女の浮かない氣持を此の雲にお預けなさい、悲しい事や、厭な事はみんな、此の雲にお預けなさい、而して二人で祈りませう――此の山に來る日、美くしい旅につく日、あの夕暮方に二人は祈つたぢやありませんか――神様は私達小さいものゝ願を聞いて下さる方です。僞のない言葉は、例も神様のお喜になる事です。さ美子さん。

（太陽、あか〳〵と華やかな裝て上手に現る）

晴雄。あらつ奇麗つ。少つとも僕は知りませんでした。美子さん、何時あの奇麗な太陽は上つたのです。え、まあーあの美くしい陽の色、貴女のお心のやうに光り輝いて居るぢやありませんか、二人丈の爲めに陽は山を照すのです。二人の希望と幸福とが彼の空に輝いて居るのです。ね、丁度其のやうぢやありませんか。（嬉しさに狂う許り）美子さん、二人の幸福な影に向つて祝の歌を歌ひませう。厭な國から遁れて來た二人の爲めに祝の歌をうたひませう、陽に向つて、さ美子さん、祝ひの歌を、而して幸な祈を、

…………

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

美子。（晴雄の側に近寄りながら）あー何だか狐にでもつまゝれて居るやうだ、私どう考へたつてそんな夢のやうな氣にはなれない。

晴雄。（美子の獨語には氣づかぬ體、唯、喜悅の爲めにわく〱して居る）僕は何て幸福者なのだらう。

美子、晴雄の兩人、上手に向ひて跪く。

靜かな音樂と共に、舞臺段々暗くなる。（ダークチエンヂ）

第二場

百合姬の居室。何世紀かを經たかと思はれるやうな古い室、崇高でめまぐろしくない飾附。上手床、並に珍奇な置物掛物など適宜に配置されてゐる。正面は古風な格窓――午前十時頃であるから、樹木を透した陽の姿が小さい窓の傍に、倚りかゝつてゐる。――一段下つた所に侍女等の控へる場所がある、同じく下手に出入口がある。此場は幻影なのであるから、總ての色、音などは、餘りけば〱しくならぬやうに。

百合姬。（最も容姿の麗しい女性。百合模樣の衣服、同じ帶、髮を下げ、少し上手寄に正面に坐る。左手に脇息、百合の花束一、右手に百合の花、紙、白赤のリボンなど花束を造るに必要な品々が置かれてある。）何か面白い話

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

はないかや。

第一の侍女。（夢のやうな、おつとりした色の着物、似よりの帶、）おな退窟事でムります。

第二の侍女。（第一の侍女と同じ着物。）昨日の雨に引かへて今日は又何といふ晴々したお天氣でムりませう。（間）今日の花束は大變にお美しく出來ました、ほんに我々共許りで拜見致すのは惜しいやうに思へまする。

第一の侍女。して香の高い事………

第二の侍女。今朝咲き揃つた許りを集めたせいかも知れませぬが、此様に香りの高い事は稀でムります。

百合姫。色もよいわ。

第一の侍女。此様に、好う出來ましたのを私共許りで拜見致すのは、誠に惜しいやうに思ひまする。（何か思ひ出したやうに）姫様、今宵は十五夜のこと、この雲摸様では、雨などにはなりさうにもムりませぬ。久し振りで皆の者をお召しになりましては如何でムります。面白いお話を致しまする、

第二の侍女。してお好みの曲でも奏でさせましたら………

百合姫。面白からう。

第二の侍女。久し振りのお酒盛を此の廣い庭でなされましたならば一層興深いことでムり

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ませう。

第一の侍女。而して、あの泉の酒をお手づからお掬ひなされましては………

百合姫。面白い、おもひつきぢやなう。

第一の侍女。その折には、私がもう面白い、それは〳〵誰れも知らない變つたお話をいたしまする。

第二の侍女。それならば私は、それは〳〵面白い、誰れも聞いたことのない音樂を奏でまする。

此時第三の侍女、少し周章氣味に下手より登場。

第三の侍女。申上げまする。

百合姫、何ぢや。

第三の侍女。只今私は見なれぬ女子に出遇ひました。（怖ろしやうに）髮を逆て、聲さへ震はして、何やら人の名を叫んで居りました。

第一の侍女。まあ、それは何處にて厶ります。

第二の侍女。どんな風姿して。

第三の侍女。姫様のお居室の前を右へ通つて往きました。

百合姫。それて………

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第三の侍女。ちらと見ましたから追ひ駈けて參り、其方へ行つてはならぬと確と申付て置きました。その時、其の女子は手を合せて申しまするに、『隱さないで何卒會せて下さいませ』と恁う申して居りました。

百合姬。連の者を見失つたのかも知れぬ。して何方へ行つたかや。

第三の侍女。私は知りませぬ。たゞそちらへ行つてはならぬと恁う申したまゝ直ぐに此方へ參りました故。

第二の侍女。その女子はどんな風姿でした。

第三の侍女。暗い女でした。美しい聲は、何の爲めか烈く慄へ、奥深い眼は、釣上つて（間）大變に窶れて居りました。

第二の侍女。未だ其邊に居るで厶りませうね。

第一の侍女。果て、それでは、その女子の連らしい者に遇ひました。

第二の侍女。えつ何處で

第三の侍女。男で厶りますか。

第一の侍女。先程、姬樣の泉のお酒を掬うて居るものがありました。それは見知らぬ男で厶りまする。

第三の侍女。（冷笑的に）あの泉の酒を………

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第一の侍女。盗んで居りました。
第三の侍女。何て莫迦な男てムりませう。俗人がいくら掬ふたとて、手の底は愚か、一滴だとて口の端にも入らぬものを。知らいて、致した事てムりませう。
第一の侍女。眞然そうらしうムりました。何と憎い男てムります。
第二の侍女。ほんに太い奴原。つかまへて、戒しめてやつても宜しうムいます。
第三の侍女。(第三の侍女に)左樣なこと仰せられますな。知らないで致したと思へば可隣しうムります。その女子と、その男とが連の者であれば幸ひ、見つけてやつて二人とも會せて喜ばしてやりたいものでムります。
百合姫。ほんにさうじや(間)何か仔細あつてこの山に來た者共かも知れぬ。探して遣りたいものぢや。
第一の侍女。では私がめつけて參ります、
第三の侍女。私は其の女子をめつけて參りますゆえ、(第一の侍女に)汝は男をめつけてお出でなされませ。
百合姫。早ければ未だ其の邊に居るであらう。
第一の侍女。直ぐに連れて參ります。
第三の侍女。御免を蒙ります。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第一の侍女、第三の侍女退場。

第二の侍女。如何(どん)な人達か早う遇つて慰めてやりたいものでムります。

百合姫。ほんにさうぢや。

第二の侍女。互に探し合うて居た人々だと宜しうムいます。

百合姫。（花束の一つを造(こしら)へ上げ左手に置き）此の花束をやつても能いやうな人達であれば好いなう。

第二の侍女。嘸かし喜ぶ事でムりませう。何に致しても早う參られゝばよい、何といふ待遠な事でムりませう。

第一の侍女、第三の侍女、浦子、守也の四人下手より登場。

浦子。い、い、愼ましく輝いてゐる眼は、穢れのない小女の眞(まこと)を現すに充分である。けれど、小さい顔を掩ふ暗い影は、羽のぬれた、寒さうな小鳥のやうに、ぢつとして浦子の身體(からだ)に喰みついてゐる。）え、何處(どこ)に、え、何處(どこ)に、（悲しいやうな聲て四邊(あたり)を見廻す。）

守也。（訝しさうに、浦子の容姿を見ながら、侍女等と並て坐る。）あの泉は、飲んではならぬのださうで

第二の侍女。其のお咎(とが)めはありませぬ。近う寄つて、汝(そなた)の名前を申し上げたが宜からう。

浦子。晴雄様。晴雄様。え何處へ、

守也。妻を訪ねて此山迄來つたものでムります。守也と申しまする。

百合姫。それは宜う來られました………然し、妻女を訪ねて………

守也。申上げるのもお愧かしい次第でムりますが私の妻は突然居なくなりました、

百合姫。で此山に來られたのかや、

守也。左樣でムります。した處、歩き疲れて咽喉が大變に渇きました。それで幸ひ泉がみつかりましたので掬はうとして居りました。

百合姫。いや〳〵そのやうな心配は要らぬ。（間）ぢやが此の婦人は。

守也、一向に存じませぬ。

浦子。晴雄樣。貴方は何故私を置いてきぼりになさいました。晴雄樣、貴方は何故行つて終ひなさつたのです。ゑ、私は貴方の名を呼びながら三日三夜歩き廻りました。けれど、答はありませんでしたの。長い山の旅の間、私の木の葉のさゝやきと、蟲の歌とを聞いた丈けです。遇ふもの〳〵私の辭に一言も返事をしては呉れませんでした。青い杜の衣服は冷めたうムいました。そう、私の身の周圍には、知らない人許りですわ。

百合姫　（浦子に）汝の名は。

浦子。（哀しげに）うら子。

百合姫。此所へはどうして來られたのかや。

浦子。黒い鳥が翼を擴げて私の頭の上を、そうッと包んで守つて居て呉れました。（空を熱

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

視て狂ほしさうに）それて私は、其の鳥のおいでといふ方に許り歩いて來ましたの、けれども晴雄樣は見えません。晴雄樣に遇ふ事は、出來ませんでした。オヤッ。（急に何か聞えたやうな容姿。）晴雄樣、晴雄樣。（二三歩行つて立ち止り）。貴方のお名は慕しうムいます。其の聲は、私の耳に世界の音樂といふ音樂から撰り取つた一番佳い音よりも氣高く、懷しいのでムいます。（耳を聳てゝ）あら駄目、駄目（間）オヽ厭や。厭や、物の聲の聞えぬ國へ行きたいつ。音のない國へ。何んにも思はないて、何んにも聞えないで、睡り許のやうな國へ。

第二の侍女。尋ねる方を早く見つけて上げ度いものでムりますわ。

守也。何處に彼來る方か知らないが、慿う氣狂しく迄なつて訪ね廻つてゐる優しい方を置いて行くといふ人も隨分ひどい方だ。

第三の侍女。訊いて見ればほんに氣の毒な方です……人の心程自由にならぬものは、ありませぬ。

浦子。（第三の侍女の側に寄り云はすまいと手で仰へるやうにして。）何の、何の人の心程自由なものはありませぬ。眞が人の心に喰みついた時、世の中のどんな強い力だとて叶ふものですか、人の心は空ゆく鳥のやうに自由でムいます。神樣から頂戴いた美くしい、心といふ鳥に、眞といふ強い翼をつけて、世の中を飛び廻つて御覽なさい、どれ程面白い事でム

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

りませう。（フト立上り守也の顔を熟と見て）貴方ね、神樣から與へられた翼を奧樣の被在る處へ投げて上げる氣はありませんか、眞面目な心持で奧樣を御呼びになつたらどうですか、え、山の奧でも海の底でも、貴方の思てゐる方へ奧樣の爲めに、强い翼を送るといふ氣はなくつて。女の心は美しいものですわ、少くとも男より劣つてはゐませんもの。だから其の人を迎へる爲めに貴方眞面目な心におなりなさい。今のまゝの貴方が續くと、萬一女がめさめた時に、貴方の立場がなくなりますよ。貴方が奧樣を探し當てたにしたところで、貴方は不幸な一生を送らねばなりません。（調子漸時に亂れてゆく。）けれど私もわからない、どつちが眞面目なのでせう。どつちが眞なのでせう。私にはけじめがつかなくなつた。私は眞の聲の屆かない國は無いと思つて居ました。私の聲の屆かない國はないと思つたけれど……黑い鳥よ、黑い鳥よ、私を連れて行つて呉れ。汝の好きな國へ、（間）さうぢやない〳〵。私は行く所があるんだ。私はお嫁にゆくの山を越え、川を渡り、三日も四日も步き廻つてね、お母樣、私と一共に被來しやいませんか、私はお母樣を置いてお山へ來ましたの、お母樣、あら御母樣、（悲しさうな聲）お母樣よう。

第二の侍女。（浦子の側に泉の酒を持ち來り飮ませろ）さあ召し飮りませ。これを召すと、氣分は全然癒りますの、そして頭の重いのも苦しいのも、みんな忘れたやうになります。さ、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お氣を確りなさいませ。

浦子。(一口飲みて)おやつ此所は陽の山ですわね、陽の山ですわね。美子さん。美子さあん。(第二の侍女の肩に手をかけ)ね美子さん私は恨みはしないわ、又そんな筈はないけれどもね、貴女自分に自分を僞つては被來しやらないでせうね、自分を僞るといふ事は、一番怖ろしい事ですわ。

守也。貴女、もしか美子を御承知で被在るのですか、此の山に居る私の妻を御承知ですか。

浦子。(守也の語には氣附かぬやうに)貴女ね人の心を弄ぶなんていふ事はなさりはしますまいね、私の友人の貴女が、萬一そんな事をなさつたら私は許して置けません。萬一不幸にも私の思つた事が事實なら私は、私は、戀人の爲めに戰ひませう、それから貴女といふ私の友人の爲めに、美子さん。戰ひませう。貴女の怖ろしい、厭な意地と、私の眞の心とどつちが勝つか………疲れて、疲れて、羽のしほれる迄。翼のビシ〳〵に折れる迄。

第三の侍女。烈しく荒んで被來る。(側によりていたわる)さ、これをお飲りなさい、而して氣を確りと。

浦子。有難う。甘しいわ、(空しい笑い)私甘しいの、ほら〳〵來ました黒い鳥が、私を連れに來た。私を連れに、たつた獨つきりの私は小さくなつて、下向いて歩きませう。淋し

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

い——淋しい——淋しい、私はたつた獨りつきりよ。

第二の侍女。さ、もつと御飲りなさい、これをすつかり飲むと、氣が晴々しますの、召飲れ。

守也。貴女美子を御存じなのですか、御存じなら居る處を知せて下さい。

浦子。此の山の中に、

守也。何方へ行つたら遇へませう。

浦子。眞面目な心でお探しなさい、私のやうに此の山中を訪ねて御覧なさい。私は、胸の中の血が疲れて動かなくなつても、私の行く前にどんな大きな石があつても、自分で途を造らへながら歩きますわ、陽の山の此所です。私の探す山へ入つてから挫けるなんてそんな筈はない、私は自分で自分の足を撫でながら歩きますの。

百合姫。（兩手に百合の花束を持ち立ち上り）浦子どの、汝の途は開けて居りますぞ、汝の心の糸は、今靜かに解けましたぞ。さ、此の花を兩手に持つて妾のあとを、ついてお出でなされ。（花束を浦子に渡す）天は眞を取りあげて下さるのぢや。

浦子。（兩手に花束を持ち高く捧げて、喜に堪えぬやうな容子）有難うムいます。

（ダークチエンジ）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第三場

第一場と同じ背景——其儘の續であるから、美子も晴雄も第一場の終りのまゝの容姿——晝近い陽の色である。

晴雄。(放心してゐる人の眼の前に、羽虫でも飛んで來たので何かなしに我に返つたといふやうな氣持)何だか睡いやうな……妙な氣分だ。

美子。(第一場に現れた時より稍々確りした落着と覺醒の氣分を持つ)睡りはしなかつたのだ、確に睡はしない。(間)だから夢ぢやないのだ。

晴雄。(晴れやらぬ風で)どうも可笑しい、夢でないとすると。(考へ込む)

美子。確にさうだ、神様の試、試。さうに違ない、あゝさうなら私は恁うしては居られない、私は自分を僞つて居たのだ此の怖ろしい試には堪へられない、然し夢であつたのかも知れない。(半信半疑の體)

晴雄。どうも變だ(間)夢であつたのなら、醒めなきやならない、それとも今が醒めた時なのか、(四邊を見廻し美子のゐるを始めて氣附いたやうに)美子さん、私は今睡つてゐましたらうか、それとも、此所に誰れか見えましたでせうか。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

美子。私も今考へて居ますの。

晴雄。僕は不思議な夢に出遇つたやうな氣がする。

美子。私は神樣から、よいお訓示を受けたやうに思ひますの。

晴雄。訓示……さう、さうも云へる、さうかも知れません。

美子。でね、私家に歸らうと思ひますの、どうしても私は、家に歸らなければならないのですわ。

晴雄。今神樣にお約束した許りだのに。

美子。今日といふ今日は、私判然と自分の心を見ました。偽りのない自分は此山に居られないのです。

晴雄。たつた今誓つた言葉を貴女は、よもお忘れにはなりますまい。

美子。忘れはしません。確に誓ひました。

晴雄。それでも貴女歸らうと仰有るのですか。

美子。えゝ私歸ります 、神樣を偽るより、自分を偽つた方が恐ろしい事ですわ、自分を偽るのは神樣を偽るのです、して見れば、私今迄二重の偽りをして居ました。何といふ怖ろしい事でせう……と云ふのは、私は山の生活といふ事は好まないのです。貴方と二人つ切りの淋しい生活、私はどうも厭なのです。適して居ないのです。尤もそ

れは、今始めて氣附いたといふ譯ではないのです。知りながらも私の好奇心は私の脊を打つて呉れました。自分を振り向いて考へる力よりも、好奇心の方が强かつたのです。(同) けれどもう駄目です。

晴雄。(稍々頭が纏つたといふ風に) おや貴女は、好奇心で僕の後をつひて被來しつたのですか。

美子。好奇心で……まあそんなものですね。私は貴方の世間から離れた一人切りの淋しい處を、氣分を、拜見したかつたのですわ。それからも一つは、私の周圍を包んでゐる世間の種々のうるさいものから鳥渡離れて見やうといふ氣になりました。

晴雄。おや貴女は、戯れに戀を爲さつたのですね。好奇心と、鳥渡した氣持とで貴女は、僕を、弄みなさつたのですね。貴女は戀を粧はうて、而して僕は、その粧に欺されたのですね、此の弱い、小さい僕を貴女は、小猫が鞠をころがすやうに、ぢやれて見なさつたのですね。

美子。そうね、今の立場から考へると、そうも云へますわ、そう仰有つても私一言もありません、けれど私……それ程判然した氣持でなかつた丈け悔しいのです。私が小猫で、貴方が鞠。私は莫迦だ、幸福な事をしながら知らずに了つた。たとへ三日にしろ四日にしろ、貴方の仰有る小猫であつたら私はどれ程幸福者でしたらう。私は面白い遊戯を取り遁したのですわ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

晴雄。取遁した………

美子。自分の心のまゝに人を連れて來たり、左様ならをしたり。何て面白い戯れでせう。私は夫れを取り遁しましたわ。

晴雄。捕へる氣はありませんか。

美子。もう駄目。いゝえ〳〵さうでもない、私は其の爲めに此の山を下りるのですの、人はみんな判然して居ますわ。自分の思うやうに働いて、自分の思ふやうに樂しんでゐます。私は人の享けてゐる幸福は眞面目によつて得られるものだといふ事を知りました（間）私が貴方と一緒に此の山に來る道すがら、幾度歸らうと思ひましたでせう。幾度引返さうと思つたでせう。けれど貴方にお氣の毒だといふやうな、二人の爲めに役にたゝない遠慮から貴方の後を跟いて來ました。折角樂しまねばならない、一人舞臺を、私はむざ〳〵詰らないものにして了ひました。さ、もう私は眼が醒めたのですから、明るい町に歸ります。世間のまんなかにもぐり込んで面白い事をして、自分のために樂しみますわ。私、今日から自分のために生きるのですもの、而して種々な聲や姿を見ますわ。私には電車の軌る音だつて、豆腐屋のラッパだつて、それから子供の泣聲だつて、………夕方集まつてくる澤山の物音は、私を晴々しい氣持にしてくれます。行きませう、烈しい街の聲の聞える處迄。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

晴雄。ゝゝよく解りました。お互に此山へ來ようと相談の出來上つた頃は子供でした。僕が貴方を知らなかつたやうに、貴女も僕を知らなかつたのだ。

美子。さうよ、二人の考へが淺かつたのですわね。

晴雄。（いらくくして堪らぬといふ風に、行きつ、戻りつしながら）僕が惡かつた。ゝゝもう今更、愚痴の洩しつこしても仕方がないから、これで別れませう。

美子。それが一番いゝわ。そして二人のためにそれが一番幸な遣方ですわ。

晴雄。（烈く熱して）上調子な笑と、乘鉢な世渡りとは僕は嫌です。僕の世界は、つゝゝましい小鳥のやうなもの許り住むところです。貴女は異ふ世界の人です。

美子。異ふ世界の人……さうです。貴方の仰有る通りですわ。

晴雄。おや僕は御送りしませんが宜うムいますか。

美子。えゝ何卒も其のまゝにして下さい、さよなら。

美子退場。晴雄默したまゝ美子の後を見送る。暫時沈默

晴雄。御機嫌よう。

晴雄。（ぐつたり足下の木株に腰を掛ける）二十二年の長い生涯を送つて來た自分、いくらか世間の色は見分けらるゝと思つては居たが、何も彼も解らない、解つたと思つたのは自分丈の想像であつた。何も解らない。夢の中を浮いてゐたやうなものだ。此山に登つたのも

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

家を離れたのも、皆、自分以外の或者が、自分に命令をするので、その云ふがまゝに從つて來たのかも知れない。噫々自分には奈何しても、さうとしか思へない。夢の中で知らない人を見た。又、浦子さんの聲も聞いた。知らない人達の訓示を受けた。何でも彼でも煙のやうだ。憧々登つて來た新らしい生活、波のやうに押寄せて、波のやうに逝つて了つた。取返のつかない遠い國へ行つて了つた、（間）けれどこれは偶然ではない。決して、偶然ぢやない。（自分自身を恨むやうに）考へて見れば自分が造つて來た仕事だ。知らず、知らずの間に自分が造つて來た仕事だ。その過去が姿を變へて、今眼の前に現れたのだ、淺ましい、淺ましい自分の手には何もない。確り掴んでゐるものは何もない。空手だ、空手だ。（いら／＼した樣）空手だ。

晴雄頭をかきむしりながら、四邊を歩き廻る。此時、浦子活々した樣子にて花束を兩手に持ち上手から登場、けれども晴雄は氣附かぬ體

浦子。晴雄樣。晴雄樣。

晴雄。空手だ。自分の淺果敢な姿が現れてくる、怖ろしい。

浦子。晴雄樣。

晴雄。（烈く驚いたやうに聲のする方を向く）あつ。

浦子。（急いて近よらうとして踏みしめる）晴雄樣、あゝ私は漸くお目にかゝれました。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

晴雄。浦子さん。（元氣なくうなだれる）
浦子。嬉しい。私嬉しい。
晴雄。（落着て）浦子さん貴女どうして、此所へ被來しつた。こんなに淋しい山の中に、
浦子。貴方を探して、
晴雄。僕を……
浦子。貴方を訪ねて長い間、睡りもせず、休みもせず……
晴雄。（手を振つて）許して下さい。貴女が此の山に來るのにどれ程苦しい思をなさつたといふ事はそれはもうよく解ります。浦子さん何卒許して下さい。（怖ろしいやうに）僕の云ふ事を一々信じて下さい。僕は今眞心から貴女に謝ります。許して下さい、
浦子。私に……貴方が私に謝る。こんな事はありませんわ。私唯貴方にお目にかゝれゝばそれで滿足ですの。而して少しお話をする時間を與へて下さりやもう、私現世に何も望みませんわ。（見廻して美子の居らぬに不審を持つ）私少し此所に居てもよろしいのですか。
晴雄。えゝ何時迄も、……　貴女が一分時でも、餘計に居て下されば僕は幸福なのです。さ、御話なさる事がお有りなら何でも聞きます、聞いてから僕は全然お詫をします。
浦子。私三日の間、毫とも休まないで來ましたの、一分でも休まずに、一分でも睡らずに。輕いはずみな考て此所迄來たのではないといふ事を承知して頂戴かなければなりませ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ん。それから、此花束を特に貴方に、納めて頂戴かうと思つてゐるのです。――これは、私に取つて紀念の深い人から贈られたのです。――ね、受けては下さいませんか。

晴雄。僕は喜んて戴きます。

浦子。（晴雄に花束を一つ渡す。）眞面目であつたと、も一度云ひますよ。私は、眞面目に貴方を戀してゐたといふ事を、貴方一人丈けに私の口から御話したいのてすわ。今迄私は、一度もそういふ事を申上げた事はない、隨分御一緒に散歩もしました、お話も致しました。けれど、私が貴方を戀してゐると打明けた事はありませんてしたわね。と云ふのは、お互の間はもう定められてゐると思つてゐましたから、私達は一生涯、一緒に住む事の出來る間柄だといふ意がありましたし、世間でも、又、私達の親達でも、認めて居て呉れましたからですわ。けれども事實は、全く違つてゐました、私の考へてゐた事や、樂んて居た事はみんな、夢でした、夢でした。親達の定めた間柄は、私達若者の爲めにはならなかつたのです。私は恨みに來たのぢやないから、もう、くど〳〵しい事は云ひますまい。たゞ貴方に云ふのは、貴方を戀してゐた女があつた。而して今も戀してゐる、といふ事を、判然と御報せしたかつたのです。

晴雄。僕はもう何と云つてよいか解らない。唯、自分から出た事が自分に戻るといふ事な知りました。僕は何ても宜い、浦子さん何卒僕を貴女の思ふ存分にして下さい、てな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

いと僕は苦しくつて堪らない。
浦子。そんな事を仰有つちや不可ません。私は貴方を苦めに來たのぢやありません、私は、貴方がそんなに苦しみなさるのなら來てはならないのだわ。私が戀してゐる人の苦しむことは鳥渡でもしてはならないのですから。私歸りますわ。
晴雄。待つて下さい、僕に許すと一言仰有つてから歸つて下さい。
浦子。許すつ、許すつて、私に對して萬一もそんな考へて彼在るのなら全然、打棄つて下さい、私は貴方を僞つたり、欺いたりするやうなことは一生涯ありませんわ。
晴雄。眞個ですか。
浦子。私はお目にかゝつた丈で滿足してゐますす。其上に思ふ事も云つて了つたし………
晴雄。浦子さん。
浦子。はい。
晴雄。僕の云ふ語を信じて少し聞いては下さいませんか。
浦子。聞きませう。
晴雄。僕は、美子さんと此出へ來たのです、樂しい生活をする心算て、世間の煩さから離れて、眞の生活は淋しい山の中にあるのだと思ひましたから。(間)けれど其れは悲しい終を告げました、そして僕は好い敎訓を受けました。貴女の美くしい御心に縋りた

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

いのです。貴女の外に誰も、、、もう救つて呉る人はありません。

浦子。貴方の苦しい時には、私が救ふのです。私丈が………

晴雄。さうだ、實に貴女切りだ。

浦子。分りました。私に任せてね、私がみんな庇つて上げますわ。

晴雄。有難う。貴女は僕の救主だ。

浦子。安神してね。貴方の喜は私の喜です。

晴雄。浦子さん。（喜びに激したやうに、身體を振る）僕は安心が出來ました。

浦子。さ一緒に歩きませう。………天は私の眞心を聞いて呉れました。人の眞程力の强いものはありません。

浦子。さうですわ。眞實は最後の勝利ですわ。

（幸福を祝ふ華美な音樂と共に幕）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

磯のひる

淑子

磯
磯のひる砂に射返る日輪の光りに眼閉ぢて佇む
去にし年君と遊びし砂山に我一人立ち浪の音きく
如何なれば物思ふ子となりにけり君と相見し初夏の頃
赤らみし桃盗む子は憎みつゝ人妻をしも戀ふと云ふ人

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

夫あれど夫し思はず自からの作りし戀の幻を追ふ

かくて遂に沈默（しじま）の森に君と我れ詩と意地に胸あはて死ぬ

我戀はよどみに浮ぶうたかたの且つ消えてゆく刹那々々に

思ふ君と夏野を行きぬ薔薇色の草に入る日を美しと見て

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

七夕の夜

物集和子

お蔦（つた）は札の辻の友達の家へ遊びに行つて、彼の方はもうお子さんが二人あるの、大變に老けて見えるの、お内儀さん染みて、意氣な丸髷に前掛なんぞ掛けて被入るの、此度彌々例の光子さんもお極りなすつたんですつて。子爵とかで、學校の校友會の此の春の時には、馬車でお乘り込みなすつたとか云ふ、大分は友達の噂で持ち切つて、サイダや葛餅を食べて歸りには、夕日が強く薄紫の日傘で遮へ切つても、傾けた襟の邊りは何となく暑かつた。

お天氣の續いた町は、砂埃に煽られて、後毛を掻き上げる度びにザラ／＼と氣味惡く思はれる。水を撒いてる家が多かつた。而してお了ひには、

「貴女は何が不足で然うやつて被入るかと思つてよ、隨分佳いお家からお望みだと云ふぢやありませんか、私なんか考へたら申分か無いやうに思ふんだけれど、」と何日か一遍それ

を云はふと思つて居た事を、漸つと云つて了つたと云ふ風で、和目な女は夫れ丈云ふと默つて了つた。お蔦は蛇度、何日かは此の女の口から、斯う云ふ言葉を聞かされるだらふと豫期してゐた事に、今急にバッタリと出逢したやうな氣がして、一寸返事に詰つたが、品の佳い若奥樣らしい、大きな丸髷と紅いてがらとに目をやり乍ら、

「何故てせう、」とつけもないやうに、其の癖其の返辯とも聞かれるやうな言葉を故意とはぐらかすやうな調子で云つた。

「だつて慾を云つたら際限が無いでせう。」と其の女は眞面目に云つた。其樣に慾張りに思はれてゐるのかしら、と可笑しくも思ふし、口惜しくも考へた。其樣事を胸の內で繰り返し乍ら、何の氣なしに、出て來た友達の家をもう一度振り向いて見た。

此の頃のお蔦の心にある考へが、丁度其の女の口から聞いた事で、一層煽り立てられるやうに思つた事があつた。それは女優になつた同級の女の噂で、お蔦は一々其の樣子を想像してみた。華派な友禪のやうな縮緬の單衣、甕下地、名を染め拔いた手拭、假りにも自分達が思はなかつた、眉迄落してゐると云ふ。而して其の女は自分の職業を何より樂しいもので、其上に氣樂だと云つた、其の女の口から俳優をさん付けにすると云ふ事さへお蔦には耳新らしく聞えた。もう一生お嫁になんぞ嫁かないのよ。又行く氣も出ないわ。朝から晩迄一人の人の機嫌許りは取つて居られやしないんですもの。と云ふ言葉や、華派な藝

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

人生活の有様を、歴々と思ひ浮べて、自分の胸も、何だか一緒に亂れて行くやうに思はれた。それに競べて、自分はまあ何と云ふ暮し方をして居るんだらふ、母とても、姉とても、自分の心を不知ずに、只人より云つて來る縁談を受け次いで、好いの惡いのと取沙汰をして居るのが、聞くさへ辛く思はれてならない。母に奈何して自分の心が分つて堪るものか、と云ふやうな考へが始終胸に湧く。お蔦とは三十も違ふ母には、年が十五も違ふ事や、再婚と云ふ事は何とも思はれなかつた。學生時代の放蕩も、先妻の藝妓だつた事も、家の名譽と、結婚と云ふ美しい字に包んで了つて、今更ら新らしいやうな貌をして、寫眞迄寄越して、母を迷はせる男の心が憎らしかつた。自分は好いとも惡いとも云はず、母が何の位迄仲人口に乘るかを見て居たいやうな氣もした。母の心は、二つ違ひの去年卒業した妹の養子を迎へる爲めとは、云はずとも分る。

　お蔦は俯向き勝に、人の軒を歩いて居たが、聽て山内へ來て電車にのつた。車が日比谷を通る時、何々會御連中と正面に澤山貼り出してある劇場の横手に、幾臺か乘り捨てゝあつた馬車や車の內で、其の女が乘ると云ふ、草色に塗つた車が殊にお蔦の注意を集めた。彼の建物の中で、曾て自分が遊んだ一人が、其の人とは思はれないやうな變り方で、花形として薄紫に紅に、裝を凝らして、幾多の人の賞讃を買ひ、幾多の若い女の嫉みの的となつて居るかと思ふと、的もない幽かな嫉ましい氣に馳けられた。自分の目の前の、會社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

目らしい若い人が、得意らしく夕刊を買つて相場欄を見て居たが、軈てポケットから蟇口を出したり入れたりした揚句、皺だらけの紙幣を延し乍ら渡して、回數券を買つたのが、其のカラーやカフスの汚れと一緒に、平常より一層貧乏臭くお蔦の目に映つた。

駿河臺下で降車て、紅梅町の家へ歸ると、丁度行水が濟んだ許しの妹は、珍らしく島田に結つて、藤色のやうな絞りの浴衣で、昨日買つて來たきり／＼すに新らしい胡瓜を入れてやつて居た。伊豫簾も捲き上げて、冷たい風は思ひの儘坐敷を行き拔けて、其の傍に釣るした岐阜提灯の水色に秋草を描いたのを亂してゐた。

「母さまは。」

「今御飯よ。」

と低い小さい聲で妹は云ふ。妹と並んで虫が今にも鳴くかと立つて居ると、今日は白粉も塗けたらしく、仄かに其の匂ひがした。お蔦は故意と傍を向くやうにする妹の貌を、意地悪く凝乎と見詰めた。

「島田が好く出來てねえ。」

「變でせう、見つともないと思つたけれど、母さんが結へ／＼と仰在るから。」

「結構ぢやありませんか、束髪より餘程いゝわ、それに若く見えるし、せい／＼十七位よ。」と染々云つた。細面に中高な貌が、這麼髪には好く映つて、今夜許しは妹が奇麗に見

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

えた。

お蔦は自分の汗ばんだのも忘れて、柱に倚りかかつて、手持無沙汰に、水を遣つたコップを持つた儘俯向いてる妹を、しげ〳〵髮から爪先迄見てゐた。好くお蔦が白粉を塗けてゐると、三つ違の姉のおゑんが、何とも云はずに凝然と見て居る事が度々あつたが、それを何の事とも氣が付かずに居た。殊にいさかいでもした後は猶更らみた。只さへ大きい目を睜つて、掌てあごを支へて、笑貌一つせず、心の内の思ひと云ふ思ひを、皆んな目へ移して了つたやうな、鋭い見方をされると、屹度彼の娘は白粉を彼麽風に塗ける、彼麽紅のさし方をする、と思はれやしまいかと可厭だつた。それでも見て居乍ら、時には、「綺麗になつた事、」と打捨るやうな云ひ方をして、自分も貌を洗ひに行く事などもある。それが今妹の貌を故無く染々見る役になつたかと、妙に心淋しかつた。それでも自分が決つして醜くなつたのではない。妹がそろ〳〵人の目に立つやうな年になつたのだらふとは考へるけれど、妹を見る目に險しい光りがなければいゝがと、自分乍ら危ぶまれた。

「あつ姉さんから御手紙が來てゝよ。」と妹はいゝ事を思ひ出したやうに立つて行つた。まだ其の後付きには何の嬌態もなかつた。妹に手渡たされた姉の手紙を見ない内から、今日友達の家へなんぞ行かずに、姉の方へ行けば好かつたと直ぐに後悔した。すると成る可く侮暗くした六疊に寐てゐる姉の蒼白い貌と、大儀そうな體を思ふにつけ、父もなく母もなく

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

親身と云へば只一人の姉と云ふ事さへ、今日は妙に胸をふさがれるやうな心がする。初め姉さんに子供が出來たと聞いた時、今迄は白蓮のやうに美しいもの、氣高いものと思つてゐた姉さんが、急に地に落ちて了つたやうに思はれて、自分が泣いても追付かないやうな、手の内の玉を兄さんからもぎとられたやうで、兄さんが如何にも殘酷なやうに思はれてならなかつた。薄い光りの元で、薄墨で書いた手紙を讀み終ると、其の儘懷中に入れて、何を見るともなく凝乎としてゐた。提灯の紅い房が二つ三つくる〳〵と廻つた。

「姉さん行水は、」

「まだ。」

「そう、今あいてるわ。」

「まア後でもよくつてよ、それよりか染ちやん之でも食べようよ。」と袂の重みで思ひ出した、借りて來た紅い鹽瀬に、壽と絞りで白く染め拔いた手帛沙をほどくと、ツップルと桃山を包んだ紙をあけた。

先刻迄はまだ薄明く思はれたのが、もう何處にも明るい影は見出せなくなつて、直ぐ目の前の植込みも、一々吉野紙を通した朧ろげな灯でなければ見えない程になつた。提灯の廻る度びに、思ひ出したやうに桔竹草の紅いのが、二三本明瞭と現はれる。而して其暑苦しいやうな、其の擗幽かな匂ひが折々した。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

裏の方ではもう新内を流して來たのが、話をしながら時々申譯のやうに、高音を引いたり、一を打つたりして、その下駄音迄聞えて來る。お蔦には、何だか此の新内の流しが、妙に心の底に泌染み渡るやうに思はれる。段々と遠く、目に見えない糸でも引いてゆくやうに、幽かに〳〵はては消えるともなく、何日の間にか消えて了ふその音を聞く度びに、遣る瀬ないやうな思ひに惱まされた。見もしらぬ、思ひもしらぬ、遠い人の世が戀しいやうな、氣に迫まられる事が度々あつた。そう云ふ時にはよく德兵衞の上を思つた。德兵衞とは何日か見た宮戸座の曾根崎心中の中の人であつた。去年の十月、友達と二人でお揃ひの下駄を買ひに、雨の降るのに淺草迄行つた。平常の人込みに引更へて、雨のふる日は、仲見世から觀音さまへかけて、眞の用のある人しか通らない程だつた。二人は云ひ合したやうに觀音さまの方へ行つた。雨で殊に羽色が艶々しくなつた鳩が、誰も豆を撒きてがないので、お堂に上つたり、雨のかゝらない處に塊つて居たのが、お蔦が豆を投ると一時にパッと寄つて、重なるやうにお蔦のぐるりを圍んだのが、今でも目に殘つた。

「昨日は九月のお節句だつたのね。」

「そう、奈何して。」

「だつて這麽に澤山豆菊が上つてゐますもの、之を持つて來ては此處に上つて居るのと取り替へて行くんでせう。」と友達は敎へた。お線香の絕え〳〵になつてゐる傍には、萎れか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ゝつた豆菊が何本となく上つてゐた。道に捨てゝあるのもあつた。氣紛れに芝居の看板を見て、二人は入る氣になつた。入るとすぐにもう此度は二番目ですと敎へられて、行き慣れない芝居に、妙にせか／＼と落ち着かない心持で、絶えず見てゐた。華やかな舞臺に、元祿の若衆姿の德兵衛と、その頃の遊女風のお初との戀は、美しい色彩にいろどられて、お蔦は只お初德兵衛の爲めに泣いた。出てからも舞臺の事ばかり考へられて、氣の拔けた人のやうになつて、雨のぬかるむ道を宅へと急いだ。

それから見た忠兵衛より、治兵衛より一番初じめに見た德兵衛に心を動かされた。お蔦の心は華美な元祿姿の德兵衛の上によく行つた。自分もお初のやうに扮つて出て見たい――と思はないでもなかつた。それを思ふと夢のやうな美しい幻が浮かぶ。自分の行先が急に明るく、廣くズッと前に擴(ひら)げたやうに思はれた。種々の事を考へ乍ら妹と一緒に食べたワッフルには、何の味もなく、只口を動かしてゐると云ふより外には何でもなかつた。

不意にキリ／＼と頭の上の蟲籠でないた。

「あら鳴いた、」と二人一時に云つて目を見合すとほゝ笑んだ。

仲見世のどら燒が食べたい、と、この前行つた時に姉さんが云つたのを思ひ出して、お蔦は淺草迄行つた。それを買ふと、又兩側の涼しそうな品を並べた簪屋や、畫双紙やの前で

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は少し宛足を悠るめて歩いた。向ふから、細かい破れ格子の浴衣に、狹い白博多の帶をわざと小さく貝の口に結んだ、姿のいゝ此處等の藝妓が、下駄と傘とを贅澤なのにして、七つ許りの子の手を引いて、

「お人形さんが好いの、」と云ひ乍ら店の方へ行つた。

丹塗りの藥師堂の傍には、人が多勢立つてゐて、其の間から途斷れ〳〵に尺八の追分が聞えてゐた。大分何日も居る老人の盲目だらふと見ないで過ぎて、今は何をしてゐるだらふと又看板を見た。此糸蘭蝶とあつたので、又妹を誘つて、女中と三人で來よう、其の方が母も快く出して呉れるから。

谷中の姉さんの家へ着いた頃は、暑い日もやゝ蔭が出來てゐた頃だつた。電車に乘つて近道を取つて來たものゝ、大きな包を持つては可成難儀に思はれた。洗つたやうな格子戸を啓けて、穿物一つない三和土の内に立つて聲を懸けやうと思つたが、森として丸で人氣もないやうに思はれるので、其儘案内も待たずに、ズン〳〵姉の寢てゐる部屋に入つた。

「姉さんお休み、」と聲を懸けて、襖をソッと開けると、ペタリと姉の傍に寄つて座つた。枕元を少し離れて、屏風で暗くしてあるへやに、おゑんは麻の掛布團の上に片手を出して、スヤ〳〵寢入つて居たが、目覺とくパチッとその黑目勝な目を開けると、莞爾した。洗髮を一寸束ねた儘の髮は、ピンと一緒に悠く解けて、括り枕から疊へ迄流れてゐた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「好く來たわね、手紙が屆いて、」

「えゝ昨日、だから來たのよ、淋しいでせう。」

「あゝ。」と頷くと心細そうな目をして、一寸手で泪を拭いた。何彼につけて神經の昂ぶつてゐる姉は、誰かしら傍に居なければ寂しいのと、種々不快な事を思ひ廻すので堪らないと書いて寄越した。直ぐ目の前に被さるやうな枝を延した百日紅は、その毒々しい迄に紅い花を、照り返す夕日に洒して、血を見るやうに思はせた。

「暑苦しい花ね、色を見てもうんざりして了ふ。」と姉さんは首を振り乍ら云ふ。次の間との北の境は、レースが掛けてあつて、それから絕えず冷たい風が流れ込むでゐた。

「兄さんは、」

「まだ歸らないの。」

「ぢやァ餘計淋しいわね。」と云ふと何となく可笑しくなつて笑つた。隣りがお寺になつてゐて、一人の女中が晝寢でもしてゐるのか、物の音一つしなかつた。兄さんが好きで庭も半分は畑のやうになつてゐて、丈の高い唐黍や胡瓜や藤豆や、外に西洋の豆らしい紅い花も蔓に咲いて居た。

「どら燒を買つて來てよ、それから之も。」

お蔦は途中で目に止つた、藍色の地に荒い格子が黑て出てゐる浴衣を出した。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「私が縫ふから着て見て頂だい、乾度好く似合つてよ。」
「意氣だことねぇ。私には似合ふかしら、」
「普通よ、姉さんは意氣が好きぢやありませんか。」
容貌自慢の姉は透き通るやうな齒をみせた。それでも平常程奇麗には見えなかつた。眉と目との間が奈何も何日ものやうに鮮かとは思はれない、暗い影がかゝつてゐるやうに思はれる。
「今夜は泊つてもいゝの、」
えゝ、二三日はいゝのよ、だから御馳走をしませうね、何でも食べたいと思つて被入るものをこしらへてよ。」

夕ごはん後は盆燈籠に火を入れて、兄さんと二人は姉さんの枕元に座つた。兄さんは蚊遣りの烟がよく出ないのを氣にしてゐた。
「蔦ちやん、此度私が死ぬかもしれないから宅ぢや盆燈籠を今から點けてるのさ、早いでせう。」と笑談らしく厭味を云つた。
「厭な、ても奇麗でいゝぢやありませんか。」
「だから兄さんは好きなのさ、私が厭だつてのに奇麗だつちや點けてるの、」澤山おつけな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

さいと云つた風に兄を見て云つた。不意と今迄些少も氣が付かなかつた、紅入り友禪だの、紅なしだのゝメリンスの一つ身が、生モスの裏がついて、四五枚姉さんの裾の邊に重ねてあつた。レースのついた涎掛けさへ置いてある。お蔦は生れる子は兄さんに似ても、姉さんに似ても、器量好しだと思つた。兄さんは姉さんの藥壜の下になつた紙切れをとると、お蔦の前に出して、

「蔦ちやん、子供の名を先日二人して考へたんですがね、此の中で何れがいゝでせう。」

紙には、謙一、道之助、時雄、富美、鈴、雅子と書いてあつた。

「雅子がいゝわ。」

「然うですか、僕は男なら道之助、女なら富美子と極めてるんだがなア。」

「道之助は可厭よ、安つぽくつて、謙一の方が好いわ。」と姉さんが横から出て、

「ねえ。もし男の子だつたら何を買つて彼下るの、ダイヤの指輪？ダイヤでも安過ぎるわ。」

「そうさね、ルビー位にして置くさ。」

「おや然う？ならもう澤山、頂戴しませんよ、馬鹿〳〵しい、あの女の時は何を買つて、鳥渡、ダイヤぢやなかつたわね。」と眞氣になつて姉さんは笑つてる兄さんの顏を睨むやうにして云つた。其の目にはもう泪が溜つてゐる。此樣詰らない事にでも、一々嫉んだり、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

姤んだりして、兄さんの四五年前にした道樂を云つちや、今初じまつたやうに泣いてゐる姉さんを如何にも詰らなく思はれて仕方が無い。

「僕は一寸其處等を散歩して來よう、何かいゝものがあつたらお土産を持つて來ますよ。」と兄さんは貨を啣へたなりで、帶を巻き返し乍ら出て行つた。

野分みたいな風の吹き方で、可成廣い庭を風が自由に往來した。どんより曇つた空は、雲が蔽ひ被さるように低く、草でも木でも靡き倒してもするやうな強い風が、高い木の上を渡る時は恐ろしいやうに思はれた。椽側に出てみると眞暗で、一間先も光の屆かない處は只暗かつた。燈籠の火が屢々消えた。

「其樣處に立つて居ないで此方へお入りよ。」とお蔦を坐らせると、まじ〱薄笑ひしながら、

「あの方は奈何して、斷つたの、」

「否。あのまんま、」と堅くなつた。

「ぢやァ斷りも奈何もしない、母さんには奈何しても思ひ切れないのかしら、餘程此度のには御執心とみえるわね、だけど止した方が好くつてよ、良人の話ぢやね、學生の時分にある女と關係して、その女が何かの事で剃刀で死んで了つたんだつて、それを聞いてから可厭になつて了つたわ。之はだめだと思つてね、でも一寸聞きがいゝから誰でも迷はされてよ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

だけど之は止した方がよくつてよ、而してもつと外のいゝ處にするといゝわ、私が目つけて上げてよ。」と無雜作に、其の姉妹の爲めを思ふやうな口吻で云ふ。

「其樣事は奈何だつていゝのよ、私にはまだ何とも仰在らないし、仰在つた處で大丈夫よ。」其樣事で迷はされやしません、と云つて了ひたいやうな、力强いやうな云い方をした。姉さんも初じめは賛成して置き乍らと少しは可笑しくもある。

「良人でも心配してるのよ。實はね友達で貴女を是非つて人があるの、知つてるでせう。何日かお月見の晩に來た人、枝豆が莫迦に好きだつて貴女大變に笑つた、あの人よ、奈何?私達はいゝと思ふのよ。」

「そう、」

「まア冷淡ね。」

「えゝ。」

「何故?」と聞き返した時は、もう少し氣色を損じてゐるのが見えた。

「私、」とお蔦は云ひ淀んだが、思ひ切つて、

「女優にならふかと思ふのよ。」と早口に云つて了つて、譯もなく顔を紅くした。

「まア蔦ちやんが――」と呆れたやうな目をした姉の口許には、あり〳〵と冷笑の影が見えた。其顔で女優、ときゝ返して遣りたい程に、妹の心が生意氣に思はれる。何故無言つ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て自分の云ふなりにならないんだらう。自分は妹の爲め許し思つて遣つてゐるのに。

「結構ね。」と云つた許りで、心の不愉快さは蔭そうとしても、顏にも態度にもつひ顯はれた。

「私もう遠から決心してたの、只何日お話しようかとそれ許り考へてたのよ。」と妹は目眩しい物でも避けるやうに、姉の目から顏を避け乍ら賴むやうに云つた。

「ぢやア遠からなの、」

「えゝ。」

「そんなら何故もつと早く云はなかつたの、其樣事は知らないから私しや貴女の爲許し思つて、良人にも賴んだし、良人から他家にも貴女の事を賴みまはつたり、極が惡いわね、今更ら止すとも云へまいぢやありませんか。」と口をついて出た。

「えゝ全くそれは濟まなかつたのよ、申上げやうと思つてゝも遂い云ふ機がなかつたもんですから、ねえ、姉さんさへ賛成して下されば私誰が何と云つてもいゝわ、奈何でせう。」と縋るやうに云つた。德兵衞の樣子を思ひ浮べて、何だか樂しいやうな氣がした。姉には見せたくないもので、又見たとて決つして面白いものではないと思つた。

「貴女は彼の女のやうになりたいの、」と姉は少なからず侮蔑の口調で云つた。其の癖、もし妹の名が高くなつたら甚麼だらふとも考へてみた、何故か妹に其樣名を上げて貰ひたく

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ない、矢張り私と同じやうに家を持つべきだと思つた時、其様子は奈何にも取り付き端のない程冷たいものだつた。
「私としては決つして賛成をする事は出來ないわ、又良人でもそれは大反對よ、もう一度考へ直したら、」
「えゝ、」と素直に首肯いたが、姉さんにはもう話すまい、假へ云つても、おゑんの心と自分の心とには遠い隔りが出來てゐる、姉には良人や家の方が、自分より遙かに貴いものになつてゐるのだから。只その前に一度云つて置けば、姉へ對しての義理は濟んだやうなものだと諦らめた。
「貴女が其樣事を思ひ立つても、私は決つして止めやしないけれども、何しろもつとよく考へてね、之が他人でもなら面白い事だと云つて賛成もするけれど、妹が俳優になると云ふと一寸いゝ氣持はしないはね、奈何しても止めたくなるよ、それが又思ひ通りにそうスラ〳〵行くものか奈何かも考へなければね。」と何處迄も思ひ切らせないでは置かないと云ふ調子で云つた。
「誰でも自分の思つた事の半分も行かないものよ。私だつてどんなにかいゝ心算で此家へ來たか分りやしない。」ともう笑ひ乍ら、何日の間にか自分の方に話を引張つて、
「來る時は大した考へて來たものよ。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「でもそう〳〵は行かないものね、でも貴女はまだ體が極つてゐないし、好き自由で、未來は長し何うにでもなれるわ。私はもう奈何しようにも今更らならないでせう。だからせめて未來のいい話でも聞かなくつちや、時々良人に未來の話をして吳れつて賴むのさ。」
「そんな時には兄さんは何と御在つて。」
「女なんぞに云つたつて分りやしないつて、云やしないわ、だからもう聞かないの。考へるとね、何の爲めに斯うやつてゐるかと思つてよ。之から未來だつて奈何成行くものか、考へたくもないわ。今丈で澤山なやうな氣がしてよ。」
蒼白い貌は、疲れが出たらしく薄紅くなつて、捨鉢に云つた口許には、失望の色が讀まれる。お蔦は何と云つて慰めていゝか、その言葉に困つた。此の儘姉さんと一緖に、大きな聲を出して泣きたい、泣いたら姉さんの失望の幾分かゞ洗はれて了ふかと思はれるから。
「蔦ちやんはいゝわ、」とつく〴〵自由な妹を羨むやうな口吻をした。
「だつて姉さんは奇麗だから羨やましいわ。」
つひ日頃の思が口に出た。おゑんは只笑つて居たが、それでも嬉しさは隱されなかつた。姉さんの慰めは姉さんの貌だらふ。着物が特別好きなのも、髮の結び方の難しいのも、皆んな姉さんの美貌がさせるんだらふと思つた。風の間〳〵に、畑の方でガチャ〳〵が喧しく鳴き立てるのが耳につく。誰が離したんだらふ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「おゑん、奇麗だらふ、蔦ちやんみて下さい。」
散歩から歸つた兄さんが、ギヤマンに入れた金魚を姉さんの目の前にさしつけるやうにして見せた。眞紅なのや、白い斑の入つたのが、青い藻に絡んで、大きく光つて見えた。

翌る日は昨夜の風にも似ず、雨もふらずによく照つた。その代り砂は一日様に舞ひ上つて、氣持惡く思はせた。姉さんは今日は少し氣分が好いと云つて、夕方行水を使ふと起きてみた。而して椽側で爪を切つてゐるお蔦に、
「夜る爪を切ると親の死に目に逢はないとさ、およしなさいよ、」と笑つてとめた。姉さんが妙な事を云ふと思つて返事もせずにゐると、おゑんはそれには一向頓着せず、
「昨夜は七夕さまだつたつてね、今日は明瞭と見えるよ天の川が、來てごらん。」と坐つて柱に倚りかゝつて上を見上げた。お蔦も立つて柱に掴まつて上を見た。撒き散らしたやうに、蒼く澄み切つた空一面に、小さく輝いてゐる紅や青の星の間に、それかと思ふ銀河が、白くづうつと西の方迄續いて空を横切つて居た。——完——

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ヘッダ、ガブラー論

メレジコウスキー

イプセンの劇の内で他の特色あるものとして、ヘッダ、ガブラーはゴースツに於て見る樣な廣い歷史的な又社會的な基礎はもつて居ないけれども、近代人の內的葛藤を描く事に就て、作者は未だ嘗てこれ程の程度に達したことはなかつた、劇全體はヘッダ、ガブラーなる中心人物に集まつて居る。同時代の道德的生活のあらゆる方面を含むこの廣さ、哲學的概括は、同時に一個の個人的性格を有つて居る。劇中の他の人物は皆中心人物を際立たせる爲に寄り集まつて居る。是こそ眞の戲曲的肖像である。

女主人公の像は作者自身によく分つて居た。即ち彼は自分の心を惹いた女のやうに、又其女の爲には慘ましい苦痛にも堪へたやうに彼女を美しく、注意して描いて居る。其顏の極々少さな皺でも、着物の裊渡した襞までも明断と彼は見屆けた。序幕の註に書いてある彼女の容貌は斯うである。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「年齢二十九歳、氣高い、貴族的な處のある容貌、風采。餘り白からぬ皮膚。冷靜な、透明な無感覺な情をよく表して居る鋼鐵のやうな灰色の眼、餘り濃くはないが、綺麗な栗色の髮の毛。」

激した瞬間でさへ自若として居る此冷靜な透明な無感覺はヘッダの人品に貴族的な魅力を賦與して居る。

大學の文明史の講師である夫、ヨルゲン、テスマンは中流社會の凡庸の權化で、其取るに足らぬ、平凡な粗俗と無能力とは妻が何の理由もなく只無意識に、不可抗的に、其天性の全力を擧げて輕蔑する處で有つた。

それなら何故彼女は彼と結婚なんかしたのであらう？

先づ第一の理由としては、彼は他の誰れよりも堅實で、そしてまだしもの人のやうに思はれたからである。それと又困憊と、冷淡と、靜かな意識的の絶望とからでは有るが、恐らく又、學者振つた仕方で自分を大事にして呉れるこの尊敬す可き好人物と一緒に暮すことは他の誰れと伴にするよりも詰りは自由に相違あるまいと云ふやなう多少の希望も有つたのであらう。

彼は幸福と云ふ事に就ては極めて有振れた考へを持つて居る極家庭的な夫である。彼は理想の豐富からでなく寧ろ智力の缺乏に基する非實際的の人間の常として、お目出度い、予

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

盾だらけな意見を有つて居る。彼の言語、動作は悉くヘッダの氣を損うた。彼は稀に醉ひもしたけれどもまづ大低は不利な、面白からぬ位置に置かれて居る。彼は途切れ、途切れでなげれば、混亂して、甚く吃驚した風に「マア」とか「ナンテ」とか入れなければ只の一句も云はれない。此樣な男で有りながら物質上の利益問題、報酬の好い大學教授の公職に關する問題に對した時、彼は狡猾になり、拔目なくなり、邪惡になつて、決して一見して想像したやうな愚物でもなければ又望みのないものでない。併してテスマンとても教授の職を只黃金の源とばかりも見て居ない。彼は書物其物の爲めに等しく書物を愛する、記錄所の香を吸ふのを喜ぶ、そして新に購入したる書物の頁を切る事にさへ肉的快感を誘ひ出す。序幕に於て、彼は優しい心遣ひと熱心とを以て、眞劍にヘッダに見せたのは伯母さんが彼の本宅から持つて來て吳れた、二人の新婚旅行中、家に殘してあつた間に失くしたと思つた、彼に取つては大事な古上靴であつた。自分はやがて父親になるかも知れないと云ふ單純な考へが彼の內心に抑へきれぬ喜悅と、愚にも亦高慢な自足心とを起した。彼は耐へ切れないで逢ふ人每に、下女をも問はず其喜悅を知らせたく思ふ。テスマンはヘッダが絕對に自分に反對して居る事を確に認めるに足る丈けの眼を有つて居ない。

　結婚前、ヘッダは其父、ガブラー將軍の家でゲルレルト、レエボルグと云ふテスマンの未來の競爭者（彼も亦文明史の講座の候補者である）なる一靑年學生に會つた。レエボルグ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

はヘッダを愛したそして彼女は彼を失望させた。其理由は思ふに彼女が彼に對して冷淡でなかつたからであらう。彼女は彼が有つて居たる偉大な精神力と才能とを知つて居た。此レエボルグと彼のお目出度い、物臭なテスマンとは實に申分のない好對照である。彼は彼自身たる可き力を有つて居る、彼は書物は愛さないけれども人生の知識を愛する、彼は獨創的で大膽でヘッダの如く自由と否定には至極の境地にまで突進する。彼は中流社會の公然たる敵で社會からも亦無賴漢のやうに見做される。

しかもなほヘッダは彼を愛する事が出來ない。レエボルグの性格の或特性がヘッダの美に對する生來の爭はれぬ本能を傷ける。

何等の出口を見出せない才能の力がゴースッに於けるオスワルドの如く、又レエボルグの中にも、同じ種類の不德と疾病とを發展させるので、それは時として知識の低い人達が彼に對して懷く憎惡の念に正當の理由を與へる。

彼には少しの平靜もなければ、自制もない。彼は憎惡と破滅とを或は容れることも出來やう、併しあらゆるものに對する冷淡と、過度の困憊とが彼を絕望に逐つた。彼は酒色に忘却を求める。彼は惡戲をして市のあらゆる有德な凡俗共を態と脅かして見て、後では自ら心に慚ぢた。此病的敏感の激發が彼からヘッダを引離した。是等のことがヘッダには不自然とも醜惡とも見えるので、もう此樣な醜いことは死よりも恐れて居る。或は又彼と結婚する

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

氣になれなかつたのは彼女の中に犯罪的分子が餘りに多く、性質が餘りに熱情的であり、其馬鹿々々しさと、滅茶苦茶さ加減がレエボルダと餘りに多く似通ひ過ぎて居たからでもあらう、彼女は粗慢な醜惡な、そして不格好な力に對抗するに十分な力を有つて居ることを知らない。だから彼女は自分が愛することの出來た唯一人のレエボルグを棄て、輕蔑はしては居るが、併し自分の自由になる見掛け倒しの價値なきテスマンに生涯を委ねて、彼女の滅亡の原因である此愛の虐殺を犯したのである。斯様に其行動は自尊心(プライド)から出て居る。ヘッダ自分をも憫れまない。ヘッダは人の賤(いや)しい天性を許す事も出來なければ許さうとも思はない。控目な、併し愛に强い、其の氣高い情(こゝろ)は、信仰を失つた時、それ自(み)らを燒き盡して、人生に對する反抗と憎惡とに轉じ、其最後の情熱は達し難き美に對する仇なる愛となる。此愛には幸と云ふものが絶えてない。邪な、疲れ果た、そして望のない情熱――死病のやうなものである。ヘッダは美を愛した、――しかも地上に於ける其存在の可能を信じて居ない。

併し總てこれは私共がほんの偶然の論及から知つたのでヘッダは彼女自身の內的世界に就ては全く語らない。彼女は人に對する輕蔑の念や、人を嘲笑し、人を損傷せむとする欲求などを自分自身にさへ隱す。

他人の苦痛が快感を與へる程其心は硬く、そして拗けて居たが、最後まで彼女は決して自制力を失はない。取るに足らぬ、むさ苦しいものゝ只中に、或は敗滅の境にあつて他に何

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

物の美も見出されない時でも彼女は獨り美しく殘つて居る、よし此荒涼な、慘ましい美からは死の冷たさが發散するとも。

彼女が有つて居る精神的貴族の最高品位即ち純朴と、中庸とは結び付いて全性質に遠ざけ難き魔力を與へて居る。

滅亡の境からレエボルグを救つた善良なそしておとなしい細君はテーア、エルブステッドで、テーアは此不幸な人に取つては守護の天使で、同時に又同輩でもあり、介抱人でもある。彼女は忍耐と温順と母親のやうな心遣ひとを以て彼を勞り、放蕩を疾病だと思つて其無法な、無節制に打克つた。今一歩必要である、今一骨折る必要がある、と、そして遂にレエボルグは悉皆救はれたのであらう。彼は書物を出版し、思想界に於て大好評を受ける文明史の講座はテスマンでなくて彼に占められるであらうと云ふやうな風聞さへ傳はる。名聲は彼を待つて居る。テスマンに取つては此昔の學校友達で、そして競爭者である彼の不意の成功を聞くことはヘッダが云つた通り落雷だ。

劇が開ける時、丁度レエボルグは新刊の文明史第二巻で今度又出版しやうとして居る原稿を携へて田舍から出て來た。此書物は彼の書いたものゝ中でも一番好いもので、敵に對する勝利と、偉大な名譽とを彼に齎すものなのである。併しテーアは此病人が健康を全く回復したとは信じてゐない。彼女は心配の餘り、彼を監督し、いざと云ふ場合には誘惑か

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ら救ひ出さうとひそかに市に出て來た。そして其在所を探し廻つたが、偶然にも自分の學校友達のヘッダの家で彼に落合つた。

さてテーアがレエボルグを感化した事に就てヘッダに語つたところは斯うである。

「あの方は悪習先の習慣は棄てゝ仕舞ひましたの。それは私が斯うとあの方に强て迫つた故ではありません。さう云ふ事は私には決して出來ませんの。只あゝ云ふ慣習を私が嫌ふのに氣が付いてあの方が棄てたのに相違ありません。」

ヘッダ(微かな嘲笑を隱して。)「それでは貴女だつたのね、噂の通り。正しい道にあの方を連れ出したのは、ね、テーアさん!」

氣弱なテーアはヘッダより大な力を顯はした。彼の强情の前にも畏縮せず、只單純に溫順に其使命を果し、そしてヘッダには出來ない仕方て愛の衝動に身を任せた。ヘッダはレエボルグを妬みもしなければ今は戀しいとさへ思つて居ない。只彼女の心を亂したのはテーアよりも自分が弱いと云ふ考へてあつた。自分の滅亡に悶えて居るヘッダは他人の光榮には堪へられない。今が今迄長い間抑へに抑へて居た人生に對する反杭心と人類に對する憎惡の念とは破壞性の抵抗すべからざる本能に身を代へた。どんな障碍物もたとへ神聖なものであらうともう今は止めることが出來ない。彼女は何ものにも憧憬しない、何等の欲求も有たない、彼女は罪惡を私心なく犯し、自分を全然忘れて大苦痛につき、他人の破滅を目擊

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

する事に依つて得られる快感の爲に、惡の爲の惡をする。彼女の美は云ひやうもなく恐ろしくなり、しかもなほ增して時に恐ろしい破壞的元素の美のやうに見える。ヘッダは其美と虛僞とによつて自分に近附く者共を皆網にでも入れたやうにくる／＼と絡むのである。

無理押付けではあつたが彼女は柔順なテーアの信用を得る。テーアの自白を卷上げる。テーアの方ではヘッダが恐ろしい、どうかされやしないかと心もしどろもどろになつて、キッスされた時は蒼くなる。それでもヘッダの美はひたと面しては恐怖と嘆賞の械にかゝつてその意志と魔力に抗する力はない。ヘッダは自分の生贄に對し切なる溫情を有つてゐると云ふことを話した時は全く嘘を云つてゐるのではなかつた。そして彼女を愛撫しながらヘッダは其破滅を計畫する。病氣の子供でも扱ふやうに彼女を扱ひ、「あんた」と言はしたり、其柔いブロンドの髮毛を撫でたりしながら、とは云へ彼女は相手の耳に罪な言葉、即ちテーアの破滅となり又レエボルグの破滅となるやうに豫定されて居る誘惑的なそして逆意的な忠告を囁く。そこでテーアはヘッダの掌中の柔順な武器となつて彼女を尊敬する。彼女の恐怖の大なるに從つて、其服從の度も一層增してゆく。

思ふ壺にテーアを入れたヘッダは今度レエボルグに取りかゝる。彼女はまづ彼に昔を思出させて、今の新しき友達との仲を訊ねる。彼は彼女即ヘッダに關しては少しも變らないと云ふこと、彼女と、——同じやうに苦しんで居ると云ふこと、彼女を——只彼女をのみ愛

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

すると云ふことを白狀する。そこでヘッダはいよ／＼大膽に振舞ふ。

レエボルグ自身とても正しい道に自分がすつかり立ち返つたものとは信じて居ない。テスマンの友達でヘッダの憧憬者の一人の判事ブラックの家で、獨身連中の酒やカルタの會がある。連中はレエボルグを招待して仲間入りさせやうとする。彼は自分を信賴することが出來ないのでそれを斷はる。たつた一つの酒杯が、自制力の總てを奪ひ、誘惑に抵抗することが全く出來なくなるに十分だと云ふことを彼は知つて居るので、一度飲み初めると二度は決して止められない。ヘッダはテーアの眼前で、彼を愚弄し、其自尊心を刺戟し、誘惑的に微笑を堪へてポンチの杯を手渡しする。彼は滓までもとそれを飲み干す。

テーアは彼を止めやうと力める、してこれこそもう明らかに彼女の破滅を證明するものである。忽然として彼は自分の守護者に反抗した。自分の弱さと不如意さを知ることは彼にとつて苦痛だ。彼はテーアに關はず二杯目を飲む。そして三杯目！テーアは彼の爲に死ぬばかり苦悶して、ヘッダに訴へる、ヘッダは只嘲笑して、さげすむやうな微笑を浮べながら彼女をいたはる。惡魔はエボルグの中に醒めてヘッダの挑みに應へる。酒は利目を現した。もうそれからは自分の激情を恐れない、彼はそれを征服して仕舞つたと信じて居る。或晩彼は來て、自分は變つた、誘惑に打克つたと云ふことを微笑を浮べてテーアとヘッダに斷言する。そして再び強くなり、惡習慣からも脫した上はもうどんな守護だつて不必要だ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と云ふ。テーアは彼が失はれたことを信じた。ヘッダは戯談らしく彼女に斯ういふ。

「貴方は勝手にお疑ひなさるがいゝわ、けれど私は受合つてよ。まあ今にわかるから……

…」テーア「貴方は何か私に隠してゐらっしゃるのね、ヘッダさん。」

ヘッダ「えゝ、御察しの通りよ。私、生涯の中一度でいいから人一人の運命を自由にして見たいの。」

テーア「でも貴方はもうこれ迄になさつたのぢやないの?」

ヘッダ「いゝえ、私はそんなことは只の一度だつてしたことは有りませんわ。」

テーア「でもあの貴方の御主人は?」

ヘッダ「主人を自由にすることなんぞ大變ですわ! ああ、貴君には少しも分らないのね、私はほんとに貧乏なのよ! して貴方はあんなにお金持て、(テーアを烈しく抱き緊める。)

ヘッダは嘗て二人がまだ娘であつた學校時代に見ても癪に障る程の、白い絹のやうなテーアの髮の毛を燒くと云つて嚇しては其怖がるを見て、笑ひ興じた時のことを思ひ出す。そこて今彼女はテーアを抱きながら優しく囁く。

「私、貴女の髮の毛を燒いて居るやうな氣がしてよ。」

テーアはかう叫ぶ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「離して下さい。離して下さい。私は貴方が恐ろしいの。ヘッダさん。」

併しヘッダさんは彼女を落付かして食卓の前に座らせてお馬鹿ちやんと呼ぶ。もう自分の虚僞と勝利とを隱すことさへ不必要と考へた程テーアを侮つて居るのだ。

テーアの豫覺は妄想ではなかつた。翌朝、判事ブラックとテスマンは昨夜の出來事を二人に報告する。レエボルグは自分の原稿の拔萃を聲高に讀んで盛に飮んだ。明け方になつて彼は以前關係のあつたダイアナと云ふ賤婦の許へ行つた。彼は悉皆酔つて居たので其途中ポッケットの中の原稿を落して仕舞つた。テスマンはそれを取上げて又落すかも知れないと云ふ心配から彼に返してやることを拒んだ。ダイアナの處へ行くと又恥づ可き舞臺が次いで來た。レエボルグは自分の原稿を盗まれたことに就て誰彼の差別もなく其罪をきせて當り散らした。それが仕舞には男女入り亂れての無遠慮な鬪爭となり、其眞只中に警察隊が踏込んだ。レエボルグは警官の耳を擲つて告發されたところだと。

夫と二人きりになるとヘッダはレエボルグの原稿を渡せと云ふ。烏渡辭ひはしたが、テスマンは其要求を入れる。ヘッダは原稿を受取つて錠をかけて仕舞ふ。遂と彼女は望みを遂げて、一人の人間の運命を支配する力を自らに感じた。テーアは之に關する何事も知らない。レエボルグは登場する。彼はテーアに原稿を失くしたと話す勇氣がなくて、引裂いて仕舞つたと云ふ。孰れにせよ二人は永久に别れねばならない。氣の毒なテーアにとつてはこれ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ばレエボルグが生物を殺したやうなものだ。彼女の眞心の總ての委ねたもの即ち彼は二人の子供を虐殺したのだ。「二人の子供」と云ふ此言葉がヘッダの魂に深い打撃を與へた。

レエボルグと二人襲つてから彼女はもうテーアと彼に對する輕侮の念を隱してはをかない。「人間の運命をあの手で握るなんて、あのお目出度いお馬鹿ちやんの癖に。」と彼女のことを云ふ。力に渴へて居るヘッダが彼女を赦すことの出來ないのは此點だ。それてまたテーアの失敗を祝しもするのだ。彼女は何事も承知の上でありながら、又レエボルグに二人の子供を殺さなかつた事、いや殺すよりもまだ惡い――墮落した女達に交つて何處かでそれを失つた事に就て悉皆話させた。「あら、でも要するにそれは一冊の書物に限らないわ。」とヘッダは云ふ。

てもテーアの純潔な魂が其本の中にはいつて居た。」とレエボルグは叫ぶ。そして再び自分に克つ事は出來さうもないと知つて、彼は自分の生涯に終局を置かうと決心した。ヘッダは彼に「紀念として」と斷つて自分のピストルを贈る。

併し此樣な瞬間でさへ美の思想は彼女を棄てない。彼女の最後の只一つの遺言はこれである。

「ケルレルド、レエボルグ、ね、聽いて頂戴。何とか、貴方、美しい仕方で仕末をつけることは出來なくて？」―

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

彼は驚いて其問を繰返す。

「美しい？」

「えゝ、美しい。貴方の生涯の中で只一度のことですもの！　ぢやさよなら、さあ彼入い。

二度とは決してお歸りなさるな。

贈物の禮を彼が云ふと、彼女は又莊重に繰り返す。

「美しくですよ、ゲルレルト、レエボルグ、誓つてね！」

彼が出て行くと彼女はテスマンが大事にして置くやうにと彼女に預けた原稿を抽出しから取出して、爐に近い椅子に腰かけた。そして「今、私は貴女の子供を殺して居るのよ、倚麗な髮の毛のテーアさん。貴女の子供――そしてゲルレルド、レエボルグの子供。」と呟きながら、書物を一頁又一頁と火中に投げ込む。それから後の殘りを一度に皆投げ込む。

「今私は燒いて居る、貴女の子供を燒いて居る。」

此怕る可き光景は北方の或傳説を暗示して居る。私共は現實の生活から脫して仕舞ふ。ヘッダの像は擴大され、次第々々に巨大な平衡を取つて行く。蒼白い、歪んだ容貌と、烈しい淫樂の表情ある目を持て、恐しい美觀の焰を閃かすとき、彼女は稚子を殺す女神メデアか、又スカンディナウィアの傳説による怪力、不可思議な魔術師の一人と見えたかも知れない。併し此ぞつとするやうな恐ろしい犯罪にも拘はらず――或は（疑はしいけれども。）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

多分此恐ろしさの爲でゞもあらうか――私共の情は解剖し難き美の不可思議な心持によつて彼女の方へと引かれてゆく。

テスマンが安心して預けたかの原稿のことをヘッダに訊ねた時、彼女は落着いて燒いて仕舞ひましたと答へる。かうなつては最早氣の毒な失をも恐れて居ない。併し突然皮肉な心持が彼女を襲つて、全く目的なしに僞らせる。只人をからかふ爲に――僞る爲の僞、なぜならば僞ることは惡をなすと同樣の快感を彼女に與へる。彼女に取つては虛僞は何等の恥辱でもないかのやうに、手輕に、自然に、心配氣もなく僞る。彼女は混亂して、眞理の尺度を失ひ、最早自分で自分が分らなくなつて居るので無意識に僞る。此無意識の虛僞はかの猫屬の綺麗な、しかも危險な獸、豹に於て運動の無意識の美が自然であるやうに彼女に於ても自然なのだ。だから彼女は毒惡な、すれつからしの微笑を以て人々を嘲笑ふ。其惡意と機智の閃光は荒れ果た黑花崗石の紀念標の冷たい閃光を思はせる。泣くことを忘れてから久しくなる人は斯うした笑ひ方ばかりする。

ヘッダは自ら浮んで來る笑を抑へて、夫にレエボルグの原稿を燒いたのは貴方に對する愛の爲で、文明史の講座に於ける其危險な競爭者から見事に救つて上げやうと思つてゞあると云ふことを話す。鳥渡云ひ爭つたばかりすぐヘッダに說き伏せられるほど彼は自足心の強い、狹量な人である、そして自分のこの上もない友達で、一番危險な競爭者の破滅を豫

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

想しては譏笑的喜悅を包み切れず、忽ち人間の品位を全く失つて仕舞ふ。見よ此人を！萬人の尊敬を受け、人生を赤心から歡びもし愛しもして居るテスマンはこの時、人生を否定し、人類を憎む、罪ある虛僞のヘッダよりも道德的情操に闕して尙ほ、いやらしい人間だ。夫の破廉恥を肴にして、みづからの歡樂の酒杯を洋までも飲みほしたさにヘッダはテーアとレエボルグの創造物……全く二人の子供であるあの原稿を燒いてゐた時、懷姙の苦痛を始めて感じたと云ふことをテスマンに語る。是に於てテスマンは極度にその本性を現す、この時私共は忽然として今日の俗流道德に於ける一切の主義や、一切の信仰を超越して此家庭的本能の中に潛在する動物的利己の深淵を考へさせられる。テスマンは父親になりかけの人として、又善良な一家の首長として、他人の子供は一人としてゐない、只自分の子供ばかりが住むやうに定められてゐると云ふことを眞に悅んでゐる。部分的道德の此善良な代表者の喜悅は實に生存競爭に於て勝利を得た男性の歡樂である。彼は此大悅樂を抑へきれないで、下女のベルタにさへ、ずつかり話さないではゐられない。そこでヘッダはもう嘲笑(あざわら)ふ力もない位、夫の凡庸な、取るに足らぬ性格に反抗した夫をどんなに忌はしく思つてゐるかを隱さうともしない、そして直に生來の自若をさへ失つて仕舞ふ。彼女は絶望のあまり兩手を緊と握つて、

「あゝ、私は死んで仕舞ふ。私は死んで仕舞ふから！……

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

テスマン、「え？ ヘッダ。何に？ 何んだつて？」

ヘッダ（冷かに、氣を取直して、）「馬鹿々々しいわ、貴方。」

テスマン、「馬鹿な！ 俺があんまり喜んでゐるからだらう。ぢや、なんだ、ベルザに話さないてもよかつたと云ふんだね。」

併し此會話のお仕舞に來てやつとのこと彼は自分の態度がどんなに威嚴を缺いてゐたかを朧氣ながら氣付きかけた。そこで假に實際になれないまでもせめて男としての外見を取繕はねばならぬと云ふことを思ひ出す。彼は平常の無關心な風に返つて、氣の毒な破滅した友達の上を悲しんでゐる。

「いや、いや、神よ！ だがあの原稿は、あの原稿は！ お前の想像以上さ、實際氣の毒なゲルレルドにとつてはもつと恐ろしい打擊なんだ。」

判事ブラックかテスマンの家にレエボルグが自殺の報知を齎した時、ヘッダは之れを聞付いて聞きとつて、しかもそんなに早くですか。」と云ふ。そして自殺の詳細をブラックに訊ねる。好奇心は彼女を壓倒する。自分を愛した彼の最後にどんな「美」があつたかききたい。

ブラック、「あの人は胸を擊つたのです。」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ヘッダ、「胸ですか？」
ブラック「たうです申上げた通り。」
ヘッダ、「ちや、顳顬ではないのですか。」
ブラック、「い、や、奥さん、胸です。」
ヘッダ、「ああ、胸でもまあよかつたわ。」
ブラック、「何です？何をおつしやるんです？」
ヘッダ、（さけるやうに、）「いゝえ、なに、何でもありません。」

扨て、かの屢〻惱まされた恐怖を脱し、彼女は救ひと云ふよりも殆ど歡びの嘆息を以て、「これで、とうと事が出來た！」と叫ぶ。

彼女と二人きりになつたとき、自分の喜悅を發表するに何等の恥辱をも感じなかつたテスマンはもう驚を隱さうともせずに叫ぶ。

「どうしたんだ、ヘッダ！そりや何のこつた？」

ヘッダ、「美しいことをした人があると云ふのです。」

それから後、ヘッダは不斷の冷靜と、扣へ勝にも似ず、判事と親しげに物語つて、殆ど夢中に叫ふ。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「ああ、何て言ふ救ひでせう、人はまだ自由な貴いことを此の世の中で行へると云ふことを知るのは。それには何だか思ひがけない美の影が映しますわ。」

そしてあらゆる非難や、驚かされた頭の動搖や、質問に對する答として、彼女は此美に出逢つた悅樂に恍惚として、これだけのことしか答へない。

「私は只ゲルレルド、レエボルグが男らしかつたことばかり存じてゐます、あの人は御自分の意見に從つて生活したのですもの。あの人はお自分の意志と力とであの若さに人生の宴を見棄てたのです。こゝに美の影がさすのです。」

判事ブラックとヘッダと二人になつた時、彼はテーアに對する憐憫からレエボルグの自殺に關して全部事實をあかすことが出來なかつたのだと云ふことを話す。彼の死はヘッダの思つたやうに美しくはない、其自殺した所も彼自身の室ではなくて、歌女のダイアナの私室であつた。死ぬ前、彼は歌女を盜賊よばはりして盜んだ子供を出せと迫つた。そして彈丸は彼の胸でなく胃を貫いた。するとヘッダは嘔氣を催すやうな嫌惡を以て聲高に叫ぶ。

「ああ、どうしませう。それぢやあの人も駄目だつたわ！何故私の出遇ふものは呪はれでもしたやうに皆んな、皆んな、馬鹿々々しく、そして野鄙にばかりならなくちやならないのでせう。」

これこそ彼女が最後の絕望の叫びだ。ヘッダは美を信ずることを絕つと同時に生きること

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

も絶たねばならない。

判事ブラックは彼女が此の事件の連累者であると云ふこと、ともかくも自分の思ひ次第で彼女を連累者にすることが出來ると云ふことを話す。警察官はレエボルグが自殺に使用した拳銃を見出した。そしてブラックはヘッダのものだと云ふことを知つてゐる。彼は裁判上の尋問に可能なると、「何故拳銃をレエボルグに與へたか」と云ふ問ひに對する返答の必要なることを彼女に說ききかせる。それから此老判事はマキャベリ式の術策をもつて拳銃の持主を知つてゐるのは自分一人で、それを警察に知らせやうと、秘密に保たうと自分の一存できまるのだと說いてヘッダを宥める。そこで彼女は自分で自分の係蹄に陷つたことに氣付く。判事は長い間、堪へ忍んで秘してゐた自分の愛に好き返事をしてくれるならば沈默を守ると云ふことを彼女に囁く。かくてヘッダガブラーは自分の罪の判決に對する恐怖と不面目に對する恐怖を遁れる爲に、此校猾な好色な老人につかまつてしまつた。

ヘッダ（彼を見詰めて）「それで私は貴方の自由になるものですね、してこれから私を罰しやうと、愛しやうと貴方の思ひ通りに出來るのね。」

ブラック（殆ど聞きとれぬ位に囁いて、）「可愛いヘッダさん、吃度です、私は決して自分の地位を亂用しやうとは思はんから。」

ヘッダ「それでも、私は矢張り貴方の自由になるものね、貴方の思通りになつて、もう自由

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ても何でもない、——私——自由ぢやない！（彼女は荒々しく起つて、）——いや、私はこんなことは我慢が出來ない、私は我慢が出來ない、死んだつて。」

それから彼女はなやましげに、しかもテーヤと一緒に黑くなつた書類の中からレエボルグの原稿を寄せ集めにかゝつてゐる夫を一寸冷笑して、扉口帷てしきられてゐる次ぎの室にゆく。やがてこれからピアノの荒々しい舞踏曲が聞える。人々は皆思はずぞつとするテスマンは親類の一人が死んだので、家は喪中だと云ふことを注意する。そしてレエボルグのことも思ひ出してくれと賴む。

ヘッダ（扉口帷の間から面を突出して）ああ、それから、ジユリア伯母さんのこともね、さあ、勿論ジユリア伯母さんのことも思出さなくては、それから其外の皆のことも。さあ、一寸御待ち下さい。もう二度と貴方がたの御邪魔はしませんから。」

（そして扉口帷を垂れる。）

室內ではさまで重要でもない話が續く。テスマンはいつもの馬鹿を擴げてゐる。自分は毎晩テーアの手傳をしてレエボルグの書物を纒めやうと思ふから、來て、ヘッダの相手をしてやつて呉れと判事ブラックに賴む。この提議をブラックは快諾する扉口帷の陰から、ヘッダはつきりした調子で戯談交りにそれに答へる。そして不意にやむ。と拳銃の爆發する音が聞える。皆吃驚して跳ね上る。人々は扉口帷を押し明けて、長椅子の上に横はるヘッダ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の屍を發見する彼女は顳顬を擊つて自殺した。判事ブラックは殆ど失神して椅子に身を沈めて、只もう喘ぎながらかう云つたばかり、「主よ我等を護り且憐れみ給へ！こんなことになるとは、どうしてまあ。

ヘッダカブラーは煩悶の瞬間に於ても生きてゐたやうに冷酷に、靜平に、人をさげすみ己れを惡みながら自殺した。ヘッダは自分に勇氣がない、だから死ぬと言ふ、彼女は「臆病者」とすら自分を呼ぶ。併しこの言葉は全く不適當である。彼女には意志もあり、力もあつた。只此意志に何の支柱もない爲め何事も決して爲し遂げられず。極めて些細な障碍にも打克つことが出來ない。出口を見附けないため力がはね返り、それみづからを破壞する。ヘッダの魂は信仰なしに生きることの出來ないものである。しかも其信仰は失はれた。若しヘッダが其の名に依つて生死することの出來る神を見出すならば、女丈夫ともなり、或は殉敎者ともなつたであらう。彼女は信仰上の要求を全然棄て去ることが出來ない、彼女は信仰なき空虛の苦痛に堪へることが出來ない。彼女は其時代の俗流の見解に自分を一致させることも出來ない。女は其信仰と信仰の要求に於て確に男子よりも執拗なものである、若し斯う云ふ性格であつて其內的勢力が動作に導かれなつかたならば、其時それは犯罪に導かれるのは止むを得ない。ヘッタは絕對否定の理論家達がまだ透入したことのない虛無主義の或點まで、總ての人間と總ての存在に對する憎惡、そして最後には靜かな意識的な自

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

滅にまで達してゐる。

ヘッタ私共の前に其望みなき美を以て生きてゐた時のやうに矢張り欲情もなく、冷酷に死んでゐる。私共は彼女の殘忍に對して、其道德的虛無主義に對して、彼女を審かうと云ふ心持は全くない。只私共は今の如き生活を此上繼續することの不可能なるを思ふのだ。私共はかの最後の日光が空に消えて、星の一つも輝き出ない時、古き神々が死んでしかも新しい神々がまだ生れない時に現はれる、朧氣な薄明の中に生死すべく運命附けられた、それらの人間の悲劇を思ふ。――完――

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

二號豫告

ある夜（小説）　尾島菊子
鳥の讃美（飜譯）　野上八重子
柵（小説）　中野初子
短歌　茅野雅子
評論　與謝野晶子
題未定（小説）　小金井喜美子
題未定（小説）　岡田八千代子
題未定（戯曲）　木内錠子
沈默（散文詩飜譯）　ポオ
高原の秋（叙景文）　らいてう
俳句　白雨
其他未定のもの

青鞜社概則

第一條　本社は女流文學の發達を計り、各自天賦の特性を發揮せしめ、他日女流の天才を生まむ事を目的とす。
第二條　本社を青鞜社と稱す。
第三條　本社事務所を本郷區駒込林町九番地物集方に置く。
第四條　本社は、社員贊助員客員よりなる。
第五條　本社の目的に贊同したる女流文學者、將來女流文學者たらんとする者及び文學愛好の女子は人種を問はず社員とす。本社の目的に贊同せられたる女流文壇の大家を贊助員とす。本社の目的に贊同したる男子にして社員の尊敬するに足ると認めたる人に限り客員とす。
第六條　本社の目的を達する爲め左の事業をなす。
一、毎月一回機關雜誌青鞜を發刊すること。青鞜は社員及び贊助員の創作、評論、其他客員の批評等も掲載することあるべし。
二、毎月一回社員の修養及び研究會を開くこと、但し贊助員の出席隨意たるべし。
三、毎年一回大會を開くこと、大會には贊助員客員を招待し、講話を請ふことあるべし。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

四、時に旅行を催すこと。

第七條　社員は社費凡三拾錢を毎月納附すべし。社費は毎月會並に大會の費用と社員、賛助員、客員への雜誌「靑鞜」寄贈費とに當るものとす。

第八條　雜誌「靑鞜」發刊の經費は發起人の支出により、其維持は社員、賛助員、客員其の他の寄附による。

第九條　幹部は編輯係、庶務係、會計係よりなる。

第十條　係員は四人とし、半數づゝ一年毎に交代す。最初は發起人等是に當る。

第十一條　係員は社員の選擧によるものとす。

第十二條　係員は再選することを得。

發起人（いろは順）

中野初子　保持研子

木内錠子　平塚明子

物集和子

名　簿（いろは順）

賛助員

長谷川時雨　岡田八千代

加藤籌子　與謝野晶子

國木田治子　小金井喜美子

森しげ子

社員

岩野淸子　戸澤はつ子

茅野雅子　尾島菊子

大村かよ子　大竹雅子

加藤みどり　神崎恒子

田原祐子　田村とし子

上田君子　野上八重子

山本龍子　阿久根俊子

荒木郁子　佐久間時子

水野仙子　杉本正生

豫告

靑鞜社同人譯

ポオ散文集詩

靑鞜社出版

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

編輯室より

◉本誌靑鞜は此所に若き初聲を放つて生れ出ました。これ一偏に本社の志望に御賛成下さつた賛助員及社員諸姉の御熱心なる御助力と其面目を全うせむとの確き御決心とに依る事と深謝致します。

◉靑鞜は女子のために、各自天賦の才能を十全に發揮せしむる爲に、自己を解放せむとする最終の目的のもとに相手携して、大に修養研究し、其結果を發表する機關としたいと云ふ事が本來の目的でありますから雜誌の爲の雜誌でなく、どこ迄も私共の爲の雜誌でありたいと存じます。

◉私共社員は預けられたる子として、之を世話するのではなく、我が子として健全なる成長を期し其の實の空しくならないことを希望いたします。

◉本社の事業を永續し、其發展を計るには經濟上の獨立を鞏固にする必要を感じますので、多少に拘はらず基本金の中に有志諸姉の御寄附を御願ひ致したいと存じます。

◉社員は九月より毎月十五日迄に會費三十錢靑鞜社宛に御送り下さい。

◉社員の修養兼研究會は九月二日(土曜日)の午後一時より靑鞜社本部(物集氏宅)に於て開催いたしますから萬障御繰せの上御出席下さい。

◉社員の原稿は何時でも宜敷から靑鞜社宛に御送下さい。

◉茅野雅子氏の短歌は本紙に掲載の筈でしたが御主人御病氣の爲次號にゆづります

◉社員のヘッタガブラ合評及中野木内の作物も頁數の都合上次號に廻します。

◉本社の賛助員國木田治子氏は赤坂區田町七丁目一番地なる御私宅に於て本月より一六の日に松月古流生花、投入花及千家表流の茶の湯を松月古流家元藤城庵打瀨翁補助の下に指南せらるゝ由。

◉本社賛助員與謝野晶子、國木田治子の兩氏は特別に靑鞜發展の爲め毎號御執筆下さる筈で御座います。

◉念の爲に云つて置きますが靑鞜は Blue stocking の譯語す。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

雜誌規定

●毎月一回一日發行

●定價一冊金貳拾五錢――郵税壹錢五厘――

●原稿〆切期日は毎月十五日限とす。

●前金購讀料(四ヶ月分)壹圓(六ヶ月分)壹圓五拾錢
(八ヶ月分)貳圓(十ヶ月分)貳圓五拾錢(一ヶ年分)參圓

●廣告料 (一頁)拾五圓 (半頁)八圓

●廣告は總て卷尾のこと、但し申込の順序に依る。

●振替貯金(東京口座一一六〇)に拂込まれたし

●郵券代用は一錢切手に限る(但し一割増のこと)

明治四十四年八月二十五日印刷
明治四十四年九月一日發行

禁轉載

東京本郷區駒込林町九番地 青鞜社内
編輯兼發行人 中野初

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷人 島連太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所 三秀舎

發行所 東京本郷區駒込林町九番地 青鞜社
(電話下谷三七七六) 振替東京口座壹壹六〇番

發賣所 東京市神田區表神保町三番地 東京堂
電話本局(一一二四 三二八)

驚く可き低價

今日直ちに申込まざれば好機を逸す

東京女學館教師 國分操子著

總紙數千五百頁

(最新刊)

家庭日用 婦女寶鑑

國家の完備は家庭の完備に待つ、今や我國は一躍して世界一等國の列に入れり、從つて家庭の健全なる發達は急務中の急務なり、女子教育家として令名高き國分操子女史茲に感ずる所あり、二十年來の實驗と蘊蓄とを發揮して此書を世に公にせらる

國體皇室、教育、女禮式、家政、育兒、衛生、讀書烈女傳才媛傳、文章、和歌、書畫、音樂、手藝和服裁縫編物刺繡造花袋物お細工物摘み細工 茶湯生花料理工藝等中等社會以上の女子に缺くべからざる事は一切網羅せざる無く猶坂正臣先生の和歌及び手紙の書き方をも加へたり、以て文明家庭必須の智識を得べく、以て女子の人格を養ふべく、實用にして而かも趣味あり、既婚と未婚とを問はず一般の女子に取りて、師となり友となり、實益を得るのみならず精神を慰藉するに足るべく、實に方今の家庭一日も缺くべからざる實用婦女百科辭典なり、殊に裝釘の如きも高尚美麗にして贈物とするに適し、婦女寶鑑の名に負かざる絕好の一大著述なり。

和裝帙入極美麗全三册
用紙最上等改良半紙刷
正價五圓五拾錢挿畫五百圖

內容見本無料進呈

九月廿五日迄特價四圓(郵税內地金拾六錢) 期日後は一切此の特價を以て販賣せず

東京日本橋角 大倉書店發行 振替口座東京二三八番 電本局四一四番 電本局二四〇四番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

萬年筆ありや

机の上にてもよし原稿は之に如くなしレターも妙なり海に山に折々の野遊びにペン書きの書葉書は殊に風流也オペラバツグの中に萬年筆なきは現代のアトモスフヰヤを呼吸する姫とは云はれじ

オリオン
オノト

金貳圓八拾錢
郵稅金拾貳錢

自金六圓
至金六十五圓

丸善株式會社
東京●大阪●京都

スバル

九月一日發行

定價卅錢
郵稅一錢五厘

小說

雁　鷗外
硝子問屋　堀花村
夢のさめぎわ　和辻哲郎
讀合せ　與謝野晶子
葬列　長島豊太郎
壁ばな　平出修
白湯　平野萬里

詩歌

詩數篇　北原白秋
夏の雨　水野葉舟
物のきれはし　山のわかもの
文三に　町のわかもの
未定　肖三
未定　修
未定　茂子

むく鳥通信――裏畫――消息

附錄

戲曲一篇　吉井勇
同　谷崎潤一郎
椿ちる頃　長谷川虎太郎

東京市神田區北神保町二
昴發行所
電話本局四二六四

本號の記事は殊に快活にして精彩あり

女子文壇

九月一日發行要目　第七年十一號　定價一冊拾五錢　郵稅壹錢五厘

▼德富蘆花論
佐野天聲　中村春雨　日向きむ子　澤田撫松　叡嶽生　河井醉茗

▼洗禮……横瀬夜雨
▼蘆河畔の町……河井醉茗

▼月の夜語……坂東太郎
▼花摘み載する夏の夢……內藤千代子
▼開かれたる窓より……順子
▼黑い建物に囚はれたる女……覆面女
▼生れ甲斐なき貴族の血統……ゆみ子

▼日光雜行記……神近市子
▼海拔一萬二千尺……寺田よし子

▼大阪の婦人!!!
岩野泡鳴　櫻井やよ　加藤みどり

▼田舍娘に金色夜叉を語る……松並紫花
▼幾りゆくもの……山田邦子
▼花のくるしみ……本村[illegible]子

東京市京橋區大鋸町　女子文壇社出版　（振替口座東京一二二九[illegible]）
[illegible]へ御申込を乞ふ取次所あり

戲曲集

午後三時

吉井勇氏著

著者の戯曲は文壇の絶品なり、本書曾て自由劇場に於て公演せられたる「夢介と僧と」「河内屋與兵衛」をはじめ十一篇美はしき一幕物を收む。眠れる文壇一服の注入劑。

再版　定價金壹圓　小包金八錢

抒情小曲集

おもひで

北原白秋氏著

再版　定價九十錢　送費六錢

日本に於て公刊せられたる詩集の中、未だ本書の如きは曾てあらざりしとは各人の嘆稱して措かざる言なり、如何にその異色に富めるかは一本を得て知られよ

發行
東京市京橋區
南傳馬町三丁目
振替五六一四
東雲堂

若山牧水氏著

歌集

別離

定價金七拾五錢
送費金六錢

再版賣切……三版印刷中

活氣横溢新秋文壇の偉觀

純文藝雜誌

創作

一部貳拾錢
送費一錢

八月一日號發賣

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

心の花

第十五卷　九月號　第九號

波紋　高安月郊
未來の畏怖　沼波瓊音
狂日記　橘糸重子
泥洹　長尾素枝
二人　水上夕波
見張人　石榑千亦
清見潟より　木下利玄
旅路　小花清泉
夏の一日　佐々木信綱
夜　小柳清
眞夏の空氣　森田義郎
我　片山廣子
ますらをぶり　齋藤瀏
煎婆　印東昌綱
鹿兒島より　惠利武

心の花廣告〆切二十日限

定價一部十三錢税一錢●半年前金七十五錢●一年前金一圓四十錢

東京日本橋區本石町一ノ一　竹柏會出版部
振替東京四三〇〇番

●● 九月の卷發行 ●●

新婦人

七月號八月號賣切となり高評に背くの罪實に萬謝の外なく候本月號は十分の刷増をなしたれば前二號賣切の失態は切に御高恕あらん事を冀ふ

第一年第六號 定價 一册二十八錢郵稅二錢五厘 六册前金郵稅共壹圓七拾錢

睡鴿 油繪極彩色 …… 川村清雄筆

香汗淋漓 四美相擁して畫中嬌聲あり（石版極彩色）…… 鰭崎英朋筆

臙脂の匂 佳人浴を出て涼風肌を甜む …… コロタイプ寫眞

英京に於ける伏見若宮妃殿下●二條公爵夫人●小笠原伯爵令孃●大隈伯爵夫人●毛利子爵令孃●北村巴女史●堀内すま子孃●吉村千枝子孃●東郷男爵令孃太田書記官長令孃●名倉けい子女史●高畑惣七氏令孃●宮中女官尾村鐵子孃●葉室孝子孃●中山彩畝女史●壽室裡の上村松園女史●閨秀音樂家鈴木のぶ子孃●閨秀畫家田中勝代孃

婦人百態當選寫眞披露 其他例により百花絢爛紅紫拉雜

讀むもの 一 虛榮心強き兩親の玩具（寺尾博士）巴里婦人の虛榮（山崎直三）貞操を蹂躪する男子の責任（平出辯護士）男心の解剖（北原末子）其他數十篇

恐るべき同性の愛 …… 婦女通信社長 松本順造

妾の良人たる者なきか …… 小島ふみ子

附錄 家庭日記 九月分 溫度表●晴雨表●獻立表 來客簿竝に九星舊曆附

新婦人見本 郵券卅錢五厘 賣捌所 全國著名の書林雜誌店

發行所 東京市本郷區龍岡町 振替東京三〇五八番 聚精堂 電話下谷一六七九 電話下谷四〇七二

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

SECTIONAL-BOOK CASE

It fits anyplace

組合せ本箱

●最新式最新形の本箱にして目下歐米諸國に流行を極め居れり

●多數の優れたるは特徴を有す、其重なるもの左の如し

▲藏書の増減に從ひ自由に其大さを伸縮し得べし

▲室内の構造に應じて適宜に配置し得べし

▲書物を入れたるまゝ手輕に運搬し得べし

▲硝子戸の開閉に巧妙なる構造を有す

▲書物を分類するに便なり

▲形狀優雅色彩美麗しかも堅牢此上なし

▲之れを要するに最善最良の本箱!!

構造を示せる目錄は郵券二錢封入御申越次第進呈

It grows with your library

定價

金二十六圓　楢製

金二十八圓　欅製

金三十圓　櫻製

運賃荷造費御自辨

●發賣元　東京市銀座大通新橋際　新橋堂書店

（振替東京二〇〇番　電話新橋一九九一番）

村井弦齋著　増補註釋　食道樂　全一冊　春の巻夏の巻（合本）秋の巻冬の巻（合本）　定價金二圓　郵税金十八錢

村井弦齋著　増補註釋　食道樂　續篇　春の巻夏の巻秋の巻冬の巻　全四冊　各巻定價八十錢　郵税十二錢

村井弦齋著　増補訂正　臺所重寶記　全一冊　定價金一圓　郵税金十二錢

赤堀峰吉　赤堀峰吉　赤堀菊子共著　家庭應用　洋食五百種　全一冊　定價金七十五錢　郵税金十二錢

赤堀吉松　赤堀峰吉　赤堀菊子共著　家庭應用　惣菜五百種　全一冊　定價金七十五錢　郵税金十二錢

故久保田米僊著　同　米齋、金僊畫　年中惣菜　全一冊　定價金八十錢　郵税金十二錢

故久保田米僊選　毎日の惣菜案内　全一冊　定價金十錢　郵税金二錢

故久保田米僊著　同　米齋、金僊畫　茶の湯の心得　附茶席料理　全一冊　定價金八十錢　郵税金六錢

赤堀吉松閲　奥村繁次郎著　名物　諸國料理　全一冊　定價金四十錢　郵税金六錢

發行所　東京市銀座大通新橋際　振替貯金東京二〇〇番　新橋堂書店

毎月一回一日發行
一冊二十五錢郵税一錢五厘

斯道唯一の演劇雜誌

歌舞伎

第百三十五號（九月一日發行）

六冊前金郵税共一圓五十錢
十二冊同二圓八十錢

戲曲「街の子」……鷗外口譯
梅玉に關する一書……前田芳柳
歌右エ門の藝風……森ほのほ
文藝協會の試演……東儀鐵笛
私の役はヘルマ……土肥春曙
外國で見物した「人形の家」……中村春雨
「人形の家」の原作……高安月郊
秀調の「鳴戸」の型……よしを
暑中の小芝居……春浦生
金泉丑太郎日記……金泉丑太郎
歌右衛門襲名論……伊原青々園
加賀屋成駒屋系圖調……關根默庵
五代目歌右エ門について……田村成義
八月の新脚本……花菱生
活動寫眞化せるシルレルの作……吉山旭光
劇談會（喇奴、虎外、黛水、元樓、醉月、駒子）
劇壇時事……一記者
附錄脚本 刑罪……清見陸郎
母……栁月畦花

本郷區湯島切通坂町萬報社內
歌舞伎發行所
電話下谷二四八三
振替口座一八〇六

大學病院々長佐藤博士題字
女子學院々長矢島楫子題歌

醫學博士二木謙三
醫學士神村兼亮
校閲
醫學士桑原下學

大關和著

實地看護法

四版

正價 金七拾錢
豫約 金五拾錢

九月三十日迄に前金申込の御方に限り豫約金五拾錢にて差上可申候

東京市神田區裏猿樂町十九番地
發行所 大關看護婦會
電話本局二二五二番

賣捌所
東京市本郷區春木町二丁目三番地 半田屋醫籍商店（電話下谷二、〇〇八）
東京市本郷區龍岡町三十四番地 吐鳳堂書店（電話下谷一、六七二）
東京市本郷區切通上二十七番地 南江堂書店（電話下谷一、三三〇）

フリイドリッヒ・ニイチェ著

森鷗外氏序　生田長江氏譯

ツァラトゥストラ

▲絶大なる好評を博し初版將に盡きんとす▼

東京市麴町區飯田町三丁目　新潮社

▲電話（番町）二、二二三番▼

▲振替（東京）一、七四二番▼

◉總洋布製大卷稀有の美本■定價金貳圓參拾錢■小包料拾貳錢

トルストイと對立して十九世紀末の歐洲思想界に最も力ある波動を傳へた者はニイチエである。此の二人は人間生活其のものゝ偉大なる權化であり、同時に新時代新文明建設の最も偉大なる先驅者である。生田長江氏が永き努力の結果として、茲に譯出した「ツアラトウストラ」の一卷はニイチエの偉大なる精神生活の代表であると同時に、又以て十九世紀末思潮の代表的宣言である。ニイチエの思想は最近歐洲の思想界に驚くべき動力を與へたのは云ふ迄もないが、ゴーリキーの如きダヌンチオの如きを始として、ニイチエ思想に動かされて現れた近代作家も決して少くはない。ニイチエの思想は一面近代文藝の一大源泉を成して居る。わが國に於ても高山樗牛等を始めニイチエの思想を傳へやうと試みた人は少なくないが、而も多くはその精髓を撰んだものでない。ニイチエの思想は最近自然主義思潮によつて覺醒された我が思想界にして始めて傳ふべきである。生田氏が此飜譯は誠に時を得たものと云はねばならぬ。（早稻田文學評）

◉譯文の樣式森嚴莊重を以て終始し其間潑溂たる清新の趣を加へて此種の神品を傳ふるに最も適へり出版界近來の好收穫と推奬するに憚らず（報知新聞評）

特別附錄ノラ號

ナヂモヴァ夫人の「ノラ」と松井須磨子女史の「ノラ」の型

詩と劇

九月一日發行
特價一部拾錢
郵稅壹錢五厘

●文藝協會私演劇場にては本月中旬イプセンの「人形の家」上場と決せり●

●本號は六名家のノラ觀を以て附錄と爲す「ノラ」は「人形の家」の女主人公なり●

本欄

◎惜（小說）小川未明
◎わが寢室の暗より（詩）人見東明
◎盆おどりの賑（戲曲）仲木貞一
◎シヨウの理想と理想家（評論）池田銀次郎譯
◎二階の窓（戲曲）夏川靑鳥
◎チエホフの三人姉妹（戲曲）秦豐吉譯
◎梵（戲曲）佐藤惣之助
◎こゝろの秋（詩）福田夕咲
◎劇作壇の新傾向（評論）秋田雨雀

その他暮鳥芦風芳子完治おぼろ紫紘氏等十數篇あり

附錄

●「人形の家」について　坪内逍遙
●イプセン夫人の力　松居松葉
●近代劇の背景と氣分　土肥春曙
●光明ある道の開拓　東儀鐵笛
●露獨三女優の「ノラ」の型　中村春雨
●「ノラ」の性格研究　島村抱月

前號より本誌は短歌を掲載せり毎號短歌の寄稿をのぞむ

●怪奇と平凡とは吾れ等の願ふ所に非らず吾れ等はたゞ平凡の境に怪しく橫たはる異常の姿を發見していみじき消息と新らしき藝術とを得んと願ふのみ●

小石川高田村雜司ヶ谷二四　發行　詩と劇社
東京神田神保町　東京堂　發賣

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

すむ月や髯をたてたる蛬　其角

九月號

己が爲……（卷頭語）
俳諧一夕話……森山鳳羽
他の句……饗庭篁村
秋津蟲辨……（扇波）

魚がしの俳味……小澤碧童
獄中の俳味……松本道別
平凡寺を訪ふ記……瑜多迦
露の曲玉……沼波瓊音

俳味

每月一日一回發行

定價
一部　金拾貳錢　郵稅壹錢
半年分前金　郵稅共　金六拾八錢
一年分前金　郵稅共　壹圓參拾貳錢

發行所
東京市本郷西片町拾番地
俳味社
振替口座東京參四參四番

要目

我が踏みたる道……星野麥人
私解芭蕉の發句……沼波瓊音
芝居國の人間……（道蛇樓主人）
大洗まで……鵜澤四丁

艶囮二則……中川柳外
通り雲……レモン法師
挿畫……小杉未醒

附錄
伊勢紀行……（去來）

小兒科一般

一嬰兒の健康診斷及哺育法
一嬰兒の諸病及小兒皮膚病

ドクトル メヂチーネ 長井岩雄

東京日本橋區數寄屋町（吳服橋外）
小兒科養生院
電話本局百八十番

最良髮油

みやけ油

登錄商標

家庭重寶

專賣特許一一二九八

粉末石鹼

發賣元

東京市日本橋區人形町通

木村三宅堂

電話浪花六二〇 振替口座八七五一番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜第一巻第一號
明治四十四年九月一日發行（毎月一回一日發行）
明治四十四年八月廿八日第三種郵便物認可

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

明治四十四年八月廿八日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）明治四十四年十月一日發行第一卷第二號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

四十四年十月一日

第一巻第二號

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜第一巻第二號内容

太鼓の音（小說）……一……小金井喜美子
人ごみの中を行きつゝ（詩）……七……與謝野晶子
一諾（劇詩）……二一……大村かね子
ふそ言（小說）……二七……岡田八千代
ある夜（小說）……三三……尾島菊子
稲の花さく頃（短歌）……五〇……䔍子
お高（小說）……五二……岩野清子
花芙蓉（俳句）……六四……らいてう
二日間（小說）……六五……田原祐子
沈默（散文詩、翻譯）……八四……ホオ
秋海棠（俳句）……八九……白雨
ヘッダ、ガブラ合評……九一……HとY
表紙繪……長沼智恵子

太鼓の音

小金井喜美子

毎朝々々一日も缺かさず「今日は」と高聲でいひながら、藤井の臺所へ盤臺を擔ぎ込む魚米は威勢の好い男である。此間若い衆に賣り上げを持ち逃げせられて、「仕方がありませんや前厄だから」と云つて居たから、家へ來初めた四年前は二十だつたと見える。

持主は幾度か變つても此土地で名の賣れてゐる料理屋の萬金も、近年になつては若い衆を廻らせる事にしたし、又角久も若い衆の五六人も置いて手廣くやつてゐる。藤井の家へも長年廻つて來るから新らしく魚屋を入れるには及ばぬけれど、すぐ近所で急ぎの時に間に合ふのでいつか出入になつたのである。まだ華族方へ用人に取入つて御出入になる様な力はない。手を擴げても失敗じるからと、極つた得意を几帳面に廻つてゐる。河岸から歸ると一人の若い衆と荷を分けて、一番に景氣よく擔ぎ込むのは藤井の臺所である。貰ひ物があつたりなどして斷ると、「困つたなあ、今日もだめな日かな」と急に弱つた様な顔をす

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

る。一番初めに藤井で買はぬと、其日は一日賣れが悪いといふのである。

世話好き話し好きでよく近所の噂をして聞かせる。得意で頼まれると、女中でも借家でも一生懸命に手間暇を惜まず捜して歩く。或時は言ひにくさうに「手紙を書きましたが、噓字があつて笑はれるといけませんから一寸見て下さいませんか」といふ。其晩持つて來たのを見ると、假名交りのやつと書いた手紙かと思つたのは大違ひ、なか／＼の達筆で、子供の時世話になつた郷里の先生へ送るといふので、形容詞澤山の長文である。「唯今は實業に從事罷在り近き將來の發展を望みつゝ奮勵致し居候」などゝ書いてある。中に一ヶ所あけてある。「こゝはどうしたの」と聞くと、「國を出たのを何と書いていゝか分らないから、あけて置きました」といふ。出發かと聞けばさうではない逃げた樣なものですといふ。それでは出奔かといふと、それではいけぬといふ。出發でも出奔でもない仲位のはないかといつてみんなに笑はれた。

小學校も卒業しなかつたさうだが、新聞を讀むのが好きでいつも三種づゝ位とつてゐる。毎夜どうでもそれを讀まぬ中は寐ぬといふ、全く新聞學問なのである。前日讀んだ新聞で分らぬ事があると魚を賣りながら大急ぎで聞かうとする。「それはのぢかいいけかい」とか、「ばちではないの」とか、目のきかない奥さんが聞き覺えの詞を遣つても、其返事はせずに夢中になつて、其魚の鱗をひいたりなぞして困らせることがある。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

丁度其魚米が出入を初めて間もない頃であつた。「お梅さん、すてきな奧さんが引越して來ましたぜ、大きな丸髷に結つてね」と頭の上で珍な手附をして、「お使ひに出た時廻つて御覽なさい、背が高いよ、お前さんの倍もあらあ」と、いつも背の低いのを苦にする女に逃身をしながらいつて聞せた。

其家は藤井の庭先の狹い道を隔てゝ、向ふ側にある小ぢんまりした平家である。庭が廣いのに向ふは低いのだから、緣側へ立てば木の茂つた間から其家の屋根だけが見える。女中達も使に行くのに裏通りは餘り通らぬので、いつ越して來たか誰も知らなかつた。

それから間もなく或る日魚米が小鯛を澤山持つて來て、「十枚程頼まれましたからよけい持つて參りました、大負けにしますからお取りなすつて」といふ。どこでと女が聞いたら、「裏のお家の七夜です」といつた、成程どこやらで赤兒の泣く聲がすると思つた。

其明る年の春の花盛りとなつた。藤井の家は高いので下の家の軒と土塀とが平行してゐるといふのだから、近所の花を一目に見下す。一體に單瓣の櫻が多い。客が來て好い景色だと褒めると「櫻は遠くのを見るのに限ります、花の間は短いのに、年中葉が落ちたり毛蟲が附いたりしますから」と勝手なことをいつてゐる。この裏の家には非常に美しい八重櫻があつて、みんなあたりの青葉になつたあとで獨暮春の眺めを添へた。滿月の夜などはそこだけぼうと白くなつてゐた。やがてそれも青葉になつてしまふと、いつか其傍に一本

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の長い竿が立つた。餘程長いのと見えて低い地面に立てゝあるのに、藤井の家の軒と平行位になつてゐる。何にするのかと思つたら、或朝鯉幟があげられた。「裏のお家のは坊ちややんてしたね」と女中がいふ。「道理で泣聲が高いと思つたよ」などゝ話し合つた。
どういふものか節句が濟んでも其竹竿が片附けられぬ。緣側へ立つと木の少し蔭にはなるけれど、直正面なので苦になつてならなかつた。それも暫くでいつか目馴れてしまつて、今迄遠方の火事の時方角を見るのに、遙かに見える肴町の湯屋の煙筒の左か右かといつたのを、お隣の竹竿の左か右かなどゝいつてゐた。
やがて雪が降る。硝子戶越しに庭を見ると常よりも一際よい景色に見える。裏の道のふだんはちつとも見えぬ電話線の上に、重さうに雪の積つたのが二筋見える。又例の竹竿に風の吹廻しか、片面だけに雪のついたのが目にたつた。
いつ頃からか其家で太皷の音がし出した。「もうあの家の坊ちやんも太皷をうつて遊ぶ様になつたねえといつてゐた。餘程太皷が氣に入つたと見えて、外に玩具が宛がつてないかの様に其音ばかりする。
其年も暮近く魚米が何か話のいつてに、「小さい子のある家のおつ母さんの病氣はいけせんね」といふ。それは裏の家の奧さんが長く煩つて居る様子を見て來ての話してある。「それはお氣の毒ね」といつて、それからは何だか太皷の音が耳につく様な氣がする。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

年があけて二月になつた。ある日思ひ立つて日當りのよい縁側の硝子戸を女中と一緒に拭きながら「どうしたのだらう、此二三日は太皷の音が聞えないね」と奥さんは聞いた。「左樣でございますね何だか此節はお醫者樣のお車らしいのがよく見えます、お惡いのではないでせうか、魚米が來たら聞いてみませう」。「何聞かなくてもいゝがね」。

果して女中の察した樣に病氣が重つたので、親類へ預けられたのであつた。四五日して人の出入が繁くごた〳〵して來た。とう〳〵奥さんは二十餘りて死んだのである。お氣の毒なと誰も〳〵いつた。

お葬式の日は狹い道が混雜した。生垣の上から白い蓮や旗や輿が見えた。今日は連れて歸つたと見えて子供の泣聲やそれを賺す人の聲がする。

今迄よりは年取つたらしい女の聲がし出した。折々坊さんのお經の聲がする。其外は每日〳〵又太皷を叩いては何かだゝをいつて泣く聲と、それを賺す女の聲がするだけで、主人といふのは物を言はぬ人か、又は聲の低い人か何を言ふのも聞いたことがない。

雨曝しの竹の竿はまだ其儘に立てゝある。かくて一月二月過ぎた。或書過に大分ごた〳〵する樣子で、法事かしらまだ一週忌にはなるまいにと思つたら、女中が目を丸くして「奥樣、あのお子さんがなくなつたのですつて、今お葬式が出ますよ」といふ。「まあ可哀さうに、やはり女親のないので手が屆かなかつたかしら」といつたり、「あんまり泣いてばかし

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ゐると思つたよ、何か病氣があつたのだね」といつたりした。もう久しく聞き馴れた太皷の音も聞かれまいと、生れてこの方聲ばかりで一度も顔を見なかつた子の、小さい輿を生垣の上から見送つた。

又二三ヶ月過ぎた。或る日使に出た女が歸つて「魚米の前を通りましたから、なぜ今日は來ないのといひましたら、方々の仕出しがかちあつてすみませんでした。お裏の家へは今夜お嫁さんが來ます、それを十五人前程引き受けましたからねと大騷ぎをしてゐました」といふ。もう女中は梅ではなかつた。其夜は果して車が待つて居るしいつ迄も賑かであつた。

明る朝氣が附いて見たら例の竹竿はなかつた。植木屋が掃除に這入つてゐた樣だから片附けたのだらう。

それからは變つた事もなく月日がたつた。一年程してから又赤兒の聲がする樣になつたが別に氣にもにかけなかつた。

すると昨日の午後、ふと其家から太皷の音が聞えた。小さい子が打ち初めるので輕い音である。二三年前に聞いたのと少しも變らぬ。座敷に居た奥さんの耳にはそれがひどい響の樣に思はれた。又今度のも太皷を打つ樣になつたか、早く育つ物だと思ふよりは、又何だか同じ事を目の前で繰り返されるのではあるまいかと思ふのである。——完——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

人ごみの中を行きつつ

與謝野晶子

○

唯だ「人」と、若しくは「我」とのみ名乗るぞよき。
雜多の形容詞を附け足さんとするは誰ぞ。
大と云ひ、小と云ひ、善と云ひ、惡と云ひ……
そは事を好む子供の所爲なり。

○

何物をも附け足さぬはやがて一切を備へる故なるを。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

相共にその自らの力を試さぬ人と行かじ。
彼等の心には隙あり、油断あり。
よしもなき事ども――善悪と云ふ事どもを思へるよ。

○

過去は青き、酸き、充たざる、如何にありしとも。
今は甘きか、匂はしきか、
今は舌を刺す力あるか。
君よ、今の役に立たぬ果實を摘む勿れ。

○

商人等の催せる饗宴に、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

我の一人まじれるは奇異ならん。
我の周圍は目にて滿ちぬ。
商人等よ、晩餐を振舞へるは君達なれど、
我の食ふは猶我の舌の味ふなり。
されど商人等よ、おのおのの其最近の所得に就いて誇りかに語れ
我はさる事をも聽くをよろこぶ。

○

行くほどに街は暮れて明るき月夜の海となり、
人は魚の如く跳り、ともし火は波の如く泡立つ。
地に落つる人影にわが影の入りまじる如く、
われは他の遊ぶを遊ぶ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

われは知る。つひに一人(ひとり)なり。

○

かの歯車(はぐるま)は断間なく動けり。
静なるまでいと忙(せは)しく動けり。
かれに空しき言葉なし。
かれは彼(かれ)の中(なか)に一切を刻(きざ)むやらん。

○

すべて異性の手より受取るは、
温(あたた)かく、やさしく、匂はしく、派手に、
胸の血のわりなくもときめくよ。

女のみありて、
女の手より女の手へ渡る物のうら淋しく
おなじ茶人の間に受渡す言葉の寒げに質素なるかな。
このゆゑに我は女の味方ならず、
このゆゑに我は裏切らぬ男を嫌ふ。
かの袴のみけばけばしく淋しき女の群よ、
かの傷なき紳士よ。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

一諾

大村かよ子

一

夫れ一陽の春になれば、
世の波たつも立たざるも、
天に奏する樂の音に
地のもの笑みて舞ふとかや。
世は戰の修羅なれど、
小柴綻ぶ、鴨川の
主なき家の垣の內、
なよかに春の風ぞ吹く。
軒は傾き、欄は朽ち、
荒るゝがまゝの庭の面。
いつの野分の名殘りにや、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

落ちしがまゝの甍には、
春の若草萌えいでゝ、
昔の榮を語るらし。
聲を收めて、遣水も、
翼休息めて、鶯も、
たゞしめやかな春の庭。
花にうまゐの蝶の夢、
さむる期もなき靜けさを、
風のそよぎか、山鳥の
羽音か、いさゝむら竹の
篠の揺ぎか、垣の外。

二

重籐の弓の肩先きに
なびく柳の波を分け、
ゆたにのりたる武者一騎。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

荒れし垣ほの、枝折戸を、
深きまびさし傾けて、
やがて、暫時を點頭いて、
こぶし花咲く木の下に、
繋ぐ、連錢鹿毛の駒。
鬣なでて、顧みて、
「待よ、我が鹿毛、こゝにして、生れしこゝの我が家居、暫時の名殘り惜ませよ。」
草はむ駒を顧みつ、
咲きも亂るゝ山吹の
花間を分けて、しづ〳〵と。
頭高に負ひし箙には
三十六の黒羽の矢、
朽葉の直垂ほの見えつ、
武太刀に枝をおしわけて、
黒革緘しの大荒目
搖るゝ一歩に、はら〳〵と

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

山吹の花ぞ散りかゝる。

三

「見るに、思ふに、忍ばるゝ此の庭木立、彼の軒端。月見るとては、父君と掎りし露臺は、幾秋のあらしに影も止まらず。殘るかたみの礎に、こゝと一と本立つ蕨。花吹くとては母君と飽ず眺めし紅梅の、めづる人なき幾年を、去りとも春は笑みにけん、散りすぎし花の、今も、なほ、忘られぬ香ぞ、身には染む、母屋の階、孫廂、朽ちしながらもしかすがにむかしのあとぞ忍ばるゝ。めのとを馬になぞらへて、一人の弟義嗣と競べ馬より興じつる彼の細殿も、渡殿も、ありしあたりは若草の處えがほに萠えいてゝ。

四

「春や昔の春ならぬ、實に我れのみは、もとの身の、ありしや現、見しや夢。父君もなく母君も。たゞ世に一人の弟とは、あゝ、かりごもの世とは云へ、しのぎをけづるかたき同士。今宵召されて、白河殿、身は上皇を守護の役。伯父爲義の麾下にして、立つべき功は、此の胸に。」

任りとたゝいて弦走り。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

どつかと座すや、孫廂。
またも昔の思はれて、
固めし拳いつしかも、
ゆるみて、糢糊茫然と、
仰ぐみ空のゝどけさを、
破つて一聲、若駒の。

五

こは、いぶかしゝ。鹿毛ならぬ、
思はぬ駒の、いなゝきと、
小手をかざせば、築山を
こなたへさして、武者振りも
床しき曹司、たゞ一騎。
かぶとの鷹角(たかづの)打ち反(そ)らし、
緋縅しのよろひ、褐色(かついろ)の
直垂、いとゞ花やかに、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

二十四さしたる小中黑、
頭高に負ひて、もつ弓は
七尺二寸の塗籠籐。
怒物造りの尻鞘も、
汀に舟の貝鞍も、
雪とふりしく花はら〳〵。
またがる葦毛のたてがみに、
つもる落花も、さながらに、
射向けの袖に花をうけ、
花をうけては、空仰ぐ
おもざしの、こは、誰れ人ぞ、

六

おゝ、珍らしや兄者人。
思はぬ見參のうれしやと、
駒を櫻にのり捨て、

きざはしのもとにひざまづく、
花か艶なる若武者の
顔つく〳〵とまもりては、
詞もなくて打ちそむく
頼嗣が前に、二三尺、
きざはしのぼり近づきて、
のう、なつかしや、兄者人、
兄者人よといざりより、
がらりと、太刀も、弓も捨て、
かぶとをぬいで、孫廂。
菱縫の板にとりすがり、
つく〳〵と仰ぎて、兄者人、
なつかしや、のう、兄者人。
よべど、頼嗣眼をとぢて、
石とばかりに嚴然と。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

七

「なつかしやのう兄者人。弟に候、義嗣に。」
射向けの袖を打ち控へ
すがらんとすれば、はらひのけ、
「何處の人ぞ、おん上は。さても武者振り美しゝ。さぞや、櫻の武士ならん。」
から〱と打ち笑ひ、
「ふたまた武士の弟は、我れ源の頼嗣は、憚りながら世に持たず。ご粗忽あるな、おん曹司。」
立たんとすれば、草づりを、
しばしと義嗣ひかへつゝ、
此はあまりなるお言葉と、
唇かみて、打ち震ふ
こぶしに拂ふ血の涙。

八

「武士なればこそ今日の我れ、四面は楚歌の世にも立つ。推察あれや、兄者人。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「かたじけなくも、上皇に我が父君のうけにける海山の恵み我れ知れり。まだいわけなき頃にして、親にわかれし孤兒のわれにかゝりし年比の伯父爲義が限りなき慈愛の程も我れ知れり。知つて上皇に弓をひく、我が此の心。兄者人、苦しき弓矢帶ぶる身を、推察あれや、兄者人。」

ふり仰ぐ花のかほばせを、
與下に睨めて、二歩、三歩。
なほすがりつく手を拂ひ、
叫ぶ一喝、取りなほす
鐵扇、丁と、義嗣が、
雪の頸筋、紅の花。

「かしまし〻此のむしけらめ。」

「打ちて御心ゆくならば、思ひのまゝになし給へ。」
つく双の手の唐紅。
青ざめし顏に打ち仰ぎ、
なほふり放す賴嗣の
太刀の石突、後より

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ふるふ腕にとりすがる。

九

「其お怒りはさりながら、暫時兄上聞きてたべ。思ふ十とせのその昔、たゞかりそめの戦ごと、忘れしもせじ、のう兄上、兄上と爲朝と敵にして、我は義朝と味方同士。彼れ彼の山を我が陣に、兄君の陣は彼の木立、此の庭にしてたゝかひし紅葉の秋のありにしを。其の折なりき、義朝と命の限り味方同士、父とも兄とも別れても、味方同士よと約しつる其の一諾の忘られず。戰ひはたゞかりそめの遊びなれども、一諾は、一諾は我が肺肝の、心の友に諾しつる約をいかでか、兄者人。ゆるし給へや、兄者人、生れて武士の我れ、いかで此の一諾を忘れんや。よし世の人は知らずとも、われものゝふの、一諾を、一諾をいかで、武士の

十

我れ武士の義嗣が、此の一諾を打ち忘れ、伯父爲義が麾下にして、我が上皇を守護の役、そむかば、義朝が此の約に、たゞ一諾を忘れつる甲斐なき武士と、後ろ指さゝれんよりも口惜しきそしりは、外にあるものを。伯父爲義がいとし姫、我れにゆるせし露姫は伯父御

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

が館にあるものを、此の一諾を打ち忘れ伯父御が招ぎに走せ行かば、女々し男となりもせん。生れて武士の此の義嗣、此の手、此の頸、此の脛の、よしやみじんになればとて、なでふ、めゝしと、めゝしとはいはれていかで忍ぶべき。推察あれや兄者人、御心なほしておん笑顔、お情けに此れ兄者人、ゆるして、我れを、義嗣を、呼ばして武士の男ぞ」と。

兄上頼み上げますと
後ろ姿に手を合せ、
引敷の草づり、そと引けば、
詞はなくて頼嗣が
閉づる眼をはら〳〵と
何の雫のこぼるらん。

十一

「さばかりの武士が心根のおん身と我れは露知らず過しゝ言のはづかしさ」
ゆるせと弟の手を取りて
立ち戻る母屋の廂の間、
「ゆるし給ふか兄者人。」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ひれふす頸の唐紅、
きと眼をとめて頷きて、
取りくつろぐる引合せ、
懐紙(ふところがみ)を取り出だし、
血糊拭へば飛び退り、
勿體なしや、兄者人、
嬉しやとばかり縋り付く
義嗣が手を引寄て、
「一陣に立ちては敵同士(かたきどし)、暫時も共に斯くあらば、人の詞のわづらはし、やがて西方浄土にて昔語はせん程に、はや別かれぞや、さらばなり、戰ふとても義嗣よ、戰ふまでの其の手足、いたはれよ、兄が願ひぞや。」
いらへはこゝと緋縅しの
鎧の袖の露しぐれ。

十二

葦毛の頭たてなほし、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

いざと一禮、義嗣が
乘らんとするを袖ひかへ、
「待てよ、義嗣、露姫にことの葉はなぞあらざるか。」
いなゝく葦毛のたてがみの
白波に花ぞ戯るゝ。
「此は有り難し、さりながら禿びし矢立ての筆にては麻と亂るゝ此の心書かん術さへ我れ知らじ。」
たなびく花の夕映か、
たけきをほこりのものゝふの
顏にも茜の色ざさす。
「恐れあれども、兄者人、伯父御に背きし此の身をば、さこそ姫にもうらむらめ。よしなにつくろひいひてたべ。此のたゝかひの和とならば、必ず連理の枝ぞかし。もし勝敗のわかれなば、勝つも負くるも、義嗣は行くに任する雲水と必ず、姫に、兄君よ。」
また一としきり花吹雪、
「來よやと姫のつね日比、たのめし春は身に仇の此の戰ひの世となりぬ。共にとちかひし此花も陣に見る世の是非もなさ。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

せめてとかたへの櫻が枝
折りて「兄君此れをしも、かたみと姫にまゐらする
願ふは是れのみ、いざさらば。」
さらばとばかり勇ましう
一むちあてゝ一と走り、
落花を蹴たつる若駒の
蹄の音の消えゆけば、
きらめくかぶとの白星も
花の吹雪に消えて行く

十三

花の吹雪に消え去りし
弟が行衛のび上り、
つまさき立てゝ見送りつ、
鹿毛の手綱も打ち捨て、
枝折戸を背に賴嗣は

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ちからなげにもくづをるゝ。

「姫は此の世にあるものと、可愛や弟が枝折りつる此の八重咲きの花ざくら、さゝげん姫は幽明の境をへだてし西の國。伯父御に背きし義嗣が罪をかよわき身にうけて、白梅かをる朧月に、守り刀の露と消し優しき姫が心根を、語らんと、さは思ひしが、なまじ首途のものゝふに力落しをさせまじと、別るゝきはの一と言を、かりそめならず喜びて、此の一と枝を托しつる我が義嗣が眞心は、草葉の蔭にも、うけまさん。白河殿のおん召しに、遅参の罪はありといへ、いざ駒にむち、露姫が、おくつきどころ、此の花を、弟が詞をさゝげん」と、

みかへる遠の山の端に
夕日は消えて、消えやらぬ
一とむら雲は花の刷毛。
たそがれの幕一重おり、
一重おりては、一としきり、
しきるや雪の花ふゞき、
むせぶか、鹿毛の一と聲の。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

よそ事

岡田八千代

朝稽古の子供が大低歸る時分、留吉は、のそつと二階から下りて來た　火鉢の前には母親のみつ代が稽古扇を帶にさしたまゝ一寸一服といふ形で立膝をして煙草を呑んで居た。

「お早う」

みつ代はぢろりと上眼で見たまゝ何とも言はなかつた。

母親に向ひあつて緣起棚を後にまづと座り込まうとした留吉も、此樣子を見てとると、

「フン。」

と鼻の先で笑つて、腹の中で「少々お冠曲りか」なんぞと思ひながら、仕方なしに座るのは止して開けはなした直ぐ次の臺處へ出ると流しの前へぢつと座り込んで不性らしく手を延ばして眞魚板を掛けた羽目にさしてある、ライオンの齒磨袋を突きさした房揚子を取つて、やけに袋の中を掻き廻して口へ含むと、流しの下に伏せてあつた磨き上げた銅の金

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

盥を流しへがちやんと置いた。それもてきぱきともする事か、ぐずり〳〵とやるのである。呑みかけた煙管を手にしたまゝ目も離さず之を見て居たみつ代は、イヤといふ程火鉢の椽で煙管を拂いた。

「オイ〳〵留公。何處で顏を洗ふつもりだい」

「洗ふ可き處で洗ふのさ。」

と後も見ずに水瓶の蓋を取らうとする。

「生意氣な事をお言ひでない。その水を用ふのはまア御免をかふむるよ。」

「何故さ。」

「何故さもよく言はれたもんだ。その水が減りやア誰が汲むんだよ。」

「誰でも手の空いてるものが汲まアね。」

「お前の手はいつになつたら空くんだい？」

「まづ暫くは覺束ないね。」

「ほんとに呆れ返つてものも言へない。もう今日からは、水道の處へ行つて顏を洗つて來な。二十歳にもなつて、なんだ。朝と言や十一時の鐘が鳴らなきや起きやしず。夜と言や、どこをまアほつつき歩く處があるかと思ふ位だ。稽古の子のことを見な。六ッや七ッの子が、六時にも七時にもずん〳〵出て來る。第一あたいの顏に係はるよ。母親はその日〳〵

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

を暑いとも思はず稼いて居るのだ。誰の爲にぼろを下げたり、頭を下げたりしてると思つてるのだ。手前の姿を見ろ。べらしやら／＼しやがつて、誰のお陰だと思つてる。お時はお時で、踊の師匠や三味線の師匠ぢや一生頭が上らないなんて、人が苦勞して育てた事は思ひもしねえで、お構ひなしに相手を見つけてサッサと行つて終ふ、後に殘るのは役にも立たない手前ばかりだ。見つともないから、せめて八時にも起きられなけりや一日起きて貰ひたくないね。あゝ明日からは、一日寢て居るが好い、どうで起きたつて何の役にも立たない奴だ。寢てろ、寢てろ、もう一生でも二生でも寢て居たい丈寢て居ろ。」

みつ代は、手に持つて煙管をハタと留吉に投げつけた。煙管はツと之を避けた留吉の脇をかすつて流の椽へ當るとポッキと二ツに折れて轉がつた。

「おつかない、おつかない。」

留吉は口の中に咳やきながらコソ／＼と金盥を持つて水口を出た。其處は小さな庭のやうになつて居た。山の手の地處でも立て込んだ此處いらでは、これから日盛りといふ頃を隣の二階にさえぎられて、もう日の蔭つた中に垣根にからました朝顔は、小さな花がしぼんで、枯れたやうな蔓はもう實勝になつて居る。留吉は裏木戸を出際にいたづらにその蔓をグイと引いた。母親が朝やつて置いた水がハラ／＼と落ちた。

ドンを打つても留吉は歸つて來なかつた。みつ代は、夫でも、よもやに引かされてお晝

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

飯を待つて居たが、一時を打つても足音もしないので、揚板をカタ〳〵と淋しさうに漬物を出してさら〳〵と御茶漬をかつこんだ。心の中では、あれ程に言はなくてもよかつたとしきりに留吉の歸るのが待たれた。二時頃になつて亦學校がへりの子がポツ〳〵と稽古に來る時分、向ふ横町のせんべ屋の淸ちやんといふのがお稽古に來がてら、留吉の持つて出た金盥を持つて來た。

「留は又お前さんの處かい？」

みつ代は又ぢり〳〵とした。餘に月謝も呉れずに稽古によこすさへあるのに。なんかと言つては留吉の肩を持つて煽だてるこの子のお袋が憎い。

「今日は御師匠さんは肩が張つてるから休んでお呉れ。」

みつ代は、つけ〳〵と言つて其處にある長唄の稽古本を枕にして舞臺脇へゴロりと横になつた。それでも半時とならぬ中に亦起きなければならなかつた。多くない弟子は間を置いてはポツリ〳〵來るのであつた。お淸は歸るでもなくおとなしく夕方まで遊んで居た。みつ代はそれでも稽古に立たぬ程意地の惡い女ではないのである。もう三日も一ツ處をやつて覺えないのを、怒りながら幾度も〳〵手を持つやうに敎へて居た。

留吉は夜までせんべ屋に話し込んで居た。そしてせんべ屋のかみさんが、

「どうして、そんなに怒られたのさ。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と大丸髷の根を掻きながらいふのを受けて、
「ヘンお極りゝ昨夜はれこが來ねえのさ」などゝ親指を出して見せた。投げ出して兩足をバタ〳〵とやりながら、よそ事のやうに母親の事をいふのである。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ある夜

尾島菊子

つぎ子は夕方飄然と家を出た。何處を何う行かうと云ふ的もなく、平常通り慣れてゐる道を唯足の向くまゝに歩いてゐる。足は自然に電車の方へ向いた。田町の角から褄を持つた粋な女が二人、緋縮緬の蹴出しをチラ〳〵見せて、さも誇り顔に出て來た。此界隈では此種の女を見るのが珍らしくはないから、殊更に振向く者もなかつた。つぎ子も此方へ越して來て一年ばかりの間、外へ出る度に嫌と云ふほど見せつけられて、今では最うあまり目障りにもならない。唯晝日中ドス黒い顔をして、髪を壞したまゝ、粗末な服裝も構はず平氣で其處等歩くのを見ると、何となく不快で堪らぬ。それに十五六の器量の好い雛妓でも見るなら、眼先が華かで可愛いだけに恐い心持もしないが三十面の阿莫擢れたのを見ると、自分を耻かしめられたやうに腹立たしくなつて來る。

「彼年をして溜池あたりの小つぽけな藝者屋に勤るてゐる位なら、何故思ひ切つて死んで

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

了はないのだらう。」
　何だか焦々した心持になつて、何時でもこんな事を考へる。
　けれど、然う思ふ下から又、
「寧そ藝者なんかの方が暢氣かも知れないわ。末は野となれ山となれ、唯其日〳〵を樂しく暮して行くのだもの。嫌な日もある代りに、心のどん底まで思ひをやる樂しい日もあらう。眞面目一方の人間は、今の世の敗北者だわ。正義につけの、道德に從へのと、古い敎訓に慣らされた自分なぞ、幾ら人間を眞面目に解釋して、正義や、道德を重んじたとて、結局それが何れだけ自分を益してゐるだらう。第一正義だの道德だのつて、人間が勝手につけた理窟に、何の標準があるか？世間の人間が表面ばかり飾つて、裏面で色んな醜い行爲をしてゐるのも知らずに、自分一人が豪さうに正義呼はりをして、そして普通の女には迚も堪へられぬ困難をつゞけて行く……世間ではそれを嘲笑つてゐるではないか。ひねくれた彼女の形相を見ろと、冷たい眼で笑つてゐるではないか。」
　忌々しい、と云ふ氣も起つた。
　つぎ子は溜池の停留場に立つた。角の洋食やへ洋服の男が二三人入つて行く。と直ぐ二階から其連中の頭が見えた。電車は何れも皆滿員である。つぎ子は行く的が定まらないので、何方へ乘らうかと迷つた。考へて見ると何の爲めに斯うして出て來たのか自分ながら

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

解らぬ。家に居れば唯頭から壓へつけられるやうなので、此儘にしてゐたら氣狂ひにでもなりは爲まいかと思ふ位心が焦燥つので到頭出て了つた。何をそんなに焦々するのだらう？

「元子さんは遂にお嫁に行つて了つた。私を殘して他所の家の人になつて了つたのだ。今頃は私の事を何とか思つてゐてくれるか知ら。それから彼の人……あんなに元子さんを思つてゐた人……元子さんも始終好きだ〳〵と云つてゐた人……彼の人の事を何う思つてるんだらう？　あゝ元子さんは意志の強い女だ、と云ひたいけれど、一面から云へば薄情な人だ。戀人を捨てゝ、親友と別れて、そして何處かの知らぬ人の許へ行く……それで淋しくも何ともないのだらうか？　地位があつて名譽があつて、それで財產があれば、最う戀なんか入らないのか。不思議だ、不思議で堪らぬ。元子さんだつて人間の温かい眞の情愛に渇してゐる女ではないか、何うして彼人を思ひ切りよく打捨つて行つたのだらう。そりや元子さんの云ふ通り、幾ら雙方で好きだと思つたとて、到底夫婦にはなれないのだから――と一應尤もだけれども、夫婦になれないと云ふ規則が何處にある、皆自分自身で勝手に定めてるのではないか。年下の夫を持つのが耻かしいの、若い男は財產がないの、心が變り易いから末が案じられるの、と悧巧は悧巧な考へに相違はないけれど、私は親友を失つた今の淋しい心持に較べて、彼の人の辛さ切なさを一入深く感じる。可哀想

によく〳〵激しい戀に落ちたればこそ、なけなしの財産を擲ち、自分の名譽を捨てゝも、元子さんの滿足を買はうと努めたのではないか。元子さんだつて血もあり涙もある女だ、それ程に思ひつめてゐる彼の人の心をようく知り拔いてゐる筈である——さう〳〵こんなことを能く云つたつけ。晝はいろ〳〵と忙しいのに紛れてゐるけれども、夜になると思ひ出して、獨りで泣いてゐるつて……

あゝ元子さんは可哀想だ。私が若し私の力で出來るものなら、晝と夜と元子さんの夫を取り代へてやりたい。何とか云ふ今の夫になつた人が、無理矢理に貰つた爲めに、元子さんも泣く、私も泣く、彼の人も泣く、三人が泣いてるんではないか。天下に何の罪もなく、美しい憧憬搖籃に眠つてゐた三人の夢を破つて、自分一人が勝利を占めた男が憎い。いやだ〳〵。最う何が何だか分らぬ。何うでも好い、何うでも好い、各自に皆勝手にするが好い、世の中の事は皆斯うしたものなんだらう。お互樣に好きな人とばかり無事に一緒になる事が出來たら、そしてお互に嫌になると云ふことがなかつたら、あんまり單調で爲方がない。昨日までは命も入らぬと誓つた中でも、今日は早や路傍の人になる、そして又他へ命を賣りに行く……戀の切り賣り、命の安賣り……妙な事が流行つたもんだ。」

つぎ子は取りとめもなく思ひ亂れた。頭が破れるやうにピン〳〵する。

「歸つて寢ようか知ら！」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

とも考へた。けれど又あの解らずやの母から、元子さんの悧巧さを讃め稱へられて、何時までも夫を待たずに愚圖〳〵してゐる自分の意氣地なさを誹されるのが如何にも嫌だ。親でなかつたら、彼の口を縫つてやりたいと思ふ。

全體世の中に親くらゐ勝手な者が何處にある。子供に施すべきだけの義務も果さないでおいて、好い加減親風を吹かせて、そして我子に向つては如何な無理を云つても、可いものと許してゐる。子の迷惑さは如何だらう。然かも私なんか女ではないか、女が精々働いたつて何れだけの事が出來よう、大抵に考へて見るが可い。此上未だ私を苦しめようと云ふなら私は斷然家を出て了ふまでゝある。

それから世の中に妹とか弟とか云ふ者ほど厄介なものはあるまい、自分共が後から生れたからとて、何て先に生れた者を苛るか？先に生れた者は何故に後から生れた者の責任を背負ふ義務があるか、子の責任は全部親にある筈ではないか。親に若し其責任を負ふだけの意氣地がなかつたら、爲方がない、迷惑だけれど各自に覺悟を極めるまでゝある。何も先へ生れた姉ばかりを責めると云ふ法が微塵もない、親の爲めに恐ろしい迷惑を受けて困り切つてゐる處へ、後から出て來た連中にまで苛られちや、實際最う此儘自滅するばかりである。あゝ親や弟妹ほど荷厄介なものがあらうか？、自分一人を責め殺して、そして滿足してゐる彼等の心を思ふと、もう堪らぬ。出ませう。家の者と別れて自分一人になつ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て了ひませう。如何に氣樂になるか知れない。我身を犧牲にして親に孝を盡したつて、弟妹を可愛がつてやつたとて、何にならうぞ、自滅！自滅‼　自滅の他はない。

あゝ早く獨りぼつちの靜かな生活がして見たい。

つぎ子は一時に𠹭となつて體中の血が火のやうに燃えた。來ては停まり、停まつては去る電車が、幾臺となく自分の眼の前を活動寫眞のやうに過ぎた。

空はだん〳〵濃くなつて、田町の通りに浴衣の人影が淡く浮んだ。パノラマへでも入つてるやうだ。洋食屋の後の邊から、さはりの好い三味線の音が洩れて來た。

こんな風に無暗と頭腦の混亂した時に、浮世離れのした絲の音締めなど聞くと、酔一杯、カッと怒鳴つてやりたいやうに腹が立つ。つぎ子はスタ〳〵と葵橋の方へ歩いた。

「まるで氣狂ひだ。」

自分ながら冷りとした。何うしたら此焦々した心持が靜まるのだらう。此心、此思ひを、此儘此處へ形にして現はすことが出來たら、それを小包にして誰かの處へ送つてやりたい！　誰の處へ？

誰もない、誰もない、そんなものを受取つてくれるやうな嬉しい人間が何處にあるものか。

世間の夫は妻と苦樂を共にしようなんて云ふけれど大の僞、苦は妻にばかり、樂は自分

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ひとりさ。

元子さんは其様ことを千も萬も承知して、そしてお嫁に行つた。可愛い人――好きな人を他所にして、髭面の氣難かしやの理窟云ひの處へ行つた。

元子さんは先方から云ひ寄る人を嫌ふ女だ。何の彼のと紋切形の定まり文句で說き落さうとされると、背に水を浴せられたやうに竦として嫌になると云つた。

元子さんは人形のやうに美しい顏をして、小鳥のやうに可愛い聲をして、雛のやうに艶麗な容姿をして、それであのまあ心の強いこと、彼の人を泣かして振り切つて行く度胸の豪いこと。噫々。

「妻君入用」

電車道について虎の門を曲る時、角家の商店の硝子戶に、こんな貼紙があつた。

つぎ子は偶と立停つた。

ふつと噴き出す。美しい微笑が浮ぶ。硝子戶の中には電氣が華かに流れて、椅子に相對してゐる白い洋服の男が二人、ゆつたりと葉巻を燻かしてゐる。

「何方が妻君入用の主人なんだらう。」

つぎ子は好奇心に駈られながら偶と上を見た。軒の周圍には米國の二字が矢鱈に書いてある。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つぎ子は少時中の樣子を見てゐた。

「まあ何ていい面白い性格の主人だらう!」

又ニコリと笑つて步を進めた。あんなに手輕な事で、或男と女が一生結びつけられて行くなら、お互に手數が省けて眞實に世話がない。今の世だもの、應じる女がありさうなものだ、とこんなことも考へて見た。

日はもうとつぷりと暮れて了つた。

つぎ子は遂に何處へ行かうと云ふ心も起らなかつた。例ならば此樣晩は屹度元子さんと二人で步いてゐた。此方で誘ひに行かねば、先方で誘ひに來る。一日逢はねば何となく物足りないやうな氣がするので、大概每日顏を合はせぬ日はなかつた。元子さんは能く心の迷ふ女であつた。今の家へ嫁附くまでに何れほど迷つたもんだらう。けれどいざ斯うと決心して了ふと、大切の〳〵好きな人をも犧牲にして了ふ。

元子さんは人には容易に涙を見せぬ代りに、自分ひとりで心の中に血の涙を絞つてゐたことは、私が能く知つてゐる。

「ねえ、世の中に貞女になる位つまらないことはないわ。」

これが元子さんの口癖であつた。私等二人はこんな話をしながら夜となく晝となく、唯漫然として能く外を步いた。然うして今年の夏は何處か靜かな海岸へ行つて暮さうの、寧

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

そ二人で家を持たうかなどゝ、こんな事を語り合つた。
又或時は粋な商賣でもはじめて世間を驚かしてやらうか、と妙な反撥心も起つた。
それもこれも、今になつて考へて見ると、お互に獨り住の所在なさから、つい暇つぶしに考へた空想に過ぎなかつた。
此度逢ふ元子さんは最う何々夫人と云ふ肩書附きである。そんなあられもない空想は最早や過去の夢だ。あゝ夢！夢!! 何處かにも夢だ夢だと云つて悶えてる人があらう。
あゝ淋しい夏！今年の夏はほんとに淋しい！
つぎ子は急に便りない感じがした。能く二人で通つた道だと思ひながら、又ふら〳〵と溜池の方へ戻つた。袖を吹く涼しい夏の夕風が肌に冷たく秋風のやうに泌み渡る。
「明日からの自分を何う爲ようッ」
つぎ子は戀人にでも去られたような果なさを感じて、熱い涙が込み上つた。
自分一人でこんな淋しい、やる瀨ない思ひをしてゐる位なら、寧そ彼の人を呼んで來て一緒に泣かう、そして二人で元子さんの薄情を怨まう！
いやいや、元子さんは薄情ではない、元子さんは女の踏むべき道を踏んで行つたのだ。怨んでは濟まぬ。元子さんの立場として考へたら、彼あするより外はなかつたのだ。元子さんは私の勸めた通りに、又彼の人の望んだ通りになるやうな、そんな女ぢやない。情の

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

爲めに自分を忘れて了ふには、あまりに理性が勝つてゐる。

私は今更になつて最う何も云はぬ。只元子さんの將來を幸福なれと祈るばかりである。けれど自分は淋しい。朝に晩に晴れやかな笑ひ聲も聞かれず、美しいあの顏も見られぬ。

「女には女の友達が絶對にない筈のものである。それが眞理である。」

過日誰やらがこんな事を云つたのを思ひ出した。あゝ矢張り然うなんだらうか。

つぎ子は同じ新町の通りを三度廻つた。もう家へ歸らう、歸へつたら頭を縛つて直ぐに寐よう、と斯う考へながらぐる〳〵ぐる〳〵と步いてゐる。夏の夜の街は一種の色彩を帶びて何處となく華かであつた。

「おや、今お歸りですか、私、先刻からお宅へ上つてゐましたの。」

黑つぽい單衣を着た色の白い細面の女が、向ふから淋しさうな姿でトボ〳〵と步いて來ると思つたら、先方から直ぐに聲をかけた。それは七八年前の舊い友達で、四年ほど前に夫に亡れた人であつた。

「まあ、大變に久らくでしたわね。能く入らしつたこと。さあ行きませう。何うも失禮しました。」

つぎ子は思ひがけないと思つた。

「ほんとに久らくでしたわ。逢ひたい〳〵と思ひながら、相變らず貧乏暇なしでね。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ほゝゝと心細い笑ひ方をする。つぎ子は貧乏の話なんか、もう飽き〱だと不快に思ひながら、

「でもまあお變りがなくつて何よりね。私の家も相變らず、昔も今もあのまんまよ。」

「けれど私は、何時も蔭ながら貴女を羨ましいと思つてゐますわ。ほんとにお氣樂で被居るんですから。」

不思議なことを云ふ人だ、とつぎ子は可笑しかつた。パン屋の横を曲つて靜かな街へ入ると、五六間歩いて、

「此家よ。」

と、つぎ子は先に門の中へ入つた。

「お客様よ。きみ子さん！」

其聲を聞きつけて、奥から妹の鶴ちやんがひよいと顔を出した。

「逢つたの、まあ好かつた。大變お待ちになつてゐたのよ。姉さんは又默つて何處へ出かけたの？」

つぎ子は知らぬ顔をして自分の室へ行つた。其跡からきみ子も默つてついて行く。後の方で一寸、

「ほゝ又上りました。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と、鶴ちやんに云つてる聲がしたばかり。さあ、何卒此方へ。どうも久しく、御無沙汰ばかりで相濟みません。」

二人は改めて挨拶をした。つぎ子は焦々する此心を鎭めさしてくれる爲めに、今夜――一年あまりほどで突然にこんな不意な人が來たのか、と思つた。然うして手取り早く現在の生活狀態を訊いた。きみ子は八才になる女の子をつれて、今は實家にゐるが、いろ〳〵面白くないことばかりだから、假令薄給でも勤めに出たいと思ふ、何卒世話をして下さいな、と賴んだ。

「何故貴女にお嫁に行かないの？」

つぎ子は素氣もなく、こんなことを云つた。

「ほゝゝ、一度行つたぢやありませんか。」

「もう一度さ。」

「もう一度？」

「えゝ。」

「幾度行くんでせう？」

「幾度でも……　…」

「まあ、では貴女は何うなの？」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「これから嫁くてせうよ。」

「…………………」

きみ子は寧ろ意外と云ふ顏附をした。

「何をそんなに不思議がるの？」

「だつて、ほんとに然うか知ら。」

「えゝ、然うですとも、だから貴女も、行らつしやいな。勤めなんてつまらないからお止しなさい。若い娘がお嫁入支度の爲めとか、家政上の都合で出るなら、未だしも聞えてゐますけれど、三十面を下げて、今更袴をつけて貴女、外を歩かれて？

ねえ、きみ子さん、考へて御覧なさいよ。今から勤めなんかに出て、それが何になると思ふの。十圓や十五圓の月給を貰つて、毎朝々々割引電車で慌たゞしく家を出て、そして終日下らない仕事をさせられて、夕方疲れ切つて歸つて來たつて、誰が讃めてくれて？

ねえ、誰が貴女の勞働を感心してくれるでせう。誰もないわ。却て世間ぢや笑つてよ。何ていあの見素ぼらしい姿だらうなんて、如何に輕蔑されるか知れないわ。然うして自分ばかりが辛い目に遭つて馬鹿〳〵しいぢやありませんか。お止しなさい、お止しなさい。今の世は再婚が恥ぢやないことよ。反對に我を通してゐる女の方が憎まれるのよ。それでも憎まれながら立派にやつて拔けられるだけの技倆があるなら可いけれど、別にこれぞと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

云つて一つの藝に秀でゝゐると云ふ話でもなしさ、何を便つて今後暮されると思ふの。何も一度夫に死別れたつて、又其次も死別れると云ふ、そんな法はないわ。若し萬に一又死別れたら、それまでの運命だと思つて諦めるのよ。

だからきみ子さん、私は貴女のお爲めを思ふから云ふのよ。早くお嫁附きなさいな。子供はお母様に頼んでおきなさいよ。何うせお嫁にやる子でせう。然うなさい然うなさい。そして勤めようなんて云ふ考へは、全然捨てお了ひなさい。幾ら威張つてゐたつて、女は遂に弱者よ。」

つぎ子は机に片臂を突いて滔々と辯じた。きみ子はつぎ子の口からこんな言葉を聞かうとは思はなかつたので、異様の眼をしてつぎ子を見てゐる。

つぎ子はきみ子の慌てぬ様を焦烈たいと思つた。何故何時までも〳〵斯う愚圖々々してゐるのだらう、と齒痒くて堪らぬ。

「小學校の先生や女事務員などになる位なら、藝者になつた方が增しよ。」

と口頭まで出たのを引込めた。

きみ子は呆氣に取られて穏かならぬつぎ子の調子を窺つてゐる。

「ねえ、きみ子さん、貴女此度お嫁に行くと決心がついたら、私及はずながらお世話するわ。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

斯うなれば、何うでもハイと云はさねば止まぬと云ふ權幕である。

「ありがたう。けれど、子供の事が氣になるしね。それに嫁に行くつたつて支度も何もない裸體の地藏樣ですもの。爲樣がないぢやありませんか。ほゝゝ。」

此人は直ぐ笑ふよ、とつぎ子は焦り〳〵した。

「支度なんか何うでも可いわ。ねえ行らつしやいよ。行くと決心なさいよ。ね、きみ子さん！」

「さあ。」

「さあなんて、考へることなんかないわ。勤めは一時の凌ぎですもの、それよりも永遠の安全を計らなきやならないでせう。」

「そりや然うよ。では家へ歸つて今夜とつくり思案するわ。」

大分折れて來たと思つたら、つぎ子は何となく愉快でならなかつた。

きみ子は心の中に思ふことを十分に云ひ得ずして、遂々十時ごろまでつぎ子のお談義を訊かされて歸つた。跡でつぎ子はしみ〳〵氣の毒な人だと思つた。

夏の夜は森として深けた。表を通るハモニカの音の凉しく消えた後、つぎ子は獨り兀然と机の前に坐つて、虛空を睨んでゐた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つぎ子の癖で、夜を深けるに從つて、頭がだん〳〵明瞭して、次第に冷靜になつて來る。暮れ方氣狂ひのやうになつて、外を駈け廻つて歩いた時分の熱した感情が今は最うしつとりと落着いて了つた。机の上の窓からそよ〳〵と冷たい夜風が吹き入つて、洗ひ髪の庇を通して地肌の毛穴のひとつひとつに心地よく、すう、すうと泌み込む。

「あゝ好い晩！」

つぎ子は夜の世界を悦ぶ女であつた。腫れぼつたくなつて眠さうだつた眼がパッチリ開いた。隣りの室から微に洩るゝ家人の寢息と、カチ〳〵カチと刻む時計の音と、犬の吠聲と、何處かで閉てつけの悪い雨戸を時折ガタリ、ガタリ云はせるのと、吾妻下駄で靜かに通る優しい齒音と、代り〳〵に耳に入る。つぎ子は立つて藤椅子にぐつたりと凭れかゝつた。見慣れた机、本箱、戸棚、琴、花瓶、床の軸など、何れもこれも同じ中に、偶と今日繪を書く弟が取り代へた生物畫の額に眼を止めた。別に好いとも拙いとも感じない。只眼を開いてる間に一心に繪筆を握つてゐる平和な彼の心が懐かしかつた。そして弟の寢息が最も美しいと思つた。

森々と深けて行く夜半に、つぎ子は眠つてるでもなく覺めてるでもなく、椅子に凭れたまゝ夢現の境に恍然として自分を忘れた。そして此儘夜が明けなかつたら、私は如何に幸福だらう！　最う何も望む所はない、斯うした心の平和……それに一番私に取つての幸

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

福であると、自ら信じた。

明日の心を測り知られぬ浮薄な戀人など、何に爲よう、もう何も入らぬ、何にも入らぬ。平かな我心！　これさへあれば私は永遠に幸福である。元子さんが何？　戀人が何？　親が何？　弟妹が何？　何であらうぞ？　况して信をおかれぬ夫が抑も何者か？

私は今夜のやうな靜かな晩に、ひとり斯うして冥想に耽つてゐる、此間の心の平和を以て私の最も快樂とする。私は斯うした眞の孤獨の寂寞の中から或快感を見出して、自分獨りを慰める。あゝ好い晩！

つぎ子は平常人に接してゐる間に、何時も或寂し味を感じた。一人が二人三人と餘計になるほど、我身に迫る悲哀と寂寞を覺えるのである。故に晝の煩はしさを嫌ふて、人の夜靜まつた夜半を好む。世界に夜ばかりであつたら誰の心も平和になるだらう、虚榮も僞善も何にも入るまい。あゝ平和！

ひとり！ひとり!!ひとりに限る。假令心を一つにした戀人があらうが、夫があらうが、結局自分は遂に自分でひとりのものである。戀人と云ひ夫と云ひ、或範圍を乘り越して自分を奪ふことは絶對に出來ぬ。

私は斯うして何時までも獨りて自由に考へて、ひとりを樂しむ。

つぎ子はぼんやりとした眼を半開きては、又閉ぢた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

遠くて電車の軋る音も絶えた。夜はいよ〳〵靜閑となつた。庭の立木に時々強くあたる風の音がした。チリンと風鈴の音色！

つぎ子は其儘スヤ〳〵と眠つて了つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

稲の花さく頃

祜子

生命なほ我れにようなし戀なくて
うつろの如く生きん日思へば。

いかづちか嵐かなゐをほりする日
きのふの如く暮るゝが悲し。

大きさの限りとなれる朝顔に
双葉の殘る淡きかなしみ。

かくもなほ戀ひわたるとは我れにさへ
告げじと思ひよそ事をいふ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たまはりしもの只一つはぐゝみて
　大天地に生きんとぞ思ふ。
人住める國かとかなしいほえ波
　君が越え行く南の島(メキシコに行く友に)
今日にして始めて知りぬわれをさへ
　欺かぬ日のすくなかりしを。
思ふことやめよと君は云ひますか。
　などミイラにと告げはせずして。
地の底の三千丈の暗闇を
　堀るにも似たるわざと人いふ。

(青鞜發刊の日)

お高

岩野清子

正雄は晩酌の盃を手にしながら

『ねお高、お前にも永い事苦勞をかけたが、いよ〳〵金を出して呉れる人も見つかつたし、座も明けられる事になつたから、あしたから色々準備もしなければならない。』

酒の加減ばかりでもない晴れやかな顔色をお高は嬉しさうに見て、

『おやさう、それで私も一安心しました。』

德利をもつお高の手はいつもより浮々としてゐる。希望にかゞやく眼には盃の中のなみ〳〵とあふれさうな酒の樣な喜びの充ちた波がたゞよつてゐる。で、お高はまだ何か云ひたりない喜びを云ひ繼がうとするのを、正雄は『それに就てだ』と遮ぎつて置いて、『此處から毎日出掛けるのも不便だし、三崎町の家へ引揚やうと思ふのだが、豫々お前にも話してある通り、家には、出戾りの姉と娘がゐる。』から云つて正雄は盃をチャブ臺に置いて、一

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

寸お高の顔を見た。

『エヽ、それはもう前からお話しがあつたからよく承知してゐますわ、姉さんはお姑さんだと思つて萬事御相談して色々家風を敎へて頂きませうし。先妻の娘さんも丁度私も子がないし、自分の子と思つてお世話しますわ。』

お高はかう云つて、抱へ車夫まで置いてあることは云つても、旅館や生活は萬事に不自由なのを思ふと、よし小姑や繼子があるにしても、一家の主婦になつた方がどの位張合があつていゝか知れない。と心で思ふ。

『然し、娘はとにかく、姉は隨分氣むづかしやだからね。それに己れの留守中殆ど一年半二年近くも家を切り盛して居た位だから、それだけ確かりして居る。又それだから、威張りも強い。で、お前も隨分面倒な辛い事もあるかも知れない。』

此時正雄は、憐む樣な眼でお高をぢつと見るのであつた。

お高はもう明日からは〇〇座主のおかみさんで、多くの出方や役者から大事にされる身になるのだ、と云ふ事を思つて獨りでうれしくつて〱たまらないのだから、家庭の小事、小姑や繼子の氣兼位なんか立派に辛棒してみせると意氣込んで居る。だから正雄のかう云ふのを、親切は嬉しいが、却てそんなに子供らしく思はれて居るのが齒痒い位に思はれるのだ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『その事なら、もう心配なさいますなよ。假令どんな辛い事があらうと、鬼ではなし蛇ではなし、こちらで下手に出てさへ居れば、姉さんだつて女ですもの、さう苛にしたものでもありますまいよ。』

『まあお聞き、』と正雄は引取つて置いて、下においた盃を取り上げて、咽喉をしめしてからと云ふ樣に一呼吸にぐつと飮む。

お高は直ぐまた酌をしようとすると、生憎酒がみんなになつて居た。

『もう一本つけさせませうか？』媚る樣に少し首を曲げてから云ふと、

『なにもういゝよ。安心したせいか、平日よりは醉つた位だ。飯にしよう。』と伏せてある茶碗を起す。

『前祝ですもの、今夜は如何樣にあがつたつてようございますわ。』

例になくこんな事を云つて、お高は無性にこ〳〵してゐる。お高はもう、ぢつとして此喜び迄とは打つて變つて光りに充ちてゐる樣な氣がするのだ。自分の周圍の總てが昨日をしまつて置けない。只身體がから浮上る樣で、思ひきり大きな聲で笑つて見たい。此旅館にゐる客を皆んな集めて御馳走をして、驚かして遣りたい。出來るなら一日一晩續けさまに御馳走ぜめにして、〇〇座と云ふ大芝居の座主のおかみさんの氣前を見せて、後々までの話しの種に殘してみたい、と思つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

然し正雄は、矢幌り茶碗をつき出してゐるので、お高は遂にそれへ飯をもつてやりながら、自分の浮々してゐるにの引きかえて、機嫌よくはしてゐるが、平常と大して變つた樣子もない正雄の落付いた顏をみると、私はこんなにそはそはした心持ちなのに、所天はどう思つて居るのだらう。座を開ける樣になるまでは隨分やきやきしてゐた癖に、それが都合よく思ふ通りにならうと云ふ今日になつて、大して喜しさうでもない。若やあんなうそを云つて私を空喜びさせようとする のかしら、とも思つ て見た。いやいやそんな事はない、矢つ張り事實なのだ。さうしてみると、男は心の大きいものだから胸の底では嬉しくつても、女のやうに顏色にまで出さないのだらう。自分の所天はそんなに輕々しく喜怒を表はす樣なそんな安つぽい男ではないのだ。と思つて見ると今更ながら正雄の男らしい澁い眉や廣々とした額までが一層人格を上げた樣に見えるのだ。

正雄は二口三口默つて食べてゐたが、思ひだした樣に、

『それでだね、お前が辛棒する氣にしても、今急に一所にならない方がいいかも知れない。俺はかうしたら如何かと思ふんだ。暫くどこかに家を持つてゐて、もう少し氣樂な生活を續けてみたら、尤もおれは座が開くと忙しくなるから毎日來る譯にはいかないが、一週間に一度位はどうか都合して來るようにする筈なんだ。』

お高は正雄のかう云ふのを、給事の盆を膝にのせて兩手でそれをまさぐりながら聞いて

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ゐたが、深く氣にも止めなかつた。只々明日からの明るい華やかな生活が、今にも自分の後ろに迫つてゐて、自分を喜べ〳〵とそゝる樣だ。そして一日も早く否一時間も早く自分の死場所と定つた三崎町の家に行つて見たい。森田の家の主婦として切り廻して見たいと思ふ。それも明日だと思ふと見なれた電氣の光さへ今夜はいつもより明るい氣がする。

『なんのあなた、私だつて雇人の五人や十人立派に使ひこなして見せますわ。今こそ用がないからぼんやりした氣のきかない娘の樣に思つてゐらつしやるかもしれないけれど、これでも私の育つた家は、日本橋の通りで葉茶屋をしてゐたんですから、隨分小僧や番頭もゐましたわ。さう云ふ者や出入りの人達の使ひぶりは小さい時から見たり聞いたりしてゐたのですもの――』

お高は正雄の言葉を打消す樣にかう云つてつんと取すました樣な顔をした。

『強いて止める譯ぢやあないが只おれの老婆心さ。お前がさう云ふ決心なら明日此處を引拂ふ事にしよう。俺はすぐ座の方に行くからお前は、――知つてゐるね家の番地、――その方へ一足先に行くがいゝ。』

お高は其夜眠られなかつた。明日からは大きな芝居の座元のおかみさんだ。あちらへ行つたら自分のある限りの働きをしてみせて、所天にも働き所のある女房だと思はせる樣にしよう。出入りの者にも、森田のおかみさんは利口な人だと云はれるやうにしてみせやう。こ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

んな事をはてしなく思つてゐた。

二

正雄は二年ばかり前の春狂言に客の不入の爲、大損をし、それがため役者も三日目あたりから座に出なくなつた。それも座を開けるのに引幕まで質に入れた程の苦心をした後なのだから其手傷は中々多きかつた。債權者は毎日嚙付く樣に迫る。しまひには差押とまでならうとしたので、自分が居てはとても仕末がつかないと思つて、家族のものと相談した結果身を隱して行衞知れずになつた體にし密かに上野の山下の山下館と云ふ旅館に隱れてゐた。そして再擧をはかつて居たのだ。だから、旅館住ひには不似合な抱車夫を置いたりしてゐた。

お高は、朝、正雄を送りだしてから、手廻りの小道具などを取り纏めながら、そわ〳〵した落付かない氣分で鏡臺の引出しを明けて見たりしめて見たり、物を同じ處へ容れたり出したりしてゐたが、急に正雄を送つて行つた車夫がもう歸つた時分だと思つて、丁度廊下を雑巾がけしてゐる宿の下女を見て、

『姉さん、重藏が歸つてゐるなら、お世話樣ですがちよつと呼んで下さいな。』と、かう云つた。

『若い衆さんなら、今帳場で家のおかみさんと話してゐました。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

さう云ひながら又三尺ばかり拭いてから、階子段の上から、

『若い衆さん、おかみさんが呼んでいらつしやいますよ。』と、疳走つた聲で叫んだ。

重藏がお高の座敷の廊下に黑鴨仕立の體裁のまゝで立つと、お高は昨夜眠られなかつた神經の高ぶつた青白い顏で、

『これからすぐ私は三崎町の家へ行くからね、仕度をしてお呉れ。それから荷物はお前に賴んで置くからね、後から運送屋に賴んで送らしてお呉れ。』

さう云ひながら、お高は今一度鏡臺に顏を寫して血色の惡いのを氣にして手で二三度顏を擦つてから、思ひきつて立上つた。

『姐さん、長々御厄介になりましたね。あちらの方へいらしつたら是非寄つて下さいよ。芝居位いつでも見せてあげますわ。』

こんな愛嬌を云つて、重藏の先に立つて階子段を下りた。

ともすれば居眠りの出さうなのを強いて目をみはつて車に搖られて行つた。

車の上でも、お高は樂しい華やかな夢を畫がいてゐた。水道橋を渡ると、もういよ〳〵そこだと思ふと、重藏の足が早すぎる樣に思はれた。今迄はまだるつこしい樣に思つてゐたのに。

お高は急に背中が重くなつた樣に感じた。雇人小者多勢の有象無象を甘く統御して行く

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

身の心忙しさを思つたからだ。然し腕の振ひ甲斐もあると思つてみると、自分が急に豪くなつた樣に感じて嬉しくもあつた。

留守中の下女など、どんなおかみさんかしら、早く見たいなどゝ思つてゐるだらう、など他愛もない事を考へたりした。

じやり〳〵と玄關敷石をすべる轍の音にきつと我に返つたお高は衣紋を直して取濟した態度になつた。

二年ぶりで歸る主人の爲めに玄關の正面の衝立を見せて障子は一ぱいに開いてある。敷臺の板の間も鏡の樣に奇麗になつてゐた。

『御免下さい。』と重藏におとなはして、自分は車から下りると、十八九の婢が怪訝相な顔をして、

『誰方で被入いますか。』と一寸腰を屆めて云つた。

『私は高ですがね。』お高は少しつんとした顔で云つた。

『お高さん――』と婢はまだ考へてゐる。

お高はもしや家が違つてゐるのではないかと思つた。そして後に立つてゐる重藏を振向いて。

『こゝが森田の家に違いないかね。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と、婢が引取つて、

『手前は森田ですが、あなたはどんな御用で。』

そんなら正雄からとうに話しのあつた筈だ、此女はまだそれを知らないのだとお高は今度は悉皆落付いて、

『そんなら姉さんは御承知の筈、お前さん姉さんに高が來たと取次いてお呉れ。』と主婦らしい口調で云ふと、婢は急に横柄になつたお高をむつとした顔で見て返事もせずに奥に引込んだ。

間もなく前の婢が出て來て、卑すんだ様な笑を眼元に見せて、

『こちらへ』と導いた。

それでもお高は、いそ〳〵と導かれた座敷に通ると、そこは八疊の間で庭に向いた明るい座敷だ。

『お前はお高かえ、度々噂さは旦那から聞いて居たが、色々世話になつたさうだね。』

これが噂にきいた出戻りの姉さんか、随分權高い人だと、お高は辭儀をした首を上げると、花菖蒲をいけてある床の間を背にして二人の女が座蒲團の上にゆつたりと座つてゐる。

『オヤ』とお高は思はず心で云つた。お高は其時自分の胸をどしんと何かで打たれた様に感じた。眼がぐら〳〵した。昨夜眠られなかつた神經の疲れと目前の驚きに氣が轉動し

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

た。

左の方に座つてゐるのは、どこやら面ざしの似た處のあるので、それが正雄の姉だ、とは分つたが、右の方に座つてゐる三十格好の丸髷結つた女は何だらう。お高はそれを見透さうとする樣にぢつと見つめてゐると、左の方の女が『お前はまだ知らないかもしれないがこの人は。』と一寸右の方の女を見て、『正雄の家内だからね。』

ぎろりと右の方の女の眼が光つた。

つい先刻まで心に畫いてゐたお高の華やかな夢は其冷やりとした眼の光でさめた。お高は大きな石が自分の頭の上にずしんと落ちた樣な氣がした。一言の挨拶も出來ない中に熱湯の樣な涙がお高の頰に止度なく流れた。膝の上の手にも落ちた。

『欺された。欺された。口惜しい。』

とお高はから幾度も叫んださうして正體もなく前に俯伏した。體だ中の血が涙になつて絞れるかと思はれる樣にいつまでも〱涙が止まらなかつた。

それを冷やかに見下しながら、左の方の姉は、

『正雄はお前に、どんな事をいつてゐたか知らないが、家内も今迄二年と云ふもの隨分苦勞して來たのだからお前も其答りでね。』

お高はもう、そんな事を聞いては居ぬ、只泣きに泣いた。思へば正雄が憎い。今迄よく

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

も〳〵私を欺した。今に歸つて來たらどうしてやらう。お高は齒が粉々にくだけるかと思ふ程食ひしめた。手はぶる〳〵と痙攣する。繰返し〳〵正雄が憎い〳〵と思ひ詰めた。『〇〇座の座主て、今は失敗して山下館にゐるのだが、なに一旗上げさへすれば。』と云つたのを仲人口と知らずに片付いてきたのだのに、と其仲人までが自分を欺いた惡魔だとお高は傍にゐない仲人に噛みついてやりたい程口惜しい。

道理こそ、取次に出た婢の樣子が變だと思つた。さう云へば昨夜正雄のいつた事もひし〳〵胸に當る。

早く正雄に逢ひたい。今迄ぬけ〳〵と私を欺むいてゐた面の皮をひんむいてやる。

自分の部屋とあてがはれた狹苦しいじめ〳〵した薄ぎたない四疊半に引取つてからも、お高は一晩中、口惜泣きに泣いた。

瞼が眞赤に張れ上るまでお高の泣はやまなかつた。熱病の樣に身内がほてつて枕元のランプの火がぐる〳〵と廻つて見えた。

『私は仲人があつて立派に片付いて來たんだ。』疳走つた聲であたりに聞えよがしにお高は幾度も叫んだ。然し此廣い家の中で誰一人の自分の味方になつて呉れる人はないのだと思ふとヂー〳〵と油をすふランプの音と共に一歩一歩薄暗い穴の中に引込れる樣な氣がする。お高は思はず邊りを見廻した。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

正雄が歸つたらどうしてくれやう。」と廊下を通る人の足音に耳を澄した。鼠のあれる音にも起上つて障子を細目にあけて玄關の方をすかして見た。

――完――

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

花芙蓉

らいてう

病床にて

鳴神や、仁王の臍の紙礫。
今朝の秋蟲歯の數をかぞへけり。
蚊帳越しの曉寒し白芙蓉。
芙蓉さくや白鳩の眼の紅に。
火食せぬ人のむすびて秋の水。
太腹の和尙めでたき踊哉。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

二日間

田原祐

江戸川から電車に乘つた美知子は入口の隅に腰かけたが、それでも眩しい様な氣がした。そして美知子には早く姉さんに逢ひ度いと云ふ心よりは、タッタ今迄寄宿舍に居て、外の二十人三十人の人達と餘り異はない様に動いて居たものが、此の三十分計りの間に、自分一人皆から引き離されて、果てしもない暗闇に導かれつゝある様な現在を、今更不思議なものゝ様に打ち眺むる心計りが働いて居る。

春日町で乘りかへて、白山で降りた時には、も早や爭はれない秋の風が身にしみる様で、天の川は銀砂子をふりまいた様に冷たく見えた

重い足を引きずる様にして坂を上り詰め、せゝこましい途を幾つか曲つて、始めて尋ねる番地が見當つたのだ、改まつた心持にて、まだ上戸をおろさない格子をソット明けると照り返しがギラリと光つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「御免下さい」

低い、それでも底方のある聲で斯う云ふと、内からは待つてた樣に直にハイと云つて、立てつけの障子に大きな男の影が映つた。やがて出て來て、

「美知さん」

と男は云つた、美知子はギョッとしたが、其の瞬間それが速見である事を知つた。

「姉さんが待つてお出ですよ」

男は重ねて斯ういつた。

「はい、存じて居ります、私逢ひに參つたので御座います」

美知子は始めて男の顏を正面に視た。度の強い近眼鏡が光つて居る。

「とにかくおあがりなさい」

と云つた男の詞には返辭もせず、その跡に從いて階子をのぼると、上り立ての部屋の入口に姉の民子が立つて居た。

「姉さん」

「美知さん」

どつちからも同じ樣な事を云つて座に就いたが、其の先きは何と云つてよいものかと、互に先きの口振りを待つてる樣に、三人共おしだまつてしまつた。美知子は部屋中見廻し

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て、姉の持物らしいものが、中位の信玄袋と洋傘一つしか見えないのと、此處が速見の宿であると云ふ事とて、姉の今度の出京が兩親承知の上ではないだらうと推した。

「お民さん僕は一寸出て來ます」

手持不沙汰氣にモヂ〳〵して居た速見は斯う云つて座を外した。二人共もう散歩の時間でもあるまいと思つたが、別段止めもしなかつた。その足音のまだ消えない中に、

「美知さん、矢張り私は駄目よ」

と姉の方から口を切つた。

「駄目つて姉さん、新潟の方がなの」

美知子はかねて姉が新潟のある實業家から貰はれて居るのに、またいつもの樣にグヅ〳〵云つて兩親を困らせて居る事を薄々知つて居たので、直に新潟といふ代名詞を使つた。

「エヽ、それもさうだけれど、私の駄目だつてのは、私が父さん達の子として、直江津の家に居なければならない、其の事がなの」

民子は斯うい乍ら思ひ出した樣に押しやつてあつた茶盆を引き寄せて、茶を入れかけた。見れば其の後には、燕菓子が三つ四つ殘つたまゝの竹の皮やら、お箸やらが散らばつて居た、美知子はそれを見ると、自分が來る迄、速見と二人で食べて居たのかと思つてい

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

やな氣がした。
「姉さん、私ならお茶なんぞ入りませんよ。御馳走になりに來たんぢやないんですもの」
いつもの癖とは知ながら、つい今のいやな感じを口に出してしまつた。
「エヽ、だけどお茶だけは」
と民子は云ひわけらしく云つて、火鉢越しに美知子に手渡しゝた。
「そしたらもう姉さんは直江津に歸らない氣で出て來たんですか」
美知子は先づこれを確めなければならないといふ語氣で尋ねた。
「勿論。だから美知さんにも逢ふまいと思つたんだけれど……ヒョットしたら一生もう逢はれないかも知れないと思つたから」
ほつれかゝる鬢(びん)の毛を煩(うる)さ相に掻きあぐる姉の手が、かすかに慄えて居るのを美知子は見た、其の銀杏返も昨日今日結つたものではないらしい。
「何ですか私には姉さんの心持がよく解らないんだけれど、そんなら姉さんは、新潟にも行かず、直江津にも居ないで、何處かで獨り暮しをしやうとおつしやるんですか、だけど姉さん何處に居たつて知れないつて事はありませんよ、それに假りにもこゝになんぞ來るんですもの」
美知子は始めから「何故速見の處に來たんだらう」といふ事が、解つた樣で解らなかつた

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

から、さすがに正面には聞きえもしない事を斯う遠まはしに言ひ出した。

「だつて此處だけが日本ぢやあるまいし、樺太だつて臺灣だつてあるわ、それにもうお母さんだつていゝ加減手古摺つたんだもの、生きてる事さへ解つたら、呼び戻しになんぞ來る根氣はないにきまつてるわ」

　美知子は此の位の自暴半分の事は、何時も聞かされて居た、が、それが手紙である時は姉が何かを求むる心と、それを抑へ樣々々々とする家の人の心とが、水と油の樣にして一緒になつてる事に無性に同情されて、親に對して恨みがましい文句を並べた返事を出した事もあつたが、今、面と向つて斯ういふ捨てやりな事を云はれると　何故かしら、多少腹立たしい樣な氣がする、美知子は此の心の働きを妙だと思つた。

「いけない〳〵、そりや姉さん、親の心を知らないにも程があるわ、だつて手段としては多少押しつけがましい處があるかも知れないけれど、根は姉さんのためを思つての事だもの。其の親の深切だけを買はなきやいけないと思ふわ、それより姉さん、何處に行つて何をして暮らさうといふんですか」

　またもとと同じ事を尋ねた。

「何處だか私も知らない、だつてどうせ私は高松の家の子ぢやないんですもの、定まつた家のありつこはないわ」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

迫がに後の方は口の内でつぶやいたのだが、美知子はこれを聞くと同時に、もう今晩は駄目だと思つた。姉の狂人じみた行爲も原因はこゝにあるのである。たまに休暇なんぞで歸つた時、美智子と二人になると、今迄ハシヤイで居た人だとも思はれないほどシンミリとなつて話ずる事がある、其の果ては多く、「私なんぞ誰の子だか知れやしないんだもの」と云つて泣き出しては、手がつけられなくなる事があつた。その癖、つい前までは、孤兒救育がして見たいだの、私に一瞬間でも心から尼になりたいと云ふ氣が起りさへすれば、立派に頭を圓めてしまうんだけれど、と云ふ様な事を本氣で話した事を、今美知子は思ひ出した。

二人はまた沈默の内の人となつた。

美知子は逆上せた顏を風に當て樣と思つて中窓の障子を明けると、直前は廣い墓場になつて居て、二三本の木立の下には雜草が生ひ茂つて居る。窓の下には石がごろ〳〵ころがつて居て、干したまゝの浴衣が不氣味に見えた、美知子はこんな處が東京にもあるのかしらと、不思議に思つて見て居ると、下でがらりと戸を明ける音がした、そしてそれが速見らしかつたので、急に歸舍ねばならぬ事を思ひ出した。はねとばされる樣にその座に歸り火鉢の縁に肱枕ついて掌で顏を蔽うて居る姉の肩に手をかけて、

「それぢや姉さん十時迄に歸る樣につて先生に云ひつかつてるんですから、私これで歸る

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

わ、そして明日は日曜だから朝から來て、此の問題を何とか片をつけませうよ、いゝてせう、そして姉さんも、もうお寐みなさいよ」

美知子は袴の紐をしめなほし、自分の懐中時計を見て「まだ三十五分あるから大丈夫」と獨言いひながら立ち上つた、身體がフラ〳〵する様だつた。

何とも云はない姉を今一度振り返つて階子を降りると、下には速見が立つて居た。

「アヽお歸りですか、僕美知さんの好きなもの買つた來たんですよ、しかし學校の人だから無理には止めますまい。」

何時も自分が時間々々と云つて居たのを覺えて居た事かと少々おかしい様な氣もしたが、それでもとり濟して、

「どうもありがたう御座いますが、今晩は失禮いたします。本統にお邪魔いたしました。」

と叮嚀に頭を下げた。

「いやなんにも。それぢや僕電車道まで御送りしませう」

と速見は下駄を穿きかけて居る。

「ありがたう御座います、ですけれど私俥に致じますから、もう澤山て御座いますの、どうも恐れ入りました」

もう堪らぬ程歸りが急がれるので、ソコ〳〵に出様とすると、今度は宿の主婦らしい中

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

年間の人が出て來て。

「どうも御粗相樣でございました」

と手をついた、美知子は少しうろたへた。

「私こそ御挨拶も致しませんで……此の節はまた姉がいろ〳〵御世話樣になりまして」

と仕方なしにも一度頭を下げて、洋傘を持つと直「お靜かに」「それぢや明日は日曜ですから」などいふ聲を聞き捨てに逃げる樣にして家を出た。空は益々冴えて果てしもなく星が輝いて居る。直に通りがゝりの俥に價もきめずに乘つて、幌を降ろさせた。

美知子はホッと息をついた。同時に姉からの直接の電話で、不承々々に臨時外出を許して呉れた舍監の顏が頭に浮んだ、續いて同室の無邪氣な下級の人達の事などが、別れてもう二三日も逢はないものゝ樣に思はれる。するとまた「どうせ私なんぞ誰の子か解つたもんぢやない」と身煩えしてる姉の姿が目先きにチラつく。それが妙な事には、タッタ今逢つて來た速見の宿ではなくつて、直江津の家の樣である。華やかな着物を引つかけ散した中の八疊に四五人の藝者が寢そべつて何か唄つて居る、其の中には二人の從姉妹も居ていり豆か何か喰べてる、一番上の姉の子が二三人、皆の背中の上をアッチに渡り、コッチに渡りしてキャッ〳〵騷いで居る。其處に直上の姉一人納戸の簞笥にもたれて雜誌を讀んで居る、かと思ふと物狂はしくそれをなげ出して、ヂット疊を見詰めたまんま嘆息をついて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

居る、やがて此の姉の姿だけが、いろ〳〵の想像の中に殊に鮮やかになつて、次第に浮き出た樣になると、あととはグル〳〵廻つてる樣だ。すると今度は速見といふ事が、其の渦中に一滴の水の樣にしたゝつた、同時にすべてのものは忽ち消えてしまつた。

速見！々々、何かしらん今日は速見に侮辱された樣に思へてならない。

速見は二三年あと、伯母の家が戸塚で下宿屋をして居た頃宿つて居た某大學の生徒である。そして其處の伯父が保證人だつたので、美知子はチョイ〳〵顔を合はせて居た。處が去年の冬休みの事、國の民子から暫く出京すると云つて來たので、美知子は歸らずに、伯母の內で落ち合つた　民子と美知子とが別々の意味で速見を忘られぬ者と思ふ樣になつたのは其の時からである。

美知子は近所のミルクホールで待ち合はせた事を思ひ出した。そして姉もまた其の頃から速見の事を一言も口に出さなくなつた事を忘れはせぬ。勿論伯母もそれを氣づいて居て、美知子には民子の事を、民子には美知子の事をそれとなしに云つた、が休暇がすんで美知子が學校に歸つた時には、民子も越後の人となつて居た。それだから美知子は其の後速見に接する機會は多かつたけれども、其の時からして、伯母と姉とに對する譯の解らぬ意地で、速見とは一切交通を斷つてしまつた、そのためには自分で行つて判をもらつて來ねばならない場合にも郵便て濟した事さへあつた、が間もなく伯母の內でも下宿をやめて小石

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

川に引越した。それでも速見の消息のあらましは、時々來る姉の手紙で間接に知つて居た。速見が今本郷の素人屋の間借りをして居る事もそれで知つて居たのである。

民子が何處までも速見を二人の友人として取り扱つて居る事を説明しやうと努めて居る態度は明らかに見えた、それが明かに解れば解るほど美知子は不快で堪らない。速見に對してもいやな感が募つて、先きの日の自分の行爲が時々やるせない程後悔される様になつた。が、姉に對しては單に憎い、厭だと云ふだけでは居られない。兩親を捨て、故出を捨てた、其の姉が將來の方針もハッキリとは定めずに速見の宿に落ちついて居ると云ふ現在の事を思ふと、矢張り姉の身内には濁つた淫奔な血が漲つて居るのだと思はざるをえない。姉が何時も口にする『誰の子やら解つたものぢやない』といふ反抗的の詞は、姉にしては親をのゝしり、自分の境遇を呪つて居るのだらうけれ共、其の實矢張り、自分の行爲の責任を自分に置くまいとする勝手な云ひ草だと云ひたくなる。

「速見さんの處に來る位だもの、どうなるか解るもんか」斯う思ふと、泣いても呪つても訴へても、どうす事も出來ないある凝りを生れるときから抱いて居るのが姉の運命だと云ふに歸着する様に思はれる。そして其の姉の妹なる自分の現在の心持に思ひ至つた時、美知子は思はず襟をかき合せた。目を塞ぎ耳を蔽ふてあらゆる音と色と、光りとから遠ざかつて、此のまゝ闇を辿つた方がむしろ安樂な、そして自分達にふさはしい生活ではあるまい

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

か、それならば自分の現在は此の運命に逆行しつゝあるので、自滅の路を取つて居る事となると思ふた、美知子の頭は益々亂れて殆んど車上の人であると云ふ意識さへ失つた。
カタリ轅をおろした車夫は、汗を拭きながら幌をはねた、ハッと思ふ刹那美知子の目に映つた寄宿舍の黑板塀は、怖ろしい牢獄の鐵の扉の樣に見えた。

二

翌朝美知子は同室の人に搖り起された。
「美知子さんお母樣が今入らしつて待つていらしつてよ、そして先生に御目にかゝつてる間に外出のお支度をなさいつて」
「えッ母が？ 私を迎ひに？」
斯う問ひ返した美知子は先を越されたなと思つた。
「お玄關も御掃除最中でゴッチャだつたもんてお氣の毒だつたわ」
前掛の紐をいぢりながら云つた。
「本統に今日は寢すぎちやつて御免なさいよ」
美知子は大急ぎで袴を着けながら云つた。
「いゝえ、それは構はないのよ、餘りよくおよつてらしたから、日曜ではあるしお起しゝなかつたの、だから早く髮でも御結ひなさいよ」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と云ひつゝ、白い前掛の人は出て行つた。

美知子が母と一緒に寄宿舍を出たのはそれから三十分の後だつた。途中も餘り口は利かなかつた。母は唯姉が家出をした事と、直に其の夜の汽車で東京に來たのだと云ふ事だけを話した。美知子は母の云ふ事を黙た振りもせずに聞いて居た。

行く先きは勿論大塚の伯母の家だつた。

「おみつちやんが來たよう母さん」

六つになる從妹が、何が嬉しいのかとびはねて居る。

「姉さんよく早く歸られてね、さあおみつちやんもおあがりよ」

伯母は前掛で手を拭きながら、入口の三和土に立つてる美知子の小さな包を受取つた。

何時もの居間に通ると朝飯最中で食卓が一杯になつて居たので、ヤットと火鉢のわきに坐つた。人はいゝが、愛想のない伯父は默つて食事を續けて居る。四人の從姉妹も、まだ髮も亂れたまんま、着物も着かへずに居る。

「おみつちやんはまだ御飯前でせう、何もないけれどお召がんなさいな」

一番上のお濱が立つて行つてお茶碗とお箸を待つて來た。

「私もう澤山、欲しくないから」

美知子は斯う云つて、食卓をはなれた伯父のあとに從いて座敷の六疊に行つた、伯父は

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

楊子をつかひながら始めて何でもない事を一言二言云つてまた默つてしまつた。

美知子は今日の國民を取り上げて讀み始めた。その内に母も伯母も御飯が濟んだと見えて煙草入を持つて這入つて來た。お濱は三人の妹に何か云ひながら跡片づけを始めたらしく流しもとに洗物の音がしだした。

一座がしらけ渡つて銘々に誰が何を云ひ出すかと待つて居た、暫くして母が、

「お前姉さんの居所を知つて居るんだらうね」

と云つた。

美知子は母達が知つて居る者ときめて居るからこそ斯う早く迎へにも來たものだらうと思つて居たが、全く豫期して居た通りに出られた事は、おかしい樣にも思つた。それで今更らしく隱し立てしてもどうもならないと思つて、

「えゝ知つてます」

と云つた。

「それぢや逢つたかい」

母は突込む樣に云つた、が追がに逢つたとは云へない、かと云つて皆の見當つけて居る所もわかりきつた所だから、東京でないとも云へず、

「今日逢はうと思つて居た處でした」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と努めてハッキリ答へた。
「それぢやみつちやん、逢つてどう計らうと思つてるの」
これは伯母であつた。
「逢つて話して見た上でないぢや解らないぢやありませんか伯母さん」
美知子は母親の思はくの方が先きに聞き度いので、姉の事に就いては一切こちらから口は開くまいと覺悟した。
「それよりお母さんはどうしやうと思つてらつしやるんですか」
少しうろたへ氣味で反問的に斯う尋ねた。
「勿論伴れて歸るのさ」
今迄新聞に目をおとして居た伯母が、一寸顔を擧げて斯う云つた。
「だつてそんな事したつて駄目ですよ、伴れて歸つた處でまさか絆いでも置かれないぢやありませんか、また絆ぐ樣な事するのは餘り殘酷ですね」
餘り皆がそらぐ\しく見たので、遂に斯う云つてしまひはしたものゝ、多少云ひすぎたと思つた。
「お前またさうお云ひだけれど、折角えゝ樣に取り計らつてやるのに、跡足で砂の樣な事をされるんだもの、親の心子知らずと云ふが本統さ、それぢや絆ぐ樣にもしやうぢやない

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

か、第一外聞が悪くて居られる事ぢやない」
母はどいつもこいつも、と云ひたいのを我慢してこれだけ云つた、美知子には、其の母のいと、ゑとを間違へる訛りの多い、詞がいやに耳に立つた。
「だけど世間の見えに育てゝる事ぢやないでせうだから、姉さんの幸福になる様に計らつたがいゝんだと思ひますわ」
美知子は理屈云つたつて駄目な事は知つて居る。それから幸福と云ふ意味だつて、自分の云つてる通りには解されない事も知つて居るが、何故か斯う云はねば氣が濟まぬ様に思はれた。
「誰が姉さんの不爲のなる様にしてるもんか、お前は姉さんの事となると内の者を目の敵にしる」
美知子は兩親始め姉妹に迄、自分が姉を煽動してでも居る様に思はれて居る事を知つて居る。時には連累者の様な取扱ひを受けた事もあつた、現に近來は美知子からの手紙は姉の手に渡る前に父母の眼を通つて取捨されて居る事も知つて居る。けれ共美知子自身は自分の判断が決して偏見に陥つて居るものではない事を信じて疑はない、從つてさう云ふ内の人達に對しては、思ふまゝに任せて、殊更に辯解をしやうとは思ひもしなければ現在しても居ない、それで今自分がオビキ出してもした様に云はれた時、昨夜の自分の態度を説

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

明したい樣な氣もしたが、それも甲斐ない事と思つて口を緘じた。
「お母さんも大抵な心配ぢやないから出來る事なら穩當に歸つてもらひ度いんだかね」
すべての成行を默つて見てると云つた態度に構へて居た伯父は、話の第二の緒に斯ういつた。
「こちらのお濱さんなんぞは本統に大人しくて、女らしくて親孝行者だよ、何時來て見ても從姉妹同志で斯うも違うものかと思はない事はないんだよ」
母はしみ〴〵と斯う云つが、煙官の火皿を火箸でほじくり始めた、美知子は、一週間に一度神田まで電車で髮結にゆかれるといふ事にすべての滿足を買ひえてるお濱さんを、またないもの丶樣に羨やましがる母が氣の毒にも思へた、それで、「皆がさう〴〵お濱さんの樣な型に出來上つてたまるものか」といふ氣もした。
「姉さんそんな事があるもんですか、みつちやんなんぞ人に出來ない學問が身について居るんだから」
伯母は打消す樣にかう云つたまた例の「お豪らう御座いますから」が出たなとは思ひながらも、端書一本滿足にはかけない自分を學校に行つてる時間の上から打算して豪いものと計り思ひ込んで居る伯母の正直さに對して、美知子は、知らず知らずに欺いてる樣な氣がした。

とにかく民ちやんの處を聞いといたらいゝでせう」
伯父は結末を急ぐらしい口調で云つた。
「さうですね、こちらには國の父さんの考へもあるんですから。そしたら矢張り何だらうね、速見さんと一緒で……」
母は云ひにく相にして斯う尋ねた。美知子は皆が皆、かうと計りきめこんで居るのを憎らしく思つた、それよりも斯る事を知りぬいて居て、それで速見の處になんて身を潜めて居る姉が歯痒くてならなかつた。
美知子は此の際寧ろ内の人の所謂煽動者であつて、一圖に姉を庇い度い氣になるかそれとも皆の云ふ處を尤として姉を伴れ返す事に盡力する氣でも起つたなら却つて苦痛は少いだらうと思つた。が勿論さうしたい意志はないので一時のがれに、
「そんな事知るもんですか、まだ逢つて見ないんぢやありませんか」
と已むを得ず前に云つた事と辻褄を合はせた。
「それならそれでいゝよ、その代り姉さんが居る處だけをきいときませう」
美知子は「その代り」といふのがいやだつた。
「云はなくつても、どなたか入らつしやる時に私が御一緒に行く事としませう」
強ち姉のために斯う云つたのではないが、何だか一人でも多くの人に告げる事は、自分

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

自身の輕はづみを示す様に思へたので云つたまでゝある。そしたら自分の同行を拒むだらうと思つた母が案外にも「それならそれでもいゝ」と云つたので一寸あてが外れた様な氣がした。

「それぢやチットでも早い方がいゝだらうから、今からでも出かけたらどうですか」

いつもセッカチなのは伯父である。

「あゝ、それぢやさうしませう。美知、伯父さんもあゝ被仰るんだから、お前が云つた通り一緒に行きませう」

母ははや煙草入れを帶の間に入れて立ち上りかけた。美知子は今更行かぬとも云はれない。トッサの間に「どうなりとなれ」と投げ出した様な氣になつて立ち上つた。

「何れにしてもそれがいゝでせう、そしたら姉さん成るべく氣を永く持つてね」

伯母は氣づかはしさうに斯う云ひつゝ後からついて來た。

降り樣とした時、下駄が二足チャントと向ふむきに並べてあつた、お濱も赤い糸のつながつた針を袷にさしながら出て來て、

「それぢやおばさんお早く、みッちやんも今晩は内に來ていゝんでせう」

と追ひすがる樣にして云つた。

二人は通りに出た。此の時迄美知子は、姉の宿に行かうと云ふ事にも、姉を伴れ出して

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

何處かで逢ふ様にしやうかと云ふ事にも、ハッキリきめては居なかつた、只母に伴れられる様にして、電車のある方へ歩いて行つた。

——完——

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

沈黙

ポー

山々の頂は交睫めり、谷も、洞も、巖も靜なり。——アルクマン——

惡魔我が頭上に手を置きて、

聞けよ、我が云ふリビアの土地を、Zaire 河に近きリビアの胡地を。其處には靜寂もなし、沈默もなし。

河の流れは鬱金色に病み、滔々と海に注がで、太陽の赤き光の下に、喧しく、戰きつつ永年に渦卷く。

河の兩岸、沼地數里に亘りて、見上ぐる許り生ひ延びし、物凄き睡蓮の荒野あり。此靜寂の中、睡蓮は互みに太息吐きつつ蒼白き頸長く伸ばして、フワ／＼と、無限の空に搖ぐなり。

地底に騷ぐ水音か、何處よりともなく、朧なる囁き、睡蓮の間に漂ひ來ぬ。睡蓮は尙も互みに太息を洩す。

暗く、怖しき雲を摩する密林は、睡蓮の荒野に續きて境せり。ヘブライデスの島々の岸打つ波のそれの如、低き密林の叢は、小止みなく動けど、空に一陣の風あらず。而も神代ながらの大樹の梢は、高鳴りして裂くが如し。滴々と太初の露零れ落つ。根下には怪しき毒草數も知られず、亂れし糸に夢を結ぶ。仰げば灰色の雲、永久に喧しき音立てゝ、西へ西へと流れ行き、遂に、地平線なる火の障壁に大なる瀧津瀨を懸くるなり。されど空に一陣の風あらず、而も Zaire の河邊靜寂もなし、沈默もなし。

時は夜なりき、雨降る夜なりき。雨と注げど、降り來しは血潮なりき。我は丈高き睡蓮の間、沼地に彳みぬ。雨は我が頭上に注げり。靜寂の氣迫る中、睡蓮は尙、互みに太息ぞ交はせる。

忽ちにして血色の月、蒼白き薄霧の中に上り來ぬ。我が眸は、河の岸邊、月に照されたる灰色の巨巖の上にあり。巖は灰色にして、物凄く、丈また高し。其面には刻まれし文字あり。或は睡蓮の沼を分け、文字を讀み得る邉りにと近附きぬ。されど尙文字は讀み得ざりき。再び我沼地に歸らんとする其刹那、月光輝きを増しぬ。あはれ我、今顧みて巖と文字をと凝視するなり。……文字は「荒凉」とこそ月影に讀まれたれ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

眼を擧げて空を見しに、巖の頂に人ひとり彳めり。其人の爲さん様を見んものと我は睡蓮の蔭に身をひそめつ。彼丈高く姿勝れたり。身に古羅馬の長衣を纒ふ。顔の輪廓定かに認め難きも、そは慥に神の姿のそれなり。夜の黒き幕、霧、月、露皆其被服もて彼が面をば包まざるなり。其額想ひに高く、其眸憂愁に荒れ果てゝ、双頰の上刻まれし數條の皺に悲哀、疲勞、人類を憎む呪ひ、孤獨を願ふ心の色、それ〳〵明らかに讀まれぬ。

彼、巖上に座し、手もて頭を支え、荒涼の野を回顧し、騒がしき密林の叢を瞰下し居たりしが、忽ち高き太古の森を仰ぎ、更に又高き無邊の空を打眺め、遂に血色の月を熟々と見入りぬ。我は睡蓮の蔭に隱れて、一向、彼が爲さん様のみぞ打守り居たる。

彼は荒涼孤獨の裡に震ひ慄けり。されど、夜は次第に更け行きぬ。人尙、巖上に座せり。

彼、眼を空より放ち、荒涼たる Zaire の河上、黄に濁りし水の上、睡蓮花咲く荒野の上、其間より起る囁きの上に思ひを廻らせり。

我は隱れて、只、彼の爲さん様をぞ打守る。彼は寂寥の裡に震ひ慄けり。されど、夜は更けぬ。人、巖上に座せり。

斯くて我は沼地の凹所に下り立ち、目も遙なる睡蓮の曠野を徒渉り、河馬を呼びぬ、河馬は其處に住めり。我が呼ぶを聞きて、べへモスてふ巨獸つれて、巖が根近く來る。月の下、巨獸の嘶き、怖ろしく、無邊際の天地に轟き渡りぬ。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

我は睡蓮の蔭に身を寄せて、彼の爲さん樣をぞ打守る。

彼は寂寥に震ひ慓けり。されど、夜は次第に更けぬ。人巖上に座せり。

こゝに我れ、騷擾の呪咀もて、天地六合を呪ひしに、穩かなりし大千世界、忽ち恐る可き颶風の巷と變じぬ。やがて見る、一天掻き曇り、篠突く大雨烈しく彼が頭上に降り注ぐ。河水氾濫し、泡沫湧き返り、睡蓮、沼に呻吟く。密林は風前に折れ碎け、電光閃いて、雷鳴頻りなり。巨巖さへ今は根より搖ぎぬ。

我は尚も睡蓮の蔭に横はり、彼が爲さん樣をぞ打守る。

彼は寂寥に震ひ慓けり。されど尚、夜は次第に更け行きぬ。人、巖上に座せり。

憤怒の我れ、此時、沈默の呪咀もて、河、睡蓮、風、森、天空、雷鳴、睡蓮の太息とを呪ひぬ。忽ち之等總てのもの、深き沈默に入りぬ。月は天空に沖する步みを止め、雷鳴靜まり、電光閃きを收め、雲不動の姿となり、氾濫の河水又舊に復す。密林も搖ぎを休め、睡蓮も太息を殺し、彼の怪しき囁きも、最早其陰に響かずなりぬ。否、目も遙かなる曠野の裡、果はものゝ音の響くを聞かずなりぬ。

此時、我れ、再び巖上の文字を見上げしに、不思議なり、文字は既に變りて「沈默」とあ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

り。我又視線を彼人の上に投げぬ。其面貌恐怖に満てり。
やがて彼、慌しく頭を擡げ、巌上にきつと立上つて虚空に耳傾けぬ。されど無涯の曠野は物の音絶へてなし。唯巌上の文字「沈黙」とのみ。
身を震はせつゝ、面を背けたる彼は、遠く遠く逃れ行きて、遂に再び見えず。

預言者(アラビヤ)の書、固く閉ぢられたる預言者の書には、多くの怪しき物語潜めり。天と、地と、海との栄ある物語、或は海と、天と地とを支配せるゼニーの物語など含めり。又巫女の語りしものにも多くの教へを含む。又昔ドドの地、神秘に戦く木の葉に依りて聖なるこの数々は語られしとぞ。

あはれ、今悪魔が墓石の影、我が傍に座して語りし此比喩は、最怪異なるものゝ一なり。悪魔は是を語り終りし時笑ひつゝ墓穴に入りぬ。されど我れ、悪魔と共に笑ふを得ざりき。我れ笑はざりしが為、彼憤りて、我を咒ひぬ。永久(とこしへ)に墓に住むてふ山猫は、其時墓より出でゝ悪魔の足下に横はり其面貌をしけじけと凝視せり。

――――(完)――――

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

秋海棠

白雨

筆持てば物書かんとや秋海棠
指に巻きて捨る脫毛も秋の雨
がてんして茶に燒く舌も新酒醉
秋扇で一茶が膝の拍子など
汐干狩アラ藻の上を這ふたこや

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

若竹や産子を知らぬ旅の父

秋晴や鳩の脚に似し蕎麥の莖

秋風や小男腕を撫てゝ見る

破芭蕉寺の横壁古代文字

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ヘッダ、ガブラア合評

H と Y

漠然と唯、合評々々と振れ廻つた處で雲を掴むやうな話ですから假に斷う不完全ながら題を設けて見ました。

（丁記）

處女時代のヘッタ

ヘッダには如何考へても阿母さんが無かつたやうに思はれます。若し有つたとするなら阿母さん等は余り眼中に置かない類だつたてせう、ガブラア將軍が唯一人の愛嬢、花に喩へたら一輪咲きの牡丹！

將軍の家には隨分若い男達も出入したらしいやうですね、ヘッダは其等の男の視線を集めて、舞踏會の、夜會のと派手な華々しい甘い空氣に圍繞せられて得意な惑げなり見て居たことでせう　まあ二十五位迄も無反省な時代で女王のやうに暴君のやうに人に對して振舞つて居られたのかも知れませんね、彼樣なら

余りに色彩の豐富な、外界の刺戟の多い、退屈のないヘッダの處女時代の境遇を私はむしろヘッダの爲に悲しみます、何故ならヘッダは眞面目に物を考へると云ふ大切な習慣を養ふことが出來ませんでしたから。

此境遇と美貌と怜悧と機智などが一緒になつて彼女を遂々人間にさせずに了つたのぢやないかとまで思はれることさへあります。

將軍の家に出入した男子の中でともかくレエボルグは一番ヘッダの心を惹いたものでせう、凡俗な社會に反抗し自己を獨立させた自由の勇者のやうにも、又偉大な天分のある人のやうにもヘッダは思つて居たらしいが、實際はもう唯、デカダン氣質一方て、それには多少才能の秀でた點も有つたにせよ、全然精神の統一を失つた、徹頭徹尾不眞面目な、浮薄な、柔弱な、男子の意氣地がないどころか一個の人格として到底も相手にされぬやうな男としか思はれない、其癖世間的の名聲心や、虛榮心には可い加減ヤキモキする、何だか卑しい、嫌な、氣持のならぬキザな男子のやうぢやありませんか

彼薄ぺラな性格ては定めし、すぐヘッダに戀を語つたことでせう、不眞面目な愛な　併し二人が相互に戀に溺れたとはどうしても思はれません、

併しヘッダはレエボルグが自分を愛して居ると云ふ自覺に伴ふ快感は確かに有つて居たに違ひ有りません。縱ひ彼自身を愛して居なかつたにせよ、ヘッダのやうな、戀

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に對し、男に對し、好奇心と遊戯衝動の多い、そして或意味で空想的な女に取つては戀の相手にはレエボルグのやうな人が面白かつたのでせう、ヘッダの興味の的となるには或は格好な男かも知れません。レエボルグの前で戀人らしい振舞をする事はヘッダの自尊心が許さなかつたのでせう、併し彼に對して萬更氣が無くも無かつた（結婚を意味するのぢや有りません）ことは處々でそれと察しられぬこともありません。此種の女は縱ひ心の奥底には熱烈な愛が有つても夫が其儘形には顯れて來ないのでせう。自分自身も意識して居なかつたのかも知れない。彼女は彼が自分に愛を求めるのを厭と思つたり、煩く思つたりするやうな女ではなく、内實非常に小供らしいと云つたやうな初心な嬉しさが湧き立つと同時に又侮辱されたやうな氣もし、一も二もなく愛を否定する事に只々云ふに云はれぬ快感を見出したのでせう。斯う云ふと長たらしいが此心理は彼女の中で餘りに迅速に働いたので、恐らく自身には其瞬間何等の意識的理由も無かつたらしう御座いますが。

愛に就て考へて見たり、愛に就て不安を抱いたりする程處女時代のヘッダは反省的な人間でもなく、又其程神經の尖つた女でもなかつたやうですね。

愛の否定の快感はヘッダも容易に捨られなかつたでせう、是がレエボルグとの關係を可成の間持續させ、又彼女が彼に對して全然冷淡でなかつたと云ふ證據を意味して居るのではないでせうか。

さうさう、二人が後に此當時を追想してこんな事を話し合つて居ましたつけ。

ヘッダ「貴方ねエ、私熟々あの時分の事を考へて見ると云ふに云はれない面白い——思ひ出してもぞつとする程な快樂が有りましたつけねえ、——ほら、他人にや到底も考へも付かない二人の間の秘密に付いちやねえ。」

レエボルグ「何も彼も曝露てお話しましたつけねえ其時分には世間で些とも知らなかつた僕の秘密をなあ——ちつとも隱さず僕の不行狀を——毎日毎晩、放蕩をした顛末をね、あゝ貴女は何てまあ、恐ろしい魔力を持つて居たんです——僕に全然白狀させて了ふなんて——」

そしてレエボルグが彼樣な具合に交際した二人の間には愛情なんてものは全く無かつたのかと訊ねると、ヘッダはなかつたと斷言して居ますね、ぢや如何して彼樣な秘密を聞きたかつたのですと訊ねると、

「貴方、分らないの？　まあ彼年の若い娘がねえ——若し——秘密に聞く事が出來るなら——世間の——到底も書物や、何かで解らない事を、人にも聞けないし、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

又聞いては悪い事を……」

其を聞きたい、索りたいと云ふ好奇心、夫が一の理由だと云ふやうな事を幾何(いくら)か言葉を濁して云つて居ますれ。此様な事も確かに二人を接近させた原因の一つでもありませう、けれど私は何だか全り詮索に過ぎるか知れませんけれど、レエボルグに其秘密を話させた他の主な理由て、彼女自身口に出しては云へなかつた事は、崇高な事、神々しい事、華々しい事の好きなヘッダから見ては實に醜いとも、恥づ可き事の極とも思つて卑しめもし、心から憎みもして居る墮落、其墮落の顛末を得意らしく男自身の唇に上せさせて、無意識に其自尊心を自ら傷けさせ、自分で自分を侮蔑させて、ヘッダは心窃に快感を貪つたのではないでせうか。ヘッダに取つては其様な放蕩の話などは聞く丈けも忌はしい事だつたに相違ありません。けれども其快感の爲にはまづ自分を辱める事を敢てしたのでせう。私は後に彼女が妻となつてから夫テスマンを輕蔑して、唇に浮ぶ皮肉な冷笑を抑えて、貴君を愛する余り、貴君を安全に文明史の教授にしてあげる爲に其敵手の原稿を燒いたのだと大嘘を吐いたり、懷妊の苦痛を訴へたりして、夢中に喜ぶ夫を心からさげすみ、其弱點を見事に突差したのを痛快に感じた女としてさうありさうに思はれてなりません。

二人の仲が愈々本物になりさうになつた時、ヘッダは無論强硬に食ひ止め、それに答ふるにガブラー將軍のピストルをもつてしましたれ、あの瞬間がヘッダの戀愛否定の最高潮に達した時て、ヘッダが心中の戀の滿足と、弱性からでなくては得られぬ快感中の快感に魂は躍つたでせう。戀の否定が詰り彼女の戀なのですものれ。レエボルグを殺さうと云ふ氣はもとより無かつたのでせう。其程彼女の性格は眞面目でもなければ正直でもないやうです。又殺す必要もありますまい、あした場合にピストルで相手を狙つてやると云ふだけの行爲て、既に彼女自身内心の希望は完成したと云つてもよいのぢやありますまいか。其瞬間の快感丈けていゝのでせうよ。銃殺するよりも何だか惡く殘忍ですれ、ヘッダはまだ〳〵レエボルグに興味を繋いで居るやうです。どこかでこんなことを云つてたぢや有りませんか。

「私が疑つて仕舞はなかつたと云ふのはれ、何も彼晩私が馬鹿に臆病だつた故(せい)ぢやなかつたのです。」なんて、まさかにヘッダだからつて箍(たが)の緩んだ男にてゞもなけりやあんな間拔けた眞似にしなかつたでせう。

(H)

ヘッダはガブラア將軍の令孃として先づ高貴の部類の

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

家に人と成つたのでありませう。華美と、我儘と、自由とに狎れきつた心にも自（おのづか）ら備はる貴族的品位は、彼女に中庸と自制力とを授け、物に動ぜぬ心を養はしめたものと思はれます。彼女が根據なき感情的な美の憧憬者であると共に中々自尊心も强かつたやうです。彼女の崇拜する美は同時に彼女の信仰であつて、實に最期迄の行動を支配して居ました、彼女の自尊心は決して修養と努力とによつて得られたものではないし又彼女の學識は彼女をして自立自營せしむるの信念を抱かしむる迄には餘り微弱でありました。彼女は彼女自身の行爲及内的生活を統一するだけの確實なる根據ある信仰は持つて居りませんでした。彼女は父の家、即我家に於て一靑年レエボルグに會ひ、結婚以前に於て既に邪惡の快樂を味はつた以來、毎日彼を我家に待つて相愛の思ひを繰りました。然し男は此時既に純白なる靑年では有りませんでした、所謂男子としての或經驗も經、そして其をヘッダに打開けました、ヘッダの方は無垢なる少女の好奇心から大膽にも其秘密を發かせ、何の臆面もなく夫を開き取りました。レエボルグは此ヘッダの態度に醉つて了つて、まさかに自分が捨てられやうとは自覺して居なかつたでせう。然し女は失望させました。

ヘッダは精神力の盛な才氣に滿ちた天才肌のレエボルグを愛したとは云へ、彼の自制のない、醜惡な罪惡的分子の多い陋劣な性情などうしても許す事が出來なかつたのです、美が承知しないので、一時は興味を感じて心は寄せたが結婚しようと云ふ氣にはどうしてもなれなかつたらしう御座います。と云ふのは彼女の性質が熱情的で有つたゞけ狹量で、人を容れるとか憫むとか云ふ事が點から出來ない處へもつて來て、レエボルグに對する愛の觀念が大に眞面目を欠いて居たからでせうと思ひます。ですから勢ひレエボルグによつて自尊心の滿足を得る事が出來ない、斯う感じたヘッダは怜悧？にも手早くピストルの引導を渡して爪先さへよごさずに見事男から身を引きました。之も一つには彼女が凡て意識的であり、冷靜であつたからでありませうが其時のヘッダとしてはそれより外にとる道がなかつたのでほんの自然的發作の行爲であつたかも知れません。

ヘッタは何故結婚したらう

（Y）

先づ最初に結婚前の心理狀態を調べて見ればなりますまい。それはブラックに云つて言葉の中に能く顯はれて居ると思ひます。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「詰り私は踊り疲れて仕舞つたと同じ事よ。私の時代はもう過ぎ去つたのです。——全く過ぎ去つて仕舞つた譯でもないけれど——まあ、其樣なやうなものですね。」

ブラック「さう、自分から好んで老い込まなくてもいゝぢやないか。」と云つて居る處があるでせう。

年齡から老へても廿九、もう娘盛りは過ぎて居ます。外面に向つてのみ生きて居た、はしやいだ、無反省な生活にも漸く飽いて、ものとはなしの空虚を感じ出して來たのでせう。興味と好奇心の對象物の日に日に少なくなつて行くのも物寂しかつたのでせう。若し彼女が何か專門的に研究す可き或物をもつて居たならば、又は天職と信じられるやうな事業にでも身を投じて居たならば、或は確實な自己の宗教觀念でも有つて居たのだつたらそんな事はなかつたでせうが……。けれどヘッダには何にも有りませんでした。只散慢な生活、注意の集中點のない生活です。退屈、疲勞、失望、等が襲つて來るのは必然でせう。如何しても自分の生活を一變せねばならなくなつて居たのです。何處かに落付處を見出さればならなくなつて居たのです。こゝで初めてヘッダも眞面目に自分を考へ、自分を知り究めたのだつたら、眞に自覺ある女として生れ出る事も出來るのだつたでせうに。自己の獨立と云ひ、自由と云ふのもこれからだつたのでせうに、

ヘッダは何處迄も女らしい女でした。女の中の女、實に弱い女でした。根本的に考へる丈の堅實な心根を有つて居なかつたのです。如何も小怜悧で不可ませんね。まやかし上手で。あの可成に強い力と意志と情熱とを有ちながら、それを何物に向つて集中すべきかの標的を見出す丈の眞の知識を缺いて居るのです。と云ふのはそれを飽迄も見出さうとする丈自己の生活に對する熱心と忠實とがないのです。

そして遂々不解決の解決とも云ふべき捨鉢的な結婚に其落着所を定めて仕舞つたのです。全くブラックに白狀して居る通り嘘から出た眞實だつたのでせう。テスマンが何だか憂欝いて居るのを見て、妙に可哀想になつてふと口を滑らしたなんて如何にも自意識の強い女に有りさうな弱點ですね。そして嘘から出た眞實の成行に身を任せて見す見す生涯を破るなんて、此無頓着さ加減は到底達人の無頓着ではない、つまり、自己の嫌厭と疲勞と絶望から來た自暴自棄でせう。

處が併しヘッダはテスマシに對して、小娘らしい、隨分お目出度い希望と信賴の念を多少有つて居たやうですね。ブラックに話した處などから推して考へて見ると、例へば何處から見ても別に是ぞと云ふ點の打處もない

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の、勉强家だから其內に屹度少しは世間に知られるやうになれやうと思つて居るとか、私に色々な事を云つて與れた人は澤山あつたけれど、さう迄眞實に、親切に思つて與れた人はなかつたからとか、大分惚氣を云つて居ましたつけねえ。レエボルグを自ら捨てたり、自分の生活に屈托したりして內實は余程氣が脆くなつて居たからかも知れません、此樣な恍けたやうな事を考へたとすれば。

ヘッダは結婚するに當つてレエボルグの事を明に心に浮べたに相違ないと思ひます。そしてテスマンとの結婚が彼女の心に何物を齎すかをも考へて見たでせうね。そつと胸の裡で二人を比較して見もしたでせうよ。

此パッシヨネートな、貴族的な女の心に宿つたあの戀は、戀の虐殺に寄つて成就するより外にないあの戀に報ゆるに他人との結婚を以てする事は此時の彼女には責めてもの快よさであつたかも知れません。レエボルグに對する感情がテスマンとの結婚を多少助けたやうでも有りますね。それには好人物の學究先生はもつてこいの代物だつたでせう。

此樣な結婚は不幸を產むに極つて居ます。テスマンを得てヘッダは增々寂しさを感じたのです。夫はもとより、其伯母さんも枯草臭い家迄も皆厭て々々ならなくなつたのです。テスマン家の何から何まで自分と趣味が合はないのですね。不愉快、不滿足、寂寥、屈托、疲勞、彼女は唯々倦れて苛々して、すねて、ねぢけて行つたのは無理もないと云ひ條、どうもヘッダ自身に罪が有るやうです。事々に細君から輕侮されるテスマンこそいゝ面の皮ですね、テスマンは或は無能かも知れないが、好人物丈、愛嬌もあり、何處から如何見ても悄氣のない男丈け余計見じめな氣がします、若い女に持てさうな面白味と云つてはないかも知れないが、仇氣ないやうな、通常、若い男子に有り勝な、キザな、鼻持のならぬ厭味が無い丈でも私は、尊敬すると云ふ氣にはなれないが寧ろ愛して遣りたい位に思はれます。此樣な人には世間の事は何も知らせずに、細君の御機嫌取りになど心を腐らせず、只一心に文明史の研究丈をさせて置いて遣りたいと思ひます。

如何に、明けても暮れても文明史の學校扆の樣の平坦な、波瀾のない生活の淋しさ、退屈さ、詰らなさに堪へ兼ねた余りとは云へ、此テスマンを政治家にしたらの、ヤレ大臣になつたらのと、輕蔑し切つて居ながら、其輕蔑して居る夫に對して何此樣な事を求めたり、華美な社交場裡を夢みたり、貧乏世帶を苦にしたりして居るあたりは、冗談でないとすれば、淺墓とも、無智とも、寧ろ滑稽て馬鹿氣切つた話です。どんな無教育な女だつて、此樣な時、此位な卑屈な考は起せませう

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ヘッダは何故かう人にばかり求めて、自分自身に求めないのでせう。自分を如何かしやうとか、救はうとかの方面には少しも努力して居ません。彼女の取る可き道は斷然テスマン家を出て獨立するか、でなければテスマン家に同化するか、さもなければ、今より一層孤立して全然、自己自身の中に充實を求めて、周圍に向つては少しも注意を拂はないと云ふ無頓着な純然たる超然的態度を取つて、テスマン家に何物をも與へぬかはり、何物を望まぬと云ふ深い覺悟を固めて掛らねばなりますまい、そして夫や伯母様が困つて離婚を申込めばいつ何時でも默言つて承知して出て行くと云ふ此三途位なものでせう。

然しヘッダは離婚と云ふ様な事は甚く恐れて居ました此様な處は餘程臆病だつたやうです。コンベンショナルな道徳を顧慮する事や、自分の實力のない事や、例の詰らぬ虚榮心なども多少手傳つて居たのでせう。それにしてもブラックに云つてる「自分の仕事は此世中に唯一つしかない。それは一日、一日と自分の命を縮めて行く事だ」と、此言葉が彼女自身の眞實の聲ならば、自分の救濟だとか、滿足だとか云ふ様な仇な希望を思ひ斷つて仕舞ふ程もう絶望して居るのなら、それ程人に對し、又自分に對し嫌惡の念が強いなら強い丈何故もつと眞面目に突込んで根本的に如何に生く可きかを考へなかつたのでせうどうも私は物足らなくて仕方が有りません。其故か總てが嘘らしくて少し馬鹿々々しいやうな感じさへします。イプセンも餘り拵へ過ぎはしないでせうか。併しこゝら邊りがまあヘッダの徹頭徹尾女性で有つた事と獨存の人たる資格、即ち男氣と知慮とがない弱點を皮肉に示した處なのでせう。どうかすると頭を擡げかけるあの小才氣は齒の浮く程厭味ではありませんか。

(H)

私は大體に於てメレヂコフスキーと同感です。結婚は必らずしも幸福を呼ぶものでは有りません。平凡にして幸福なる結婚のみ平和なるものであります。人として自己絶對の自由を呼ぶ者は多くの場合に於て結婚は最後の墓地だと覺悟せねばなりません。歴史的社會的の因習は問はずもあれ、結婚なるものは本能の慾求と自立自營の出來ぬ依頼心の強い、孤獨の寂寞に堪へぬ人達が社會の困憊と疲勞に敗北して、自己の安全と、平和とを求めん爲の最都合よき避難所、逃げ込み所としてもぐり込む穴ではありますまいか。ヘッダに於ても等しくさうでありました。彼女は獨立して行かなければならぬ程の身分でも境遇でもなかつた許りではない、彼女は美の信仰の爲

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に、自由の爲に獨立して天地の廣き道を歩む丈の意志の強い信仰のある人ではなかつたやうに思はれます。

云ふ迄もなくあの才氣と美貌とが徒らに彼女を誘惑の巷にさまよはせて、自らに求め自らを導ぬる信仰的觀念を鈍らしめたのです。

結婚に伴ふ約束の束縛、不便の多かる可きを慮らずして愚かにも彼女は只一圖の安逸と内心の空虚を滿さんが爲に結婚して仕舞ひました。此不自全なる偶然の結婚が不幸に陷らぬ譯は有りません。意識的に現世に絶望し困憊した彼女は生のかぎりのない迄に其心は冷酷となり、憎惡となり、捨鉢となり無慾望となりました。自ら自らの心を憎み呪ふ程のヘッダに如何してレエボルグなどゝ……あの多角形は男と結婚する事が出來ませう。平凡とは云へ、眞實て賴母し氣のある確かな、先づ安心して身を任せるに足る好人物のテスマンに落ちて行くのは寧ろ當然てせう。如何にも普通あり打な婦人の撰びさうな結婚法てす。彼女は自分の生涯を捧げて此お目出度い大丈夫らしいテスマンに走つたのは其依賴心の強い敗滅の涙が遂に傲慢なる自尊心を蠱らせたからでありませう。

結婚前普通の女が抱く夢へのやうに、幾分か都合のよい算用をたてゝ、希望を豫想して居たヘッダは其後事一々に付けて絶望の度を高め、果てはいらいらする餘りに凡庸なる夫を無遠慮に最後迄嘲笑し輕蔑しました。彼女の心は輕蔑もなり、嘲蔑となり、罪惡的となり大膽となり、虚僞となり自暴自棄となりました。

遂に結婚は彼女の美な絶滅と敗亡とに終らしめました。テスマンの家にレエボルグと會つた時も化石して居た彼女の心には何等の情も動きませんでした。もはや昔のヘッダではなく、自ら自らに厭き人生を咒つて居るヘッダて有りました。此時彼女の眼中人情のほめきなく、愛なく熱なく同情も涙もない、冷灰の女と化して居たので寧ろ人の運命を支配して一向其れの破滅を見る事のみを樂し運て居たのでした。之が云ふ可からざる快感を彼女に與ふる迄に彼女の良心は荒廢し麻痺して居たのでした。そして惡の爲に惡を喜ぶ破壞的狀態に其心は一變し彼女の鋭き理智は惡賢く働いて憐む可き從順なテーアをさいなみ、唯一の情を傾けし愛人レエボルグを殺し、又遂に自らを殺した。詰り自分の輕はづみからワナに陷入つた事を氣付くと同時に生存の苦痛と重荷に堪へられなくなつたのでした。て最後の自由を保つ爲に美を實現する爲に彼女は理想的美の死を遂げたのであります。併し彼女は此死によつて幾何か人間らしく生きる事が出來たので、彼女は實に死によつて失敗の生涯の幾分を取返し得たと云つてもよいてせう。花輪て飾られた若い女の死體

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

勝利の死と云ふのでせうか。けれども何だか臆病のやうにも思はれますれえ、法庭に召喚されてピストルを渡した迄一を告白する氣力を失つて了つて居たのです。ヘツダの身になつて見たらもう此上の生きやうはなかつたのでせう。

（Y）

家庭の常客としてのブラック

ブラックは隨分世間通な、融通の利く、惡く世の中を呑み込んだ、どこ迄も常識的な處世上の老手です。拔目のない、それ丈安心して交際の出來ぬ男のやうです。全體に行き亘つた調子の低い感じのする卑しい厭な男ですれ。

兎も角、テスマン夫婦の歡心を得、殊に主人テスマンの信用に取り入り、テスマン家にとつてはなくてならぬお客樣とまでなつて居たやうですれ、客と云ふよりは寧ろ家人とでも云ひたい位に。

あの三角同盟を主唱する邊り、如何にもブラックの人と成りが諭つて居ます。

隨分此若夫婦はブラックからお坊ちやんとも、お孃さんとも見られて居たのでせう。又ブラックはヘツダの心を得る爲には可成努めて居たらしいやうです。ヘツダはテスマンに對するよりも寧ろブラックの方ないゝ友達とも、話相手ともして却つて何事も蟠りなく打明け話もすれば相談もすると云ふ風で、自分の屈托を紛らす爲に何時もブラックを使つて居ます。ヘツダの爲には氣散じと憂さ晴しの此上ない重寶者であつたのでせう。併しどうもヘツダが卑しく見えてなりませんブラックに對するあの態度を見ても同じ玩具にするにせよ飜弄するにせよ。

（H）

ブラックは彼自身が自白して居る如く、ヘツダを掌中の玉とせん目的の下に彼の家に根よくお百度を踏んだのでせう。ヘツダに媚び、テスマンのお髯の塵を拂ひ、斯の類の青蠅は唯にブラックのみではありません。茲ではく程そんじよそこらにころがつてる連中の比類でありませう。

（Y）

レエボルグとの再會

レエボルグと舊い學校友達で有つたテーアとが市に來てテスマン家を訪れた事はヘツダに取ては大事件でした。彼女の性格は此大事件に相遇して目覺しくも發展し

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たのですから。

テーアを巧みに籠絡して秘密を殘らず白狀させる迄に至る手際は實に甘いものですが、其甘ければ甘い丈、ヘッダに對して反感が起り、テーアに對して同情が起つて來ます。そして何だか淺ましいやうな氣がしてヘッダのやうな女には夢にもなりたくないものだと熟々感じさせられました。

思ひも懸けぬテーアとレエボルグとの關係を聞いたヘッダの心は隨分亂れたやうですれ。自分よりも下級生で有つて薄のろな、あの髮の毛を引張つてはよく愚弄つて遣つたあの小供ぢやないか、何生意氣なといきなり立つた事でせう。自分が曾て關係した男そして愛するが爲に捨もした男の上に、ヘッダには取るにも足らぬ女のやうに思はれて居たテーアが意外にも偉大な感化力を有つて居たと云ふことは余程癪だつたに違ひ有りません。ヘッダもケチな女ですれ。嫉妬でせう矢張り。併したゞ單純なる嫉妬ではない、目今の自分の不愉快極まる絶望の生活にむしやくしやして居る處へもつて來て、テーアのやうな女が自分以上の力を持つて居て、人一人の生涯を支配したと云ふのが無暗と口惜しかつたと見えます。

飮まないと云ふ酒を强いて飮ませたり、遂とブラックの家の晩餐會に迄もレエボルグを突出してテーアが折角の苦心を水泡にした揚句、「そら、さういふ風になると、レエボルグも以前の往來に戻るのです――もう〳〵何處かの厭らしい女の愚痴から離れて――仕舞つて全然獨立の人になるのですよ。」なんてあてつけがましい嫌味な文句を並べて居ます。

それにしてもテーアとレエボルグとの關係はどう見ても理想的ですっ殊にレエボルグのやうな墮落した、性根なしの、不眞面な男を對手取つてあの美しい關係を持續し不身持を改めさせたばかりでなく、あれ丈の事業を助けたり、勵ましたりして成就させたテーアの忍耐と、人知れぬ苦心とは察するに餘りありです。温順な善良な單純な犧牲的な女の人格力でなければ到底も是丈の事は出來ますまい。私は何となくテーアに對して床しい感じがします。そしてレエボルグがあんなデカダン肌の男だと思ふにつけテーアの苦心が察しられます。そして表面に顯はれない偉大なる眞の婦人の力と云ふものに敬服します、全くテーアの樣な婦人の前に私は頭が下げて見たいのです。

何だか道學者先生見たいな、又時代晩れのしたやうな考だと新しい女の方々などからはさぞ笑はれる事でせうが、私は眞箇にテーアのやうな女が好きなのです。

勿論中世の理想的婦人でせう、けれども如何に時代が

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

奈何しようが斯うしようが、矢張單に男子に及ぼすばかりでなく、一般社會に、人類に、世界に及ぼす眞箇の婦人の力は最後の勝利ですれ。眞面目、單純、忠實、純潔、熱心、犠牲の精神、沒批判的想度が爭はれないものてかうした暗々裡の勝利を得せしめるやうてす。近頃頻りと此樣な事が考へられるものですから、ついうつかりテーアをもち上げて了つたのてす。女の强味は單純にありやしないてせうかしら。女の尊さも。總て美しさも。

此頃の私の心狀態は無暗と此樣な事が親はしくつて仕方がないのです。

ヘッダとテーアとの人格は到底も比較物になりませんテーアの前に跪く私は、ヘッダの面に唾する私てす。

然し、あのヘッダの深く抑へては居るが始終苛々として、どうかしなければ居ても立つても居られないと云ふ絶望の氣持には私共は染々同情も出來ますれ。なまじ此同情が有るのてあの罪惡、無法な原稿燒の露習行爲だつてさう〳〵咎める氣にはなれません。

久しい間の無事、平穩、單調に倦み疲れて有り余る力を内に持ちながら集中點を見出せないで、只苛々と荒んて行く中、偶々此樣な事件に出合して、統一のない破壞力を集め、畏る可き死力を盡して一直線に現はれて來たのではありませんか。だから善惡を念頭に置くてもないし、行爲の結果を思ひ遣つて恐れる暇もなく、利害關係の打算なしに、殆んど夢中てやつてのけて仕舞つたのですれ。忽ち身の破滅となるやうな行爲を如何にも平氣無雜作に、何の躊躇もなく演したものてやりのけて居ますあすこが面白いぢや有りませんか、偉大な感じがしますよ。偉大と云つては少し可笑しうございますが。

只復讐の刹那的快感、絶望の人のみがよく知つて居る犯罪の快感、それ丈しかなかつたのでせう。あの原稿を燒いて居る瞬間は殊によつたらそれすらなかつたかも知れまんれ。只忘我と恍惚と。

又考へて見ますにヘッダは嫌な々々々生活を早くお仕舞にして了ひたい一徹から、太く短く、半ばやけから華々しいくゝりを付けたくつて一つには彼樣な破壞的な行爲を態としたのでせう、嫉妬とか復讐とかの形は取つて居ますけれどそれがヘッダの本來ではないらしいやうてす。空虚な生活に堪へられなくなつてあんな事をして故意に身の破滅を招いたのだと見ると同情の涙も湧きます。

（H）

テスマンの人物

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

テスマンはヘッダの夫としては餘りに凡庸過ぎた。下手な月並俳句を讀むやうな感じがする人です。程度以上の好人物で寧ろ無感覺に近い無神經性のやうにも見えます。彼が人間たるの本性は文明史の講師たらんとする時に於て、ヘッダがレエボルグの原稿を燒いたのは貴方に對する愛の證據だと云つた時、父親たらんとする喜悅にのみ打消されて居た彼は、總して仕打がお目出度過ぎて居ます。彼は只に書物の奴隷たるに滿足して、かつは意に適つた妻を迎へ得た喜悅に余の事を顧る暇なく、譯もなくヤク〳〵してヘッダの新要求も、內的生活をも自己に對するヘッダの心持をすら看破する丈の慧眼を有たなかつたのです。彼の心は餘りに古典的で少しも働かない。彼は吃度往來を歩く時、自分を忘れて四邊の事象のみを見廻してキヨロ〳〵通り過ぎる人だらうと思はれますね。家長たるの品位も威厳もなく、推察するに彼の營んだ理想的の家庭と云ふのは聊かも家庭らしい感じがしないばかりでなく獨身者の男女が寄集つて勝手な眞似をして居るやうにしか思はれません。ヘッダの孤立的な態度が重な原因をなしてるのでせうが、テスマン其人にもそれを統御する丈の技倆のない處が如何にも傍から見ると齒痒く感じられます。然しヘッダは斯樣な中に在つても尙其貴族的な品位を落すまいとして、飽く迄冷靜に、自若として利己的な持ちつゞけます。故意に佛性の伯母をいぢめるのも、どこ迄もテスマン家などゝ同化しまい、ガブラア將軍の愛孃たる尊い氣性を損じまいとの淺い誇りの爲せた業と解釋するより外御座いますまい。

（Y）

私は最初此脚本を讀んだ時、女主人公ヘッダが夫テスマンの其所謂意味の家庭的な平凡、俗惡に對する嫌惡と侮蔑の餘り、忌々しさに堪へ兼ね、自分の最忌はしいと思つて居る懷妊と云ふ事を以てして、故意に自分を恥かしめて迄も夫を輕蔑して一種の快感を買ふに過ぎないのみて、必竟貴方を愛する爲に原稿を燒いたと云つたと同樣の大嘘と心得て居ましたが再讀するに當つて其事實なのを初めて確めました。

と同時に私は自然の皮肉に逢着したやうな感じがして冷笑を禁じ得なかつたのです。伯母さんはテスマンにヘッダが後でお前にこつそり話す事が有るかも知れないよと注意を與へ、伯母さんが歸つて了つて二人切りになつてからこんな會話が交はされます。

「それから――丁度いゝ機會ですから、お話しますがれ

否、否――伯母さんにお聽きなさい――會得りますから。貴君が得心が出來るやうに話すでせうから。」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

テスマン「ああ！　大概お前の云ふ事は見當が附いた―え、眞實―え？」
ヘッダ「そんな大聲をなさるなと云ふに！　勝手に聞えると云ふのに。」
テスマン「はゝゝ。勝手にって！　はゝゝ、一寸、何てまあお前は可愛んだらう！―勝手には、はい、下婢（ベルサ）一人限りて座いますよ！　僕は行つて下婢に話して來る。」
ヘッダは夫の斯の如き様を見るに堪へませんでしたらう。嘔吐を催す許り嫌らしくも、卑しくも馬鹿々々しくも思つたでせう。然し取りも直さず此心の底からさげすんでる夫の前に明らかな敗北を見たのでした。彼女は常に死程惡んで居たにも係らず遂々懐妊して了たでは有りませんか。そしてそれが夫を斯う迄喜ばせたでは有りませんか。夫を嘲笑するのはやがて自分を嘲笑して居るのでした。彼女のプライドは地に墜ちて仕舞ひました。どんなにか夫をはた自分を呪ひましたでせう。
ヘッダ「あゝ、私は死んで仕舞ふから、私は死んで仕舞ふから」
テスマン「え、何うしたつて――え？―」
ヘッダ「貴君！　馬鹿々々しいぢや有りませんか、」
私は今此後のヘッダの行動を評するに當つて、其背後に彼女は懐妊して居ると一事を忘れずに置く必要があるやうに思はれます。何故なら之は彼女に取つて殆んど想像以上の打撃、否到命傷であつたに相違ありませんから。夫テスマンが如何な好人物であつたか手にとるやうではありませんか。

（H）

ヘッダの死

是より先きまだ原稿を燒かない前の事、ヘッダは再び自分を救ふ事の出來ないのを知つて、ひそかに自殺を覺悟したのでした。レエボルグに紀念として、昔一度それて彼を狙つた事のある。彼がプラア将軍の短銃を渡して、是を以て美事な最後を遂げて呉れと再三頼みます。ヘッダは自分の戀人の美しい最期に總ての希望を托したのでした。戀人の上に自分の意志の顯現を見て快感に打たれやうとしたのです。さうして滿足を得やうと試みたのです。此世の中の總ての事に望みを失つた人、又人間と云ふ生物に憎惡の念の強い一種の潔癖家はともすれば生涯に唯一度しかない死に多くの夢を籠れて、責めてもの心遣りとして、甲斐なき希望を繋いで居るものです。只單純な、眞面目な、嚴肅な崇高な宗教的情操に恍惚として、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

生物の本能である死に對する恐怖の暗い影などは限なく漲る白光に跡方もなく消されて仕舞ふものであります。

彼女は戀人の死に余り多くを期待して居ました。ヘッダは刑事ブラクから彼の死を聞いて「やつとの事で立派なことを！」と獨語ました。

「あゝ、刑事様、ま、何たる饒倖でせう、學士の歿つたのは！」とも云ひました。

ブラック「饒倖？——え、奥様？、左様、實際彼に取つてはね。」

ヘッダ「否、私に取つてはです——自分の勝手にああ云つた所業を、此人生でする事の出來ると云ふことを知るのはね。ね、何だか思ひ寄らぬ神々しい光輝が映ずるぢや有りませんか。」

又斯うも云つた。

「…私は唯彼人が自分の思つた通りの生活をする男氣を持つて居たと云ふ事丈を存じて居るのです。さうして——此まあ立派な最期を！、其最期に美しいと云ふ感じが映ずるのです！　ね、立派な力と意志とでもつて、此人生の快樂を見捨てゝ仕舞ふなんて——まだあの若さで。」

此處に至つてヘッダは彼が曾て自分と關係の有つた男だと云ふ事も、生涯の中人一人の運命を支配して見たいと云ふ自分が最初の欲求も忘れて一種の恍惚狀態に落入つて仕舞つて居ます。彼女は時に隨分判斷を失するけれども兎に角自分で作り上げた或觀念の中に忽ち自己を沒入し、觀念に生きる力を有つて居ますね。案外單純な精神的貴族であるから、何處か氣高い一節を供へた處が仄見えます。是が彼女に對し又彼女の惡行に對する憎惡の念を余程和らげさせて呉れる理由の一つでございませう然し彼女の喜悅は空しく外れて、事實レエボルグの最期は醜惡を極めたものでした。

彼女は最後の希望とプライドとを全く失つて、

「…忌々しいつたらない、私の手を出す事は、何から何迄皆斯う喰ひ違ひになるのだらう——…」と絶叫しました。

事の意外は意外を重ねて燒き捨てたレエボルグの原稿はそれなりに滅せず、テーアのポッケットの中から彼が口述した折用ひた控えが顯はれ、テーアとテスマンは今宵後の一室で協力してそれの整理に掛つて居ます。

其上彼女が彼に與へた短銃が祟つて、彼女は愈々窮地に落入りました。扨斯う物事が悉皆食ひ違つて來て見ると、ヘッダは元々氣の少さい臆病者で有りました。實は自分が滑稽者でありながら此事件の係合となる事を甚く恐れ、かの怪しい唱歌者のダイアナ等と一緒に裁判所に召

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

喚されることには到底堪へませんでした、彼女は判決を受けると云ふやうに甚く恐れ戦慄いたものでした。

「ですけれど、其様な醜悪い事、私に關係した事ぢやないわ。」と云つて逃げを打ちます。彼女は自由、獨立を欲して居ながら其行爲は何時も卑怯で、逃腰の處が多かつたやうでは有りませんか。一寸した社會的の事件であつて所謂自己の面目に關する事は非常に恐れました。

世間通の悪狡猾い判事はヘッダの弱點等は疾に呑込んで居ます。「併し、別に心配なする事は無いんです――自分が沈默を守る限りは。」と云ひます。短銃の持主を知るの唯一人です。此時ヘッダは自分は他人の掌中の者である事に感附きました。判事は何處迄も執念くヘッダの弱味に食ひ込んで居るのです。ヘッダはもう堪りません。

「それでも矢張、貴君の好自由の體れ! 貴君の好自好にされるのね! 嗚呼、畜生! 否、考へる丈けでさへ私はそんな事は我慢が出來ません! 死んだつて」

最早何時もの冷静も有りません。頭脳は全く混亂して何等の辨別も有りません。彼女は曾てブラックに云つた通り知らず知らず一日一日と否、一刻一刻と自分を破壊して來たのでした。ヘッダは身も心も疲れ果て、今更救ひ出す道も、只途方に暮れる許りでした。

憎らしい、忌々しいブラックを避けて彼女は背後の室に行きます。そして騒々しい舞踏曲を無茶苦茶に一頻り奏し終ると――彼女はやがて死にました。全く理想通り只一發の短銃(ピストル)で顳を撃ちぬいて美しい死を遂げました。輕侮し、嘲笑し、憎悪し置かなかつた連中の心に夢にだも思ひよらなかつた不意の驚愕を見舞はせて……。其蒼白い冷たい顔には苦悶と寂寥と孤獨と、絶望と敗北を蔽ふ物凄い微笑が漂つて居ましたらう。

懐妊した若い女の屍、しかもそれを知つて居る唯一人は矢張り彼女が生前侮辱して止まなかつたテスマン其人では有りますまいか。併し彼等は其屍によつてなほテスマンを嘲り其氣高く。美しい顔によつて、產褥の醜悪と疼痛に眉を顰め、口を曲める事なくして死んだことを責めてもの快さと喜んで居ると云ふかも知れません。

浮いた干燥(はしや)いだ、騒々しい、矢鱈に奏いた舞踏曲――

ピストルの響――

是が妙にヘッダの性格を顯はして居るかのやうに私には思はれてなりません。そして彼女は死ぬ迄否斷末魔の瞬間でさへ自分の意識に向つて注意を集中することに努めなかつたらしう御座いますれ。奈何な稀薄な主觀に生きてる凡人でも死の瞬間丈は醇化せられて眞生命を内心に感ずるものですのに、彼女は遂に靜に之を味ひ知る事なくして、彼女の所謂生涯を通じて只一度の死を空過し

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て仕舞つたかと思ふと染々不幸な女だつたと氣の毒でなりません。

全體に亘つての感想

（H）

私は「イプセン」物を澤山讀みませんから、イプセンの女性に對しての內容をよく知りません。只「ヘッダ、ガブラア」が名高いと云ふ處から一讀して見ますと、二度と再び手に振れるも嫌と云ふ程此ヘッダに對する惡感を催しました。其底意地の惡い冷淡な獰惡なる態度が、虛榮と嫉妬の權化の樣にも思はれました。

是でもイプセンの理想の女で、然かも覺醒した女かと驚きもし呆れもしました。私の眼には如何しても醒めた女とは受け取れません、那邊に自覺あり、覺醒があるのでせう。只自意識の强いと云ふ處を意味して强いて誇張したらさう云つて云へないこともないか知りませんが、それとても其自意識なるものが頗る薄ぺラで、普通の女に有勝な片意地とか、勝氣な女の負け嫌ひとでも云ふ樣な極詰らぬものであるとしか思へず、女の立脚點から見て何等の同情もない、評するに足らぬ女の樣に感じられてなりませんでした。

併し今度、男氣を振つて仔細に再讀して見ますと、左程厭でもなく全部通じて殊の外面白く讀まれました。そして今更ながらイプセンの非凡な技倆に感心もし、其巧みな配置を嘆賞したのでした。

曾て逍遙さんが鑑賞者自身の性質次第で同じ大家の名作でも好惡の別を生ずると云はれましたが、同一の作物に對する感じですら鑑賞者の心持に依つては斯うも違ふものかと思つて私は大に悟る處が御座いました。

即最初の折は作物に對する批判的餘裕を缺いて居た事と意外なるヘッダの態度に驚かされて憎惡の念ににのみ滿されたと云ふことにあつたらしく思はれます。

私は敢て全然とは申ませんがヘッダによく似た女性にどうかすると出逢ふことがあります。

「ヘエ、左樣でせうとも、れ私只一度で宜いから生涯の中に人間一疋の運命を自分の自由に——思ふ通りにして見たいわ——」

是が心持がヘッダの行爲の總てゞあつたらしく見えますれ。そして其自意識の强い點、一歩も人より下る事を好まない、美貌に於て、才氣に於て、門閥に於て、其華々しい虛飾的生活に於て。只浮々と派手に面白可笑しく外面に於てのみ生活して來たヘッダが、眞の人生の意義と云ふものに觸接なし得ず、徒らに悶々憂苦の中に自惱

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

を招いて行く徑路が如何にもよく活躍して居ます、

「眞箇に貴女は馬鹿ね――それから、ホラ十時になると貴女の大事な親友が葡萄の葉を頭に乘せて千鳥足で來るぢや有りませんか、」

ヘッダの言葉として如何にも其性格をよく語つて居る面白い詞ではありませんか、けれど嘲笑つて強がるヘッダより苛なまれて慄へて居るテーアの眞面目から出て居る力の方が強いことは爭はれませんね。外面ばかり無暗と傲慢て、内省とか精神的生活とか云ふ事は殆んど皆無と云つても差支えない、此樣な女が自覺した女だと男性の眼に映ずるかと思ふと實に情ないものだと熟々嫌になつて仕舞ひます。怜悧な女には違ひ有りません、其策略的秘術的な手腕が手に足に眼に口に聊かも内省顧慮を要せずずんずん運んで行く處は實に目覺ましいものですが是のみをもつて覺めた女と首肯する事は出來ません。

あゝ覺醒た女とは果してどういふのを指すでせうか。

(Y)

默つて彼女の全生涯を通じて考へて見ますに矢張彼女は自己の内生活に於ては案外意識的の處が少なかつたやうに思はれます。

彼女の云ふ事、爲す事、又物事の考へ方、そこに一種のインデイビデュアルな處は有るにせよ、何一つとして女性的でない處のものは有りませんでした。時には女性のあらゆる弱點の結晶體のやうに思はれて、私は幾度か催す嘔氣を抑へるの餘儀なさに出逢ひました。

彼女は決して他を容れる事が出來ませんでした。又自分をも容れませんでした。何物にも同化されませんでしたが、又何物をも同化する事が出來なかつたのです。先天的に同情と同感の能力を缺き、自ら門戸を閉し偏狹な利己主義者となり、孤獨と、寂寥と、空虚と自滅が生じました。しかも其苦痛に出逢つて堪へられなくなると、何時も自分を措いて無駄に他にのみ向つて求めました。あらゆるものを否定しながら矢張其否定したものに依賴して居たのでした。いつもヘッダの中心は自己以外にあつたやうです。

彼女が自分として守つて居たあの少さなセルフイシュな我、其我を擴大すれば、其擴大の至極は無我である事を知らなかつたのです。生涯の中に一個半個の人間の運命を自由にして見たいと云ふやうな枝葉の事を考へて居て、先づ自ら自身を自由にし、自ら自らの主たり得る人とならうと云ふやうな第一の問題を嘗て一度も考へたことがなかつたらしうございます。矢鱈に自由々々と叫びながら遂に眞の自由に至らず、どう考へてもヘッダには眞劍

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

な處が缺けて居ますね。あれがあの悲劇をなした不幸な性格であつたのでせう。

メレジコウスキーのヘッダ論は成程隨分ヘッダに呑まれて居るやうですね。併しあの中で、

「女は其信仰と信仰の要求に於て確に男よりも執拗なるものである、若し斯ういふ性格であつて其内的勢力が動作に導かれなかつたならば、其時それが犯罪に導かれるのは止むを得ない」と云つて居る言葉は私などの心にはヒシ〳〵と響いて參ります。

ヘッダは確に信仰がなければ生きられなくなつて居たのです。併し自分自身それを明に意識して信仰を得んが爲に努力したかどうだかは頗る疑はしいものです。それ程生命に對する執着心が強くなかつたらしいぢや有りませんか。どうも物足らない感じがします、中途でごまかしちまつたやうで。

男子もさうでせうが婦人は殊に信仰がなくては生きられますまい。自分を眞面目に考へられば考へる程宗教的の要求が湧いて來るものです。ゼームスは人間の氣質を二つに分けて軟心派、硬心派と云つて居ませう。これを男女に當嵌めて見ると女はどう見ても軟心派ですね。

若しか、無宗教、無信仰で居て、醇化した、高調な生活を遁つて行かれると云ふ女がありますなら、其人は餘程自分を知らない人なのでせう。私に云はせると吃度不眞面目と云ふより外ないと思はれてなりません。

矢張どう考へて見ても婦人一般の上に懸つて居る使命は宗教的に外ならない樣に、此頃の私は切にさう感じられるので御座います。

話が大變橫道へ外れましたがつい機づみに乘つたので御許し下さい。

それからヘッダガブラアの劇は全く悲劇に相違ありますまいか？　何だか讀み終つた時の感じは喜劇じみたもののやうに感じたのです。何故でせうか。私には分りません。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

編輯室より

◎本誌青鞜も愈々こゝに二號を重ねます。どうかと思つて心配して居りましたが、皆樣の非常なる御熱心のもとに初號は殊の外なる好景況を呈しまして中には市内の書店にはもうないからと折角本社あてに御申込下すつたにも係はらず品切れて御送り致す事が出來なかつたと云ふお氣の毒樣をする迄で御座いました。私共一同深く皆樣方の厚い御同情と御熱心とに感謝いたします。これからも愈々皆樣方の固き御決心を無にせぬ樣出來得る限りを盡して此雜誌の完全なる發達を遂げんことを一向希望して止まないので御座います。

◎社員の方々は九月より毎月十五日迄に會費三十錢青鞜社宛に御送り下さい。

◎本社の事業を永續し、其發展を計るには經濟上の基礎を堅固にするの必要が御座いますから、多少に拘はらず基本金の中に有志姉妹の御寄附をお願ひ致したいと存じます。

◎社員の方々の原稿は隨時青鞜社宛に御送附下さい。

◎茅野雅子氏の短歌は愈々次號に掲載致す事となりました。

◎又此度社員野上八重子氏にはよんどころない御事情の下に一時御退社なさる事となりました。眞箇に私共幾重にも殘念には存じますが何分餘儀ない御事情故。尚御作は時々頂けるさうで御座います。

前號に豫告致しましたもの、内で野上八重子氏の「海の讃美」及中野木内の作らいてうの「高原の秋」は都合により今回の誌上に缺きます。

◎本社の賛助員岡本田治子氏は赤坂區田町七丁目一番地なる御私宅にて先日より一六の日に松月古流生花、投入花及千家流茶道を松月古流家元藤城庵打瀨翁補助の下に指南せらるゝとの由。

◎一生懸命には試みましたもの、とかく此道には新米の事とて前號などには餘程活字に誤謬が御座いましたさうで皆樣へ對しまして誠に御申譯も御座いません。其他體裁等も追々馴れて參りませうと存じますから何卒お目寛やかに。

寄贈書目

層雲(一ノ五) 層雲社
婦人の鏡(八月號) 東京婦人社
蝸牛(九月號) 蝸牛社
月光と臥床(一集) 白藻社
鷄苑(一ノ四) 鷄苑社
パリ(第一)
赤い花(七、八月號) 秋田、野の花社
心の花(十五ノ九) 竹柏會出版部
ホトヽギス(九月號) ほとゝぎす發行所
車前草(二ノ一) 車前草社
春夏秋冬(九月號) 籾山書店
文學界(一ノ六) 文學協會
旅行(一ノ一) 東京旅行社
俳味(二ノ九) 俳味社
路上(歌集) 若山牧水著 博信堂書房發行
評は次號にて熟讀の上。
矢車(九月號) 矢車發行所

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第三號豫告

* * * * *

題　未　定（戲曲）　長谷川時雨
安　　心（小說）　水野仙子
枯　　草（短歌）　茅野雅子
題　未　定（詩）　與謝野晶子
高原の秋（叙景文）　らいてう
題　未　定（小說）　阿久根俊子
祭　の　日（小品）　杉本正生
題未定（散文詩飜譯）　ポ　オ
俳　　句　白　雨
評　　論
題未完（小說）　上田君子
其他未定のもの

* * * * *

青鞜社概則

第一條　本社は女流文學の發達を計り各自天賦の特性を發揮せしめ他日女流の天才を生まむ事を目的とす。

第二條　本社を青鞜社と稱す。

第三條　本社事務所を本鄉區駒込林町九番地物集方に置く。

第四條　本社は社員賛助員客員よりなる。

第五條　本社の目的に賛同したる女流文學者將來女流文學者たらんとする者及び文學愛好の女子は人種を問はず社員とす。本社の目的に賛同したる男子にして社員の尊敬するに足ると認めたる人に限り客員とす

第六條　本社の目的を遂する爲め左の事業をなす

一、毎月一回機關雜誌青鞜を發刊すること。青鞜は社員及び賛助員の創作、評論、其他客員の批評等も掲載することあるべし

二、毎月一回社員の修養及び研究會を開くこと但し賛助員の出席隨意たるべし

三、每年一回大會を開くこと大會には賛助員客員を招待し講話を請ふことあるべし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

四、時に旅行を催すこと。

第七條　社員は社費凡三拾錢を毎月納附すべし。社費は毎月會並に大會の費用と社員、賛助員、客員への雜誌寄贈費とに當るものとす。

第八條　雜誌「青鞜」發刊の經費は發起人の支出により、其維持は社員、賛助員、客員其他の寄附による。

第九條　幹部は編輯係、庶務係、會計係よりなる。

第十條　係員は四人とし、半數づゝ一年毎に交代す。最初は發起人等是に當る。

第十一條　係員は社員の選擧によるものとす。

第十二條　係員は再選することを得。

名簿（いろは順）

賛助員

長谷川時雨　岡田八千代
加藤籌子　與謝野晶子
國木田治子　小金井喜美子
森しげ子

社員

岩野清子　戸澤はつ子
茅野雅子　尾島菊子
大村かよ子　大竹雅子
加藤みどり　神崎恒子
田原祐子　田村俊子
上田君子　阿久根俊子
山本龍子　佐久間時子
荒木郁子　杉本正生
水野仙子　井上民子
龍野ともえ　中野初子
平塚明子　保持研子
木内錠子　物集和子

豫告

青鞜社同人譯
ポオ散文詩集

青鞜社出版

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

東京市本郷區駒込東片町七十六番地

株式會社 東盛銀行

【電話下谷一千百四十番】

頭取 牧田義雄

本郷區根津八重垣町三十二番地

根津支店

【電話下谷千百十五番】

北豊島郡板橋町七百六十一番地

板橋支店

【電話番町百九十三番】

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

女子文壇

第七年第十二號 ・日發行

十月號

定價一冊金拾五錢 送料壹錢五厘

● 私の貞操觀……與謝野晶子

● 女子の腦髓……澤田順次郎

● 九月七日・横瀨夜雨 ● 詩 森川炎村 ● 歌 原田琴子

● 小品文……河井醉茗 澤村胡夷

● 竹久夢二論 岡田三郎助 中澤弘光 外數名

● 日光隨行記・神近市子 ● 富士より箱根へ 平塚白百合

● 婦人記者の地位・澤田撫松 ● 秋の夜話・坂東太郎

● 口語新譯 枕の草子……外島浪之助

● 數字の上に表はれたる婦人の自活 しぐれ月

● 東西 夜の歡樂 大阪の帝國座、東京の帝國劇場……

▲ 繪と歌と……竹久夢二

十月十日 女子文壇 第三增刊

娘時代

美裝二百頁 價廿錢 送料壹錢半

東京市麴町大…町 女子文壇社出版 （振替口座東京第七九壹式番）

毎月一回一日發行

一冊二十五錢郵税一錢五厘

斯道唯一の演劇雜誌

歌舞伎

第百三十六號　十月一日發行

六冊前金郵税共一圓五十錢

十二冊同二圓八十錢

戯曲 **街の子** …… 鷗外

新無線電話（歌舞伎座買收の件）…… 室田武里

「扇屋」と「陣屋」…… 伊原靑々園

拙作「夢殿」…… 有田寅彦

夢殿の衣裳道具 …… 鳥居清忠

喜劇「心機一轉」の作者 …… 太郎冠者

帝國劇場の新脚本 …… 尾上梅幸

「血統」の脚本 …… 中村春雨

新富座雜談（河合、村田、伊井）……

私演の舞踊劇 …… 坪内逍遥

「俠艶録」の評 …… 林和生

喜多村と河合との力技 …… 葉椰子

今泉壯太郎日記（二）…… 靑々園

三座の「影絵」…… 幸堂得知

帝國劇場の「胡蝶の舞」…… 松居松葉

帝國劇場の「世繼曾我」…… 岡本綺堂

日本最初の外人劇 …… 山野芋作

九月の新脚本 …… 川村花夢

故市川團藏の事 …… 靑々園

附錄脚本 **刑罰** …… 清見陸郎

本郷區湯島切通坂町報知社内

歌舞伎發行所

電話下谷二四八三　振替口座一八一一六

十月一日發行

價廿五錢
郵税貳錢

スバル

十月號

雁（小説）　森鷗外

政チヤンの死と其前後（小説）　生田蝶介

影ノ法介（小説）　山本禿坪

雪の上（小説）　中島清

嵐（脚本）　水上瀧太郎

水症後記　吉井勇

掠鳥通信　無名氏

詩

佐藤春夫

阿部省三

山本禿坪

水野芳舟

高村光太郎

歌

三ヶ島葭子

原田琴子

長島豊太郎

スバル同人

東京市神田區北神保町二　昴發行所　電話本局四二六四

心の花

第十五巻　十月號　第十號

塙保己一の事業　芳賀矢一
塙保己一の逸話　井上頼圀
塙保己一と歌學　佐佐木信綱
群書類從の序跋　和田英松
今　武林無想庵
伊東　大村八代子
岳麓湖上吟　川田順
倫敦より　大河内國子
幻の華　白蓮
秋の一夜　石榑千亦

定價一冊三十錢●半年前金七十五錢・一年前金一圓四十錢●税共

東京日本橋區　竹柏會出版部　本石町一ノ一
振替東京四三〇〇番

近刊書目

小山内薫著　舞臺と役者
著者の演劇論集也
定價其他未定

北原白秋著　詩集　邪宗門　再版
改訂再版發賣
定價金八十五錢
送費金八錢

吉井勇著　水莊記
淒艶なる物語四編
定價金九十錢
送費金八錢

土岐哀果著　歌集　往復の路
著者の第一歌集
定價金五十錢
送費金六錢

發行元
東京市京橋區南傳馬町三丁目
振替貯金東京五六一四番
東雲堂

十月一日
發行

創作短歌號

本號特價
金五拾五錢
送費金貳錢

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

瓦斯竈十德

七輪は無損料竈は一ヶ月僅に金拾五錢
一日使用を後るれば一日の損あり、至急乞御申込

一、据付くるに廣き場所を取らず。
二、据付くるに多くの費用を要せず。
三、貯へ置くべき納屋の必用なし
四、晝夜何時にても使用し得らる
五、火災危險等の心配少しもなし。
六、煮焼湯沸に多くの時間を要せず。
七、點消は容易にて手數かゝらず
八、天井を燻さず髮や衣服を汚さず。
九、費用は炭薪に比ぶるも安廉なり。
十、煮物の出來よく調味頗る佳し。

神田錦町 東京瓦斯株式會社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ホトトギス

十五卷第一號
本號に限り十月十日發行

要目

●死人を罵る男と死人との問答
●秋の濱邊の犬　高濱虛子
●舞鶴心中の事實
●合歡の木　伊藤左千夫
●合財嚢（文學者歷訪記）　飛行機
●伊太利文學小消息　日野月明紀
●畫家と其周圍　齋藤與里
●感想錄　若き女醫
●繪畫三十葉

發行所　東京芝區南佐久間町一ノ一ほととぎす發行所

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

最良髮油

みやけ油

登錄商標

東京人形町通

木村三宅堂

家庭重寶

專賣特許 一一九八

粉末石鹼

發賣元

東京市日本橋區人形町通

木村三宅堂

電話浪花六二〇 振替口座八七五一番

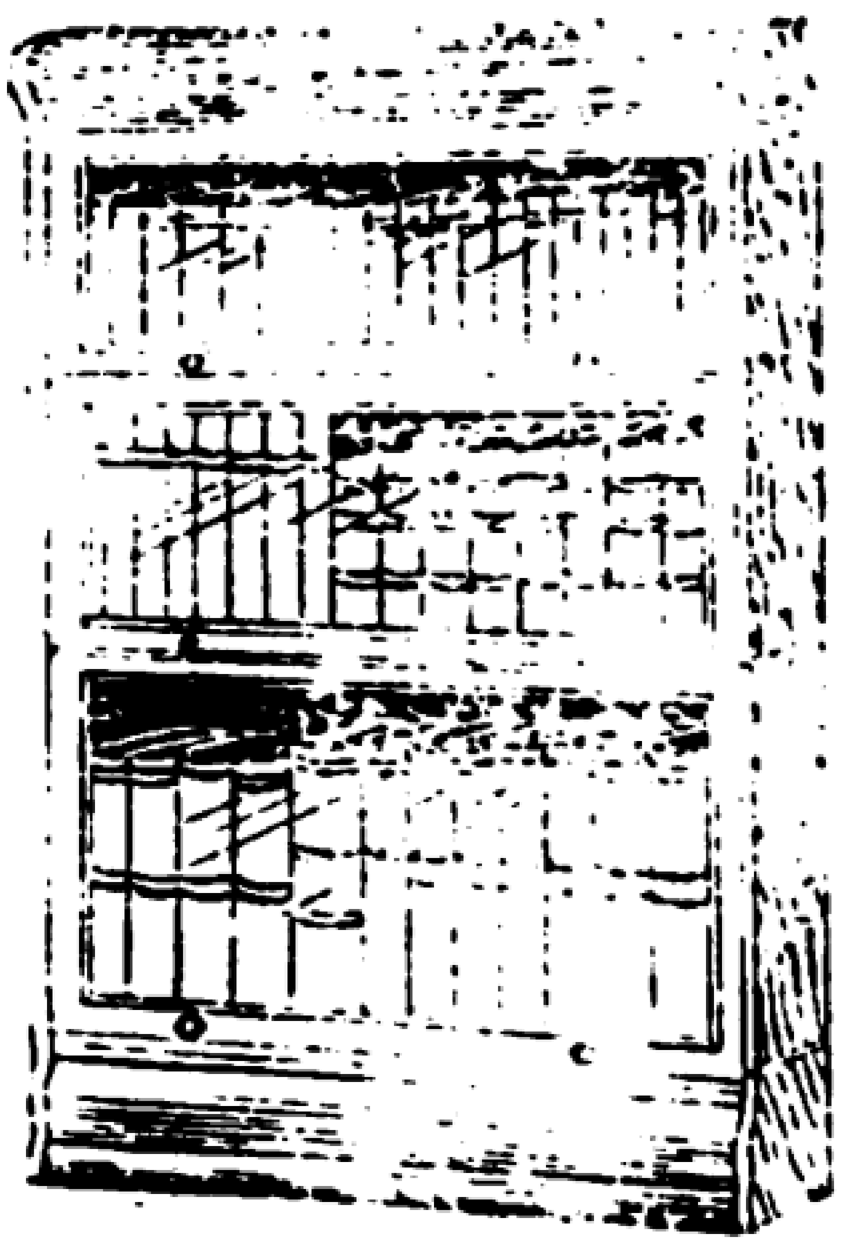
SECTIONAL-BOOK CASE

It fits anyplace

組合せ本箱

●最新式最新形の木箱にして目下歐米諸國に流行を極め居れり

●多數の優れたる特徴を有す、其重なるもの左の如し



▲藏書の増減に從ひ自由に其大さを伸縮し得べし

▲室内の構造に應じて適宜に配置し得べし

▲書物を入れたるまゝ手輕に運搬し得べし

▲硝子戸の開閉に巧妙なる構造を有す

▲書物を分類するに便なり

▲形狀優雅色彩美麗しかも堅牢此上なし

▲之れを要するに最善最良の本箱!!

構造を示せる目録は郵券二錢封入御申越次第進呈

定價
金二十六圓 桝製
金二十八圓 欅製
金三十圓 櫻製
運賃荷造費御自辨

It grows with your library

● 發賣元 東京市銀座大通新橋際 新橋堂書店 (振替東京二〇〇番 電話新橋一九九一番)

村井弦齋著 増補註釋 食道樂 全一冊 (春の巻 夏の巻 秋の巻 冬の巻 合本) 定價金二圓 郵税金十八錢

村井弦齋著 増補註釋 食道樂 四冊 (春の巻 夏の巻 秋の巻 冬の巻) 各冊定價各金八十錢 郵税十二錢

村井弦齋著 増補訂正 臺所重寶記 全一冊 定價金一圓 郵税金十二錢

赤堀峯吉 赤堀峯吉 赤堀菊子 共著 家庭應用 洋食五百種 全一冊 定價金七十五錢 郵税金十二錢

赤堀吉松 赤堀峯吉 赤堀菊子 共著 家庭應用 惣菜五百種 全一冊 定價金七十五錢 郵税金十二錢

故久保田米僊著 同息米齋、金僊畫 年中惣菜 全一冊 定價金八十錢 郵税金十二錢

故久保田米僊選 毎日の惣菜案内 全一冊 定價金十錢 郵税金二錢

故久保田米僊著 同息米齋、金僊畫 茶の湯の心得 附 茶席料理 全一冊 定價金八十錢 郵税金六錢

赤堀吉松閲 奥村繁次郎著 諸國名物料理 全一冊 定價金四十錢 郵税金六錢

發行所 東京市銀座大通新橋際 振替東京二〇〇番 新橋堂書店

秋色漸く闌と相成候

十月一日より―例年の通り

冬衣大賣出し開催

本年は新柄格別多數到着に付一層盛大に相催し可申尚ほ此の機會に於て

お袷ろぬ御仕度の御便宜を圖り

一日より十四日まで破格を以て

御召　金十一圓

本場秩父銘仙　金三圓八十錢

特に新糸織、紡績絣　金一圓四十錢

均一にて發賣仕り

よせきれ見切反物類は全部差換陳列いたし候

松坂屋

いとう呉服店

東京上野廣小路

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

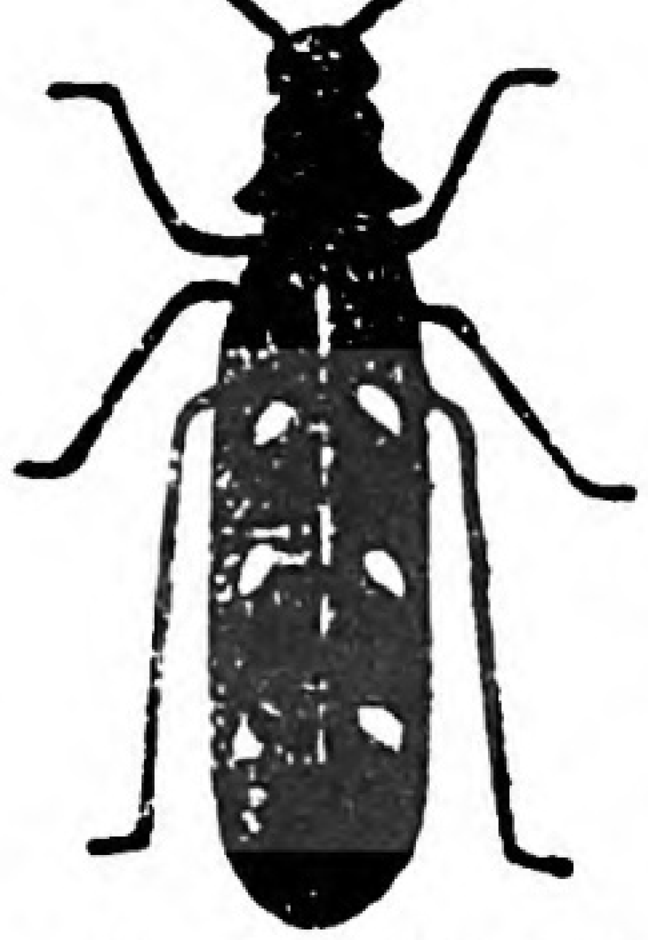
増築落成

○秋季新製品大陳列會開會　十月一日より
○藤原模様圖案應用衣裳陳列
○よせきれ見切反物數千種
○新商品（美術工藝品、陶磁器、什器食料品、履物）陳列販賣

創業貳百五拾年
増築落成
紀念大賣出し

○餘興場と少女音樂隊設備
○寫眞室の新經營と假裝衣裳の用意
○藤原式休憩室新設と食堂の改良
○東京市第一の大窓飾と昇降機完成

東京日本橋
白木屋呉服店



九月十五日より

友禪モスリン新柄陳列會の開會を期としモスリン類の大賣出し仕候

十月一日より

第廿二回新柄陳列會

雜貨新製品陳列會

諸大家新作美人畫展覽會

懸賞裾模様圖案陳列

懸賞寫眞「少女」陳列

第二回美術及美術工藝品展覽會

寄切れ見切反物大賣出し

右何れも特別盛大に開會仕候間賑々しく御來觀被下度希願上候

駿河町 三越呉服店

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

萬年筆ありや

机の上にてもよし原稿は之に如くなしレターも妙なり海に山に折々の野遊びにペン書きの端葉書は殊に風流也オペラバッグの中に萬年筆なきは現代のアトモスフォヤを呼吸する姫とは云はれじ

オリオン
オノト

金貳圓八拾錢
郵税金拾貳錢

自金六圓
至金六十五圓

丸善株式會社
東京●大阪●京都

雜誌規定

●毎月一回一日發行
●定價一冊金貳拾九錢　郵税壹錢五厘
●原稿〆切期日は毎月十日限とす。
●前金購讀料（四ヶ月分）壹圓（六ヶ月分）壹圓五拾錢
（八ヶ月分）貳圓（十ヶ月分）貳圓五拾錢（一ヶ年分）參圓
●廣告料（一頁）拾五圓（半頁）八圓
●廣告は總て後尾のこと、但し申込の順序に依る。
●振替貯金（東京口座一一六〇）に拂込まれたし
●郵券代用は一錢切手に限る（但し一割増のこと）

明治四十四年九月二十五日印刷
明治四十四年十月　一　日發行

編輯兼發行人　東京本郷區駒込林町九番地　青鞜社内　中野初
印刷人　東京市神田區美土代町二丁目一番地　島連太郎
印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍

禁轉載

發行所　東京本郷區駒込林町九番地　青鞜社　（電話下谷三七七六）振替東京口座壹壹六〇番

發賣所　東京市神田區表神保町三番地　東京堂　電話本局（一二四）（三二八）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜第一巻第二號
明治四十四年十月一日發行（毎月一回一日發行）
明治四十四年八月廿八日第三種郵便物認可

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

十一月號

明治四十四年八月二十二日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）明治四十四年十一月一日發行 第一卷第三號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

四十四年十一月一日
第一卷　第三號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜第一巻第三號内容

風邪（詩）……一……與謝野晶子
夢占ひ（振事劇）……七……長谷川時雨
安心（小説）……一二……水野仙子
枯草（短歌）……二七……茅野雅子
道子（小説）……三三……荒木郁子
言葉の力（飜譯）……三八……ホオ
菊日和（俳句）……四三……白雨
初秋（小説）……四七……上田君子
眼玉（小品）……五六……白雨
夕祭禮（小品）……六二……松本正生
夜明の灯（短歌）……六六……原田琴子
夕化粧（小説）……七三……木内錠子
高原の秋、……八六……らいてう
編輯後の雜感……一〇四……らいてう
社員諸姉へ（社員は必ず御一讀下さい）編輯係
表紙繪……長沼智惠子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

風邪

與謝野晶子

十月八日の夜の十二時すぎ、
三人の男女の客を歸したあと、
語り疲れて床に入つたが、寢つかれぬ。

いつも點けて置く瓦斯の火を起きて消せば、
部屋中の魔性の「闇」ははたと音をひそめ、
みるみる大きく成つて行く黒猫の柔かな手觸りて

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

わたしの友染の搔卷の上を輕く壓へ、
また、涙に濡れた大きな黒目がちの
人を引く目の優形(やさがた)の二十三四の女と變つて
片隅に白い右の手を頤(あご)にしたまま寄りかかり、
天井の同じ方ばかり待ち人のあるよな氣分で見上げる。
(それはわたしの影である。)

部屋中の靜かなことは石炭の庫(くら)の如く、
何處からとなく障子の破れを通す霜夜の風は
長い吹矢の管(くだ)をわたしの髪にそおつとさし向ける。

わたしはますます寢つかれぬ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

閉ぢても、閉てても目は圓く開き、
横向に一人じつとして身ゆるぎもせぬ體（からだ）は
慄毛（おぞけ）だつ寒さと汗に蒸される熱さとの中で烹られる。

わたしは風邪を引いたらしい。
それとも何かに生血（いきち）を吸はして寢てるのか、
時計は二時を打つ。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

夢占ひ

長谷川時雨

晩秋の野末の路の、すがれたる叢にもう虫の音もない。驛路の鈴の音にて幕があく。此處へ出てくるものは、つんぼの夢占ひの媼さんと、醉どれの奴と、阿呆の郡司の子息と、旅の二人連の男の五人だけである。幕があいた時に、夢占ひの媼さんは路のまんなかに座して、片手に煙草につける火繩をもち、片手に御幣のようなものをもつてゐる。ずつとそれより左の方に、枯草を敷いて奴が寢てゐる。その醉どれの背へ、秋の入日がうつすりとさしてゐる。

(媼のいふだけのことは、下座の祭文節がかはつて語る)

唄祭文「ええこれは夢うら判だんする商業。よい夢ならよい占をたて、惡い夢なら獏にくはせる考へつけましよ。迷ひこよ迷ひこよといふたら巫いちこを思はしやろ。此處ぢや夢うら、吉凶判だん賴まれまをそ。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

酔どれの奴、むくむくと起上りて、目をこすりながら娼を見すゑる。

奴白『あはははは、いつの間にか娼様が、夢うら判だんの店をおつぴらいたわ。

『でもさても、地から生へたか、どこからひよつこり出かけてきたか、どろりとろり、とろとろと、油のような酒に酔て

投ぶし『すがれた茅が世の屏風、君を抱寝の肘まくら。

『ええい。どつくりと共寝をした夢を見た。ああ、ああ、ああ。欠伸が出るほど寝てくれた。そこへお娼がひよいと出て、夢うら判だんか。へゝや、お手の筋。

『おなじ化るのなら、美しいのになつてござれ。お娼ぢやどつこい、やつこらさ。

奴白『やつとことつちやうんとこな。

『寝むりこけたる髭男、八里八方、四里四方、野分けのような大鼾。

奴はまた、徳久利を抱いて倒れ伏す、

唄祭もん『これは夢うら判だんするものよ。よい夢ならよい占をたて、悪い夢なら獏にくはせる考へつけましよよ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

奴は不意に起上り、夢に迷ふてをかしき身振りをはじめる。

奴「これこれこれ、まあまたしやれ。何處さお出なさる。いや、女郎様の御腹立至極御尤なれど、この奴め、ちくとんべえ酒によふて、お頼まれのものつい調へかねた此頃には仰せられたこと、美事叶へまをさう。小判十枚、へへ、いと安い事。よし、よし。紫鹿の子の裾つけた、白地摺箔の小袖一枚、うんうん、それもよし、それもよし。其次は、何ぢやと、水のたるるやうな鼈甲の櫛笄か、をつとずんとよし。奴は粋ぢや、萬端美事なのを見立て進上せう。ぬし様はその小袖を着て、笄さして、ぴらりしやらり、ぴらしやら、ぴらしやら。をゝはづかし、おほほ、ええも、憎らしい。

「ささ、ござんせ〱この粋もののめ。

またころりと奴は倒れ伏す。

唄祭らん

「迷ふ夢ならゆく道つけましよ。文の夢なりや物ごと長びくものよ。夢に粋ならさめてが不粋、夢は逆夢とかくおのれの得手勝手、吉凶判だんほどよくしましよ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

奴「はくしよ。そねめ不粋め、とかく水をばさしたがる。こちの間にや、浮氣な風は吹(ふき)はせぬ。

奴夢中にて身を起し、また眠りこける。

(次の唄の二節は、異りたる方面にて双方一所に唄ひ出す)

唄祭もん「迷ふ夢ならゆく道つけましよ。文の夢見りや物事長びくものよ。夢に粋ならさめてが不粋。夢は逆夢とかくおのれは得手勝手、吉凶判だんほどよくしましよ。

「野邊はたそがれやや寒の、西風たてば薄の穂花飛散つて、今宵は霜か、村雨は、野路の旅には封じもの。空に殘んの夕照(ゆうやけ)を、振かへり見るさんど笠。

唄につれて旅人二人來かかる。夢占の爐は、座つてゐるままにて火鋼を旅人に突(つき)つける。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

唄祭もん「これは夢うら判だんする商業(しようばい)よんべのお宿の夢うらつけましよよ。

旅人白「はて、昨夜の夢占ならいらぬこと。

「今宵とまりのよい恵方、右か左か、左か右か、宿の姐(あね)へが兩方いちどに袖をひく。

旅人白「その判だん願みましよ。

旅人白「あははははは。夢うら判だんの嬢様(じよさ)はつんぼか。

「こりやまたどうした事てあろ。

旅人白「さあ急ぎましよ、急ぎましよ。

「見かへりもせぬ夕鳥。

旅人はさつさといつてしまふ。異なる道よりところの郡司の子息、阿呆なる様にてとぼとぼと来かかる。

「あほうあほうと唄はれても、さてひよんなもの、昨夜の夢にたしかに逢ふた。ありや前の世から定まつた、いとしの妻ぢや、我妻ぢや。

白「夢にあふた。女子(をなご)やい夢に逢ふた女子(をなご)――やい。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『あいと返事もしをらぬか。ええ何故消えた、なぜうせた。つれなの人や戀しやな。

唄祭もん『夢なら判だん頼まれませう。

白『や何といやる、そちや夢うら判だんか。

『嬉しや嬉しや、まづ言はふなら、昨夜見た此方の花嫁御は何處の誰ぢや、まづそれからきかう。それからとしは幾才ぢや、十七八か、いいや十九か。

白『ええ二十歳になぞはまだならぬのぢやわえ。

『みる目よし姿よし、大々吉吉、上上吉。婚禮萬端の日どりも便次に見てたもれ。

白『へへへへへ、よい嫁御ぢやよ。

唄祭もん『悪い夢なら獏にくはしよ。夢は逆夢、とかくおのれの得手勝手。

白『うう、おのれ。

唄祭もん『迷ふ夢ならゆく道つけましよ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

白「そりやほんにか、これほんにか、ほんにか。

叔は夕風に吹かれ、惡醉やゝさめて、先刻から二人の樣を眺めてゐるが、つい出しやばつて、

「これさ、これさお若衆、嫗樣はつんぼて馬の耳に念佛、おれさまに強意見と同じ道理て、駄目さ、駄目さ、仕方ばなしに願まれまそそ。

「さらばかうぢやよ、ちよとこちへござれ、よんべ夜中に髮美しき上﨟が、

白 ぴつたり傍へよりそふて

「やいの、やいの、どうでも君に離りやせぬ。

白 と、いふた。

叔「味なはなしに實がいつて。ふふふふふ、そりや夢かいの、しん實か。

白「いいや夢ぢや。

「夢ぢやからとて、離れぬといふたを反故にして、ゆくとはあんまり、つ、つ、つ、つれ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ない……、忘れかねたる面影、それ、それ、それそれをを、そこにゐてぢや。

奴に縋りついて泣落す、奴し女を氣どるをかしみ、媼はけげんな顔に二人を眺めて。

媼白「奴どのは狐つき、こつちの和郎は狂人か、

「はて面妖な、眉毛につばして、どりや歸りましよ。

奴「やれまてどつこい、どつこいしよ。おんら一人で物にするのは和母へ笑止。な、な
な、ものにおしやれさ、な。

種々な身振にて媼へ納得させる。媼はやつと得心ゆきて物々しくかまへる。

媼「自體（じたい）そさまは何者ぢや。

阿呆「郡司の和子と人はいふ。

奴「よ、よ、よ。そんならたんまりやられるわ。

奴白「小判といふものもたしやるか。

阿呆白「これここにたんとある。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

奴「おつとよしよし、姫様に一枚、も一枚はづんでくれべえか。ところで奴が、ひいふう、五ッの十。山吹色はかはゆい酒を思はせる。

奴「嫁御は今宵おじやらりよう。御名は、むにやむにや、夢姫か。たしかにお姫さうぢやげな。

阿呆白「さうぢや、さうぢや。

姫もよい加減に傾いてゐる。阿呆も嬉しさうに傾づく。

奴「しめ、しめ、しめ、しめ、しめ、しめこのうさぎ。月の出ぬ間に、どりや一さんにずいとく寺。

姫「わしも今宵は五勺(こなから)買はう、奴どのござれさ。

奴「お姫もおじやれ。

阿呆「わしもしめ、しめ、しめ子のうさぎ。姫と逢ふには何處がよい。

奴「露をしつぽり寝まつてござれ、待間ほどなく忍んでござる。

阿呆「ほんにほんにさうぢや。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

阿呆は草の上に匍匐ひになつて、手拍子足拍子をとる。

奴「ねむりやほどなくそこらへござろ、一夜しつぼり草枕、朝のお顔がちよと見たい。

阿呆「ほんにほんにさうぢや。

奴「しめ、しめ、しめ、しめ、しめこのうさぎ、月の出ぬうちどりやずいとく寺。

阿呆「ほんにほんにさうぢや。

奴と姐は、手振をかしく踊りながら遠ざかる。阿呆は一人興じゐる。——幕。——

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

安心

水野仙子

「おい！」

石鹸玉のやうにふはりと輕く出た言葉が、ふと譯もない輕い心持ちにしてしまつて、いきなり彼は同僚の肩に手をかけて、口を歪めて笑つた。

「なアおい！」

其時また〳〵勢ひに乘じた心持ちが、卷舌の生醉狀態の面白さを思ひ出して、どうやら足許も亂してみたくなつた。けれども白面なのは確かであつた。二人は今仕事からの歸りである。彼はまだ晝間の汗を入れがてに、白い襯衣を見せて半纏を肩にかけて居る。旗掛けの黑十文字が背中に横に組んで、頸窩の深く長いのが、後から見た彼の特徴であつた。

折からくう――と一つ向ふの線路に電線が呻る。大蝗の肢を逆さまにしたやうなポールが、しゆうと辷つて電車は遙かの家並の陰に現はれた、と思ふうちにまた家並の陰に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なつた。近頃めつきり色を増した青葉の中から、踏切りの白い柵がつと揚るのが遙かに見えた。

「なア周公、昨夜はよかつたらう、面白かつたらう、なおい、どうだ振られなかつたかい？」

「ふゝ、薄笑ひしてやがら！」

彼は半纏に手を通した。すると、彼の手から肩の離れた男は、圖拔けて高い背をのつそりとして、外つ方を向いて粘つた唾液を吐いた。唾液は土手の若草にかゝつた。其若草の連らなる果てに、樹立を置き、家根を並べ、その不揃へな間に際立つた○村の教會の尖つた屋根に、夕陽は今燃えかけて居る。

「どんなことを言つてたい？」

ふとこの言葉だけが彼の口に出た。ふとした昨夜の出來心から、薄のろの男をそゝのかして、新宿の場末に汚れた淺黃の暖簾を潜つたのから、思ひ出はそれへ〳〵と其場の情景を繰つて居るうちに、肥つた女の里訛りがこんぐらかつて、その夜の朋輩が對手の女の顔を思つた時にふつと言葉になつたのである。

「知らねえよ、己らそんなこと！」

大きな男にとつては、これは彼が出來るだけの最も適當な返辭であつた。並はづれて大きな口のあたゝ　極りの惡いさうな薄笑を浮べて、小さな粒々しい目を、眞面に見られ

た魔女のするやうに外らして、紅い空のあたりに遣つて居たが、猶口のあたりに殘つた微笑ともつかぬ微笑みが、そこに人間としての初めての快樂の思ひ出があつた。
「己れの奴がね、今度貴方に襦袢をこしらへてあげませうねえつてたよ、唐縮緬でだとさ」
言はでもの空言てある。いつの日に割引の電車の中て、口のゆるい筒袖の三人連れが、あたりかまはず高聲にふざけて居た、其時の話を思ひ出したのであつた。
「だからもつとせつせつと通つてやらう。
「……………」
どうだい……………」
彼は何たしら言はずに居られないやうな氣がしたうぶな明輩の態度が、もの可笑しさよりもなんとなく羨しいやうな氣がするのであつた。
ふと
「どうだい、少しばかり貸してくれないか」
と彼は男の肩に手をかけて見た。輕い氣持ちだつた。それが眞面目とも笑戯ともつかず。
「なア、少し貸して貰へてえんだが」
ふと此時彼は妻のことを思つた。さうだ！この月が臨月である。毒々しく黑くなつた乳

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

首頸くまつはる二人の子供を叱る時に光る目、堪らないやうな肩で押し出す息づかひ―彼は少しく悄氣た。まだ何の用意も考へてなかつた。

「なア周公、少し融通してくんな、ちつとばかり要ることがあるんだから」

彼は聲を優しくして女にする手管のやうに、掛けた手に力を入れて對手の體を搖つた。

「どうだい？」

「…………」

「すまねえがね、全くすまねえがね、己ア奴等のやうに手前を騙すつもりぢやねえんだ、だから初めてよこんなこと言ふなア、そしてこれがおしめへよ、全く少し要ることが出來てるんだ、な、嬶があんなだらう、今夜にも飛び出さねえとも限らねえ、うつかりしてゝ己らつひ昨夜遊んぢやつた、構はねえ誰だつてその出來心つてあらアなア、差配の爺め今朝ア己れの手先を取ッつかまへて怒鳴つてやがつたつけ、尤も己も惡いや、滯らせるのが惡いや、けれども仕方がねえ、質が出せねえつたつて…………」

ふつと彼は口を切つた。恐ろしく生眞面目になつて居たことが自分でも知れた。元來彼は氣が小さかつた。さま〴〵な不義理や不自由を思ひ出すと、それが一々彼の胸の肉を鋭い齒で嚙へて行つた。

「手前だつて有り餘つてるんでねえことア己れだつて知つてる――だからあのそら

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

品てもいゝことよ、長かあしねえ決して、決して」

繰り返した言葉に彼は力を入れた。全く決して彼は長くしない積りであつた。泣き出しさうな程小さく眞面目になつて行つた心は、ものを積むやうにたゞ目的に向つて働きを積んだ。

「頼むよ、なア」

ふと對手のむッつりして居るのが心許なくなつた。ひよいと鶴嘴の肩を替へた時に、沈み行く夕陽の名殘りが背後になりかけて居るのに氣がついた。あたりを見廻すとよほどもう日は暮れて居る。目先近く踏切りの番小屋が灰色に立つて、〇村の往還に軒燈の灯が薄くちら／＼してみえる。

「いやに默つてるぢやねえか」

「出來ねえものをよ！」

男はのつそりとして居る。彼はなんとなくむら／＼とした。男の吝嗇なのは常から知つてゐる。意固地て、その癖うすのろて、へん、それてもあの婆あめ、子は可愛いとみえて、袷せの古などを買ひ込んぢやあ、青梅在から出て來るんだつてね、いつかそれ、己ァこんな工夫なんかしねえたつてもよ、なんて大きいことを言つてやがつたつけ、へん吝嗇め！」

「出來ねえたつてお前………」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「出來ねえつてばよ！馬鹿アいふない！」
「何つ？」
損失には飽く迄も頑強な態度をとる吝嗇の常、男の顏に爭はれぬ強い色を見ると、多はたゞ譯もなく失望した。失望を補ふ忿怒！
「やい！」
力委せに右の手でぐいと小突くと、途端は丁度足を奪つて、わけもなく倒れかゝる男の肩に、鶴嘴が重さをなしてどうと倒れる。隙もなく體は體の上に重つた。胸の上に折つた膝と、頸にからんだ兩手の輪とが、彈機の外れた壓板のやうに力が籠ると、跳ねかへるやうに空を躁く兩足と腕に獅嚙みつく兩手とが、益々無我夢中に力を添へる――。
彼はハッとして彈かれるやうに立ちあがつた。我にもなく四邊を見廻すと、不思議や人の影一つない。彼はかへつてそれが怖ろしいやうな氣がした。力の拔けた腕をそゝのかすやうに胸が早鐘を打つ、痲痺れた頭はぶる〳〵と慄ふ股の肉を制止するすべを知らなかつた、髮といふ髮の毛が逆立つばかり耳の下にぞつと寒い風がふく――一目散に彼は驅け出さうとした。けれども丁度それは夢の運動のやうなものであつた。走らうとする心を體が引き止めた。動かうとすれば心が重く殘つた。彼は無暗にたゞ四邊を見廻した。人の家の灯が遙かに目の底にちら〳〵する。ふと見ると線路の土手が目の前に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

斜めに黒く横つて居た。
沈み終つた夕日の空の名殘りも消えて、若草の緑が黒ずんてみえた。横はつた黒い物體のまはりを、彼は輪を劃いてぐる〱とめぐつた。その黒い影に解けあふやうに日は全く暮れた。

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

すが〱しい青葉の世界、初夏の朝に目覺めた○村が、貫かれた線路に氣持よく身輕な電車をすべらしてゐる。それが遙に見えた。村の一部と、青い空地と畑とを圍んで獨立した鐵道線路には、長い客車が走り去つたあとに四本のレールが光つて居た。
ふとひよつこりと現はれた人影、それがすた〱と歩いて來て、やがて躊躇ふやうに四邊を見廻した。線路を外れて若草の續きに足を入れて行つたが、草にせばめられた溝の淺い水の流れを、あちこち追うて居た目がふと留まると、體をしやつきりとさせてまた四邊に人のないのを確めた。
人影はやがてすた〱ともと來た方へ引つかへして行つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「丁度私が起きたばかりで、顏を洗はうと思つて井戸傍に出て來た時でした。奴がのつそりと木戸口からはいつて來て、親方大變ですつて眞靑な顏して私の前につゝ立つてるんです。尤も眞靑な顏もしてる筈でさア、その顏つてねえもんだから、私も一寸ぎよつとしましてね、どうしたんだつて聞くと、人が死んでる人がつて言ふんでさ人が死んでたつてそんなに驚くにも當るめい、一體何處にだいつて聞きますとね、これの溝ん中に足が見えるつて話なんでさ、私あ一圖に乞食の行き倒れでゝもあらうと思ひましてね、ぽつとけやいゝがかゝり合ひにでもなると惡るいやつて言ひますとね、その全く乞食の行き倒れだと思ひ込んぢやいましたんで……奴是非私に行つてみてくれつて言やがるんです、かまこともねえや、手前仕事の出先なら行きがけに交番に聲かけて行きねえつていひましたんですがね、奴どうにもかうにも私に行つて見てくれつて聞かねえんです、私も面倒だと思ひましたが、その一寸やつぱり好奇心でそれぢやあつて出掛けた譯なんでしたが、道々幾つばかりの男だいつて聞くと、二十三四だらうつて云ふんです、私もその時あ氣が付きませんでしたが、今になつて考へて見ると、あゝして溝ん中につゝぷして居る者の年がさつぱりわかる筈がありませ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

んや、引き起しても見もしねえてね、手はれねえもんですな、恐ろしいこつてす。だが奴も飛んでもねえことをし出來したもんて……それぢやアお上ぢやもうちやんとお調べがついてるんですかい、眞實に飛んでもねえことをやらかしたもんて……奴あ決して惡人ぢやありませんよ、私も去年の手不足の時に一寸使つてやりましたばかりなんて、その決して深い關係があるわけぢやねえんですがね、決して人を殺さうなんて思つて殺すやうな男ぢやねえと私は思つてるてす、途端てさア必と何かの氣負つて來ると馬鹿に調子に乘る男てしてね短氣だけに手は早いやうてしたが、何にしても飛んだこつてす、奴が殺つたんてすかねえ、で奴あもう捕縛られましたんて？」

○村の植木職直次郎が、S警察署の訊問所て申立てたことは右の通りてあつた。

植直はほつとして嚴めしい署長の前を離れて訊問所を出る時に、手錠をはめられてしほ〳〵と警官にひかれて來る彼に會つた。

出會ひ頭にふと顏をあげた彼は

「あ、親方、私もこれてやう〳〵安心しました」

から言つて彼はがつかりと首を垂れた。――完――

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

枯草

茅野雅子

君が手の脈かこの手をうつ脈かゆふべの森に音かたかくなる

わが夫ふた月病あり稲の穂に朝風ふけば心かなしき

大なる不幸の來るを感ずるや明日といふ日にこころ戰く

雨七日ふくろのごとき山峽に君とわかれてものおもひをり

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

君とせし後の世界をおもふほど靜けきこころあはれなるかな

君うすむ夢の世界か湖に火をふく山のあかくうつりぬ

白樺に秋のかぜなる山國のあしたの雲にしたしめるかな

終の日來る心地しぬ枕邊のしろき花さへ水盤にうく

時來れば蛹も繭を嚙みて出づ吾等はふるき世界よりとぶ

女をばなぞ嘲けるや女より生れぬ人のあらじとおもふに

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

君病めばこころまづしくなりにけり亡びゆく日をみてあるごと

葉のひとつおつる音にもおどろきぬはじめてわれや秋に逢ひけむ

をさなごにまじりてけふも歌うたふ秋の夕日の雲ながめつつ

秋風は君が素足と傍なるなでしこ吹きぬしろき石をも

あるかぎり悲しきなかに手をとりてさみしく笑みぬ十月の丘

わが夢の世界より來し數萬の少さき蝶かもしら萩の花

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

人のことわが身のこともあきらかに見えてさびしき日となりしかな

ましろなる菊に似たりと顧みてわが若き日をおもふさびしさ

やや黄ばむ秋の森より鳥とびぬ別れし人を追ふがごとくに

かぎりなきかなしみ來る日につづくこの日のごとく思はるるかな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

道子

荒木郁子

ヂョセフの室に這入つてドアをどんと固い音させて閉めた時、道子は厭な氣持がした。野良犬みたやうな彼の心、其れをよく現した肉感的な赤い鼻むやみに高い脊丈を對手に釣合のとれる丈け丸く曲げて、近寄つて來る容姿にむつと咽せ返つた。と、同時にそれを知りながら訪ねて來た自分の心の底にうづくまつてゐる汚い或ものが、電光のやうに、ぱつと眼の前に閃めいた。

道子は撓んだ心に映つた閃めきを押隠さうと焦つた。焦れば焦る程込上げて來る不快の情をせゝら笑つて心の中に恁う叫んだ。

「何の、何のたゞ金を貰へばそれてよいんだから、而して又、呉れるだらうからて其の貰ふ迄の辛棒だ」と、

「ヂョセフさん暫くてしたわね」

「まあお道さんよく來ました」
ツフハーを勸めてヂョセフの手は戰へてゐた。それを道子は何とも感じないやうに、極く華やかに笑ひながら彼の手を握つて美くしい表情の多い眼を働せた。
「來やう來やうと思つて居たんですがね、多忙かつたんですの……あ、それから、之れは貴方に御送りする爲めに備へましたのよ、好い香でせう。」と花束を圓卓の上に置いた。
ヂョセフは烈く周章たやうに、有難う、有難うを繰り返しながら花束に接吻して、室の中を歩き出した。而して鏡の前に立つてネクタイを押へて、髮を鳥渡手で撫てゝブローチを差變へ、道子の前に來た。
「貴女よく私を忘れませんでしたね。忘れましだと思ひました。私は毎日〳〵貴女のことを考へました。」
「さう。有難う。」
「有難う？　え、眞個有難？　私好きですか」
ヂョセフは、道子の兩手を握つて同じくツハーに腰を掛けた。
「けれど……」
「なきなら何故來ませんでした？　私毎日〳〵待つた、眞個ね、待ちました。」
「私ね、私……　貴方を好きですけれど、種々用事澤山〳〵ありましてね、それで來ること

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の出來ませんでしたの。」
「何の用事。」
「何だつて好いぢやありませんか、私の用事私丈け知つてゐる用事。」と捨てばつけな口調で云つた。
「貴女だけの用事？面白い用事ね」
　ヂョセフは譯もなく笑つた。さも可笑さうに笑つた。笑ふ度に道子の手を握りしめて高く振つた。それでも道子は何とも云はぬ。手を振り離しさうにもしない、唯々される儘に任してゐる。而してぺつたりソファーに身體をおつつけて、妙に人をそゝるやうな容姿をした。
「お道さん、貴女此頃何處にゐます？」
「私？私ね好い處にゐますの。淋しい〳〵ことをして、だけれど淋しいのは心丈けだわ。身體は矢張り元々通り賑でもあるし又面白さうよ、……こんな話、したつて貴方にや解りやしないわね」
「解らないことありません。此頃何でも解るやうになりました。」
　道子の閉めたドアを輕く打つて、僕のアモンが紅茶と御菓子とを持つて這入つて來た。彼の頃は、日本語が少つとも出來なかつたんだがと思つて男の顔を見た。輕く笑つた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

アモンは世辭らしく

「暫らくでした御道さん」と音のよい日本語で云つた。

「アモンさん。私を忘れなかつたのね。彼頃には日本語が少つとも出來なかつたんだが」

にこ〳〵しながら戸を閉めやうとしたアモンに、ヂョセフは何か大きな聲で命じた。

外には蜩が忙さうに啼き出した。窓から、ぱつと淡い夕陽が差入つて、冷めたいマントルピースの上に飾られた石膏像の白い額に、そつと接吻した。

道子が始めて此石膏像を見たのは、一昨年の丁度今頃であつた。其時分ヂョセフは、橫濱山の手通りの小高い丘に住んでゐた。道子は其家に出入する商人の娘であつた。

女學校を中途で停めてぶら〳〵遊んでゐた道子はつゝましい裁縫や、お花のお稽古に落着いてはゐられなかつた。と云つても、家事の手傳や、弟妹達の世話をする氣にもなれなかつた。自尊心の強い道子は、近所の若者對手にさわぎ廻る娘連の仲間入もしなかつた。

とも角、若い人達丈けに與へられた華やかさと、特に自分が持つて生れた眼の美くしさとを無用にしない丈の考はあつた。

折々商賣上のことで番頭代りに好んで出かけた西洋人の家の空氣を吸ふ道子は、美くしい花の香、それ等から呼び起される歐洲の華美な街のすがた、夜會に咲く紅い花の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

かほりなどがまぼろしのやうに道子の胸をかすめた。

或日のことである。道子はヂョセフの家を訪ねた。妻君のない若いヂョセフは、可愛い道子の口から自國語の片言を聞いた時大變に嬉しく思つた。始めて會つた日からヂョセフは道子の美くしい眼と、快活なそぶりとが氣に入つて了つた。道子は而白半分に片言の佛語でいろんな話をした、赤や青や紫の奇麗なガラス戸のあるカトリックの教會へ度々行つたことも話した。それから其教會に附屬してゐる小學校出身であるといふことも話した。佛蘭西好の道子は、其後も度々ヂョセフの家を訪ねるやうになつた。而して、時には、晩餐も共にした。一緒に散歩もした。道子はたゞ佛蘭西の話が聞きたい許に、ヂョセフの許に通ふやうになつた。

然しそれは長い間ではなかつた。萩の咲き初める頃から、漸く紅葉の霜に遇ふ頃迄の事であつた。その短かい日と日との間を二人は、長い年月のやうに、幾度も繰り返したとのあるやうな氣分で、大變に親しい日を送つた。所がヂョセフの職の都合で二人は、一緒に佛蘭西のあどけない夢を見ることが出來ないやうになつた。

天長節の翌日にヂョセフは、道子に築地の此度住む家の番地を書いて渡した。其夜はもう東京の人となつたのである。

好奇心な道子は住み馴れた横濱より東京の廣い町を憧れるやうになつた。それに、ヂ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ヨセフといふ話對手もあることだから、又好いきつかけでもあるからと思つた。それで行つてみやうといふ氣になつて父母に話した。然し父も母も其れには大の反對あつた。止められたので尙行かねばならないやうな氣持になり、いこぢな道子はヂヨセフが發たつて一週間と經たない中に、横濱の長く住みなれた家を惜しげもなく振り捨てた。

目と鼻の間ではあるけれど、物の心を覺えてから、未だ一度も來たことのない道子は、東京の明るい街から、今迄經驗したことのない、和らかな淋しい、又、深みのある何物にか觸れたやうな心持であつた。唯々もう、一足先に流れてゐる銀色の瓦斯の光のやうなゆつたりした心持になつて、眼新らしい街を左へ、右へと迷つてヂヨセフの家へと着いた。

築地の此家に厄介になるやうになつてから、間もなく又も此家を無斷で出た。それはヂヨセフが眞面目な同情とか愛情とか以外に、特に異性丈に求むる或るものを要求したからである。

道子は極く無邪氣な小娘である。向ふ見ずの御轉婆でこそあつたが、荒んでこそゐたが人の心の裏に潜でゐる、よどみや、世間並な浮ずつた交際の中に覗かねば見えぬものを、見やうとする女ではなかつた。そのやうなことは全で知らない處女なのである。此の小さな面白がりやで飛びつかゞり娘は或る夜一睡もせずに、將來のことを眞面目に考へた――それはたゞもう自分自身の幸福といふことについて。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

而して翌朝チョセフの家を暇乞もせずに、立ち去つたのである。

淺草新福井町は汚かつた。築地の美くしい建物からみると豚小屋のやうに汚なかつた。殊に道子の訪ふた家は烈かつた。煤や塵で塗り込まれたやうな古い柱はゆがんでゐた。薄暗い茶の室には出來かけの細工物や、木の箱などが一ぱいに積み重ねられてゐた。その殘つた僅かな二三疊には、火鉢や茶盃やらうす汚れた座布團やらが亂雜にちらかつてゐた。流石に簞笥丈はてか／＼赤銅色に光つてゐた。小さな姪や甥がうぢや／＼泣くやらおこるやら全て動物の住所のやうであつた。其むさぐるしい一種の長屋の臭氣のたち籠めた叔母の家に暫く厄介になることに定まつた。

此家には女と男と取り雜ぜて二三十人の職工が每日通つて來るのである。裏の日のあたりさうもないしけつた三軒長屋を打通しの工場からは、堪へがたい程やかましいわめき聲が聞へて來る。橫濱の貸家に飾られた美くしい刻物や細工物、高價な種々の置物等が恁ういふ人間離のれした住所から生れてるかと思ふと、美術家に對する尊敬と、美といふ文字に對する憧憬の情とをそゝがれるやうに思へた。と同時に努力に對する報酬の充分でないといふことも考へずにはゐられなかつた。終日働いてゐる彼等には人間らしい喜と幸福とを享け入れるには餘りに忙し過ぎる。餘りに貧しすぎる。などと、自已離れのした生活問題や、彼等下級人民に對して冷酷な社會に烈く不平を持つやうに

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なつた。

「どんなに働いてもあれなんだもの」

道子は度々恁な獨語を云つた。道子の地についてゐない足は此頃から漸く確りして來た。が又、飲めもしないお酒を臺所で自分の茶碗に注ぐ位の藝當もやるやうになつた。歸家から聞き覺へた。――

花の暈が遠山の雲か花かは、白雪のなかをそよ〱吹く春風に浮浪誘ふやさゝ波のこゝをかもめの都鳥………

なんて、口三味線で、調子合せる事も出來るやうになつた。それから裏へ來る職工を捉へて淡薄した、戯談も云へるやうになつた。其年も去つて春が來た。若々しい氣の起る飾も松竹も、道子には淋しさ哀しさの變化とより外には思へなかつた。道子は哀しくかたまつた大人になつたのである。長い間喰みついてゐた子供ぢみた嬌さや、賑しい初々しさたは何處へか去つて了つたのである。

道子の行末を掩ふカーテンの前を、走馬燈のやうに、廻つてゆく、暗い影と、やるせない疲れ切つた自分の姿をうつとり引きづり込まれるやうに見入つて居た。而して時には獨語を云つたり、人の前に來て長い間物言はなかつたり妙に落着かぬやうになつた。此頃道子の心は一種の精神病者のやうになつたのである。兎も角雨か雪か模樣替へを見

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ずへには濟まされぬ狀態であつた。丁度雷の鳴る一時間前のやうに、地震のゆる前の日のやうに――椿の花のやうな道子の心は、細い指一本さわつても、もろく落ちるのである。張りつめてゐる道子の心は其細い指の一本を待つてゐたのである。其の悲しい宣告を待つてゐたのである。

道子は或る日叔母の家を又も無斷で飛び出した。而して或る男と一所に何屋かの二階を借りて、有邪無邪な日を十日許し笑ひくづした。

「何したつて好い生活は出來やしない。終日働いたつて、又働かなくつたつて似たやうなものだ貧棒娘は成丈け樂さうな仕事を探し出した方が勝なのだ」と、慾な暢氣なことを云つて男と別れた――朝から晩まで同し男の顏を見て暮すといふことに飽いたのである――而して料理屋の女中になつた。それから、田舍の宿屋へも行つた。下宿屋の女中にもなつた。而して今は工學士の篠田といふ國元には妻も子もあるものと同棲をするやうになつた。

篠山は遊人に學問をさせたやうな男である。

田舍の富豪に金を出させて高等學校から大學迄行つた。其富豪の娘である彼の妻は、彼の幼い子供と一緒に實家にゐるのである。

家庭があつてないやうな彼は、月給の全部で自分と、道子との生活に足りれば好いの

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

てあつた。二人の關係は非常に自由なものである。外國にあるとか聞いた自由戀愛俱樂部とか云ふものでも此の家庭には、一歩を讓るであらうと思はれる。兎も角、二人が愛し合つてゐたといふ事は事實であるが然し、お互に女も男も一週間も顏合せずに過すこともある。それは、互に出歩いたり。又、各自の情人の處を尋ね廻つたりするからである。それを二人とも、別に不思議とも思はない。篠田が月給日から十日も歸つて來なくとも道子は濟ましたものである。お金のある間丈は出歩いて相當の散財をして來るが、失くなつても一向に案じないのである。そんな時は、知人の許に驅け込んだり又、篠田の着物や書物を質店に任せたりするのだ。その方法がつきた後は以前關係したのろま男の處を訪ね廻つて絞れる丈絞つて來るのである。だが萬一先方で烈く困つてゐるやうな風だと、Aから貰つたのをBの處に全部置いて來るやうなこともした。今日は其等の方法を盡きたので仕方なしに何年も來なかつた思出の多いヂヨセフの家に來たのである。

「お道さんお食りなさい」ヂヨセフは圓卓をぐるつと廻つて道子の隣へ腰を掛けた。而して又落つかぬ風に立上つて室の中を歩き廻つてドアを開けて見廻してポケトから鍵を出してカチンと云はせた。道子は何も氣附かないつていふやうに、そのくせヂヨセフの心は一から十迄飮み込みながら初心らしい顏して

「ヂヨセフさん。私ね今日お金を借りに來たの」と小さい聲で、戶口からソフハーの方寄

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つて來る彼の腕を握つた。而して甘へるやうに下から其赤い顏を見た。

「さう宜しい。」

彼は、其後それにつひて何も云はなかつた。たゞ物言はずに、ソファーへ腰かけた道子の美くしい姿に見とれてゐた。

互に違ふ意味で荒び切つてゐる二人の呼吸する此室にも和らかな夜の幕は下りた、ひつそりした燈火の花も咲いた。

やがて運ばれた食事を二人ともおだやかでない氣持で濟した。道子はウヰスキーをと自分から云ひ出した。酒嫌なヂョセフは、道子の醉ふて喋舌るのを嬉しさうに打守つてゐた。

而して、も一杯、も一杯と可成餘計に勸めた道子は前後不覺になる迄も自分で望んで飮んだ。

其夜はとう／＼ヂョセフの家に泊つた。

翌朝道子は新らしい改正の札五枚を無雜作に帶の間に押込んで「もう恁んな家に來るものか」と皮肉な調子で心の底に叫びながら小さな鐵の門を出た。

秋の朝空は高く廣がつて、誰れでも其の大きな胸の中に抱いて吳れさうである。（完）

言葉の力

ポオ

オイノス。アゲートスよ。不滅の羽翼新に生ひし靈物のはかなさを咎むる勿れ。

アゲートス。我がオイノスよ。汝は許されむことを希ふが如きことを語らず。知識は直覺によりて得らるべきものならじ。されど智慧を得んとならば與へられむことを心行くばかり天人に求めよ。

オイノス。されど我れ、此の世界にありては一切の事物立ちどころに認識せらるべく且またかく一切の立ちどころに認識せられし時、幸福の來るべきことを夢想せり。

アゲートス。ああ。幸福は智識の中のものならじ。寧ろ智識を得むとするところ。永遠に知らむとすることによりて我等は永遠に祝福せらるゝを。されど一切を知ることは惡魔の呪咀ぞかし。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

オイノス。さはれ最高なるものは一切を知れるにあらずや。

アゲートス。一切はなほ彼にさへ未知の一事ならざるべからず。(彼は最大の幸福者なるが故に

オイノス。とは云へ、我等は、知識によりて、刻々に成長するものなれば一切の事物いつかは知り盡さるゝ日あるべしと云ふに何の障りかあらむ。

アゲートス。我等かく星の中緩やかに分け行くとき、かく緩やかに分け行くとき、數多き星の並木に瞳を凝らせ、深淵の遠きかなたを見よ。靈的幻影(まぼろし)さへ、四周おしなべて宇宙のすきなき金壁に遮えきらるゝにあらずや。金壁は無數の光體にして、數の大さのみを以つてするも單一に歸入するかとぞ思はるゝ。

オイノス。我は明らかに認む、物質の無限は夢ならず。

アゲートス。Aidenn に夢あるなし。唯斯くの如きことぞこゝに囁かる、物質の無限に於ける「唯一」の目的、そは靈魂の永久(とこしえ)に、內に押へんとして押へ難き知的渇望(知的渴望の癒やさるゝはやかて靈魂其みづからの消滅なるが故にを癒やす無限の泉を供するにありと。さらば我がオイノスよ、心行くばかり安んじて我に問へ、いざ! Pleiades の聲高き調和を左に見捨てなむ、いざ! 玉座より菫花咲くそれならでオリオンの彼方、大いさ三倍なる三色の太陽等がしとね、かの星しげき牧場まで

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

浮び出でなむ。

オイノス。さてアゲートスよ、敎へよ！下界の親しき聲音もて語れ。我等人間の間にありし頃常に創造と呼びならはされたることにつきて今汝が仄めかせしその樣式と方法を我は悟らず。創造主は神にあらずと云はむとするや。

アゲートス。上帝は創造せずと我は云はなむ。

オイノス。語れ、其のいはれは。

アゲートス。只發端に於て、神創造せり。かくも存在の中に不斷に發出し今や宇宙に遍在せる外觀上の創造物は神聖なる創造力の間接の結果と思惟せらるゝのみ

オイノス。我がアゲートスよ。こは人間に異端の極みとや思はれむ。

アゲートス。我がオイノスよ。そも亦天人には只眞理と見做さる。

オイノス。汝の語りしところにして我が了解せしはこれに過ぎず、即ち自然、あるは自然律と稱する活動によりて或條件のもとにあらゆる外觀上の創造を生ずることあるべしと云ふこと是なり。あり〳〵と思ひぞ出づる、下界滅亡に間近き日、哲學者が小動物の創造に命名するにいづくに十分の弱點ありしかをさま〲の實驗もて曝露せられけるを。

アゲートス。汝の語るところは全く第二の創造の場合なり。第一の言葉、第一の法則を

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

二この世に語りし以來常に行はれける創造の場合なり。

オイノス。 虛無の深淵より天上に流れ出でしこの星しげき世界―アゲトスよ、これらの星はなほ神がみてづからの意匠ならずとや。

アゲートス。 オイノスよ、我が抱ける概念に歩一歩と汝を導かなむ。あらゆる思想の不滅なるがごとく、如何なる動作も無限の結果なきはあらじそは汝のよく知るところなり。例へば、我等下界の住人たりしとき手を動かしぬ、ために下界を包める大氣は震動せり震動は漠然として四邊にひろごりゆき、はては下界の空氣の分子ことごとくに衝動を與へぬ。かくて永久に一擧手の動作は下界の空氣に影響するなり。地上の數學者は此事實に通曉せり實に彼等は特殊の衝動によりて流動體に生じたる特殊の結果を正確なる計算の主題となせり。一定の範圍の衝動が地球を圍繞し、大氣のあらゆる原子を壓迫する期間を精細に決すること容易なるに至れるはこの故なり。彼等はまた逆行して、一定の條件のものとなる一定の結果より最初の衝動の價値を決するに何等の困難あらざりしを知りぬ。今數學者は與へられたる衝動の結果の絕對に無限なるを、次に其結果の一部たるや代數的解析法によりて詳細に追索せられたるを逆行も亦容易なるを見き、それと同時に此種の解析はそれみづからの中に限りなき進歩の能力を有し、その提

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

出と適用は、掘出者若しくは適用者その人の智力を除きては何等の限定せらるゝところなきを見き。されどこゝまで歩み來りて數學者は逡巡せり。

オイノス。アゲートスよ、なんすれぞ彼等は前進せざるべからざるか。

アゲートス。かなたに深奥にして與多き思量こそ存せしなれ。そは彼等が知れるものより推論せらる、即ち完全なる代數的解析の開かれたる全智者にとりては空氣のみならず、空中の精氣、幾世の昔、いとも遠ざかりけることどもにまで、與へられたるあらゆる衝動を容易に追索し得るてふことと是なり。すべて空氣に與へられたるかゝる衝動は終に宇内に存在する個物をのこりなく壓迫すべきものなることは實に論證するに明かならずや。我が想像の全智者は衝動の遠き波動を、全物質のあらゆる分子に及ぼすそが影響、舊き形體(かたち)の變化の上即ち新らしきものの創造の上をとこしへにいづこ迄も追索しえらるゝなり。かくて彼は神の玉座より反射し來る衝動の消え行く最後の力なささまでも見きはむべし。たゞにそれのみならず、それがしの時一定の結果の與へられむか、—例へば、無數の彗星のひとつ、觀測の中に現はれむか、彼は解析的逆行もてそが最初の衝動のほどを決すにいと易し。もとより絶對に完全なる逆行の力は上帝の特權たるのみ。—されど未だ絶對の完全に達せざる各種の階級にありてはこの力それみづから天人の睿

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

智もてるなべての大衆にぞ用ひらるゝ。
オイノス。とは云へ汝は空氣に及ぼす衝動を語りしのみ。
アゲートス。空氣につきて語りし時我れは只下界に說き及びぬ。されど一般の命題は精氣に及ぼす衝動に關せしなるを。精氣は全空間に遍通する唯一のものなるが故に、かくも偉大なる創造の中間物たるなり。
オイノス。さらば一切の行動はその性質を問はず創造するや。
アゲートス。さ、あるべきなり。さるを眞正の哲學者は一切の行動の源は思想なりと敎へしや久し。——而して一切の思想の源は……
オイノス。神ならずや。
アゲートス。オイノスよ、我れはひとりの小兒につき、過ぐる日滅びだりし美しき下界につき——下界の大氣に及ぼず衝動につきて汝に語りたり。
オイノス。さなり。
アゲートス。我れかく物語りし間、言葉の物的の力に關する思想は汝の心をよぎらざりしや。一切の言葉は空氣の衝動とこそ知れ。
オイノス。されどアゲートスよ。なんすれぞ汝は泣くか。なんすれぞ。オオ、なんすれぞ我等今この美しき星の上をさまよへるとき、汝の翅はしほたるゝか。では我等が

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

飛行の間にめぐりあふなべての星の中なるいとも恐ろしき星なり。緑色また上なき星なり。美しの夢か、目映ゆき花よ。されどこの烈しき火山は亂れたる胸の熱情に似たり。

アケートス。 この目映ゆき花は！――目映ゆき花は！ このあらぶる星は今日ぞ生れし思へば我れ戀人のかたへにありて、組みしめたる兩の手と、かゞやくまなざしと、烈しき言の葉の三つ五つもて、豫言せしより三世紀の今日ぞ生れし。この目映ゆき花はあらゆる見果てぬ夢のいともしたはしきものなり。しかもこの狂へる火山は動亂と邪惡の限りをつくせる胸の熱情なり。

――完――

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

菊日和

白雨

何の功曾祖に贈位や菊日和。

叡感三度蛟龍菊に廬を出づる。

富士の眺め黄菊白菊畑續く。

菊に凝る老翁雙眼の士に祕を語る。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

○山鳴の絶へしが久し暮るる秋。

白鳥の眠りも畫題秋雨のして。

土潰せし山裾にして女郎花。

人の子の親ともならず秋の暮。

肥を願ふ郎が秘術や渡り鳥。

○地裂して湖埋めし古話の山眠る。

ふと解と履きし老婆哀れむ夜長かな。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

初秋

上田君子

久代は珍らしく泣けるのがうれしかつた。まあ、不思議によく涙がわいてくれる。もつと澤山泣いて見たい、などゝ見ひながら、泣きじやつくりして絣の袂で涙を拭き／＼した。が聊かの傷から搖ぎ出した取り止めもない悲哀は、いつかもう涙と共に流れ出てあつけない程胸には何もなかつた。

井戸端にしやがんで居る久代の後を、鶺鴒がギッキッと鳴いて飛んでいつた。やせた秋海棠の小さい花や葉をうつして、井筒の桝から絶えず流れ出る堀井の水が、さら／＼と秋らしかつた。

「アラ、姉さんが泣いてらつしてよ。さつきの事を怒つたんかしら」と、奥の間で久代の男の兒を遊ばせて居た母親に告げて居る妹の聲を聞くと、フト久代は袂を下して顔をあげた。思ひ出した樣に盥の濁つた水をあけて、先刻洗ひ上げたおしめのバケツをさげて

物干場の方へ急いで出ていつた。

「乾度お前なんか氣にさはる事でも言つたんだろう」

「私そんな積りぢあなかつたんですけど。」

「だからいつも言ふぢあ有りませんか、一體お前ははしやぎ過ぎだよ。」

「やつぱり？」と彌生は針の手を止めて笑つたが

「母さん何でしたつけね、雉子も鳴かずば撃れまいものゝといふのは――」

「そらまた、此のお雀さん上の句を忘れて了つた。」

「よくつてよ、今思ひ出すから、」

「よくないよ、思ひ出す前に味はふんです。」

母に叱られ乍ら彌生が矢張り笑つて考へて居ると、少し眼を赤くして久代の襷をはづしながら這入つて來た。

「ねえ、姉さん今私母さんに叱られてる所なの」

「アラ、彌生ちやんの言つた位の事で私、何時迄怨つてるものですか。」と笑顔して、「だめよ、彌生ちやんなぞに私の涙はわかつてくれない。」と強く言つたが、それは甲斐ない復讐だつた。彌生は何の感じもない様に、生々した眼を動かして針の手を止めなんだ。年とつた

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

母と普通の娘の心を持つた妹、自分の思ひを語る人ではなかつた。斯ういふ時久代はいつも、遠く離れて居る夫を思ひ出した。

「開け放ちた欞子窓に背をもたせて、見るともなしに芳坊を眺めて居たが、繪本を見て居る一人前らしい樣子が、フト不思議に思はれて、輕い驚きか暫時久代の胸を浪うたせた。父によく似た芳坊はいつになく靜かに、祖母がくつて呉れる繪本の動物を覗き込んで、どれもこれも皆、ニャア〳〵と言つては笑つて居つた。

「久代さんお宅」と、道子が久しぶり尋ねて來た。座敷へ通ると邊りを見廻して、「よつちゃんは居ないの」と袂からゴム人形の可愛好いのを引つぱり出して振つて居たが、

「今ねおばあ樣におはれて出ていたの。」とお茶持つて這入つて來た彌生が言つたので、さもがつかりしたらしく久代の前にペッタリと座つた。

「明日もう歸校ることにしましたの。」といきなり言つて、まあ此の人は、何時までたつてもちつともお母さんらしくならない、と思ひ乍ら、ポッと上氣した白い額の汗を拭いた。

撰むに自由な商買柄だとはいへ、道子の好みは何時も派手だつた。白地に麻の葉くづしのメリンスの薄い地から、濕みを持つた滑らかな肌が、思ひやられるほど今日はなまめかしかつた。何處から女學校の先生らしい型が見出せよう。まして久代より四つ年上

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の二十九などゝは知らぬ人には思ひもよらぬ事だつた。知らず〳〵淡い妬ましさから、友のものこしにも何となく注意して眺められた。然し其れもしばしして、いつもなつかしい暖みを覺える都の近況や友達の噂、斯ういふ話は事もなく若い二人が一所になつて思ふ存分喋いて見たい樣な、輕い心持ちに誘つていつた。

道子は少し膝を崩して、小さい聲で讃美歌などを唄ひ、「彌生ちやんも出て入らつしやいな。」などゝ大きい聲で呼んだりした。

「あなた今も教會へいらつしやるの。」と久代がきくと、

「たゞ歌だけ教へになるの。」と、氣作に笑つて、何とかいふ背の高い西洋婦人がヒヤノを彈く妙な手つきや、いつの集りの日にても乾度涙を出して悔悟する。年若い或る熱心な學生の眞似などした。

「きのふ手紙が來て居たわ、その人岸本さんと言ふの。」

「何か面白い事でもあつて？」

「どうだつたか、私少し讀みかけてよしちやつたから。」其の事もなげなのが、戲談とはきかれなかつた。道子には有り勝ちの事の樣に思はれて、

「まあ、貴女にはうつかり手紙は上げられない。」と久代をあやぶませた。ふと思ひ出して

「此の間伺つたお話は」と言はふとするのを、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「あの話なら止めにして下さいなあれつきりなの。」

と手て止めて道子はたゞ笑つて居る。

「また？好いのを三つ迄一度に伺つたぢあ有りませんか。」と云ふと久代は何となく可笑しくなつた。

「貴女のすきな紅入友禪の帶も駄目になつてよ、でも思ひ切つて手放そうと迄、決心なさつたお父様が感心ね。」

「手放すも手放さないも始終私が家に居ないのだから仕末がつかないわ。」と道子は獨りできめて、「でもね、私オールトミスにもあきちあつたの、うるさくって。」

と一寸眉をひそめたが、艶々しい顏の何處にも暗い影は一つも無かつた。

「私なら、あの美しいお店に座つて見るんだけど」

久代がいふと、

「なら乾度店が繁盛してよ。美しい男でも來たら特別まけてやるんだたわ。」とすまして居る。

「ほうら、何とか言ひましたつけ、捨られたかの番頭さん。」久代はついこんな事をきいた。

「エ、賢吉の事。」

「今どうしてまして。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「知らない。」と道子は無雑作にいつて「私そんな事など考へたこと有りませんの、眞實の母の事だつてさうですよ、考へて見たい樣な、なつかしい樣は事は過ぎた中に澤山有る樣だけど、どうも今の私とは、さつぱり關係のない事の樣にしきあ思へないのですもの。」

フト久代は紅友禪や五色のいろ絹、さういふ中に道子を浮べて見た。軒を並べた呉服町でも殊に此の店は大きく派手だつた。夏の夜など、まばゆい許り電燈の光りが輝いて、店先の硝子戸棚には、粧ひ凝らした粧飾人形が、道ゆく若い人々を、交る〲止めさせた。が明るい此の店から壁一重へだてた奥はいつも暗かつた。もの堅い商人氣質の年とつた父、しつかりと一人で店を切り廻して居る若い繼母、一人娘の道子がまた物心つかぬ頃でさへ、三人の心はもう散り〲に淋しかつた。町の舊家によくある例で、道子の幼い時から決められてあつた繼母が氣に入りの若い男は、道子が都へ出たあとに行衞をくらましたとさへ聞いて居る。

「こうしてる内にはどうにかなるんさ、先のM町やK市より少しは面白い樣だけど、然しS市ももう大分見あいたわ、どうせ風のまに〱ならもつと芳烈な刺激のある所へいつて見たい、いつそ滿洲へでも飛び出さうか。」と一寸頭を傾けて見て「それよりも米國の方が好いかも知れない、何處かには屹度私の心としつくり合ふ處が有りさうに思はれてならんのよ。」と憧憬の眼を光らせた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

軒の風鈴がリン／＼と簾を透して涼しい風が流れ込んだ。久代は時々芳坊の泣き聲を何處かで聞く樣で、フト遠くから呼び戾されては耳を澄ましたが、全くそうではなかつた。うち出來の下手なカステラを淡白しておいしい／＼と言ひ乍ら、香の好い麥湯を呑み／＼して道子は話した。

「一體男つて妙なものですよ」と如何にも男を知つたらしい大膽な口ぶりも、道子自身では何の氣でもなかつた。

「よくお話した從兄の三木ね、いつもやれ婦人問題がどうだのかだのつて私をおだてゝ居た癖に、何時の間にか怪しげな女に引つかゝつて、とう／＼此の間背ひ込んで了つたんですよ。

「ほゝ、全く貴女なぞは文明國の良材料位に思はれて、敬遠されていらつしやつたんだわ。」

「矢張り彌生さんの樣な心持ちて押し通す方が好いのかな。其れぢあいつそ、かの話の博士さんの處へでも嫁つてやりませうか、お爺さん／＼つて私可愛がつて上げるわ。」と肩をすぼめて「でも乾度長くて三日位の辛抱よ」と久代を笑らはせた。

Sといふ港の賑かさ、其處の學校の話なども出た。「來學期はね、姙產婦の心得なの、私困つちつた。」と一人でクス／＼笑つて、道子は自分の受持ちの家事科の事を可笑し相に話

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

し「貴女に少し欲はつてゆかなくつてあ」と言ひ〳〵したが、別に其れを聞く樣でもなかつた。

「貴女よく御存じの美保子さんね、あの方の妹が私の學校に來てますの。」

「またどうして其んな遠い處へいつてるんでせう。」

「親類の家が有るんです、初めは私も知らなかつたの、其れが職員間の注意人物になつてましたもので探つて見ると美保子さんの妹ぢああありませんか、性格なぞさつぱり姉さんとは違つてますのよ、其れに一つ悪い癖があつて――」

「私一度も美保子さんから妹があるなんて聞かなかつた。」

「さうでせう。どうも妾腹の子なんからしいのよ。」

と道子は一人でうなづいて居た。

まだ轉任して間もないS市の話の中にも耳新らしい事は澤山あつた。

「彼地へいつて間もない事でしたわ。校長の宅につい長居してね。夕ぐれの海を眺め乍ら初めての海岸を歩いて居た歸り道でした。「如何でせう、器量はあまりよくないが××を卒業してます。」といふ男の聲がフト私の耳に這入つたんです、咄嗟、私はハッと自分の事の樣に驚いて振り返ると、直ぐ傍の松の下に、一人は立つて一人はしやがんで話して居た二人の男が一所に此處を向いてじつと私を眺めました。私ポッとして終つたわ、ア

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

アいやだ、今迄に幾度私は斯んな事を斯ういふ言葉て人から人へ傳へられたてせう、わづらはしさから逃れて來た二百里の此處までやつぱり私を追つかけて聞かせに來る。私はひどく恐怖に打たれて了つてね」

いつにない眞面目な話ぶりが久代の耳を聳てさせた。

「偶然てせう、けど全く妙なことが有るものね。」

「其れから暫らくして私は初めての道をどう歩いたのか、どの家も／＼格子作りの屋並のよく揃つた明るい町を歩いてました。凉し相な打ち水や、三味線の音や、若い女が取り／＼の粧ひ、夏の夕ぐれの空氣は人の心を心持ちよくとかして行く樣でした。フト手すりのある二階から、仇な女が立て膝して凝然とゆく人を見下して居るのとパッタリ眼が出合つた時、自分の事のみに屈托して頓つて居た私の心も、何がなしに驚かされずにはいられませんかつたわ。港の色町は廣いのね、賑かね。」

ふだん呆氣ないほど冷淡らしい道子は、時によくこんな感慨めいた情緒を吐き出す事が有つた。久代はさつき自分の泣いた、一つ／＼を美しく彩つた繪卷物にして、見せられる樣な氣分になつて凝明ときいて居た。

芳坊がヤア／＼と大きい聲して泣き乍ら、彌生に抱られて這入つて來た。

「おかへりよ。ソーラ此の人形好きでせう、押へると鳴くんですよ。」とさも可愛らしくて堪らない樣子に、覗き込んであやして見てもちつとも泣き止まない、見かねて久代が胸を開らけてたゝいて見せると、俄かに元氣づいて如何にもうれし相な笑顏で這ひよつて來た。大きい乳房に、手を置いて、苦し相にクックックッと咽喉をはづませ乍ら飮んで居る樣子を見て居ると、何となく道子は可笑しくなつて來て

「妙ね何だか動物見だいて」と笑ひ出すと、彌生はさも乾驚した樣に顏を上げたが、「アラ姉さんは昔から人間よ」といつて二人はコロ〳〵と笑つた。

「彌生ちやんのほんとに大きくなつたこと、女學校を出るとあんなにも俄かに娘々として來るものかしら。此の次には赤い花を買つて來ませうね。」とだしぬけにいはれて

「有り難う。先生此の頃は白粉もねるんですよ、」と彌生はおどけるのが上手だつた。

「好いわよ白粉は、其れより彌生ちやん、私お嫁にゆきたいの、と言つた風するのだけはおよしなさいよ、お願いだから。」と言つて道子は彌生を凝然と眺めて居た。

「あーら、樂隊だわ」橫町を通る樂隊の騷々しい音が、一番に彌生の眼を光らせた。

「末松座の活動よ、ゆきたいわね。誰れか祕居やらない事。」と二人を見較べたが、姉の動かない顏を見ると直く道子の方へ眼をむけて

「だめなの貴女も。お別れに一度一所にゆきたいわね。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「仕様がない人ぢやあ一度一所にゆくとしませうか。」と道子は易く引きうけた。
「さあ、おんぶだ〱、」と彌生は周章て芳坊をおんぶして馳し出したので
「彌ちやん草履をはいて入らつしやいな、轉んだらどうするの」と久代は追つかける樣に注意した。
「芳ちやんに見せるより自分の方が見たいのだもの」
と獨り言の樣にいつて、道子は下葉の色付きかけた葉櫻を眺めながら、椽端へ出てトン〱〱と樂隊に合せて足拍子を取つて居た。
澄み切つた空から降りそゝぐ熱の心地好い漂ひ、萩の亂れて庭の隅にはコロ〱と蟲もないて如何にも氣節の變りめを思ひ出させる樣な午後であつた。
「いつまで貴女は若いのでせう。貴女を見ると何となく、衣通姫を思ひ出すの。」と、久代はいつて、さつきから秘密に胸にしまつて有つたものを、やつと出して了つた樣な氣になつた。
「あら折角のお世辭なら、玉藻の前と言つてほしかつた。」とにつこりして「ほんとに私、殺生石になつて了ひたいわ、ね久代さん」と引き入れる樣に道子は言つた。

——完——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

眼玉

白雨

私は眼玉が大好きだ。葡萄色に圓く光つて居る瞳！底深く淸く澄んで、輝いて動く人間の眼玉！。

私には一體悪い癖があつた。其は凝視(みつめる)と云ふことで、眼玉に觸れるものは何んでも、のがさず底深く見極めたいと云ふ願望(ねがひ)を心の奥に持つて居た。が中でも人の眼玉を見ると云ふこと程愉快なものはなかつた。其が此の節では習慣性になつて、無意識に、たゞ一種の趣味を以つて會ふ人ごとに眼玉を見て居た。

此の筆方を度々あびせられて居た友は、私とむき合になる事を嫌つて決して私の側によつかないのである、別に私に心の底を見ぬいてやらうなどゝ悪い考へが働いて居るのではないが、つい惰性的習慣に囚はれて、矢張り見ぬと氣持が悪るく、物足りないと云ふ感じがするのである。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

眼玉は生のポイントであるとつく／＼私は感じた、魂の宿つて居る集點だ――、結燒點だ――。

私は常に人の眼玉を凝視て居る時に、其の人のマインドがスピリツトが繪畫の樣に、種々の形を取つて浮んで現れて來る樣が面白くてたまらないのである、愛もプラウドも嫉妬も、悲しみも、皆其深い網膜の上に、反映の影が渦を卷いで現れて來る。

お覧なさい、あの血線を引いた、濁つた嫉妬の眼玉を、少しく上に釣り上つて恐ろしい光りを黄色く放つて居る虛榮高慢の眼玉を、我こそは美人なりけりと云ふ、普通女の持ちたい誇りを、あの筋肉の弛るんだ印象の明瞭でない顏に、呆然とした鈍い笑の中に、心のしどけなきを語つて居る眼玉、白い無敎育な眼玉、オヽ厭だとお六さんを思つて私は身振ひした。

瑠璃の眼玉が懷しい、愛に光つた大きい瞳、崇高な、沈着いた、何處となしに重みのある茶色の眼玉、あゝ、それは逝かれた愛子先生のだつた、そして其眼玉は先生の性格の凡てを遺憾なく現して、王者の輝きを、かくや姫の樣に放つて居た。

私は種々な眼玉を見て、いろんな人の心を學ぶことが好きだつたが、尚一つ忘れられない眼玉が外にあつた、其は私の宅の金鋼の中に居る五羽の白い鳩の、一番大きい一つであつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

御覧なさい、片足を羽毛に隱して、眠つて居る神々しい姿を、あの天の乙女の使の樣に羽を廣げて脊伸した後て咽頭を「グウ／＼」鳴らして紅葉の跡を砂の上に刻みつけて步るく赤い脚を、けれども、麗かな朝日の光線(ひかり)をまともに受けて嬉しそうに眺めて居るあの丸い眼玉！ 糸のやうに細い淡赤いピンクの上を白く小刻(こきざみ)の眼瞼で線取(ふち)られて居る水晶の眼玉を、鞏膜の白い部分は圓い大きい瞳孔に壓し縮められて、僅かに兩端に其影を見せて居る。マア前からよく見て御覧なさい、そら、まるて底ひの知れない淵！ 黒く澄んて動かないが、それを一寸橫から見ると、ほら、まるて反對に眞茶に、底赤く光つて居るてしやう。金玉に漆(うるし)をかけたやうな光澤！ 何んて美しい深い色彩のある眼なんてしやう。

クル／＼と廻る眼玉を包んて上下から同時に閉づる淡絹の眼瞼——。

アヽ又開きましたよ、あの可愛いヽ眼玉！——赤い芙蓉の花はキット鳩の眼から咲いたんてしやう。

私は何よりも此の眼玉が好きなんてす、利巧な、邪氣のない、おとなしい眼玉。

私は鳩を抱いて鈴やかな張りのある眼玉を見て居た時、鳩も私の眼を見て居ましたふと、小さい鳩の眼の奥に、あざやかに私の影を見出した時に、私は何とも云へない、嬉しい感じに打たれました。——完——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

夕祭禮

松本正生子

鉾も山げ通り過ぎた四條通り、いらいら蒸し暑い夏の日は、開き慣れぬ人の頭上に潑びせかゝる其鉦や大鼓の騒がしい響のやうに、なやまさるゝあつさであつた。

夕祭禮を待つ人々は、一先づ家々に歸つて行く。其混雜も一通りであい。成丈け控目な京都の人々は、此際の日丈けは、陽氣だつて浮つ調子になつて、上京の人も西陣邊の人も宇治の人も、伏見の人も、燃かるゝ様なあつさに誘りたつて祇園町、御旅町、烏丸、と言つた様な御祭禮の通る街の家並に、恁う黒い城廓を作つたやうに何重となく群り立つ。

鉾や山は已う四條通りは過ぎたけれど、烏丸邊が丁度盛り、と見えてちやんちきちん、ちきちん、ちきちんと言つた風の囃の餘波がまだ何だか恁う、迹に殘された人々の耳に響いてもゐるやうに噛りついてゐる。夫れでも人々は日中の熱天に干されてゐた忍耐と幾組となく押し付けられた鉾や山の其毒々しい濃厚な色彩とに、已う充分の飽滿を

感じてゐるから、やれやれと言つた調子に撒らばつて行く。
私は人通の全く疎に立つて行く迄、茫然として店に座り込んでゐた。
私の家は四條御旅町の丸襟といふ鹿の子屋である。
此日は勿論店を閉めて、町内は御神燈、幕で軒を飾つて、夜は屛風に建てつまる京風の奥ぶかい家の中は、籠行燈の幽艶なみやびさ。實際祭りとしての趣致は夜であるのだ。
全く疎らになり終はるといふ事は御旅町ではありやう筈がないのだが、でなきや水を打つにも挨り立つた門の中を掃除しやうにも手もつけられない。
私は往來の人の足を見詰めながら祭禮の通りすぎたあとの寂しさを感じて、縮緬の袖をしつとりと重ねて茫然りと坐つてゐた。
年を老つても、お祭りとなると矢張り陽氣めくものと見えて、母も襷がけの此何だかかう沈つかない素ぶりを見せてお客の中に立ち混つていそいそとしてゐた。
「まあさん、夕祭禮の來る迄におみじまいしとお終いやあ、何しとおゐるのえ」
と店の間へ屛風を立て直しに來た母はさう言ふと、
「まだ、早いわ。なんや知らんがくたぶれて了つはやうな氣がして、」
といふと、衝と立つて銀杏がへしの根がけの歪んだのを一寸なほして見た。母は小さな銀杏がへしに今朝結びなほしたのである。意氣好みの父はよく似合ふと言つた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「おつねさん來やはらしまへんな。來やはらてんのてしやらふか、あないに言ふておいたのに。」

と私の言ふのを、遮ぎる樣に母は、

「何に言ふとゐるのや。そない來て欲しのか。あんな人を。妙なやないか。」

といふ。大方母は然う言ふだらふと思つたけれど、でも何となくおつねさんを待たれた心をつい言つて見たい氣になつたからであつた。母は屛風を一尺ばかり退込めたり出して見たりなぞしてゐた。思ふ樣に位置を得なかつたといふわけであらう。

「一寸と來ておくれやす。」

と奥の間に對つて父を呼んだ。父は直ぐやつて來た。七八人のお客を對手にした父は巳う赤くなつて、上布帷の意氣な胸を披げて、容子つぽい襟付きをしてゐる。母を見ると小楊子を口に噛へて、

「何うするつもりだい。是れて奴ぢやないか。」

といふ。

「いきまへん。直しとくれやつしや。」

と母は実慳貪に言つて出て行つた。勝氣な、些細な事に無頓着な、大揚な母は孜々として父に努めるんぢやなかつた。夫れてもお人好の父は圓滿な家庭の人てあつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「是れて好ぢやないかね。」

と父は屏風を元の通りにして見て一間ほど離れて一寸眺めて見た。首を傾けて岸駒の山水を横ざまに見た。

「是れてゑゑやらふ。」

と父はあてすつぽな言葉づかいて言つた。

「へえ、夫れてよろしおすわ。」

と私は言つた。父はふんふんと頷いて白博多の意氣な角帶を細く結んだ腰をふりながらふいと駒下駄をつつかけて表通へと出た。

私は其まま母を手傳ふといふ考へもなしに臺所へと行つた。お由さん、おつるさん、おかね、お千代、みな赤い襟がけにまめまめしく働いてゐる。鯛のお作身、茄子、胡瓜、鱧のつけやき鮎、鯉、夏の京料理は透明な硝子を若葉青葉に透かせるやうに美しい。私はおつるさんの初茸の叶物を手傳つてゐると、俄かに門口の方て人の聲がして、夫れがなと今一人女らしい聲音てあつた。京の家の土間は臺所の流しから門の外まて見透かれる樣に續いてゐるものだ。おつるさんと私は直ぐ覗いて見た。紺地の華美な縞の衣物に白つぽい帶を占めてゐるのは若いおつねさんてあつた。

「あ、おかみさん。來やはりましたて。」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

とおつるさんは直ぐ、意地の悪いおつるさんはさう媚てる様に言はなくつてもいゝのに、凭う母の方を向いていふ。存外母は濟まし込んだもので胡瓜の皮をむいてゐながら、無言てゐる。中々、感情を隱すに巧なは母のつねであつた。私はすぐ表の間へ行つた。

「おつねさんですか。」

と私は愛嬌よくいふ。おつねさんは大きな銀杏返しに華美な珠の根かけをかけて、其高い鼻にしわを倚せて和りと笑ひ乍ら、

「つい此向ふで這入つて見やうか、何うしやうかと迷つてましたつけ。だとお父様がお見えになつたから、遂々見られちやつて。」

と言つて聲をあげて笑つた。白い額を其の帕で拭いてゐる。私は愛嬌なくもてなした。坐敷へ通りませうといふけれど、母がまだ挨拶をしに來ないので、おつねさんは遠慮してゐた。父も母へ氣を兼ねて、臺所に這入つたなり出て來ない。私は些ともてなしに困つた。

「ほんとにおあつ御座いますね。」

おつねさんは不安な心持ちを隱してにこ〳〵してゐる。おつねさんは三年前東京から父に連れられて京都へ來た人て、今は某大家の仲働に住み込んでゐる女である。父には其おつねさんの父が隨分世話をやいたとか、父が我家へ入籍しない昔の話してあら

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

う。おつねさんは自分の父の死後可なりな資産を減くして了ひつい京都などで働いて見る氣になつたのださうだ。

箸まめな父だから、夫れが本當の事か何うか分りやしないと母はいふ。私は優しげな順しい女らしいおつねさんを惡い人と想へない。お祭りになれば是非お遊びに入らしやいと一週間も以前から頻りと招待して置いた。夫れだからおつねさんは來たのである。父が以外お世話になつた人の娘といふ點から私は母に代つて同情しなければならない。

私は母を强てすゝめて挨拶させて、人々のゐない別の小座敷でもてなした。夫れておつねさんも嬉しがつて、夕祭禮も見て歸ると言つていそいそとしてゐた。父は決しておつねさんと話をしないでお客にばかり、相手になつてゐた。母がゐなければお客のおもてなしに、おつねさんの二あがりでも聞かして貰ふのにと私しは思つた。大方父もさう思つてゐやう。父は大分廻つてから眞赤な顏をして寢轉び作ら口三味線で小うたを唄つてゐた。

夕祭禮が通るほど、日は暮れかかつた。凉しい風も吹いた。街々の灯もともりかゝつた。

夕餉はおつねさんも一座に加はつた。

「遠慮せんとおいとくれやすや。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と母は後を思つてかおつねさんにかういふと、

「いゝえ。ちつとも。」

さう言つておつねさんは笑がほする涼しい眼である。

父はちらりとおつねさんを見て、和こりともせずに又俯いて了つた。私は又妙に寂しい心持がした。夫れはおつねさんが氣の毒だつたからではない、父の氣持ちを思つたのでは勿論ない。唯、此中で一番しやんしやんしてゐる母が、一番不安な位地にゐながら、怖ともしない様に見せてゐる。夫れが私に寂しかつた。

夕祭禮が通るほど、街は人々のさゞめきが次第に繁くなつて行く。もう通るのかも知れない。

——完——

夜明の灯

原田琴子

少女子を涙の中におき給ふあはれ心の浮きてながるゝ

よしと見てわれは止まる人は皆果に急ぎぬ悔に急ぎぬ

いたましくのこる夜明の灯に似たり君がかたへにおかれたるわれ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

飯臺（ちやぶだい）を戸棚の前にとり出てゝ硯おきたるわが書齋かな

紫に紅にみどりに數多く帳たれまし悔の覗けば

泣くものと誰のあやまつ美しき戀のあふれておちたぎつわれ

戀人は氣遠になるを上もなき心のごとくあやまちて居ぬ

わが歌もよしと思ひぬ男らによからぬひゞきあたふと聞けば

泣く日にも歌はん日にもあはずして虫のごとくに聲たつるわれ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

戀の灯をともさぬ家はあさましく人と人とのはぢき合ひする

みやび男の世をもとらむとまづ君が妻となりたるわが心かな

苦しかるわが家の舞臺のがれ來て君がみ膝に泣きて息つく

まづおのれ美しむ爲男の子らのさびしき中に交りたるかな

わが心さきにねむりぬ君を守る歌うたふまでのどかになれば

地の底に沈みゆく椅子をかしくも二つならべばをどりたつ椅子

ますみ

うつろなる心となりてきゝ居たる芝居の太皷とほざかり行く。

夕ぐれの椎の大木にすずり泣く少女となりぬ十七にして。

ちよ子

この夕べ歌思ひつゝふとつみし小さき草の名かたはみと云ふ。

友禪の鏡おほひに風吹きてよべ嫁ぎたる人のほつれ毛

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

夕化粧

木内錠子

日が暮れるとお勝は血の道が起つたと云つて二階へ上つたなり、小女に枕と掻巻を出させて横になつた。

雨上りの若く晴れた空に白い夏の雲がフワリフワリと氣輕さうに飛んで、向ふの家の土藏へ明るく照り返す夕映の華やかな色を窓格子の間からマジ／＼眺めて居た。

亭主の信太は今日もどこそこに發句の運坐が有るとか云つて、晝飯の箸を置くなり出て行つて歸らない。

是が何も隱居仕事と云ふぢや有るまいし、店だつて漸つと仕入れの積込が濟んだばかりの態だのに……、ヤレ發句だ、謠曲だ、盆栽だ、爲る道樂にも事を缺いて、暇の遣り場に困つてる禿頭連れのする樣な事ばかり……少なくともお勝には斯う思はれた。

是ばかりではない、信太は又非常な信心狂て身延山とか四國詣りとかお伊勢さんだ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

とか云つて、體に眼のあるなしに關はらず講中々々に交じつては眞黑くなつて旅烏を定めて歩き廻る。

「お前樣、少とは考えても御覽なね、是が樂隱居と云ふ柄ぢやなし、二人して斯う世を張つて居なければならない身が、今から殊勝らしい神信心や佛いぢりにくすぶり込んで了つてどうするのさ、馬鹿々々しい、後生を願ふのには少と早すぎるぢやないか」

一手に帳場を引受けてる女房のお勝がやつきとなつて、長煙管をはたき〳〵隨分こつぴどく談じつける事も有るが一向手答がない。

旅好きはまだしもとしても別に書畫骨董と云ふ餘計な道樂迄附いて廻るので乾度遠出をした歸り掛けには少なからぬ散財をして、利いた風な、眼も開いて居ぬ癖に一角掘出し物でもしたかなぞのすさまじい氣で飛んでもない物を背負ひ込まされて來る。

それでも佛性な御當人は一向いゝ氣なもの、空世辭の二つ三つも浴びせられるか、人の惡い奴に「どうも黑人はだして在らつしやる」なぞと飛んでもない眼識の程をかつぎ上げられると、煤掃きの胴上げ程にも感づかず、グッと納り却つて眼を細々の天狗鼻と來るから遣り切れない。

お勝は二十の時嫁入つて來て信太が二十七で始めて此神樂坂通りへ酒屋店を開いた當時から足掛け十二年と云ふもの連れ添つて居るが夫婦の間に子と云ふ者がない。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

店を持つて四五年の間と云ふもの、二人して粉みじんになつて働いたゞけ有つて、メキメキ暖簾の色を揚げたが、此二三年以來四十にも滿たぬ男盛りを如何感づいたか、信太が急に發句や盆栽に凝り出してからと云ふもの、丁と店の方を構はなくなつたので、店は寂れ次第、置く雇人も置く雇人も尻が坐はらず、近處界隈のお得意も減切り減つて了つた。

利かぬ氣のお勝は此永い日の欠伸散じならまだ外にいくらも氣の利いた遊び樣があらうにと謠三昧、木鋏いぢりに日を暮らして居る男の呑氣さ加減につく〳〵愛想が盡きて自分の亭主ながら癪でならなかつた。

「オイ、一寸行つて來る」と云つては暑いのに御苦勞樣な、殆んど毎日の樣に風流男を氣取つてか、指先で扇子をパチクリ〳〵やりながら、細い鼻緖の突かけ下駄で店の上りばなから悠々出てゆく亭主の行く先きを、馬鹿々々しくつて問ふ氣にもならず、曲つてる羽織の脊筋をつい直してやる氣にもなれなかつた。戶の閉てられぬ世間の煩さい口の端は此夫婦の事を種々な噂に取り立てた。主人の信太が店の事に一向頓着しなくなつたのも一つには家の事が丸くしつくり行かないからだと云ふ、しつくり行かないと云つた處で何も別に氣詰りな舅姑が有らうではなし、謂はゞ惚れ合つた好いた同志が氣を合はせて働き合つてでつち上げた身上だのに……。

お勝には男が有ると云ふ、否やさ飛んでもない淫亂女で家へ置く番頭と云ふ番頭小僧でも少しニキビの出來懸つた奴は見逃しつこなく何でも御座れ式に手の中へ丸め込んで了ふと云ふ話だ、前に「庄どん」と云ふ一寸男振りの惡くない番頭が永らく居た事が有つた。殊の外主婦さんの氣に入りて親身も及ばぬ程家の爲になつて働いた――それも其筈、其いきさつが有つたからだと跡で默頭かれたが、お勝は庄どん一人ばかりに堪能しては居なかつた、まさかにと思つた牡丹餅面の吉と云ふ御用聞きにまで飴ん棒をしやぶらした。

越後生れの萬事に付けて辛棒强い庄どんは飽く迄もお勝を踏臺にして此身代の半分は濡手で位に都合よく定め込んで、お勝と云ふ可愛い奴は自分一人の持物の樣に慾と二道かけた甘い胸算用をもくろんで居たが、誰彼の差別ないお勝の淫奔さ加減と一つはどうやら折角の色男も鼻についたかしてとかく素氣ない仕組ばかり見せつけられるので、口惜し紛れと面當て半分、思ふ存分を旦那樣に逐一ぶちまけてのけた、無論、とうから出來て居た自分との關係もザラリとさらけ出して……

人は二本棒だとも云ふ、さうかと思ふと、いやあれてこそ男だ、生中家の中の恥を明るい世間へさらけ出しては暖簾の手前に係はるから、憎いも、口惜しいも、齒痒いも一切、腹の底へ疊み込んで了つて態とシラを切るのだと呑み込み貌して乙な解釋する年寄も

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

有つた。

とにかく信太は「其樣なふしだらな事は決して我家の內に有る可き道理がない」と云ひきつた丈は少くとも事實て有つた。

昨日、目て釣つた男を今日鼻て吹き飛ばす事を朝飯前位に心得てるお勝の仕打から割り出すと手切れともつかぬ僅か計りの金て、嫌になつた男を追拂ふ事が出來たのだから、結句、厄介拂ひが出來た氣てさつばりと濟し返つて。

「馬鹿らしい、寢ちや有りやしない、何も女だからってさ、そうピク〳〵紙袋被せられた猫の樣に後退りばかりしてちや壽命が續きやしない」氣嵩なお勝はヂリ〳〵と眉尻を釣らして斯う口走つたが、ふと庄吉の事を考え出すと萬更い〻心持もしなかつた。

庄吉ばかりてはない、根が厭きっぽく浮氣性に出來てるお勝は如何に惚れ込んだ男ても決して長持はしなかつた。少しでも珍らしいの新らしいのと、變り變つて目の前に顯はれて來る男を好奇心の眼顏て追かけ、手當り次第に撫て切りを試みたので中に隨分自棄半分、甚い使ひ込みをして帳尻に思ひ切つた大穴を開かしたり、晦日に掛け先きを集めた揚句隨德寺を定めたりした手合も珍らしくはなかつた。

……其處へ行くと庄吉は仕舞ひまでおとなしく目を閉ぢて居た、夜の明けない先きから起きて寢る迄草鞋も解かずに店の爲を思つて働いた――

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お勝は惱ましい頭腦の中から妙に庄吉の事ばかり思ひ浮べられてならなかつた無類の親切者だつた事、執拗かつた代りに情の細かゝつた事、物越しに云ふに云はれぬ顆母し氣な處があつて、人をなつかせる赤い少さい唇をもつて居た、色は黑いが、木彫の人形を見る樣な形のいゝ鼻附、俳優にしても彼程の素顏を持つたものは恐らくあるまいとさ……一時は思はれた、其男振りなら氣前ならいゝ事づくめを數へ立てゝ美しい庄吉の面影を描かうとしたが、漸々考へれば考へる程、矢張跡ましい感じが先きへ立つて容易に空想の面影は成り立たない、じつと物を詰詰る時物欲しさうに卑しく光る目、硬い大きな手の平、男の樣にもなく思ひ切りの惡いメソメソした性分、どう思つても懷しい處ではない、いくらいゝ着物だつて、一度は氣に入つた頭髮の道具だつて古くなりや矢張あきる、同し事だ、こんな風に考へて來ると、結句、今帳場を預けてある學生上りだと自稱するハイカラ頭髮の近眼の方がまだしも增しの樣にも思はれた。

女中が下から臺洋燈を持つて上つて來たが、今少しじつと薄暗がりで取りとめもつかぬ思ひに耽つて居たかつたので、

「あかりなんて要らない、目ばかりキラキラして餘計頭痛がする、そつちへ持つてつとくれ」突然に邪慳な浴せやうをしたので、

「では、御飯は上らないんですか」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

山出しの物馴れない丈けにオツ〳〵して階子段を下りかけながら痛い處にでも障る樣にそつと云ひ出す、

「何だつて？　上らないんですかすかと點から定めつける奴があるかい、如何ですかと云ふもんだよ、在鄕と違つて東京へ來たら少と物云ひにも氣を付けな」

癇癪聲でビシ〳〵がなり付けるかと思ふと「要らない〳〵、御膳なんかつて云ひ出された丈けでも胸が惡くなる」

子供が駄々をこねる樣に身を揉んで丸髷の仇つぽい頭髮をクルリと壁へ向けて了つた。

裾高に端折つた紺絞りの下から毒々しくドス赤い湯文字があらはれて居るのと、丸太の樣に固く太つた短い足とが妙に神經に障つてあの薄ぎたない下女の手で煮られた惣菜の唐茄子など煮上る匂ひをかゞせられるさへ胸のムカつきさうな氣がした。

お勝はそつと暗い壁へ自分の白く細い兩手を並べて見て、子供が氣に入りの玩具でも見る時の樣にニッコリ得意さうな微笑を洩らした。殆んど其と同時に朝夕向ふ姿見へ映る自分のあでやかな顏と纖細な姿とを思ひ浮べた。

子を生んだ事が無いので何時迄も若い、赤い鹿の子の手柄を懸けても可笑しくはないといつも髮結がほめる、チヤラツポコが半分と積つても滿更嬉しくないこともない、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

自分の體の中でもお勝は殊に、凄い程澄み切つた目が一番好きなのだ、どうして斯う奇麗なんだらうと時々は自分ながら自分の目に惚れ〴〵して濃くふつさりした睫毛を嬌しく思ふ時もある、斯うして横になつてながらもお勝は自分の美しい事を自分で考へて見るのが一番面白い、男なぞの事はどうでも構はない、只美しい自分に引付けられて我も我もと蝶の花に競ひ寄るやうに、目に見えない蜘蛛の網が掛つて居るとも知らず、自分から釣られに來るのが何より嬉しく誇りを感ずるので有つた、そして端から端へと果物の新鮮しい汁を吸ふ様に嚙んでは捨て、しやぶつては抛り出し〳〵て行くのが愉快で堪らない、男が自分と云ふ目的物を外した爲に失望したり、口惜しがつたりして自團太踏むのも底氣味がいゝ、庄吉の様な執念深い男の恨みを受けても咒はれても怖ろしいとも何とも思はなかつた。美しい女が斯うした場合に受けねばならぬ當然の報いの様に心得てるので……

○

「お主婦さん、何だねェ、一體全體此様な薄暗い處へもぐり込んで……之ぢやア全て押籠にでも逢つてるやうぢやないか、」

晴がりから油切つた重い身體をノシ〳〵と引づる様に、案内もなく上つて來て、突然無遠慮に聲を懸けた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

婆様は平常から心安くして居る隣りの者で、貸家の差配をしたり、内職に碁會所の看板を出しといたり、曖昧な素人下宿に迄、脱け目なく手を延して居るしたゝか者の後家である。

「だつて頭痛がしてならないんだもの」

纎細な手を輕く額に當てゝ甘へる樣な身振で云ふ。

「一寸、勝ちやん」

婆樣は自分の娘かなぞの氣でお勝の事を平常から斯う呼ぶのだ、するとお勝も亦つい其尻尾に付いて「お茶が入つたから小母樣」「お向ふから五目鮨を貰つたから小母樣」と小母樣づくめて飛んだ心安立てになつて居る。

女だてらに婆樣は帷巾の腕を捲つて、枕元ににじりよりながら、聲を低めて、

「ソラ、此間勝ちやんがお云ひだつたらう、なあに？なんてとぼけたつて知らないよ、磨鍊する年ぢやなし、あのツレ、早稲田の學生樣、家の二階の……、いゝ加減におしつたら、散々人を食つてる癖に……、そつとさぐりを入れて見たら、あゝへら堅さうに見えても案外なのだよ、今夜は皆外の奴を寄席へでもやつちまふから、都合を見てお出でゞないか三人水入らずで面白く飲まうよ、起きといでつたら、頭痛なんか忽ち愈つちまはアね勝ちやん、何だね、其樣な寢ぼけた樣な顔をしてさ、確りおしなね、見ともないよ、本當に世話

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の焼ける子つちやありやしない、アゝ〳〵私がもう五つ六つ若くつて、そして責めて勝ちやんの四半分程の容量が有つて御覧、默つて指をしやぶちや居ないよ、此御禮にはまさか、鰻丼や天麩羅位で濟ましやしまい、實際すまされるもんかね、確りお頼ん申ます、隨分氣の利いたお使者の寸法さ！」

婆様は皺の間からにじみ出る額の油汗を拭き〳〵黑豆の樣な丸眼を光らして歸つて行つた。

お勝はやゝしばらく枕に附伏して考へ込んで居たが、漸々起き出して物憂そうに姿見の前にいざりよつて、しどけなくなつた衣紋を繕ひながら、暗い鏡の面に浮き出した自分の面の少し青褪めて見えるのも淋し味あつて嬉しく染々見とれながら髮を撫で付けて居た。

○

着物も一番氣に入つてる大柄な明石縮みのを簞笥の底から引づり出して、態と伊達を見せた素肌に着込み、派手な絽の帶を若々しく胸高に締めて隣りの勝手口からそつと跤艤をくゞつて駒下駄の音を忍ばせた。

堀井戸一つを隔てに取つた自分の家の臺所では草鞋ばきのまんま、店の若い者が框に腰かけてせわしない夕飯の食べようをして居る。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

其晩はお勝も可成醉つてて十一時過ぎに歸つて來た。

信太は歸つて來て居たが、蒸暑く寢苦しい晩なので、寢床へも這入らず、下座敷の椽側で膝の上に運坐の巻を擴げながら罪のない顔をして居る。

「只今」

甘える樣な艶かしい聲をかけたが、妙に氣が臆せるのでピッタリ傍に坐つたまゝ默つて居た何を考へ込んで居るんだ、面白い話でもせんか」

信太は不思議さうに珍らしく落付いて居る妻の樣子を見て居たが、氣遣はし氣に斯う云つた語氣は相變らず優しかつた。

穏やかな目、何の蟠りも胸にない夫の仕打に逢ふとつい堪らなくもろい氣になつて

「あのお隣の小母さんが急ぎの仕事を助けてくれと云はれたのでつい……此樣に晩くなつちやつて……」

自分で弱いとは知りつゝ、つい口から出任せを並べて了つた。

「何を云つてるんだ、何も其樣な事を聞いてるんぢやない」

信太は他愛のない事を他愛のない調子で云つて無邪氣に笑つた。

洋燈を避けた暗い椽側に涼み提灯の水の樣なあかりを浴びながら、薄い肩をすぼめてお勝は淋しさうに頼りない目元で花ござの模樣ばかり見詰めて居た。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

○

女共や若い者が寝たのは何時も定りの十時で有つたが、夫婦は枕についても寝ぐるしいので蚊帳へ入らず漸々夜を更し、一時近くになつて漸く眠りに就いた。

ついとろ〳〵と寝ついたか寝つかないに、番頭頭のハイカラ頭髪が慌しく駈けて來て、

「若〳〵、旦那々々、お主婦さん」

ふるえ聲で押付ける様に重く呼んだ。

信太が物も云はず、はね起ると、

「何だか知りませんが、今太郎どんが便所場へ起きると物置の方で變な物音がしたつてんで鼠ぢやなし適切人の足音だつて申すんですが……」

小僧の太郎もガタ〳〵しながら顛狂な目を見張つて障子の外に立つて居る。

「何しろ、女共を起すな、寝て居る者は成丈打遣つてをけ、無暗と騒ぎ出すから……」

口早に云つて信太はセカ〳〵蚊帳を出ると、

「お前様、ヒョット怪我でもすると詰らないぢやないか」

お勝は胸をオド〳〵させながら袂を押へたが三人はドシ〳〵開きながしに椽側傳ひを物置の方へ行つた様子だ、氣の早い若者はもう捉へた氣かなぞでほこりだらけな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

高張提灯を棚から下したり、こゞなわを用意したりして居る。

○

然し、結句其晩は、騒ぎ丈けが草臥儲けで何の事もなく済んだ。

竊盗で有つたか、但しは火附けで有つたか、

三人が飛び出してつた時はもう影も形も見えなかつたと云ふ、然し慌て臭つて逃げ出して行く時、戸袋にても打つかつたらしく、馬鹿にひどい物音がした。

曲者は逃げたと云ふので怖々ながら太郎が往來へ出て見ると、半纏を頭からスッポリ被つた大男が消えかゝつた瓦斯燈の下をそれて向ふの路地の暗へ忍び込んだと云ふ。其尾について瓢輕な(ひよつとこ)と云ふ仇名の小僧が、「おそろしい怖い目で、丸て此春明治座て見た高麗藏の油坊主みたいだ」と自分が見て來た樣に話す。

其凄い目と云ふのがお勝にはどうしても庄吉の樣にしか思はれならない、元より自分は見もせず、何故と云ふ證據も手づるもあるのではないけれど、只何となく庄吉てあるかの樣に感じられてならぬ。

食べるに困つて來て物取りにても入つたか、又は……彼樣な妙に執念深い蛇の樣な男丈けに自分を恨んで……、お勝はもう、くらやみに目を開いて其さきを想像する勇氣がなかつた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「あれんばかりの事を根に葉に持つて、弱い女を恨むなら、祟るも宜からう、取殺して呉れてもいゝ、取殺すなら殺して見ろ、男らしくもない物置になぞコソ／＼忍び込むなんて……、拾犬見たいに、何だ！見共ないぢやないか、もつと威張つて來い、店から、店から大股に入つて來て立派に殺すなら殺せ、面白い、私もお勝だ、見事殺されてやる」

胸に餘る弱味が自分と自分に斯う力味を云はせたが矢張神經がたかぶつて寢就かれない側に枕を並べて居る信太は直ぐ其まゝ寢入つて、穩やかないびきの聲さへ漂はして居る。

眠るとは覺め覺めてはウト／＼する、ウト／＼するかと思ふとすぐ怖ろしい夢に襲はれてハツト目を開く、閉ぶると光景は破船した船底で汚ならしい旅の女が自分の側に倒れ伏して居る、抱き起さうとすると其女は死んでるので口からおそろしく毒血を嘔いて、顏は幽靈の樣に蒼い、キヤツと聲に出して思はず手を離すと、自分の大事な着物の袖から帶から血糊がベツトリと染みついて了つた　と思ふと昔娘の時分芝居で見た清玄の樣にやつれた凄い男が土の樣な貌色をしてムクリと自分の枕許に座つて居る鼠色の衣服、鼠色の帶、毛虫然とした眉毛、其下から二つの眼ばかりギラ／＼狼の樣に光つて居る、庄吉だ！／＼、お勝は怖ろしさにふるえ上つて枕許の有明洋燈を點さうとしたが、點したら暗い障子に今見た夢の幻が浮き出しさうで滅多にマッチを擦る氣に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なれにもなれなかつた。

冷汗のにじんだ體を固くして、前髪を枕紙にすりつけたなり、お勝は徒らに夜明けばかり待たれた。

翌日半日と云ふものは半病人の形で帳場へも出ず、誰が何と云つても口一つきかず、氣脱けのした樣に蒼ざめた顏をして奥に座つて居たが遂に午後から土藏前の小部屋に床を敷いて寢込んで了つた。

○

其後庄吉の姿を我も見た／＼と店では大評判である

彼の晩變な事が有つてからと云ふものお勝は耳の端で名を云はれるさへ空恐しい樣に思つて、當分隣の家へも滅多に足踏みをしなかつたが、漸々月日にほとぼりがさまされてゆくと、長い夢からさめた樣に矢張もとのはしやいだお勝に戻つて芝居、寄席緣日と目に立つ形裝をして盛んに押歩く。

或者は庄吉が乞食の樣なボロをさげて居たと話すし、或者は身奇麗な風をして神樂坂邊りの藝妓屋町をうろついて居たとも云ふ、兎に角、始終お勝の家の近所をまごついて居るには違ひない。

お勝はもう氣味が惡いと云ふより小芝居かなぞでよく見る仕掛の見え透いた化物

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

が宙に迷つてる滑稽さを思ひ出してむしろ此頃ではをかしいと思ふ様になつた。男の未練、愚痴總てそんなものはお勝の耳に蚊程のひゞきも與へなかつた。

店の者はもう庄吉の名を云はないで、其凄く鋭どい眼を慾の眼々々々と云ひあつては笑つて居る。

お勝は日にまし若く妖艶になつて行く柳の綠より青い三日月眉ぬける程白い襟足、此頃ではずつと向きを換へて、洗ひ髪を藝妓風の細い銀杏返しにして奴元結にくすんだ好みが容姿のいゝ丈けに餘計引立つて、素肌を自慢の大辨慶の浴衣と共に一段男の心をそゝつて居る。——完——

（舊作）

高原の秋

らいてう

こんな楽しい寂しさがまたとあらうか、

私の全身(からだ)がいつかしらたつた一つの圜圓の心になつて天空を抱き入れて了つた。

高く、高く、また高く、顔の上に、露草色の濃淡もなく、澄み渡る秋晴の朝空は無底の大海のやうに深いけれど、其深さには飽迄明るい輝きを含んで、視界のきはみ、羊毛の一筋ほどの白雲さへ浮ばぬ。

私は先刻から誰に障げられることもなく、高原の谿を埋める眞葛の廣葉の中に、伸び、伸びと仰臥して、心行くばかり、碧空を眺め入つてゐるのである。

今朝、温泉宿(ゆのやど)を出た時は、ほの白い曉空は水のやうに、果てしもなく流れてまだ背後(うしろ)の東山から日の出るには間があつた。もう三里近くは露を亂して來たに相違ない。いつか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

黄金色の美しい光は、水晶を解して湛へたやうな、淨明な純粋な乾燥した凸半珠の大氣の中に漲り溢れて居る。

私は日觀を忘れて居た。

この信濃の旅人となつた其日から、怠らなかつた日觀を今朝全然忘れて居た。けれど、思へ。今かうして眞直に空の奥へと高く眼を注いで居るのは、矢張り自分の心元に鉛錘を投じて、測つても、測つても、量り切れない、後から、後から千百の國土が發見される、其魂の秘密の深淵を測量してゐるのである。この間に私の神經の顫動が沈まり、眞の生命が芽を吹いて、伸び、眞の自己が孚まれて、大きくなつて行くに日觀と何の變りがあらうぞ。往昔希臘のヒタゴラス學派では朝毎に天を眺めよと訓へたさうだ。否々、私は白晝を忘れ、太陽を離れたことはない。少くとも靜平な時も、動亂の時も、夜も、晝も我が太陽と歩調を合せやうと努めて來た。

四邊は物忘れてもしたやうな靜寂さ。

開闢以來、汽車、電車、自動車の響はもとより、人力車の音にさへまだ一度も動搖させられたことのない空氣は酸つぱいやうな、どこか濕つぽいやうな、冷たい、青い匂ひを籠めて何となく心を引締める。

蟲の聲は絶えず小さな玉を色々に轉ばして居る。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

蟲の聲を外にしてもしこの雰圍氣に波動を傳へるものがあるとすれば、梢を渡る風の音か、鳥の羽音か、落葉の私語か、杣人や、炭燒く男女の氣長さうな跫音位なものであらう。

しばらくして靜に起きた………紅葉の錆びた花が袖を掠めてほろ〳〵と徑にこぼれる。

眼を西方に放てば、遠く信飛國境の大屛風・日本北アルプスの連嶺はずつきりと虛空に刻み出されて、其嶺の一つ、一つざくりと刳つた斧鑿の痕まで見えるため、いつもよりはものの何里も近寄つたやうに思はれる。

天地に塞がる大傾斜、大谿谷、無限から、無限に、無邊無際を畝ねる空線、是等はもうそれながらの自然が絕妙不巧の一大藝術で、萬人の心を威壓し、驚異と、崇高と、莊嚴と、畏敬とを、無言にして日に、日に新に强ねば止まぬ。何たる印象强き性格であらう。惡魔か、あらず、神人か、はた超人か。人格進化のクライマックスに達せる高僧、善知識等が、沈默靜座の面前に幾度か立つた自分もまだ曾てこれほど赤裸々な威嚴に打たれたことはない。

太初、茫寞の山野に住んだ原人は何等のこざかしき思念を挾むこととなしに日輪、山岳、大洋、大河、森林などに對して我知らず脆いたのである、其自然崇拜時代の嚴肅な、敬虔な人間本來の純粹相をこの虛僞な、曖昧なまやかし多き今日の世にまだ多少でも失はず

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

して生きてゐられた自分を、私は心に謝さないでどうして居られやう。

それにしても呱々の聲をあげて、まづ第一に無垢な頭腦に印象すべくこの山岳を有つてゐる信州人は何んて幸福な人、自然から受けた恩惠の豊かな人であらう。仰ぎ見るものの一つもない關東平野——しかも東京の眞中に靖國神社を唯一の遊び場として育つた自分………幼稚園の歸途をあの馬場(今とは違つて、まだ大村氏の銅像もなく、一面蓬々とした雜草て、木柵が取廻されて居た。)の中を、螽斯を追ひかけたり、電氣燈に集る大きな甲蟲を玩具にしたり、花を採つて、巡査さんに言付けるぞと園丁に嚇されたり、青銅の大華表を此の世の一番大きなもの位に思つて屈た自分………ああ、若しこの高原の土に生れ、山靈と默契の中に育つたのなら、も少し偉大な人間として今生きて居はしまいか………。

私は今、山麓の徑を河原に沿つて爪先下りに歩いてゐるのてあつた。

昨日の冷たい雨は又山々に雪を齎した。

最後列の高い峯々は頂から絹絲を振亂したやうに、縱谷に雪を疊んて、純白に、灰白に、銀白に、或は眞珠色に輝く。中にも乘鞍ヶ岱の斑雪は碧空を劃して鮮かに磨き立てられて居る。

例の槍ヶ岳は常念の後から僅に現はす鋭利な花崗の穗先に大空を突拔いて、天帝を

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

威嚇するものゝやうだ――大膽不敵の一騎打の荒武者よ。だが、松本平に灰雨を降らした、かの憤怒の燒ヶ岳は今日はいかにも呑氣さうに線のやうな烟柱を眞直に立てゝ碧空を白く二分した末はやゝ横ざまに靡いて、高く消える。けれど、上高地溫泉あたりからでも眺めやうものなら、戰慄せずには居られないやうな、猛烈な噴烟に天を焦し、萬目死に閉ぢて、四邊は緑の一點もなく、髑髏のやうな枯木立は無限の恨を天風に訴へ、見るから、荒涼、凄慘な光景であらう。夜は黒闇々の虚空に時ならぬ大紅蓮の焰の花も咲かせよう。

毛立て天鵞絨のやうに滑かな、褚色の艶肌に針葉樹の森を暗藍に煙らせた前列の山々は、護衛兵のやうに肩幅廣く、或は狹く、跨を開き据た捌いて、簇々と膝下に參ずる。

秋の空氣は圓味がない。烟が利かない。赤禿のあからさまに過ぎるあたりは强情我慢の相を示しては居るが、瘠牛の肋骨(あばら)のやうに山骨の露出したのは、ともすれば雪の白縞を欺く。

近い山々の懷から青々と長閑に立昇る三筋の細烟は炭を燒いて居るのであらう

何所を見ても覺醒の眼をぱつちりと見開いて、夢見るものゝ一つもない、澄徹した明け放しの光景は、自分の腹綿を一つ、一つ取り出して眼の前にずらりと羅列したやうな大悟の後の心好さである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

さら〳〵、さらッと何處かで音がする。
水の音ではない、風の音でもない。あゝ、秋の聲、秋の聲だ。
私は思はず立止つて、河原の方へ耳傾けた。
河原には流れがない。山林濫伐のため、一面海のやうに灰色の大砂利、小砂利は高く、低く、連つて、仙人の手窪に湛えたやうな、鋼（はがね）色の秋水が圓くそこ、かしかに光るばかり。本來の嚴格な形相を削磨された大石は四つ五つ。圓滿滑脫の老人のやうな顏付でこちらをぢつと見てゐる。其間を河原蓬や、河原母子（ははこ）が隙間もなく生々延びて、白々と、いかにも柔らかさう。あの物寂しい幽かな秋の聲はこゝから來たものらしい。風もないに河の秘密を囁きあふのであらう。今少し季節が早かつたならばこの沒彩色の中に河原撫子の紅が暖い血潮の幾滴かを點じてゐたであらうに。
河原に沿つて、柳や、雜木の茂みがある。黃葉は舞ひながら、靜かに落ちる、又落ちる……
……見よ、この細い一葉、一葉にも大自然は決して極印を忘れてゐない。
大木が路を塞いでゐる、山荒の時のが其儘になつてゐるのであらう。乘越えて行く。
對岸は山又山に圍はれた中のかなりな平野である。濶葉の林叢は丘に燃え初て、紅のはた紫の焔に榮えある秋を誇り、時に深綠の森と手に手をとつて半圓を作る。野は大方耕地になつてゐるが、其間に起伏する小丘は高いのは赤松の幼樹、低いのは櫟林や、桑畑、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

蕎麥畑、ともすれば稻田もあつて、樣々に劃せられた色彩の遠望は云ひやうもない。自然がありとあらゆる色彩を見せたさに其大きな繪具箱から生の儘のをポタポタと落したやうだ。其間に小さな農家か點々と散在する、いかにも山國の特色をよく發揮してゐる。比較的大きな高い、何の風趣もない、白堊の蠶室に三つ四つ二つ穿たれた暗い方形の小窓の暗示的なのが妙に目を牽く。

路は花野にかゝる。

高原の露はまた格別である。炎天の太陽の下にありながら、鷄兒腸（よめな）、紺菊、白山菊、地楡（われもかう）、おときり草其他名も知れぬ花草の上に、圓い、長い無數の白玉を綴つて、七彩にきら〱と光る。私は目映ゆさに思はず懷に手を入れたけれど、例の燻眼鏡はなかつた、今朝荷車につけたあの荷物の中に紛れ込んで行つたと見えて。

有るか無きかの燈心蜻蛉は芥子ばかりな二粒のタルキッシュを頭に點じて、花から花へ無心に飛び移る。足元からは螽斯（ばつた）が餘程吃驚したらしく、無作法に跳ね上る。山腹の緩勾配の山薊の險相な紅紫の針の塊に近く、しゝうど、男郎花などの繖形の花叢がくつきりと浮き上つて、白く漂ふ。風に光る崖の花すきの白銀はいかにも柔かさうな。所嫌はず茂る雜草の莖と云はず、葉と云はず、花にまでもねなしかづらの長い紐が執念に絡み

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

付いたあたりは黄ばんで見える。
けれどもう野も花も錆びた。
黒紫に熟しきつた山葡萄の房の先から一滴の雫が自からにぽたりと、
ああ可愛い栗鼠の圓い眼があの葉蔭からもしや覗いて居たら………
ああれ、あれ思ひがけない草の中に龍膽が、たつた一つの龍膽がずつと一本抜け出して、日を好む單純な、鐸狀の花は同じ色の天に口を開いて居る。この純粹な碧色は屹度秋晴の大空から色素をとつて、日本アルプスの萬年雪が反射する白雲母のやうな光に幾度か洗つたに相違ない。此國の自然畫家が自分は龍膽を描いてその背景に白妙の日本アルプスの遠望を現したいと云つたのも頷かれる。
私は顧みて、西の空を仰いだ。空には白い雲があつた、連嶺は秋の薄霞にいくらか遠ざけられたが、乘鞍の斑雪は一段の輝を添へた。
ああ、高嶺の萬年雪！ 私の胸は忽ち躍つた。………矢張り私は雪で死にたい、日本アルプスの雪で――今迄見たありとあらゆるものゝ中で、一番印象の深い、強い、暗示的な、神秘的な、いつ見ても清新で、自由で、魔力のある日本アルプスの其頂のあの神聖な萬年雪で。
雪は私の生命である。ラスキンはもしアルプスで死んだら雪の中に葬つてくれと云

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つたさうだ。けれど、私は人手にかゝつて葬つて貰いたくもたい。卑しき自愛や、欲情や、苦悶、動搖、悲愁、疲勞、老衰、死、さま〴〵な影に濁つた人間の眼にも觸れずに其儘雪を褥に寂滅の谿間に靜やかに、安らかに眠りたい。げに哲學的生涯とは生なき死、死なき生に對する不斷の冥想ではあるまいか——

私は寂滅の谿間に萬年雪を褥に靜やかに、安らかに眠つてゐる。

三千年の長い〳〵 Devachan の眞晝の夜が續く。

私は眞晝の夜の泉の中に浸り、浸つて、飽くことも知らず、乳汁を飲んで、日に日に肥つて行く。

もう肥るだけ肥つて、熟すだけ熟しゝ、ひゝわれるばかり、——

ふと高山性の強い光線の矢が痛いほど身を刺すかとばちつと大きな眼を開いて見ると、すぐ頭の上は透き通るやうな蒼穹だ。銀白に輝く視野の限り、卷雲の大海原は脚下に續く。十倍大の太陽は眼の前、手にとるほどの近さである。私は射かゝる光の目眩ゆさに眼を擦り、擦り自分の身體を見る、(身體を見ると云つても頸を振ぢるやうな無理はしない、私の魂は身體から離れて、傍に立つて居るのだから。と、不思議なるかな。一面、純白な羽毛で蔽はれて居る、つく〴〵見れば雷鳥だ。這松の中に巢くひ、千古無人の境域を默々

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

として飛び交ふかの雷鳥だ。

どうかと、まづ一鼓翼して、さて大空へと飛んで見ると、身體の輕さ、空虚(うつろ)で出來て居ると云つてもまだ重い。

私は太陽の周圍(ぐるり)を三度廻つた。——

さうだ、さうだ、乘鞍へ、乘鞍へ。

あの胡蝶のやうな斑雪は私の經帷子——高原の一雨毎にふうわりと厚く蔽いかゝる經帷子だ。

頂上には火口湖(五の池)の底まで澄み切つた眼が飽迄冷かに八峯環座の眼蓋の奥から見て居る筈だ。太初、燃えて、狂つて、火の太柱を天に沖したその噴火口が——

ああ、或時は極熱であれ、又或時は極寒であれ。

神の口から吐出されたやうな生温き人よ、不純な人、よ矯飾な人よ、汝はまた君が王國に縁(ゆかり)なきものと諦めよ。

さうだ、さうだ、乘鞍へ、乘鞍へ。

はさと小枝に面を拂はれて、思はず反身に二歩すさつた。其儘私はしばらく其所に突立つて居た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

何故私の眼からはいつまでも〳〵熱い涙が流れるのであらう源は地の底か、そもこの熱、この力は何處からくるのであらう。

と見れば其所彼所に山榛かとと思はれる幹も枝もない幼樹は羽狀の葉のみを直に大地から拔き出して唐紅に焔の舌かと燃え上る。

あたりには雜木林が多い。乾枯びた鳶色の縮葉が捲返つて震ひながら、でも、まだ容易に枝を離れかねてゐる櫟林、其蔭の奥を目白鳥が枝から枝に身輕に潜り拔ける。柴刈が、落葉掻でも居るのであらう、姿は見えないが、何處かでがさごそと音がする。

路は多少の高低をなして左に、左に曲折する。

日あたりのいゝ斜面から路にかけて、曉の星のこぼれたやうな白山菊が一面に咲き匂つて居る處に出た。

私は又何の分別もなく、其中に横はつてゐる。

清香は晶明の空氣に溶けて四邊に浮動した、求めないのに花は自から搖いで頰に觸れる。

小さな太陽をとりまいて舌狀の細い眞白な手をやさしく空に伸す白山菊よ、私はお前の葉に色づける無數の赤錆菌までがすきですきで捨てられないのだ。私が御前の中にもぐり込んで、お前の秘密を、すつかり知り盡した時乾度私とお前とは大自然の奥底

にはびこる一つ根に咲いた姉妹の花だと云ふことと解するに相違ない。
頭の上で赤蜻蛉が渦を巻く。無色の薄い翅を金銀に光らせながら、さま〳〵の綾を抽いては、描いては渦を巻く。
山裏の岨路を縫つて來た馱馬は十歩のあたりをとつか〳〵と引かれ、引かれて下りて行く。背負つた炭俵が落ち相た。
私は又歩き出す。
大きな河原に渡された平板の長橋を先刻の馱馬が畫中のもの丶やうに通る。橋の上に立つて上流を眺めると、何所までも灰色に展けてゐた砂利河原の次第に兩岸が寄合ふあたりは大石累々たる石渓で、其間を石に堰かれ、石を越え、幾筋かに分岐しつ丶、泡花を咲かせつ、散らしら丶、白々と流れ落ちる清湍が見られるが、水は極めて少ないらしい。それも其筈、前面に峙つ山々は大方枯色の兀山で、白つちやけた斷崖をそこにも、こ丶にも剝出して居る。殊に赤禿に日の照る截斷面は美人の玉の頰にむざと燒鏝でも押付けたやうな殘忍酷薄な、强烈な感じを與へる。いづれ濫伐の結果であらうが、出水の壯觀は思ひやられる。
目を掠めて、河原の石でも飛んだかと、鳥が啼がすに立つた。
橋下を見ると大石がいくつも轉がつて居る。仕事をして居た人足は鶴嘴の手を休め

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て無意味な眼で私を見送つた。

河原に別れて田圃中には入る。

蕎麥畑が所々に白くくつきりと野を劃して、蜜蜂の眠氣を促すやうな唸り聲が絕えず聞える。水車小屋では用なき所に徒らに神經の過敏になつて行く文明の人達を嘲笑ふやうに昔も、今も、夜も、晝も、大愚、大愚と繰返して居る。

蘭莚を干し並べた二十戶あまりの小村を過ぎ、とある小山に突當る、其裾を半周して、櫟林と桑畑のだらだら坂を下り、左に折れれば一群の家根が向ふの山裾にちよんぼりと浮き出る。

其所が養鯉所である。

戶數僅に三、五、郵便配達夫は朝一回しか來ない、ポストとも湯屋も何もないところ。四周山で取圍まれた大池で鯉を飼養するやうになつて以來出來た家で、皆まだ新しいのだとか。

でも、あたりは大方鋤がはいつて、日に照らされた。田の面は黃に焦け、よく實つた垂穗には同じ色の蝗が止つて居る。稻の香は空中に滿ち、あのお喋りの雀さへ無言で籾を拾ふ眞晝の靜けさを、田水は細々と、鮮かな音たてゝ落ちる。今、畦を横切つた黑い小動物は……野鼠であらう。早稻の刈田の中を鳥冠を自慢の眞白な逞ましい雄鷄が物體らしく

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

先に立つて歩く、と二羽の雌鶏が後に續く。路傍の土の中にむつと蹲つて、羽蟲に時々身體を震はせてゐるのもある。

何所からか小綺麗な、小さな垂れ耳の白犬がのそ／＼と蹤いて來る。いかにも眠さうな眼付だから、一寸口笛を吹いて見ると、すぐ堅さうな細い尾をふつた頸環も何もないが、飼犬と見えて。垈の溜水のあたりを家鴨の一列が大儀さうに駈けてゆく。其後姿をぢつと見詰めて居ると、何だか面白可笑しくて堪らないことでもあつて居ても立つても居られないので、あゝして皆んな身重の女の眞似をして、ふざけてゐるのぢやないかとおかしい。

山腹に數本の柿の木がある。見よ、汐垂れ加減の霜葉の中の鮮紅の柿の實は信濃の秋の象徵ではないか。一番高い木の梢頭に大きな鳥の死骸が竹棹の尖端にぶら下つてゐる。私は立ち止つて、其實を數へた。

柿！柿！柿！柿！柿！柿！……

此秋晴の山畑で、北アルプスに沈む入日のやうな美しい柿の實に一つ、一つ自分の魂を入れて居る私はまあ何と幸なものであらう。

詩もいらない。歌もいらない。

何所かで折々鍬の音がする。盲目縞の雪袴を穿いた、編笠被りの女が二人同じ盲目縞

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の手甲の手を甲斐々々しく働かせて居る。

田圃中の一本路を左に折れると、桝の生垣を周らした農家に突當る。門前に聳り立つ二本の欅の大樹は青空を背景に小枝々々をすつかりとすかせ、半ば振り落した黄葉は日を照り返して、立派なそれでゐて徹底した美を示して居る。

眞直に門を入ると、納屋や厩が並んで居る。柵の上から顔だけを出した黒馬の、長大な顔に釣合ふ程の大きな、しかも優しい眼に見送られて、私は暗い、廣さうな土間の一隅に立つた。二三度聲をかけたが何の返事もない。土間に置いてある据風呂や、炭俵や、糟味噌桶など、目が馴れるとだん／＼見えて來る。編笠が一つ壁に懸つて居た。まだ、

「御免なさい。」

今度の聲は餘程大きいばかりか底力があつた。聲はひたりと閉ぢた四枚の煤け障子に眞直にぶつかつて、森閑と澱んだ土間の空氣を動搖させた。けれど内からは何の反響も來ない。障子を少し助けて見ると、眞黒な大きな洞窟のやうな、まるで、惡魔の秘密會議所のやうなものが目の前に開ける。ぢつと眼を据ゑて見てゐると廣い板間で、中央に大きな圍爐裏がきつてある。梁や、天井なしの家根裏から、四壁まで丁度漆で塗つたやうに黒光りに光つて居るのであつた。自在には大藥罐が下つて居るが、「ぼや」は燃え盡して、一點の火氣もない。次の古茣蓙と、藁埃の浮く緣側の一部分とが見えながら人一人居さう

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

な氣色さへもない。と見ると大きな黒猫が隱險さうに忍び足で縁側を歩いて居る。

私は黒猫を一目見た時、心の一隅で何か深く思ひ當るところのあるるうな、一種の感動を覺えたけれど、それが何であるかどうしても分らない、屹度何かある、何かあるとばかり頻りに思はれた。

裏へ廻ると庭を横ぎつて、取付が仕事場である。三人の若者が樅の厚板を挽いて居る。木の香が心よい。四邊には鉋屑が山になり、鋸屑は霜のやうだ。水桶の傍の砥石から青色の水が流れて、地に煮染んで居る。

私の言葉に應じて若者の一人は、すぐ外に走つた今主人は池畔の小舍にでも行つてゐるのであらう。

私は今日から此山間の養鯉所にかうした素朴な人達と一つ圍爐裏に生活するのだと、胸を張つて、あたりを見廻しながら主人の來るを待つて居る。――未完――

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

編輯後の雜感想

らいてう

◎本誌は第三號です。三はなぜか意味のある、重大な數のやうに思はれてなりません。第三號の如何はこの小兒の將來に大きな關係がありはしますまいか。かう考へて私は本號に對しますと、どうも心細い感しがしてならないのです。たとへ下手でも生命の凝つたやうな作品の一つなりとも毎號本誌によつて發表することが出來るやうに御互に骨を折りませう。そして一號は一號と進歩のあとの見えるやうにしたいものです。よい作品の來るのを毎日々々待つて居るのは編輯係のものばかりではありますまい。

◎生きて居るのか死んで居のか分らないやうな生温つこい、影のうすいものばかり見せ付けられてはお互に心苦しい次第です。ありあまる精力があつてのなぐさみならばまた格別なこと、無駄話をしやべつたり、書いたり、牛の涎の長々とよまひ言をたらすばかりが女のすべてゞもありますまい。

◎のらりくらりや、あそびは進化の最高級に達した者の生活、少くともさう云ふ者にのみ許されることです。今日の女にはまだ、まだ容易に許さるべきものではありますまい。

◎生命の流れは刻一刻に進化し今や世界の人類は漸く人間の境界を脱し、今日の人間以上のものに進化しやうと、意識的にせよ、無意識的にせよ日夜に血眼になつて努力してゐるてはありませんか。我々は昔の人が考へたやうな一定不變のものではありますまい。實に變化性に富んだ、日に日に新に、より美しく、より強く、より大きく、より秀れたものとなり、かくて無限に進化すべき前途を有つて居るものです。ひとり女のみ生物進化の理法に洩れて、まだ人間の仲間入

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

りも出來ないと云ふやうな、そんな不公平な自然の法則はない筈です。私共の意志を以て進化の力を增進するばかりか、それを早めるやうに努力をせねばならないでせう。

◎今日の女は全く注意力の弱いものです。統一性の缺げたものです。やつと小兒の無意注意の狀態から、脫して有意注意の狀態に一步踏み込んだ位のものでせう。まだ、まだ、まだ、まだ、今後長い長い間、この有意注意の階段にあつて飽く迄も主我的態度を續けねばなりません。徹頭徹尾、反抗的、否定的、克服的、奮鬪的の態度で死物狂に直進せねばなりません。そして彼方に聳える自我主張の項點、自覺の頂點である苦しい、苦しい峠をいかに弱くとも是非に越さねばなりません。

◎もとより私とてこれを私共女が行き付く最後の境地だとは決して思つて居ないのですが、今日の女が、—女と限らず人間たるものが一生涯に於て是非に一度は通過せねはならぬ關門である、この關門を通過しないことにはほんとのものになることが出來ないと考へるところから、今日の女に向つて說かるべき福音はまだ主我的系統のものでなければならぬと信ずるのです。

◎併し私はこの先きを豫想して居るものなので否、豫想ではない、自我主張の極に於て來る忘却の境地、かの嚮きの小兒の無意注意の狀態とよく其態度を同じうしてしかも全然違つてゐる受動的、無抵抗的の非主我的狀態、ここか矢張り我々の最後の落着き所であると信じて居るのです。この境地まで來て始めて我々は心身共に眞の自由を得、靈性は十二分に發揮せらるゝのではないでせうか。

◎併しこの最後の非主我的境地の福音が直に今日の日本の女に向つて說かれる時、何等の價值なきものとなるばかりか、却て惡魔の聲となり、自覺なき以前の受動的態度となり終りはせぬか

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と云ふことを恐れるのです。

◎私は今、ふと、こんな言葉を思出しました。「汝等は我が信仰者なり。されど總ての信仰者に何の價値ありや。汝等は未だ索めずして、己は我を見出てき。總ての信仰者の爲すところは此のごときなり。これ總ての信仰に價値の少き所以なり。」

◎私共はまだ、主我的態度を續けて、飽迄もこれを貫かねばならぬ。「其自からの燃燒よりして其自からの敎の來るを勝れりとすべし」

◎生命なきものが筆を甜り、甜り、墨汁もて書いたもの……ああ其中から洞々として聞ゆる空虛の響をどうしませう。

——十月二十日——

社員諸姉へ（編輯室より）

◎社員は毎號必ずこの欄の御一讀を願ひます。

◎本社員は總て本社の研究會で定めました問題に對しては眞面目な御自身の意見を本社に宛て御送り下さい。

◎十一月の問題としてイプセンの人形の家を批評することになりました。

◎嘗きのヘダガブラーの折の經驗から今度は皆さんに書いて頂くことにしました。（なほ賛助員其他の御婦人の御意見も伺ふ筈です。）

右原稿〆切、來月十三日

原稿は五枚以上無制限。

◎以下人形の家研究書目を列記して置きませう。

1. **G. Brandes,** Eminent Authors of the 19th Century.
2. —— —— Ibsen and Björnson.
3. **Bernard Show,** Quintessence of Ibsenism.
4. —— —— Dramatic opinions and essays.
5. **George Moore,** Impressons and Opinions.
6. **Merejkouski,** The Life-work of Ibsen.

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

7. **James Huneker,** Iconoclasts.

8. **Phillip H. Wicksteed,** Four Lectures on Henrik Ibsen.

9. **Boysen,** Commentary on the Works of Henrik Ibsen.

10. **Henrik Yager,** Henrik Ibsen.

11. **Jeannette Lee,** Ibsen's Secret.

12. **Edmond, Goss,** Ibsen.

13. **Haldane Macfall,** Ibsen: The Man, his Art, and his Significance.

14. Csrreopondence of Henrik Ibesen.

15. **Moses, H.** Ibsen; The Man and his Work.

16. **Emil Reick,** Henrik Ibses Dramen.

17. **Les Berg,** Henrik Ibsen.

18. Berthold Litzmann, Ibsens Dramen.

19. **Schmitt,** Ibsen als Prophet.

20. **Rudolf Lothar,** Henrik Ibsen.

21. **Paul, Erust,** Henrik Ibsen.

22. **Otho Brahm,** Ibsen.

23. **Passorge,** Ibsen.

24. **Lou undreas Salome,** Ibsens Frauen gestalten.

25. **Hermann Bahr,** Ibsen.

26. **Hanstein,** Ibsen als Idealist.

1、島村抱月譯「人形の家」(早稲田文學四十三年一月掲載)

2、高安月郊著イプセン社會劇。

3、桑木博士、イプセンのノラに就きて(丁酉倫理三十八年七月號掲載)

4、坪内博士近世劇に見えたる新しき女(早稲田講演五、六、七號連載)

5、島村抱月著、近代文藝研究。

6、長谷川天溪著、自然主義。

7、島村抱月譯「ノラ」(結末の場)(早稲田文學三十九年十一月掲載)

8、島村柳水、個人としてのイプセン、(早稲田文學四十三年七月掲載)

9、島村柳水、イプセン遺稿より見たる人形の家(早稲田文學四十四年九月號掲載)

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

10、相馬御風、ノラと云ふ女（讀賣新聞本年八月十三日）
11、相馬御風、さめたる者の行方。
12、劇と詩、（本年九月號）

其　他、

◎批評は分類してなるべく精細に御書き下さい。あながち左の分け方によらずとも、各自獨特のものを示されゝばこの上ないことですが、社員の中の年若き方への參考にもと記したに過ぎません。無用の老婆心と終れば却て幸です。

1　無自覺のノラ、
2　自覺するに至る迄の經路、
3　自覺せしノラ、
4　ノラの將來如何（人形の家に現はれてゐる處まで即ち獨立宣言までのノラはほんの婦人問題の發足點で、今日私共婦人の上にふりかゝつてゐる多くの問題は寧ろ所謂人形の家が出てから後のノラ自覺以後のノにあるかと思ひますからこの項は是非ありたいものです。）
5　全體に亘つての感想。　　以上。

◎研究會で毎月何回か講師をお頼みして講義をうかゝふことも一方でいたしたいと思ひます。目下交渉中ですから其内よい御通知をいたすことが出來やうと思つてたのしんで居ます。

◎研究會ならびに「青鞜」に對する御希望や御要求は御遠慮なく本社宛に御申越下さい。研究會に就いては成るべく早く御申越いたゞけ御れば結構です。

◎毎土曜日を面會日といたして御座いますから、社員の方々は本社に御出下さい、色々御話をいたしませう。

◎本社の事業を永續し、其發展を計るには經濟上の基礎をも鞏固にする必要が御座いますから多少に拘らず基本金の中に有志諸姉の御寄附をお願ひ致したいと存じます。

◎社員の方は毎月社費三十錢を其の月の十五日迄に御忘れなく本社に御納め下さい。

◎社員の方々の原稿は隨時青鞜社宛に御送り下さい。

◎本社の贊助員岡本田治子氏は赤坂區田町七丁目一番地なる御私宅にて毎月一六の夜に松月古流生花投入花、及千家裁流元藤庵打瀨翁補助の下に御指圖せられて居ります。なほ日中は三越呉服店の方に御出勤のさうです。

◎贊助員加藤籌子氏の御作御多忙の爲本號に掲載することの出來なかつたのは誠に殘念なことでした。

◎木内氏の夕化粧は數年前の作で掲載することは作者の本意ではなかつたのです。

本號責任者
保持研
平塚明

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜第四號(ノラ附錄)豫告

題未定(小説)　加藤籌子

一夜(小説)　物集和子

六兵工燒(小説)　阿久根俊子

俳句　白雨

黑猫(飜譯)　ポオ

高原の秋二　らいてう

附錄

人形の家合評　青鞜社一同

青鞜社概則

第一條　本社は女流文學の發達を計り各自天賦の特性を發揮せしめ他日女流の天才を生まむ事を目的とす。

第二條　本社を青鞜社と稱す。

第三條　本社事務所を本鄕區駒込林町九番地物集方に置く。

第四條　本社は社員賛助員客員よりなる。

第五條　本社の目的に賛同したる女流文學者將來女流文學者たらんとする者及び文學愛好の女子は人種を問はず社員とす本社の目的に賛同したる男子にして社員の尊敬するに足ると認めたる人に限り客員とす

第六條　本社の目的を達する爲め左の事業をなす

一、每月一回機關雜誌靑鞜を發刊すること。靑鞜は社員及び賛助員の創作、評論、其他客員の批評等も揭載することあるべし

二、每月一回社員の修養及び硏究會を開くこと但し賛助員の出席隨意たるべし

三、每年一回大會を開くこと大會には賛助員客員を招待し講話を請ふことあるべし

四、時に旅行を催すこと。

第七條　社員は社費凡三拾錢を每月納附すべし。社費は每月會並に大會の費用と社員、賛助員、客員への雜誌靑鞜寄贈費

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

とに當るものとす。

第八條　雜誌「青鞜」發刊の經費は發起人の支出により、其維持は社員、贊助員、客員其他の寄附による。

第九條　幹部は編輯係、庶務係、會計係よりなる。

第十條　係員は四人とし、半數づゝ一年毎に交代す。最初は發起人等是に當る。

第十一條　係員は社員の選擧によるものとす。

第十二條　係員は再選することを得。

名　簿（いろは順）

贊助員

長谷川時雨　岡田八千代
加藤籌子　與謝野晶子
國木田治子　小金井喜美子
森しげ子

社員

岩田百合子　井上民子
岩野清子　戸澤はつ子
茅野雅子　尾島菊子
大村かよ子　大竹雅子
加藤みどり　神崎恒子
田原祐子　田村俊子
龍野ともえ　上田君子
上田朝子　上野葉子
柳清美　山本龍子
松井百合子　小林哥津子
阿久根俊子　荒木郁子
佐久間時子　水野仙子
杉本正生　鈴木かほる

係員

中野初子　保持研子
平塚明子　木内錠子
物集和子

豫告

青鞜社同人譯

ポオ散文詩集

青鞜社出版

寄贈書目

層雲（一ノ六）	層雲社
女の卷（句集）	磯ヶ谷紫紅
婦人の鍵（九月號）	東京社
大橋圖書館第九年報	大橋圖書館
車前草（一ノ二）	車前草社
矢車（十月號）	矢車發行所
春夏秋冬（十月號）	籾山書店發行
婦人文藝（第一）	婦人文藝社
日本雜誌（十月號）	日本雜誌社
女子文壇（十月號）	女子文壇社
旅行（一ノ二）	旅行社
俳味（二ノ十）	俳味社
心の花（十月號）	竹柏會
スバル（十月號）	昴發行所
一人一信（第一）	一人一信社
十善寶窟	目白僧園
三越週報	三越呉服店
蝸牛（十月號）	蝸牛社
試作	試作社

村井弦齋著　增補註釋　食道樂　全一冊　春の卷夏の卷秋の卷冬の卷（合本）　定價金二圓　郵稅金十八錢

村井弦齋著　增補註釋　食道樂　縮刷　春の卷夏の卷秋の卷冬の卷　全四冊　各卷定價八十錢　郵稅十二錢

村井弦齋著　增補訂正　臺所重寶記　全一冊　定價金一圓　郵稅金十二錢

赤堀松吉　赤堀峯吉　赤堀菊子共著　家庭應用　洋食五百種　全一冊　定價金七十五錢　郵稅金十二錢

赤堀吉松　赤堀峰吉　赤堀菊子共著　家庭應用　惣菜五百種　全一冊　定價金七十五錢　郵稅金十二錢

故久保田米僊著　同息米齋、金僊畫　年中惣菜　全一冊　定價金八十錢　郵稅金十二錢

故久保田米僊著　毎日の惣菜案内　全一冊　定價金十錢　郵稅金二錢

故久保田米僊著　同息米齋、金僊畫　茶の湯の心得　附茶席料理　全一冊　定價金八十錢　郵稅金六錢

赤堀吉松閲　奥村繁次郎著　名物　諸國料理　全一冊　定價金四十錢　郵稅金六錢

發行所　東京市銀座大通新橋際　振替貯金東京二〇〇〇番　新橋堂書店

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

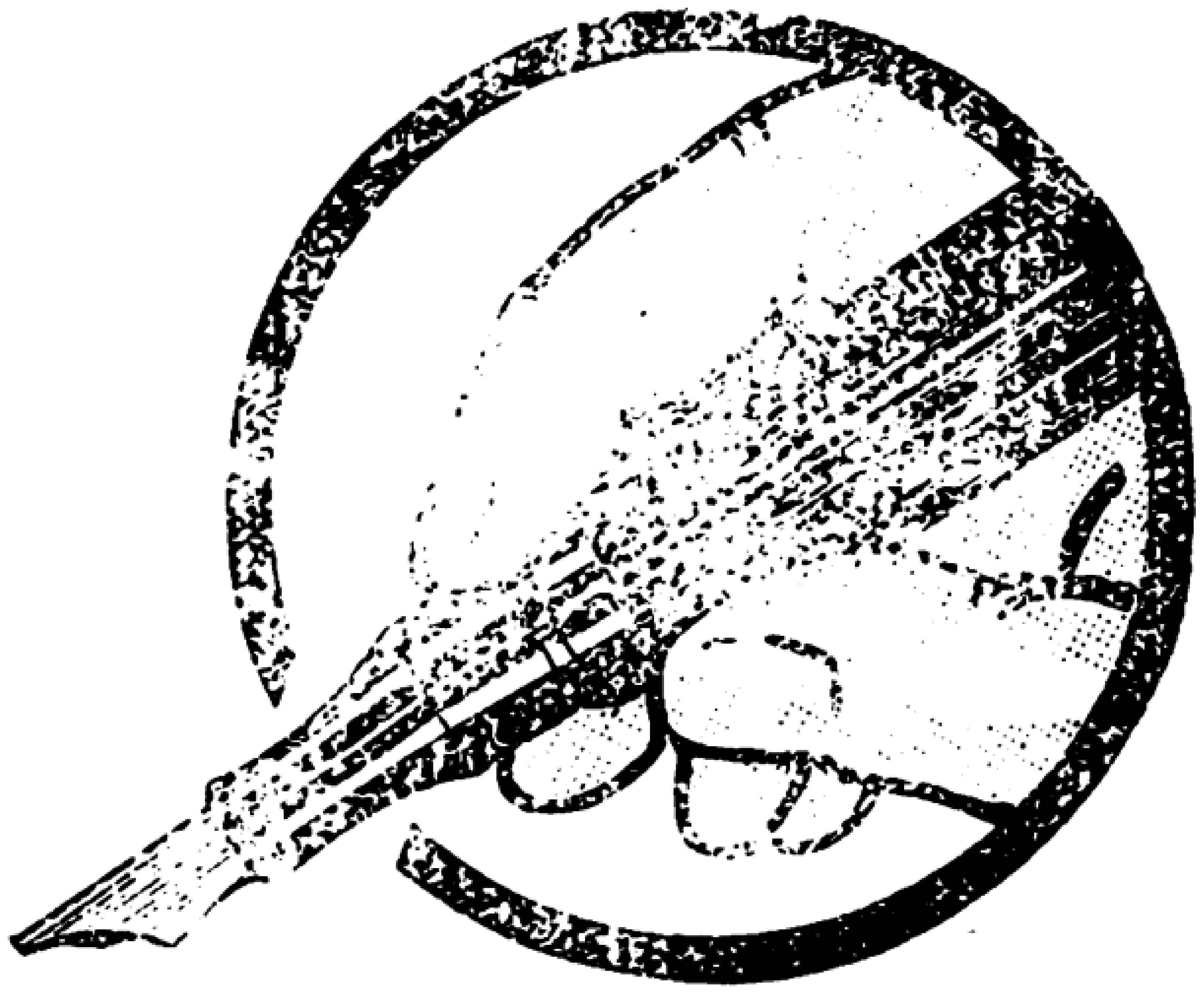
時勢の趣向と機運を察するに敏なる女流の持たせ給ふべきオノト萬年筆とオリオン萬年筆

萬年筆

オノトは理想的オリオンは實用的倶にインキ留の裝置あり體裁高雅筆尖流滑使用は永久也

オノト萬年筆

飾無きものは金六圓以上
飾有るものは金七圓以上



オリオン萬年筆

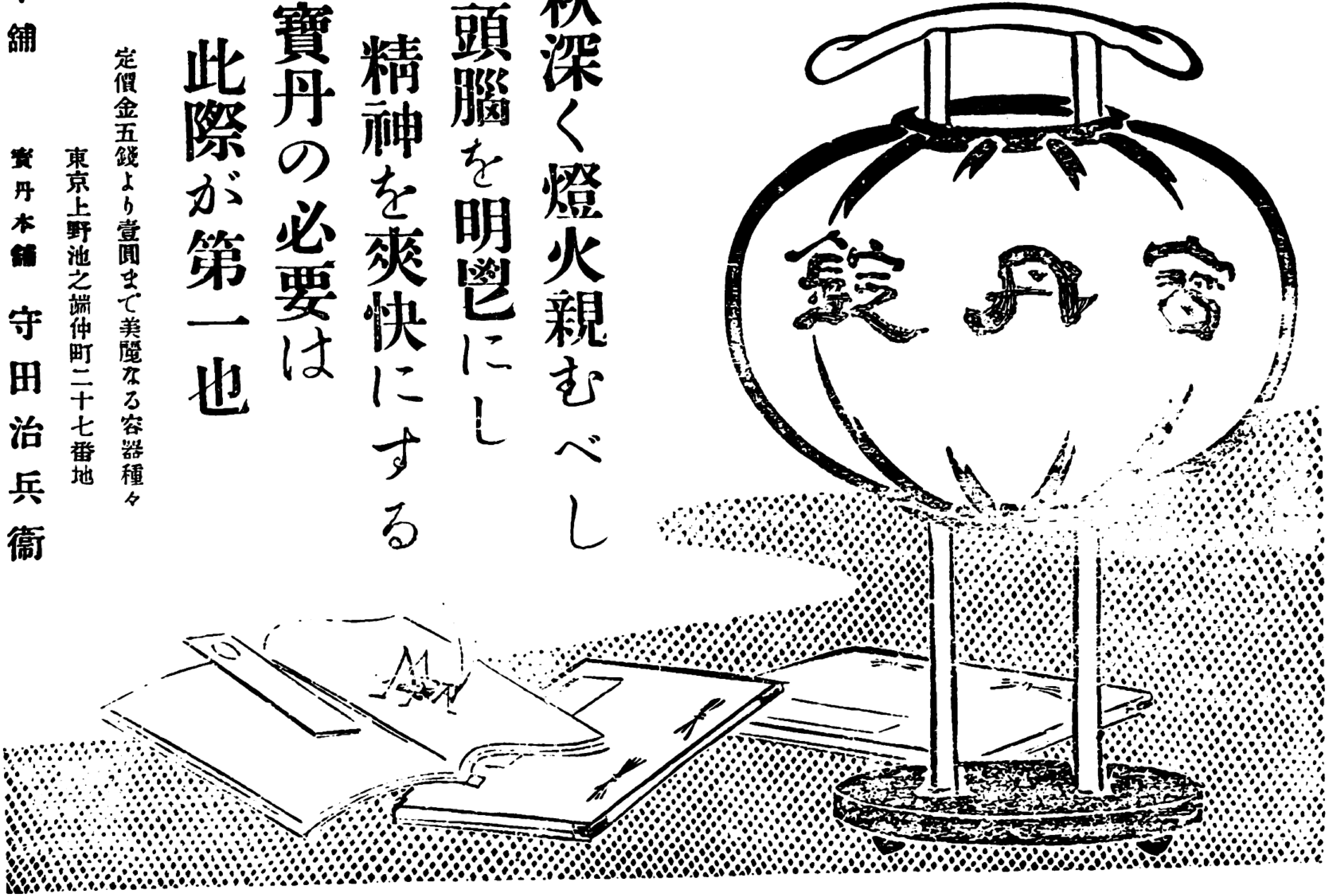
十四金ペン裝付
金貳圓八拾錢

目錄郵呈

東京日本橋通三丁目

丸善株式會社

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER



秋深く燈火親むべし
頭腦を明晰にし
精神を爽快にする
寶丹の必要は
此際が第一也

定價金五錢より壹圓まで美麗なる容器種々
東京上野池之端仲町二十七番地
本舗
寶丹本舗 守田治兵衞

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

最良髮油

みやけ油

登録商標

家庭重寶

專賣特許一一二九八

粉末石鹼

發賣元

東京市日本橋區人形町通

木村三宅堂

電話浪花六二〇 振替口座八七五一番

毎月一回一日發行
一冊二十五錢郵税一錢五厘

斯道唯一の演劇雜誌

歌舞伎

第百三十七號（十一月一日發行）

六冊前金郵税共一圓五十錢
十二冊同二圓八十錢

新無線電話（故團藏の事）……室田武里
試演劇場と「人形の家」……川村花菱
第一回文藝協會試演……芹影女
ノラの性格……高安月郊
ノラの解釋に就いて……島村抱月
關白秀次に就いて……井出蕉雨
市村座所見……林和生
「姉と妹」の作意と効果……佐藤紅緑
「結婚反對倶樂部」餘談……松居松葉
拙作「鎌倉武士」……右田寅彦
戯曲 手袋（ビヨルンソン作）……鷗外博士譯
市村座藝談（菊五郎、三津五郎、吉右衛門）……
明治座訪問記（仁左衛門、源之助）……
「箕輪心中」の第三幕……林和生
「道成寺」の話……關根默庵
五代目歌右衛門の懐舊談……伊坂梅雪
十一月の脚本……花菱生
笹つ葉物語……雀百嘴
短篇小説の材料と一幕物……川村花菱
劇談會——劇壇時事——劇界一覽……
脚本 夜行軍……紫魂生

本郷區湯島切通坂町番報社內
歌舞伎發行所
電話下谷二四八三
振替口座一八一〇六

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

顔見世や矢倉におこる霜の聲　　几董

俳味

十一月號　要目

先生は馬……（卷頭語）
近松の俳句……水谷不倒
俳諧昔噺……内藤鳴雪
賖沽と沽圖……吉丸萬太刀庵
怒濤庵俳諧……江見水蔭
俳諧七部集總論（第一章）風雷子
疑ひの淋しさ……相馬犬蓼
觀劇十七字……田中塵外
町屋まで……沼波瓊音
注意人物……豐原左堂
新聞社の俳味……小倉鶴峯
俳諧の儀式……春秋庵準一
澤露川の墓誌……天野眞名井
素人の見たる俳人……寺澤陽風
募集句評……不磁子
秋晴……（懸賞俳句發表）
我が見たる俳畫……（懸賞文章發表）
其他俳句滿載
通り雲……レモン法師
口繪（晢）……（八代目團十郎筆）
挿畫……小杉未醒

附錄

手向發句集……義仲寺

毎月一日一回發行

定價

一部　金拾貳錢　郵税壹錢

半年分前金　郵税共　金六拾八錢

一年分前金　郵税共　金壹圓參拾貳錢

發行所

東京市本郷西片町拾番地

俳味社

振替口座東京參四參四番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

心の花

第十五卷　十一月號　第十一號

霧の音　佐佐木信綱
續々近畿百首　川田順
天津旗雲　三浦守治
風の日　片山廣子
九月の旅（小說）　長谷川時雨
沈默（トフオオテ）　吹田蘆風
わかいこゝろ（小說）　岡部千代子
若き聲　青木正
神嘗祭の朝　印東昌綱
鹽原の芝居　荻原濱子
刀水河畔　石榑千亦

定價一部十三錢●半年前金七十五錢●一年前金一圓四十錢●

東京日本橋區本石町一ノ一　竹柏會出版部
振替東京四三〇〇番

女子文壇

第七年十四號　一日發行

十一月號

定價一冊金拾五錢　送料壹錢五厘

◎女性の獨身難……大阪高等商學教授 田中祐吉

◎平安朝時代の宮廷婦人……眞山青果

▲視野日記……佐野天聲

▲大和路の秋……澤村文學士

戀愛論

◎沒我の愛情なき者は玉の盃底なきが如し……建部文學博士

◎人生に於ける戀愛の價値如何　早稻田大學講師 金子筑水

◎戀愛と云ふ言語の扱ひ方……遠藤文學博士

◎戀愛と結婚と……生田文學士

◎天下晴れて說くべき問題ではない……下田文學士

◎文藝の影響を受けたる戀愛は當然なり……田村俊子

●私の貞操觀（二）……與謝野晶子

◎葦を敷きて……山田邦子

◎山より山へ……平塚白百合

◎晚秋の牧場……百合香

◎今樣羽衣……鬱生法師

◎別れた人へ……野英

◎新しい作家……白光

◎夜寒語……坂東太郎

◎落葉焚く日……女護島守

▼公設繪畫展覽會を觀る……岡本一平

◎名流婦人の愛讀書（其一）三宅花圃女史……

東京市京橋大鋸町　女子文壇社出版　（振替口座東京第七九壹貳番）

●[illegible]全國各地書肆に販賣す、●若品切の時は出版元へ御申込を乞ふ●

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

新刊

小山内薫氏著（發賣）

演劇新聲

新興演劇に對する者諸演劇論數十篇を集む

定價金八拾錢
送費六錢

北原白秋氏著（再版）

詩集 邪宗門

初版湮滅して久しく江湖渇望に背きたりし大詩集の再版出づ

定價八十五錢
送費金八錢

文藝雜誌

朱欒

十一月一日發行

特價金四十五錢

ザンボア創刊特別號

夜（戯曲） 木下杢太郎
司祭と女（對話） 長田幹彦
黒ペスト（小説） 柴田流星
題未定（小説） 谷崎潤一郎
少年と死（小説） 小川未明
死骸（小説） 和辻哲郎
挿話（小説） 久保田萬太郎
芝居小景（小品） 永井荷風
海の思想・誘惑（小品） 蒲原有明
尺牘數則（通信） 長田秀雄
小品一篇 片上天弦
南國小品 北原白秋
批評（評論） 高村光太郎
デタラメ日記（評論） 齋藤與里

モンマルトルより（通信） 石井柏亭
田端にて（評論） 山本鼎
批評 正宗得三郎
文學界の追想 太田水穂
椎の葉（詩） きしのあかしや
水仙外二篇（詩） 長田秀雄
不可能（詩） 上田敏
悩める風景（詩） 三木露風
螢捕り外二篇（詩） 北原白秋
秋の女（歌） 吉井勇
歌十二首 若山牧水
繪畫 山本鼎 齋藤與里
其他 高村光太郎 山崎春雄

發行所 東京市京橋區南傳馬町三丁目（振替 東京 五六一四番） 東雲堂

十一月一日發行

スバル

價卅五錢 郵稅二錢

十一月號

澪（小說） 長田幹彦
花火（小說） 久保田萬太郎
雁（小說） 鷗外
鮪問屋（小說） 長島豊太郎
山の燒けたる日の夕がた（脚本） 堀花村
評論（詩） 瀨川[illegible]三
むく鳥通信 無名氏
雨ふる街の晚秋 山本禿坪

詩數篇
高村光太郎
堀口大學

歌
三ケ島よし子
原田琴子
段谷秋洋

歌
萬造寺齊
吉井勇
阿部省三
堀口大學

漫畫
スバル同人

東京神田 電話本局
昴發行所
北神保町二 四二六四番

「藝文」特別號

詩人クライスト

十一月十五日發行▲定價四拾錢郵稅二錢

獨逸文學に於けるクライスの位置　文學博士　藤代禎輔
クライストの戲曲　文學士　橋本忠夫
クライストの小說　文學士　小牧健夫
クライストとロマンチック　文學士　平田元吉
クライストの女性　文學士　福井利吉郞
クライスト評傳　文學士　成瀨清
愛國詩人クライスト　文學士　大塚治雲
クライストの筆致　文學士　廣木多三
喜劇「破壺」　辻善定
小說「ミヒアエル、コールハース」　榎木安三郎
附錄一、クライスト著作目錄
附錄二、クライスト研究書目
口繪
一、クライスト肖像
二、ホルヘルミーネとエンマ、ユリアーチ
三、「ケルマニヤ、アン、イーレ、キンデル」の末句

發行所　東京小石川原町六　振替口座一三五三三　鷄聲堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

文豪國木田獨歩

獨歩書簡

の書簡數百通を集む以て文豪の眞生活を知る可く以て生ける書簡文範として學ぶ可し！

▼四六横型美本
▼小杉未醒氏裝
▼定價金六拾錢
▼郵送料金八錢

五版又々賣切

第六版

印刷出來

批評一班

▲二六新聞曰く、其全部を通じて精神的な眞面目な熱力にみちた調子は深く人を動す就中其戀人に送つた手紙には獨歩氏の眞情流露して再讀三讀するに足るものがある書翰集として此位人を引き着ける者は少なからう。

▲讀賣新聞曰く、獨歩が高潮の極に達したのは明治二十八年佐々城信子との戀愛時代であつた。私は今迄にかくの如く熱烈の戀愛萬能主義の文字を見た事がない。二人の愛を成功するのは人道の爲めだとまで叫んで居る。如何なる困難があらうとも二人の愛さへ變らなければ、それで滿足な生活が出來るものと眞に思つて居たらしい。

▲日本新聞曰く、殊に彼が生命を賭して戀へる佐々木某女に寄せたる數十通の書簡に至りては痛絶人を泣かしむるものあり。

▲大阪新報曰く、殊に獨歩が相愛の人信子に與へた書簡の數々は、一言一句皆熱血である、熱涙である、「嗚呼わが信子よ。吾等一體は悲壯の歌を口吟して人情の大道を歩まんとするのみ」と云ふが如きは眞に一篇の哀詩である。裝釘も美しく、體裁も氣が利いてゐる。

發行所 東京市麹町區飯田町 振替東京一七四二番 新潮社

女子大學校講義

● 入會諸姉の便宜を圖り

更に二千名迄入會金免除 ●

會員募集

● 新學期開講

十月發行の講義錄は既に全國の家庭婦人界に提供好評嘖々たり

學科目及講師

○修養講談 ○修身講話 ○教育 ○實驗心理學 ○兒童研究 ○法制大意 ○經濟大意 ○社會衞生 ○家庭理科 ○家事

諸名士教育大家

成瀨仁藏　麻生正藏　文學博士 松本亦太郎　高島平三郎　法學博士 奧田義人　文學士 中隈敬三　醫學博士 三宅秀　近藤耕藏　井上秀子

○作… ○日本料理 ○西洋料理 ○裁縫手藝 ○挿花 ○家庭園藝 ○自然研究 ○文藝 ○美文評釋 ○其他科外として女子と演劇、歌劇、結婚問題、家庭衞生顧問等臨時有益なる講演を掲載す

小笠原清務　笹木幸子　手塚かね子　櫻楓會研究部　兒島晩翠　農學士 佐々木祐太郎　大橋ひろ子　文學士 武島羽衣　文學士 下村英

毎月二回發行　會費一ヶ月金五十錢

發行所 精美堂（電話番町二三九）

東京市小石川區久堅町一〇八

■ 會則付き 內容見本 申越次第送呈

東京小石川 高田目白臺

日本女子大學校通信教育會

入會の最好機

女子手藝講義錄

普通科

本會の講義錄は現代婦女界に廣大の信用あり

本會の講師は東都に於ける有名なる各學校の教師と都下に於て著名の各專門家とに依り成立せるものなり

講義

△裁縫科和服洋服
△手藝用圖畫科
△割烹科和洋
△手藝教授法
△組糸科
△袋物科

△編物科
△刺繡科
△造花科
△果實科
△細工物

會費（普通科）

壹ケ月分……金參拾錢
半ケ年分（割引）金壹圓七拾錢
壹ケ年分（割引）金參圓廿四錢
△摘細工

高等科

課目

△裁縫科和服洋服
△手藝用圖畫科
△割烹科和洋
△手藝教授法
△組糸科
△袋物科
△組紐科

△編物科
△刺繡科
△造花科
△果實科
△摘工科

會費（高等科）

壹ケ月分……金參拾五錢
半ケ年分（割引）金壹圓九拾九錢
壹ケ年分（割引）金參圓七拾八錢
△課外講義數種

成功の捷徑は即刻入會するにあり

▲入會規定及内容見本申越あれば無料進呈▼

學科 壹ケ年修了

毎月一回 一日發行

入會申込所

東京日本橋角

大倉書店

振替貯金口座東京二三八番

入會申込注文 全國各書店

雜誌規定

●毎月一回一日發行
●定價一册金貳拾五錢 ―郵税壹錢五厘―
●原稿〆切期日は毎月十日限とす。
●前金購讀料（四ヶ月分）壹圓（六ヶ月分）壹圓五拾錢（八ヶ月分）貳圓（十ヶ月分）貳圓五拾錢（一ヶ年分）參圓
●廣告料（一頁）拾五圓（半頁）八圓
○廣告は總て後尾のこと、但し申込の順序に依る。
●振替貯金（東京口座一一六〇）に拂込まれたし
●郵券代用は一錢切手に限る（但し一割増のこと）

明治四十四年十月二十五日印刷
明治四十四年十一月一日發行

禁轉載

東京本郷區駒込林町九番地
青鞜社内
編輯兼發行人　中野初

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷人　島連太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所　三秀舍

發行所　東京本郷區駒込林町九番地　青鞜社
（電話下谷三七七六　振替東京口座壹壹六〇番）

發賣所　東京市神田區表神保町三番地　東京堂
電話本局二一二四　二三二八

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜第一巻第三號
明治四十四年十一月一日發行（毎月一回一日發行）
明治四十四年八月廿八日第三種郵便物認可

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

十二月號

明治四十四年八月廿八日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）明治四十四年十二月一日發行第一巻第四號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

四十四年十二月一日

第一巻　第四號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜第一巻第四號内容

わが家（短歌）……一……與謝野晶子
夜汽車（小説）……三……尾島菊子
蛇影（小説）……二三……永安初子
痛みと藝術と（感想）……三一……上野葉子
寂しみ（詩）……四六……小林歌津子
高原の秋（つゞき）……四九……らいてう
一夜（小説）……六五……物集和子

俳句……七七……白雨
黒猫……七九……ポオ
高窓の下（小説）……八二……加藤みどり
自由劇場の二夜（劇評）……一一九……長谷川時雨
編輯室より……一三一……
表紙畫……長沼智恵子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

わが家

與謝野晶子

片ときもたち離れずてならひしはきのふのわが世こし方のこと

おなじ世のこととは何のはしにさへ思はれがたき日をも見るかな

おのれこそ旅ごこちすれ一人居るひるのはかなさ夜のあぢきなさ

ねがはくば君かへるまで石としてわれ眠らしめメズサの神よ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

うれふるやはたよろこぶやわが君にかかはる事のいと遥かなる

おもひでの世界つくると二日三日つよき煙草をとるもはかなし

今すこし人にかへらば子等などもなだめんと思ふいとわろしかし

海こえんいざや心にあらぬ日をおくらぬ人とわれならんため

逢見ねば黄泉とも思ふ遠方へたからの君をなどやりにけん

あはれにも忍ぶ戀にはあらねども咎められじと思ふ時泣く

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

夜汽車

尾島菊子

宵の口にばら〳〵と夕立が降つたあと、空はまだ濃く灰色に曇つて、星がひとつふたつをり〳〵雲のあひだから鈍い光を見せた。

新潟行の夜行列車は今暗を縫うて進行してゐる。歸省やら避暑やらの客で、列車は悉く滿員であつた。

前から二つ目の三等室の隅つこに、淋しさうな獨り旅の女がゐる。紺と藍のあらい棒縞のメリンスの單衣に、小波羽二重の派手な模樣の帶を締めて、髮はあつさりとした庇にしてゐる。娘にしては稍老けすぎたと云つて細君としてはあまりに粋なところがある。女は始終顏へ半巾をあてゝ、美しく化粧した頰へ石炭の燃殼の飛び込むのを恐れた。

赤羽へ來ると洋服の若い男が二人乘つた。女の隣りには二人が掛けるだけの空席があつた。初めに入つた鼠の方は順序として先へ腰を下ろした。あとから乘つた紺の男は女の隣

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

りへ掛けた。紺の男は自分と友人との間へ無理に鞄をおいた。鼠の男は偶と前に半襯衣を片肌脱いだ厭な爺と、手織縞の暑ぼつたい單衣を着た田舍臭いお神さんとの間の空席を見て、其處へ移つた。お神さんは慌てゝ席をより廣くあけて渡した。鼠の男は紺の男と同じに鞄を傍においた。そして二人相對すると、鼠の男は突と紺の手を引張つて、氣味わるく笑ひながら小聲で何やら呟いた。

「馬鹿ッ」

紺の男はニヤリとして蹴落すやうに云つた。鼠の男は皆と女の方を見て微笑の眼を外らす。女は絕えず見て見ぬ振り、聞いて聞えぬ體を裝うてゐる。男は二人とも新しい麥藁帽を冠つて、金緣の眼鏡をかけてゐる。女の方から見ると斜つかいながら鼠の男の顏は、時々女の方を見るので眞直に見られる。けれども隣りの方は横顏さへ見られなかつた。男の方でも決して女の方を向かぬ。そして友達と斜に相對してゐる。斜になればなるほど、少しづゝ女に體を凭れかけるやうにも見えた。

「失禮な男だ。」

と云つたやうに女は細い眼をあけて、男の横顏から頸のあたりをながめた。色が黑くて、眼元が女のやうに優しく美しかつた。鼻は然う高くはないが團子ではなかつた。そして眼鏡が能く似合つた。けれども何處となく暗い顏立であつた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

鼠の方は眉もキッパリとして、眼も大きく鼻も相當に高くて、全體がハッキリとした明るい顏立であつた。何方が好男子かと云へば無論鼠の方である。

女は深く氣にとめるでもなく、二人を見較べた。隣りの男は汽車の動搖につれて凭れかゝらうとする。女は窓の方へ窓の方へと退けた。男は避けられると知りつゝ故意に爲るかの如く凭れようとする。そして時々怖えたやうに慌てゝ坐勢をなほした。それは前の友人に不審な擧動を感づかれはしなかつたかと、自分で偶と氣の附いた時であつた。人々はふらり／＼と坐眠りをはじめた。帽子も下る、丸髷も下る、苅栗も禿頭も云ひ合はしたやうに、コクリ／＼やつてゐる。

鼠の男は鞄に凭れて、だん／＼帽子を前の方へ下げた。女の方から見ると、顏がすつかり帽子の蔭にかくれて了つた。

紺の男は右の手を鞄にかけて、左を膝の上においた。そして眠るでもなく覺めるでもなく、うつら／＼としながら、汽車の動く度に女に謎をかけるやうな嬌態を示した。女は眠つた振りを見せて睨としてゐる。窓にかけた右の手に半巾を持つて、顏を掩うてゐる。右の手は膝の上に載せてゐたが、何時の間にか下へ滑る。メリンスの輕い袂がふうわりと手の上に掛つた。

偶と男の手が滑つて落ちる。女はハッとした體で手を引く。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

女の前に掛けてゐた筒袖絣がすりに、小倉の袴をつけた十六七の悧巧さうな年少の學生が、ボカリと眼をあけた。そして此方の男の擧動を寢恍けたやうな無邪氣らしい顔をして監視するかの如く見てゐる。男は堅くなつてゐた。

少年は足元の毛繻子の袋からサイダーの瓶を引き出して口を脱くと、瓶ごとぐい〳〵飲みはじめた。此方の男は氣味わるさうに左の手を叉膝の上へ持つて來た。

少年は空瓶を窓の外へ捨てゝ、叉眠り出した。薄暗い洋燈の光に照らされた室一杯の人々は、皆玩具のやうに右に左に前に後に搖られてゐる。人いきれで蒸されるように暑苦しい。

汽車は高崎まで急行て來ると、次第に徐々と速力を減じた。走つては停まり、走つては停まる田舍の停車場の柱時計は、何處かで淋しく零時十分を示してゐた。寂寞とした夜陰の中にレールを軋る汽車の音ばかりが瀜々と響いてゐる。

後から女の腰部へ膝頭を押つける者があつた。それから肩のあたりへ火を噴くやうな熱い頭を時々コツン〳〵と當てる、女は其度に朦朧として眼をあげて振り返つて見た。十一二の女の兒をつれてゐる四十計りの髭の男である。胡坐をかいてゐる膝頭が、此方の席まで喰み出してゐるのだ。

女は拙い顔をして少し宛つ前へ乘り出した。着物と着物とが觸る度に、兩方から來る男

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の熱い肉のほてりが心地わるく體に迫つた。
紺の男はハタ〳〵と扇子を使つた。窓から吹き込む煤煙の夜風に、はら〳〵と消炭のやうな粉をふりまいて、其上に女の髮をバサ〳〵にする。女は又しても半巾で額から鼻の穴を拭いた。そして人知れず帶の間から紙白粉を出して顔中を撫でた。紺の男はこれをも決して横眼で見落さなかつた。

二時すぐるころ、汽車は碓氷峠に掛つた。横川驛で停車すると、此處からはアプト式になるので、少し時間があつた。人々は慌てゝ用足しに下りた。

下りた連中が再び乘り込まうとする時に、

「大丈夫です、又停まります。」

と叫んで、汽車は靜かに進行した。一同は不安らしくきよと〳〵して、我乘る列車の扉のあとを追ふた。

汽車は少し逆行して停まつた、下りてゐた人々は見當が違つたので、蒼皇として行き迷つた。

「此處からお乘りなさい。」

崖から彼方此方の列車の扉の口へ、工夫共が板の假橋を架けた。大きな男共は小さくなつて渡つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

大蛇のやうな汽車は山と山との間をうねつて、二十幾つの峠をくゞつては出た。月は今雲間をはなれて美しくのぼつた。窓硝子を透して高く低い山の傾斜が、ぼかしたやうにぼうつと星が空に浮ぶ、溪間の清い流れが夢のやうにキラ／＼と光つた。露深い路芝の中で可愛らしい虫の聲が聞える。

女は男の方に背を向けて外を眺めた。首筋に手をやると、其處にも石炭の粉がザラ／＼としてゐた。懐中鏡を出して見ると、眼が甚く凹んで、顔がドス黒い。女は男に顔を見られぬやう、見られぬやうと努めた。て、だるい足を後へまげて少し横へやると、ふと靴の踵に觸れた。刹那に男の脛は輕く女の脛にもつれた。女は靜と足を引いた。

室内は咳一つする者がない。唯もう他愛もなく眠り轉けてゐる。

鼠の男は苦しさうに、

「あゝ。」

と欠伸をした。その時ちよいと眼をあけて、

「君、少し眠つたか？」

と手を伸して、對手の肩を搖つた。

「うむ、何だか落着いて眠れない、ても少しは眠つたよ。」

紺の男はさも眠りから覺めたやうに、徴に答へた。あとは又眠つて了ふ。子供を腰掛の

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

上に寝かせて、自分は下に蹲踞んでゐる女が淺ましげに鼾をかいてゐる。それで丁度室内の人々に熟睡を促す催眠歌のやうに四邊に響いた。

紺の男は何時までも虚僞の眠りをつゞけてゐる。女も矢張り眠らない。

「厩！　厩!!」

女は心に叫んだ。自分ながら不安に堪へない中から、引きつけられるやうな或物に心をそゝられるので、眠りもやらず覺めもせず。

夜は白々と明け初めた。山々の姿がだん〳〵割然と見えて、綠の樹木が煙のやうに濃く霞んだ。

「もう夜が明けるのか。」

男は思ひ切つたやうに竊と女の手を探つた。上前の裾の下にあつた柔かい女の手に微に觸れると、臆病らしく竊と指先を握つた、女は顫へた。引かうとすると、一層强く五本の指を掴んだ。そして何か云ひたげにヒタ〳〵と寄り添ふた。

ガタ〳〵と屋根を踏む足音がして、室内に下つた洋燈の赤い灯が消えた。

鼠の男は眼を覺ました。紺の男は立つて女の前から體を斜に窓へ逆上せた顔を出した。

その時皆と女の顔を見たが、女は下を向いてゐた。

もうすつかり明けはなれたので、紺の男は最初のやうに整然と姿勢をとゝのへた。そし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て友人と相對した。彼方此方から欠伸がもれて、一人宛眼を覺ます。
　女は髮を搔き上げて、「なでしこ」で顏を拭いて、それから外の方を向いて着物の前を合はせた。青磁色の絹縮の腰帶をギュッと締めて、それから又クリーム色のくけひもを帶の上から解いた。燃えたつやうな緋紋縮緬の帶揚も一寸ゆるめて、堅く締めると、粋なお太皷に結んで腰をかける。
　棚からサイダーの瓶を下ろす。口をぬいて、シュッと泡を立たせる、洋盃(コップ)にあけて、ゴト〳〵と口を洗いて吐き出す。男は一目でも此方を向かれるのを待つかの如く後から眸めてゐる。
　上田へ着いた。二人の男は立つた。紺の男は鞄を前に突き出しながら女の前を通つた。瞬間に伏目になつて、
「失禮いたしました。」
と、殆んど口の中で小さく云つて、嫣然と美しい別れの微笑を發した。女は礑と視線を合はして一寸恥かしさうな顏をしたが、忽ち相手を侮辱するかのやうに陰しい眼を送つた。男の微笑には感謝の意味が含まれてゐた。無聊の苦痛を忘れ暑さを忘れ、なほ且つ若い血汐を騷ぎ立たして樂しい半夜を過した假初の夢を謝したのでもあらうか？
　プラットホームへ下りて威勢よく階段を昇る時、女は窓から首を出して彼の後姿を見送

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つた。其時女の顏には抑え切れぬ誇りの色が動いた。

日向臭い男や、油臭い女が乘つて來た。女は眉を顰めて忌はしげにそれ等の新しい乘客を蔑視した。それと同時に忽ち睡眠不足の疲勞が一時に出てポカンと口を開いたまゝ、窓に凭れてぐつすりと寢込んで了つた。

——完——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

蛇影

永安はつ子

一

ライン樹の頂らしい、蟬の聲が斷えては續き、續いては斷え、又續いた「やがて死ぬけしきも見えず秋の蟬」と古人の名句を思ひ浮べつ、律子は日當りのいゝ窓の下で今裁つたばかりの袷の袖をたゝんで居た。

フト黑い影がさした。

郵便が來た。夫宛の封書である、何の氣もなく受取つた律子は平素のやうに無斷で封を切つたが、其差出人の誰であるかは未だ彼女の問題となつて居なかつた。

あらかねの土もとけなん暑さも夢の間にて朝夕は餘程心地よき昨今思ひがけなき兄上の御出て、あまり以外さに御別れ申上げてより御話し申上ぐべき事は山程ありしを御拜顏申上げては今昔の情に堪へず唯々何事も言葉に出す能はず御察し下され度候

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

とこゝ迄讀んではつと氣がついた。急いで終の名前を見る、果して其女である、律子は我と我が心を制して靜かに次を見た。

又御目にかゝる時のあるは必定には候へども餘りお名殘惜しく候故昨日は學校も早引いたし長男〇〇を伴れ三河屋に御伺ひ申候に最早御歸宅御出立後にて空しく歸途につき候事の殘念さ

定めなきが浮世とは云ひながら色々の事情ありて何事も夫へは打明けて話さぬ事に決し居候上兄は私を見捨て玉ひしかは神ならぬ身に候へども今日迄胸にたゝめる一々を御耳に入れ候はゞ笑はれもし叉しかられもし叉はほめられもしたりしに御話し申上ぐる時を失し候事の返す〳〵も口惜しく御座候何卒御自愛の程はるかにそれのみ祈り上候

別に賴なき身、奥樣へも一度御目にかゝり御交り申上度候へども……何卒兄上よりよしなに申上おき下され度御多忙とはぞんじ候へども時にははがきにて御安否御知らせ下され度

松より

なつかしき兄上樣へ

筆も文も亂れて居る、けれども律子のためには青天の霹靂であつた。

尤も三四日前、夫が日町に行つた事だけはよく承知して居る。けれども其時松子に逅つたと云ふ事はおくびにも出さなかつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

何も彼もさらけ出して話してしまう夫でありながら何故其事だけを秘して居るのだらう、……律子の胸は無念さに煮返る様である。

「若し怪しい點がないとすれば平氣で語つてもいゝ筈ぢやないか」

律子の念はこの一點に集中つた。

不愉快で／＼たまらない、自分は今迄欺されて居たのだ、夫は自分を欺いて居たのだ、それとも知らず信じて／＼信じ貫いて全心を捧げた自分の馬鹿々々しさ、我ながら自分の姿があはれに思はれる。

もう仕事も何にもしたくない、ぼんやりと着物の縞目をみつめた美しい眼はいつの間にか曇つて居る。

二

そりや松子と云ふ女の人物は平常夫から聞及んで居た。男の様なお轉婆で苟も己れが女であるといふ事を忘れて常に男子と往來して居たと知人は語つて居た。色の黒そうな頑丈な寫眞も見た。それて居て同窓の小學教員と自由結婚をした事や、子供の二人もあるくせに始終夫婦喧嘩をする事、そして夫婦とも夫の小學時代からの友人であり、殊に男の方は親しい仲であつた事など悉く聞いて知つて居る、だから夫がB町でその人に近つた事をいつもの通り話して居たのなら或は律子も何とも思はなかつたかもしれぬ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

事こゝに至りぬ、怪しと見れば愈々怪しいこの文ではないか。
それに他で間に合ふ要を態々B町迄出掛けて行つたのもその人故て……一日に足るべき處を二日も滯在した……假令口實はありとするも全く其人に逢ふためてはなかつたらうか、と、かう邪推の出來ぬ事もない。
殘念て〳〵たまらない、律子は唇をかんではら〳〵と涙を落した。
「あゝ欺されて居たんだ」
この人はと信じて居た夫にさへ今この事實を見出した、欺されて居たんだ、眞實と思つて聞いて居た夫の言葉の、どれが眞で、どれが噓だか分からない、まるてつかまる所がなくなつた。
千日の芽も一瞬時にたかれて空しい死灰のみ冷たく胸に殘るのてはあるまいか。
空の空、世の中の何れの所に信じ得べき者を見出し得るてあらう？　全愛の結ぶところの外に眞のホームがあり得るてあらうか、ホーム！　ホーム!!　樂しき夢も消えてしまつた。
尋常一樣の一些事も人情の機微に觸れては大なる音と鳴響く、紙障を隔てゝ相見がたく、一點の秘事も夫婦の間の越え難き障壁となるのてある。
律子の前にはモウ其障壁が築かれた、今迄信じた其度の深かつたそれだけ其障壁は高か

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つた。

淋しい感傷の胸は暮れゆくあら野の原に取殘されたやう、岸をはなれた捨小舟の賴ない思が犇々と寄せて來る。

どう考へても口惜しくてたまらない、今迄欺されて居たのだ、眞面目に賴つた自分の顏が嘸や夫の眼には意氣地なく見えたろう、思へば耻しくもあり、馬鹿々々しくもあり、もうたまらなくなつた。

嘲笑するやうに平凡な鳥が空をかすめて森の彼方に去つた。林は暗く裏の小川のせゝらぐ水を、玉を轉ばす音とも聞いた昨日の今がなつかしい。

死なば共にと誓つた昔が淺間しい。凛とした夫の顏さへ恐ろしくなつた、强い其手には許し難い、いやな血か充ち滿ちてる樣て快活な聲さへ悲しい怨を誘ふ。

「福音があるよ」

と夫は機嫌よく歸つて來た、けれども懷しい心は消えて居た、只形式に迎へて笑顏一つ見せようともせぬ。夫は帽子を投出すと勞れた樣にどつかり座つて、律子のそばの手紙に氣がつくと「誰から來たい」と何氣なく手をのべた。

「フムあれか」

と云つて讀んで居たが、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「ホンに、この女に逅つた、途中で逢つたよ、そして學校の事など立話した、」
「だつてそんなお話聞かなかつたわ、」
「いそがしくて、そんな不要な事は忘れて居たんだ」

三

「いそがしくて要のない事は忘れて居た」と云はれて見れば、成程と承知してもよささうてはあるが、平素の夫の言動より推せば、まだなぜだか笑つて融け合ふ氣にもなれなかつた。

ふだんは要のない事迄何も彼も語つてしまふくせにと直に反感が起る、若しこの手紙を自分が見なければ、或は永遠の秘密として葬去る積てあつたのではあるまいか、自分に見つけられて餘義なく苦しい辯解をしてるのぢやあるまいか、

「私、今迄欺されて居たんだわ、」

胸の中で渦を巻いてた悔しさが思はずこの一語に發た。

「欺された? 誰からだい。」

夫は驚いたやう、愁をおびた美しい律子の顔をジッと見た、

「貴郎からよ、」

「俺から?」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「然よ」
「馬鹿な、何を云ふんだ、この手紙でか……馬鹿ッ……」
「どうせ私馬鹿なんです、馬鹿だから今迄態うして貴郎に欺されて居たんだわ、」
云ひ〳〵松子の手紙を丁寧に自分の懐中におさめた、
「どうするんだ、そんなもの、」
「私が貰つとくの、とつといて要があるの、」
「餘程どうかしてゐるよ、そんなものが何になるんだ、つまらない、」
「これでも言を云ふ時があるんですから、別離る時お友達やなんかに離縁の理由を發表するの、」
「それてッ」
「その理由の一つになるのよ、」
「ハヽ……お話にならない、」
と遂に夫は笑ひ出した、律子は悔し氣に眼に一ぱいの涙を溜めて臺所の方に行つた。
聽て淋しく夕餉の膳に向つて、平素のやうに花やかな笑聲も漏れず、後かたづけもランプの掃除も無言ですました。六疊の間をザッと掃いてランプを點けると、まだ無言て火鉢のそばに來て、詰らなそうに頬杖ついたまゝ伏目になつて默つて居る、灰の色を見てる眼

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

てもない、只心の中に信じられない世を見て心頼ない瞳であつた。

「馬鹿な奴だ」

と夫は打解けて其頬を突ついて見たけれども彼女はにつこりともしない。

「オ、然だ〳〵、先刻云つた福音だ、京都の兄からなあ、お前に……最新流行のお召を一反送つた、と、三田君の手紙の端に傳言がしてあつたつけ、」

と快活に氣を引立てるやう勢をつけて云つて見たが、律子は今に及んで、そんなものが何にならうといふ様な淋しい雲につゝまれて居た。

「弓張月を讀もうか、ム、？聞くかい」

と机の前に長くなつて小形の本を取出したが矢張氣乘がせぬらしい。何の彼のと機嫌をとるのも秘密を知られたてれかくしかと律子は餘り嬉しくもなかつたので。

「オイどうしたんだ、」

とグイと其手を握つて引寄せた、温い血は男の血管を空しく流れて居た、床の下できり〳〵すが鳴き出した、萩の花がほろりと散つたやう律子の膝の上には温い雫が落ちた。

何にも云ふまい、思ふまい、思つたつて欺の世の中だ、暗い〳〵闇を探り、廣い淡い野をさまよつて遂に墓場にたどり行く悲しい運命の子だもの、道すがら摘む野ばらの花にトゲのあるのは當然だろう、と恐ろしい影が黒白もわかず其眼を掩ふた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「馬鹿な事云はないて、モウそろ〳〵寢ようぢやないか、」

と夫は眞面目な態度てから云つた、「おやすみなさいよ」と律子は獨語のやう。

「お前もさ」

と云ひ捨てゝ用足しに立つた男の姿が障子の彼方にかくれると、も一度、先刻の文を出して見た。長男〇〇を作れてとあるが若しや……若しや、自分の夫の子てはあるまいか、彼女は我心のおのゝくを覺えた。夫婦喧嘩も自由結婚に伴ふ心安さが度を越しての事と思つて居たが……若しやまた云はれぬ原因があるんぢやあるまいか。……

* * * * *

拂へども〳〵遂に怪しい影は去らなかつた、世の中の何ものをも信じられぬと、つく〳〵思つた彼女の胸に唯一つ、つひぞ懷しいとも思はなかつた昔の人の戀が悲しい影の奧底に殘月の如く淡く浮び出づるを覺えた。

四

律子の眼には五年前の雪の山里が見える、氷の如な冷たい月の光を避けて黑い男の影が幻の樣に忍んて來る。

彼女は學校を卒へると直に、さる銀行家の許に嫁ぐべく强ひられた、けれども薄つぺらな、只浮々とした人生の表面を歩いてる樣なその銀行家の態度が傑とする程氣に食はなか

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つた。假令、金はなくとも、名はなくとも、只誠ある人格こそ眞に貴いのだと云つた、が赤心をこめたる美しい清い乙女の言葉も、それは世間を知らぬ少女の空望として無下に退けられた。

　父にも容れられず、母にもゆるされず、彼女は自ら確と決した、自ら身を退いて深山に引籠り其地の小學校に職を奉じて自活の道を立てた。そして誠ある人を夫とし自分の希望の啻に乙女の空望にとゞまらざるを證すべき時もあらんかと獨り心を慰めて居た。

　野村と云ふ男は其山里に居た。村長の息子で、中學出の青年で、山村では先づ新らし空氣を吸つた、それで温情のある、どつちかと云へば沈んだ男であつた。

　近世の文藝や、時代の思潮に趣味を有つものは、この部落で先づ野村と律子と認められて居た。口の惡るい仲間等は二人を好一對だと、からかつたり、二人の間に既に何かの默契が成立してるかの樣隨分皮肉な噂をするものもあつた。

　それらの流言を耳にした野村は、恰も心の秘密を看破されたやう青黑い顔を赤くして人知れず會心の笑を漏した事もある。男の胸にはとくより打消しがたい戀の炎が燃えて居た。併し律子に於ては野村を以て自分の意中の人となすにはあまりに見識が高かつた。村長の息子であり乍ら中學も四年で退學した、それも、血統の胸の病を恐れてゞあると人傳

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に聞いた律子は柔らかい同情の眼を以て其人を見たが、それも自分と何の交渉もない間の事であつた。フトした事より悶々の情を文して打明けられて以來、何故だか其人の厭な點ばかり目につくやうで無論其戀を迷惑に感じたのである。迷惑に感じながらも亦其あはれな運命や、悪意のない沈んだ人柄が多少の同情を惹いて只普通の友人として言葉も交して居た。

野村にとりては煮えきらない律子の態度が愈々悶々の度を進めるばかり、彼は矢の如くその文を送つて苦しき思情を訴へた。

「男子の愛はカンランの森の火事の如し、炎々として天をこがし、如何にして其誠意に報ゆべきかを知らざれども、翌朝行きて見よ只冷々たる死灰の殘れるのみ」とシユライネルが云つた如に貴君の苦痛も暫時の御辛棒でせうよ、」

と五つも六つも手紙が來てから、やつと律子はかう云つてやつた。あんまり馬鹿にしてるやうだが、これ位冷酷に出ないと其火の手を打消す事は出來まいと思つたので。

けれども野村の熱情は消えなかつた。風に煽らるゝ猛火の如く益々其勢を加へたので、律子は殆んど途方にくれた。

若しか人の噂にでも上るやうな事があつてはお互に大事な身だから、以後は断じて文通しない事にしませう。と書いてやると、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

貴女と共に立てられる浮名なら、私の無上の光榮です、地獄の中にも貴女と一緒に行くのなら樂しいと思ひます、……が貴女は其時如何なさいます、實はもう既に村の者も變な噂迄してるやうですが」といつて來た。

古い中硝子の障子をたてきつた二階の六疊の自分の室で机に凭れてこの文を讀んだ律子の眉は動いた、頬に亂るゝおくれ毛がかすかに慄えて、……

「あんまり馬鹿にして貰ひません」

と思はず身を起した。その文の何だか悠々然たるのが第一癪に障る、何でも甚しく侮辱せられたやうな感がする、恁う迄自分は伍し易いとされてるのか。

「失禮な」

と我知らず自尊の聲が唇をもれた。考へても見るがいゝ、いくら何だつて私が自分よりも學識の淺い、見識のひくい、あの人の妻になられるだらうか、あの顏で居て……我身知らずの戀もするものだ。この場合フンとも云ひたくなつた。

私はモット修養もせねばなりませんから、そんな噂を立てられては、前途のさまたげとなり非常に迷惑にぞんじます、身の潔白を證するため直に辭して故郷に歸りませう。と激した事を走らして最後の積で返事をした。それが雪の降る日曜の朝であつた。

五

雜誌を返すのだと云つて新聲一冊に其文を添へて宿の娘に持たして出すと、何だか氣が淸々した樣で火鉢の前に座ると色々と明るい將來の事を思つて見た、一年有半の間に父母の心もがらりと解けて、お前の望通りにしていゝから歸つて來いとの母の手紙も机の中にある。モッと向上しなければならないと自ら心が勇んで來た。

硝子越しに見ゆる庭の面にはもう雪が白くなる程積んで居る、風のない松の梢は繪のやうに風情を添えて。降りしきる六花紛々、梨の花の舞ひ落つるやうである。居ながら眺めるのでは飽足りないと思つて、つと火鉢の側をはなれると立つて障子をあけた。

白皚々。何ものもない、見渡す限り岡も山も、田も畑も只一色に掩はれてさながらの白金まろぶ里と化してしまつた。谷川の遠の響もなつかしい。

隣の庭の竹垣のそばで雪をかためては、四五間はなれた麥畑の眞中に亭々として天を突く銀杏の幹にぶつつけて居たいたづらの吾一が、ひよいと顏を揚げてこつちを見ると圓い顏がにつこりした。

何だかそれに釣込まれるやうに自分も出て見たくなつた。木戸口まで行くと偶いと野村の妹に出會した。律子と同年の十八、ふつくりとした、色の白い、いや味のない娘である。何の用意もないが友人三四人と雪見の宴を張りたいから御迷惑でせうが御出下さいと兄の使に來たと云ふ。律子は當惑そうな顏をしたが、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「有がとう、態々來て下さつたの？　寒いのに御氣の毒でしたわ、………よく降りますねえ、いゝ景色でせう、私出たいんですけど、………あの昨夜少し風をひいたもんですから……すみませんが失禮しませう、………どうぞよろしく仰しやつて下さいな。」

と相手の顔色をみつゝ、きれ〴〵に斷つた。

それでも是非伴れてゆかねば母や兄に叱られると容易に歸ろうとはせぬ。律子も殆んど當惑したがそれでも決心は動かなかつた。そして先刻持たしてやつた手紙の事を思つて見た。もう先方にとゞいてるのか、それも知りたかつたが何となく氣がひけて遂に云ひ出し得なかつた。宿の娘とは、どの道かの行違ひて逢つて居ないのだろうと獨で定めて、もうついてる時分だが、と彼の文を見る時のその人の顔を想像して居た。

使の去つた間もなく宿の娘は歸つて來て富永さんも來て居られるから是非來て下さいとの傳言を繰返した。

「風をひいたんて………」

と、それのみ口實である。口實故には戶外に出て思ふまゝ雪の姿を眺める事も出來ない、しぶ〳〵室にこもつて居ると、宿の娘はお茶をくんで來てくれて、例の無遠慮な口調で野村の批評をはじめた。そして今日の御馳走のおいしそうに出來て居た事や、野村の母等も律子を望むらしい口吻をもらした事迄殘らず語つて、今日の雪見も律子と母との近づきの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ためらしいと追加した。

　律子もあまり事が進行してるんで、あきれて聞いて居た。紅葉を散らした顔のどこかには輕い侮蔑の色が見えた。

　其夜の事であつた。

律子は讀さしの平家物語の面白さに靜かなる雪の夜の更くるも知らで獨机に寄つて居た。

　コツ／＼と怪しい音がする。耳のせいかと思つた。

　またコツ／＼と音がした。風だらうか。つゞけてまた……鳥だらうか。

　風か鳥かと耳をすましたが、森として雪の亂るゝ音もせぬ、風ではないらしい、鳥らしい羽音もせぬ。

　はてなと、いぶかりつゝも又讀入ると、更に音がした。「何だろう」と座つたまゝ机の前の障子を開けた。小さい白いものが鼻の先に突出て居る。律子は慄とした。こわいながらもよく見ると竿の先に結んだ文である。

　律子は夢心地である。フイにおそはれた疑念と恐怖に石の如く彳んだ。ジッと氣を靜めて下を見ると籬の外に黒い影がある。たしかに見覺ある男の姿が凍るやうな月の光をさけて……

六

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

とても本氣の沙汰ぢやあるまいと云ふ感が直に律子の胸を突いて哀はれにも思つたが、また恐怖の念も加つて、只不思議に忿怒の情のみは出て來なかつた。

併し其文は受取るまい、言葉も交すまい。局外からこの光景を見たら何といふだらうと己れを謹む心にぴつたり障子を締めた。と思ふと惶急しく亂れた音がして中ガラスを打ち、如何にも物狂はしいさまなので若しや階下の主人に見つけられては大變だ、名も惜しい。取つてやらなければ、どんな物狂はしい事をされようもしれぬ、はては忍足の恥も外聞も忘れて、萬一大膽な事をされてはと、とゞろく胸を袂に押へて竿の先の文をとつた。

彼は滿足げに身を退いて籬のがけに身をひそめた。

律子は打慄ふ手に結んだ文をといて見た。

夜は森閑として何の物音もない、只遠い谷川の淋しい水音が、眠れる萬象の間を流れて居る。然らでも人の情の身に泌む頃を彼女は戀に悶ゆる、哀愁あふるゝ涙の文を讀ませられた。切々の情緒は其飾なき紙面に滿ちて居る。「出來るならば割つても見せたいこの胸を貴女はちつとも察して下さらぬ」と怨む文字の悲しい戀の誠心を語つて、なほ涙に滲んだらしい筆の跡は、ふみ迷ふ戀の暗路の悲しさを訴へて居る。

「そして歸るなどゝは夢にも云つて下さるな、私も隨分不遇の身で少さい時から色々悲しい事にも遭遇つたが今日の御手紙を讀んだ時程悲しかつた事はなかつたのです。何卒歸

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

るなどゝは云はないでいつ迄も居て下さい、歸らぬとの御言葉を聞かねば私は今夜こゝを去りかねます」と終りに書添へてある。

律子は慄えながら繰返して三度迄讀んだ。

彼女の美しい眼よりほろりと涙が滴れた。

これ程迄自分を思つてくれる人を、捨てゝ去るのは果して自分のとるべき道であらうか……と、眞に律子が深い男の情に報いたのは只この一滴の涙であつた。

けれども彼女の心の奥の奥底には深く〳〵泌み付いてる或ものがあつた。

男の影は動き出した。待ち佗びて氣も身に添はぬらしう、彼方に行き、此方に忍び、戀ひに狂へる心に分別も出來ぬらしい。

律子も氣が氣でない、丁度階下のこの窓は主人夫婦の寢室である、若し氣づかれようものなら何と云ひ開きが立つてあらう、………律子は筆をとつた。手が震へて、胸が騷いで仕方がない、やつと「辭表は出しませんから、どうぞ歸つて下さい」と紙片に書いて結んだ。

そつと障子を開けると籬のもとの黒い影が動いた。フト雪を踏む足音が耳に入る。はつと思はず身を退いて胸を押へた。野村の姿は遠くの木かげに消えて、村の青年のどこぞの歸りらしい、頰冠をしたのが、直ぐその道に現はれた。そして我不關焉と西の方に行つて

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

しまつた。

野村の姿はまた木かげをぬけ出てた。例の離のもとに忍び寄る。

律子はシヵと見定めて結んだ紙片を投下すと追はるゝやう急いで雨戸を繰つた。それつきり燈を消して寢てしまつた。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

あゝ其の雪の夜の光景が浮んで來る。

其後律子が辭し去つてからも野村は矢のやうに文をよこした。けれども律子は其文をやき、其寫眞を送り返した。そして「可惜御身を靑春の血潮に誤り玉ふな如何なる場合にありても飽迄男らしき行動をとらせ玉へや」と深切に眞の厚意を以て書添へてやつた。その後二三年經つての事である。親、親戚のすゝめに止むなく他から嫁を貰ふ事になつて、愈今夜が輿入と云ふ其夕彼は俄に吐血した。そのまゝ寢込んで翌年鳥鳴き花落つるの候ゆく水と空しく流れて遂に黄泉の客となつた。

つひぞ懐しいとも思はなかつた其人の戀が、せめてもの誠と今胸に浮び出る。

「あゝ誠！　眞！　世の中に美しい誠は、思へばあの野村の戀のみであつたらう、信じ得べきはあの戀の誠だ」

破られた灰色の心に怪しい淋しい光がさす。夫に對する信は已に破られた。彼女は永久

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に破られざる眞の信を切に〳〵探り求めたかつた。

其心の眼には青い目鏡がかゝつて居たかもしれぬ。結婚以來の不愉快な事のみ思出されて、どうしても自分で自分の心を左右する事が出來ないやうである。不思議な怪しい影に隔てられて眞の夫を見る事が出其ないのであらうか、果して青い目鏡をかけさせた夫の過失であらうか。

樂しい緣の夢さめし一羽の蝶の、遂に得られぬ誠を追ひ、無限の界をあてもなく放浪せねばならぬ寂莫の涙が胸一ぱいになつた。

身にいやし難い感傷を抱き、遠い誠に憧れて、律子は野村の戀を思ひつゝぼんやり家を出た。

——完——　（十月二十七日）

痛みと藝術と

上野葉子

人間呱々の聲を揚ぐるより果して何を追求してをるのであらうか。將又たゞ漫然と自然の力に知らず識らず押し流されて行くのであらうか。人並に笑ひ人並に興じて春の花の散り、秋の野の枯れて行くと云ふ現象を目の前に見ながらひたすら當然のことして、無意識に看過して行く人々には、追求と云ふ詞は或は無用かも知れない。毎日の出來事の起り來るが儘に、揺られ揺られて今自分は如何なる地位に立つてをるか、いかなることをなしつゝあるかと云ふことさへも、自覺せぬ人等には、追求と云ふ詞は或は意味のないことかも知れぬ。一度花間を渡る暮鐘の音に耳を傾け來つたならば、其響きがたゞ偶然の出來事として聞きのがすことは出來なくなるであらう。雨のしとしとゝ降る日に垂れこめて、街道の車の轢るを聞き澄してゐる時に、彼等の行方を考へ來つたならば、たゞ偶然の努力だとして聞きのがすことは出來ないであらう。世界といはず宇宙といはず、吾々の前に開展せられて來る有ゆる現象に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ついて靜に默想せずや。此はてしも無い大きい美しい蒼穹よ。無數の星晨は物皆の死に果てた闇の世界に明滅のまたゝきを投げて、愁人の胸に痛ましい訴へを刻むでをるではないか。吁あの靑白い月の光、私はたゞ思ひ浮べたゞけでもう胸が迫つて來る。歌舞管絃に浮世の風が外を吹いてをる奧殿の欄干にも、そと佳人を泣かしむるではないか。鬼神をもひしぐ勇猛の士も、朔北の野白砂雪の如きに皎々と中天に澄み渡る時、いかで征衣の袂はざらむ。俄然一つかみに萬物を破壞し去る夏の夕立の痛快であり、漠々たる大原の夕の空、時に底深い紺靑のとばりは飽くまで平和の譜を奏でてゐる。時に怒れる獅子の胸の炎の樣に眞紅といはず、紫といはず、樺に、コバルトに、黃に、灰に、引き搔きまはした樣に狂ふた亂調な惱ましい色彩を刷いてゐる。佳人が品定めした春の曙は云はずもがな、勇士が駒に散りかゝる關山の花。二千里外故人の心を偲ふ時、ボツ／＼と軒に音なふ雨垂の音の何と云ふ靜けさ。天を摩する芙蓉が峯。錦衣綠帶流れも淸き二荒山。波に掉さす湘海の濱。いかで氣高からねかは。時に又造化はガランとして飛ぶ鳥のかげさへ止めぬ二千里の大漠を徒に橫へたり、ベスビヤスの頂から火を吐かせて、かの追懷の多い、世界の骨董品ポンペイを埋めたり、山の樣な狂瀾怒濤の巨腭を開いて、沿海の醇朴な無辜の民を呑むで仕舞つたり、げにも凄じい粗大な惡戲を弄するかと思へば、七十五元素をいかに混ぜ合せても企て及ばぬ微細な色彩を一輪の花、一葉の脈に刻むである。植物の種子は地に落ちて、や

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

がて二葉に芽を出し、花を咲かせ實を結ぶ。かくて幾億萬刧同じ事を繰りかへしてゐる。鳥は雄揚と空に舞ひ、魚は潑溂として池に跳ねてゐる。悠久なる天地の一隅に立つて、大自然の驚くべき技巧の手際を靜かに、心靜に、眼を凝し耳を欹てゝ味つて見給へ、南洋の濃い色彩に包まれたあの怪物の様な大森林の香、赤裸々な晩秋の骨立つ疎林のさゝやき。あゝ此永遠に聲あつて聲なき自然の前に私たちは奈何するとも出來ない。更に視給へ、此白い柔い羽二重の様な膚を、生温い波立つ血潮を、あゝまあ何處より來つて、何處に去るので有ろうか。此奇怪な肉塊を透して動いてをる不可思議なる心靈のうごめきよ。これが人間世界の有ゆる波瀾、パラダイスをも地獄をも造り出す、有ゆる悲劇と喜劇とを演ぜしむるものは此心ではあるまいか。私は今、斯うして瞑想してをるとあの都會のドンヨリとした動きが縱横に映つて、其重苦しい様な調子のベースが湧いて來る。一體私は何を思ひ何を考へ何を目標にして進むで(?)をるのであらうか。人々は何を意識の圏内に浮べてをるのだらうか。農夫は豆を蒔かうとして畳つてゐる。職工は今デッキの上に破損を繕つて居たが、つい誤つて海中に足を踏みはづした、遺族は路頭に迷つてそと目をつぶつて生れた赤子の首をしめた。當路者は一將功をさなむとして萬骨枯るゝは古今の通勢だと云つて一向平氣で泰平の盃をあほつてをる。堂々たる紳士は髯をひねつて公徳を述べ立て、青年に大喝を浴せかけながらさる佳人に魂を奪はれて糟糠の妻を虐待してゐる。今しがた神の道を

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

教へて會堂を出た牧師は、人妻にそと肉迫した。支那には革命軍が起き、伊土は劍戟相見え、モロッコに紛議囂々として、列國は干渉か、中立かと氣を揉むでをる最中に、鎮守の森かげには黒い男女のかげ法師が動いてをる。詩人は天を仰いで詩心を沸かしてゐる。一日二十錢の賃錢から貯金した五十圓を慈善事業に寄附した隣の爺がそこら界隈の貧民を感化してをるかと思へば、自分で法案を立てた御役人が莫大の官金を胡麻化してをる。天下の名譽を集めて、九死に一生を祈つてをる貴族の別莊の裏手の海に、若い女が身投げをしたと噂さが立つた。今朝の新聞紙を覓げて見た時に、文部大臣が高等女學校長を集めて道德教育の訓示をしたとある次の欄に、教育界の一大問題として、あるレデーの萬引公判の顛末が掲げられてあつた。英國外相が獨の宰相と會見したと云ふて、其底の暗流を揣摩してゐる。官吏增稅案が通過した結果、吳服の値段が一割方騰貴したと內務大臣が澁面を造つてゐるポンチ繪が出てゐた。深川の吉公が助太と博賭が基て出刄騒ぎになつたとも傳へてある。あはれソロモンが榮花は槿花一朝の夢にして三千の佳人が旦に裝を凝した阿房の宮殿は、楚人が一炬の煙を化し去つて、今は黄鳥の淋しい叫びを止むるのみ。昨は王者の驕を極め、今日は南海の孤島にさすらひし英雄の末路。長生殿の春の夢酣にして俄に起る風雲にもろくも散りし平家の一門。あはれ常なき人生の榮枯。吾々は是等に向つて何うともすることは出來ない。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

秋の如く澄み切つた理智でもつて眞理を判別して行くことはいと易いことである。眞理に二つはない、四を二で割れば二となると云ふことは將來はいざ知らず、今の處誰れか打算しても同じ結果に到着する。私はかつて古ぼけた男扇子に人生行路難は險にあらず、岨にあらず、實に人情反覆の間に在り（原漢文）と物してあつたのを見ていかにも穿つた其言葉に對して感歎に堪へなかつたことが有つた。神變定りなく、電流の様に鋭敏に形容詞を見出さぬ程複雑に動いてをる人情の機微は、實にもソロバンの桁をはづしてゐる。美人一度笑つて國傾く、玲瓏玉の如き智慧者も一度纏綿たる人情の絆につながれては忽ち心眼の網膜を曇らせて仕舞ふ、仁愛、正義、謙遜、花野の春の様な美しい情操の姿を秘めてをる反面に於て、恐しい憤怒怨恨、貪婪、嫉妬、傲慢、凡そ醜い惡の華を織り出して、善と惡とがもつれもつれて、凄しい爭鬪に心は修羅の巷となる。或は其身の薄命をかこつ悲歎の聲となり、或は迷ひに迷ふ呻きとひゞく。盗めば罪として檻に籠め姦すれば不倫として獄につなぐ。怠惰、放慢、强情、殆ど手に餘る無頼漢は産みの親さへ之を見捨てるのである。けれど之も宇宙の現象ではないか、然も人間の一擧手一投足といへどもたゞ偶然に表はれて來るものではない。斯る行爲の由つて來るまでには幾曲節を踏むでをるであろうか。必ずや複雑な涙が宿つてをるであらう。心靈の光はとても物質の分子原子どころではなく、より幽玄な、より微細な働きである。斯かる心のさゝやきが千態萬姿に響いて來て世の有ゆる色彩を染出すのではあ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

るまいか。此心靈と此自然と相對立した時に其處に何んな意味が有るであらうか。人愁ふれば萬物愁ふ、人喜べば萬物喜ぶ。そこに何んな數理が有るであらうか。森羅萬象は斯る方圖もない渦巻の中に投ぜられてただ無意味に卷かれてをるのであらうか、吾々はただ無意味に存在を續けてをるのであらうか。天地開闢の始から此とりとめもない人生と永遠に默せる自然とに向つて、幾億の同胞は恐れもし、疑ひもして來た。幾多の哲人は惱み通して來た。

幾多の科學者は四方八方から有ゆる武器を浴せかけて來た。けれど吾々の行方はつひに明言せられてゐない。宇宙現象の本源はつひに悟られない。釋尊はとうとう雪山にのがれて、沈思默考僅かに慰安を輪廻因果の說に置いた。さりながら私は木の葉が吹き散らされるにも、何かの意味が有る樣に思はれる。亂脈の樣な現象界にも歎じ來ればいかにも整然たる調和を見出すとが出來る。美しい、美しい、絕妙の繪畫を見出すことが出來る。亂脈なる現象はさながら大いなる美の表象ではあるまいか。燦々しい現象界の響きはさながら大いなるリズムではあるまいか。吾々の前に開展せられて有る言はざる現象、これ悉く亂脈なる美術渾沌なる絕大の魔術ではなかろうか。思ふに、物皆は此大いなる美の本源に向つて走りつゝあるのではなかろうか。不圖觀じ來つた時にもはや懷疑の沙汰ではない。かの原始時代の素朴なる人民が、天體を畏敬し、崇拜した樣に、宇宙の美に向のてむしろ匕を投げて、痛ましさ惱ましさやる瀨なさを訴ふるの外ないのである。西行や、芭蕉や、遂に恩愛の絆を斷つてま

でも、無窮の自然美に憧憬れたてはないか。 かの和歌俳句は其憬れの迸りてある。畫聖ラファエルは生涯を捧げてカンバスと繪具とに堪へ切れぬ憬れを訴へ、フイージアスは大理石に惱ましい痛みを刻んだのである。大小の沙翁、近松は渾身の痛みを幾百の劇にかりて、綿々絶泣の中に生涯を終へた。短い筆の穗先から滴つた累々たる血痕は、時間空間の有らむ限り生々しい鮮かな印象を刻てをる。ハイネ、ウヲルズウォースの徒は張りつめた悲哀、燃え立つ炎に堪へ兼ねてとても多くを言ふ餘裕をさへ持たないで、切りに短い叫びに嫋々たる餘韻をひゞかせた。はた月下にリラを彈じて、ギリシアの海に投じた女詩人。琵琶を擁して關山の秋をかこち、靑葉の笛に鬼神を泣かしめた愁人よ。あはれ絲竹に長い思を叫ばせた、彼等はげにや美の大覺人てある。吾々の小い眼には、餘り大きすぎる大魔術の中から、かすかなリズムを見付け來つて、小い紙に、小い像に、その俤を漂はせつゝ美の堂奥に自ら慰めた。繰りひろげて行くには餘りに長い劇の中から、かすかな緖を見付け出して來て、短い筆を呵して其傷手を美の堂奥に自ら慰めた。吾々がきゝわけるには餘りに亂脈なリズムの中から、かすかな緖をきゝ付けて、やる瀬なき叫びに其痛ましい心を美の堂奥に自ら慰めた。彼等は其正體さへも知ることの出來ぬ、絕大なる美を對象として抱いた。大いなる憬れの痛みが滴り迸つてつひに世界の藝術となり、千朶萬枝の傑作となつたのであろう。痛みが深ければ深いだけ、憬れが强ければ强いだけ、其ひゞきは美しく痛切となつて來る。藝術はたゞ單に抜

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

巧の產物ではなくて、實に人間の最も眞面目な叫びでなくてはならぬ。水の迸流する樣に、内に漲る憧憬の堰きあへず凄しう堤を決して激流する處に、人生の聲が響いてをるのである。決して、決して、遊戯的木劍の類に眞の藝術は花咲かぬであらう。藝術のための藝術。生活の方便の藝術。そんなものに何うして生命が宿らう。西人の誰れかゞ「目的は屢人生に意義を與へる」と云つてをるが藝術の唯一の生命は憧憬れではなかろうか、否憧憬は人生に意義を與へると云ひ度い。生命と云ふ詞の一面には價値と云ふことを意味してゐる。價値は相對的で、對象のなき所に價値を見出すことは出來ぬ。かの屢社會の有ゆるとに失敗して、疲憊、倦怠、自棄、自暴、つひに向ふべき對象――事業なり研究なり愛なり――を失つて、全く人生の空虛に染々寂漠を感ずる時、生存の價値は失はれるのである。たとへ衝動的に生きてゐるとしても、そこに人生の意義は認められぬのである。世に藝術と稱する藝術はいと多いけれど、人を動かす傑作は世界を通じて數へる程しかないと云ふも、一には技巧の到らぬ節もあれど、未だ美に對する熱度が低いのではあるまいか。さらば世の覺人、獨り生命をつなぎ、かの毎日營々としてたゞ食せむがために働き、着むがために走つて、敢て疑はず、然も人生の空虛をも感ずるとなくして、死に行く人々には、先天的に何等高い憬れをも疑ひをも持たないのであろうか？　人生などて生命なきを得む。何人の心にも其底のドン底には生命の暗流がなくてはならぬ、たゞ其生命を自覺せぬまでゞある、生命を喚び起さぬまでゞある。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

吁人生、一度此生命なるもの、覺醒し始めた時に、吾々はぢつと落ち付いてゐるとは出來ぬ。追求！　憧憬！　吾々は何ものかに向つて走り始める。ほのめき渡るあるものに向つて追求し始める、廣い廣い宇宙に向つて、大膽にも探り始める。そして小いながらも、低いながらも、或は筆に、或は斧に、或は尺八に、痛みをよせつゝ美の堂奥に辿り入らうと追求する。偶々、覺人の傑作に會へば其己が訴へむとして訴へ能はざる、叫ばむとして叫ぶすべを知らざる痛みの琴線は、一々共鳴し、覺人の血潮は吾々の渴し切つた五體に流れ込むで、有ゆる節々を刳るのである。覺人が眞劍の叫び、痛切な訴が、世界の人心を警醒し聳動せしむるのではないか。

「蘇生の日」の主人公ルベックは、最初藝術家を以て自ら任じ、藝術を以て最後の目的としてゐた。そして彼は、其モデルを探して幾多の彫塑を試みたが未だ意に充たない。偶イレーネと云ふ婦人に出會ふと、いかにも彼女の理想美に動かされてモデルたらむことを願ふ。イレネーは快諾して、親も捨て兄弟も捨てゝルベックの家に來つてモデルになる。幾年かの後に完成したそれが、世界の耳目を聳かした傑作「復活の日」であつた。ルベックが後日イレーネに自白する樣に、實に彼には復活の日の前に彼の彫塑なく、復活の日の後に彼の彫塑はなかつたのである。

「お前は私にとつては決してモデルではなかつた。お前は私の仕事の源泉であつた」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「其後は一つも詩を作らなかつた――只模塑ばかりして日を消してゐた」

ルベックは自ら藝術のための藝術を織りなすつもりであつた。が何ぞ計らむ、彼の天才はむしろ其崇高なる純潔なる理想美によつて喚發せられたのである。此復活の日が世界の傑作たる所以は、それが彼の憧憬の高潮から湧き出た眞の滴りであつたからではあるまいか。イレネーに別れてからは、如何にも唯模塑をしたにすぎない。其作品には憬れの生命は宿つてゐない、所謂馬や牛の顔の樣なものばかりであつて靈が入つてをらぬ。然し彼はイレネーの美を愛したと云ふて、たゞ美其ものにあこがれたのであらうか。彼が復活の日の完成せむとする時に、イレーネはルックの藝術を憎て去つて仕舞つた。ルベックは暫しはそれでも堪へてゐたが、程なく彼は妻のマイヤにこんなことを云つた。

「世間で云ふやれ藝術家の天職だのやれ其使命だの何てい事は其根底を究めて見ると些の意味もない――空虚な無益なものだと思はれて來た」

「此所を御覽。私は此處の中に(胸)佛舍利の函を持つてをるんだ。そして其匣の中には彫刻の幻影が納めてあるんだ、所が例の女が去つて仕舞ふと同時に匣の錠がをりて終つた。其鍵は例の女が持つてゐる――鍵を以て何處かへ行つて了つた――所がお前は鍵を持つてゐないだらう、て匣は其儘て使ふとが出來ないて、舊のまゝだらう、そして年は立つ―私は實の持ち腐れだ。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ルペックは仕事の中途に幾度イレーネに手を觸れやうかとしたかも知れない。がそんな肉慾が襲つて來ると彼の藝術は壞れて了ふので、たゞ何か崇高なものにでも接するやうに、敬意を以て遇する外はなかつた。此を以て見ればルペックの藝術はイレーネを愛する戀の讃美であつて、復活の日は其戀の表象、美の形骸にすぎなかつたのである。彼は自覺すると共にもうぢつとしてはゐられないで、再びイレーネを探しに旅に立つたのである。赤い血の漲つてをる人間の心靈は、温い血によつてゞなければ終極の慰安を求むることは出來ないだらう。イブ、アダムが罪を犯し始めた以來、人間世界に情史の絕えた時は一刻もない。伊弉那岐伊弉那美の二神の昔から、母は子供のために生命をも犧牲にしてをるではないか。否、生きとし生けるアミーバの末に至るまで、愛の翼に温めらるゝのである。孔子道を說くに當つては決して仁を強いたのではなくて、人間生活に最も必要な糧であつて、之を行ふ心持ちはいかにも美だと觀じて、遂に默することが出來ないで、天下四方に鼓吹したのであらう。キリストが愛を神と云ふ形にかりて血を以て仕へたのも、愛が萬物の極美だと觀じたからであらう。吾々が善を慕ひ、愛を戀ふるのは義務の何のと云ふ様な淺墓なものではなくて、げにそれが美を愛する至情に根ざして來ねば眞に貴いもの、美しいものとはならぬであらう。一時の好奇心に驅られ、たゞ單に、本能の滿足を以て結局としてをる様な戀愛に、高尙なものゝないのも無理ならぬことではないか。愛國の士が一身を犧牲にするのも、祖國を思ふ美

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

しい至情に出でたのであらう。忠臣が君の馬前に命を捨つるのも、君臣の情に堪へ得ないからである。論語やバイブルや義士傳が依然として人心を支配し、人心を動かして行くのは此美に對する熱烈なる憬憧のひゞきだからではあるまいか。あゝ此温みよ、まあ何と云ふ美はしい油だらう。灰色に枯れかゝつてゐるわびしい人間の心に潤ひを與へ、失意の遊子に蘇生の口を繰りかへさしむる、げにも貴い至美ではあるまいか。萬物は此愛なる美によつて生存の意味を與へられるのである。さりながら美しい薔薇の花かげには、恐しい刺がゝくれてゐる。悲しからずや吾々は醜惡の地上に足を踏み入れて、殊勝にも僅に延び上つて美の世界をあこがれてゐるのである。美談や、義節の割合に惡事の傳へが多い。喜劇の割合に悲劇が多い。幸福の割に不運が多い。が靜に觀じ來つたならば善は固より美である。平和は固より美であるが、より深刻な美はむしろ此闇黑面に潜むでゐるのではなからうか。

浮世の義理につまされて、わりない戀を網島や硯川に沈めたのは破倫とは云へ、無慘とはいへ、そこに動かしがたい、絡んだ同情の涙もそゝがれるのである。嫉妬怨恨の產む活劇。捨て鉢な面當て、これも皆悲壯な運命の仕業だと考へ來つた時に、慘憺たる哀史の紙背又かすかに、然も電光の様に鋭く漲る痛快に打たれるであらう。花の爛熳たる天國の美は云はずもあれ、凄じい地獄の惡美に腸を斷たれるではないか。美の宮殿の裏面から、人情曲節の機微に照り立てられて、一管の筆を握つて入堂した沙、近、は勿論イプセン、ツルゲネーフ、ゾ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ラ、ハウプトマン、モーパッサン、さては本朝幾多の覺人の傑作を見る毎に、水底に潛める憧憬の金石は悉く鳴り出て、人をして胸を擁して讃歎措く能はざらしむるを見よ。私はかつて上野の音樂會に臨むでユンゲル氏のヴイオリンを聞いた時に、あの先生と音律とが融け合つて渾然たる悲壯と云はむか、歡喜と云はむか、泣くが如く、叫ぶが如く、訴ふるが如く、悲しむが如き樂の音にすつかり醉はされて仕舞つて、此儘死んでも遺憾はないとまで思つたことがあつた。かの浪花節義太夫語り等の名手が何時の間にか滿堂の人士の魂を奪つて、遠い遠い美の世界に拉し去るを見ても、いかに傑作が眞劍であるか、吾々の美感は其崇高、艶麗、凄壯、はた沈痛なる藝術によつて創るが樣にそゝらるのである。「寸鐵人を殺す」と云ふ詞は屢々人の肝膽を射る形容詞に用ゐられてゐる。高潮を吐く時、たとへ其詞は短くとも人を動す力を持つてゐる。

　起きて見つねて見つ蚊帳の廣さかな

離れしも首肯せざるを得ない。三勝半七や、ヘッダガブラーや、ルージンや、何時の世にも絕えない。吾々は時に血を沸かすけれども、それを訴ふべきを見出さない。徒に悶々の情に堪へないで切めては覺人の訴へをかりて痛歎、悲憤、懊惱、はた憧憬のやる瀨なさを癒すのである。技巧は勿論、藝術に大切な要素ではあるけれど、それは第二であつて、かの和歌にしても萬葉ものが人を動すと云ふは、眞に素朴な憧憬が詠嘆となつて韻をなしたからであらう、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

従てそれ等詩人の頭にはむしろ藝術的思念はなかつた樣に思はれる、古今以後漸く作歌と云ふことが行はるゝ樣になつては、よし技巧は進んだにせよ生命は失はれたものが多いのを感ずる。

カーライルや、エマーソンのヒーローウォーシップは宇宙に於ける傑作中の傑作たる美の有ゆる權化ヒーローに對する憧憬の聲ではなからうか。吾々は此偉人に對つて崇敬羨慕すると同時に、あの垢拔けのした天才の前に、いかにも己れの力の微弱を感ぜずには居られない。此感念が昂じては、そこに初めて宗敎的色彩を帶びて來る。哲學的見解に依らないで、情念の境域に踏み入つて來る。

凡そ宗敎と云はず、藝術と云はず、道德と云はず、たゞ此絕對美に對する叫びの中にのみ眞の生命の聲を聞き取るとが出來るのではあるまいか。經世家が社會の各方面に肝膽を碎き、實業家は經濟的方面に、敎育家は人心の指導に、殆ど席の温まらない程の貢献も、若し、其根本に於て混沌たる美の流れに棹してをらねば、必竟何等の結果をも見ることは出來ないてあらう。

吾々は雨の日に街道を軋る車の行方が何て有るかを瞑想することが出來る、九尺二間の裏店の生活をも瞑想して見度い。監獄の中の生活からも何ものかの聲を聞いて見度い、彼等は自分自身の走りつゝあるものを自覺することなしに、通り過ぎて仕舞ふのではあるまい

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

か。彼等は斯かる疑を懐くことなしに死て行く幸な人なのであらう。さらずば彼等は何の憧憬をも持たないて、闇から闇に消え去る哀れな人てはあるまいか。美を慕ふもの、美をめづる者は、いかて自ら美の權化たるを願はないものが有らうか。此美に對する熱愛心、それが世界の隅々まで泌み渡る時に、初めて普美なるパラダイスを見出すてあらう。

——完——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

寂しみ

小林歌津子

驛の夜

長い夜を
行燈の心をかき立てゝ……………
破れ琴の一節から
ゆくりなくもすべり出る
悲しい戀の物語り

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

暗いのは
ひたりと閉ぢた兩眼より
心の奥が………と泣く女
亂れ烏川の驛の夜は
しめやかに更けて行く

十二階下

疲れきつた三時過ぎの日の色は
いぎたない町に黄ろく輝やく

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

氣懶そうに——華美な袖口から
青白いうでをさしのべて
人を曳く……赤い女
慾にかつえたどんよりした眼で
薄ら笑ふ男のあさましさ
燥いだ笑ひ聲と高調な
クラリオネットの響とが
ひくゝ軒をめぐる——
こゝ公園の裏通り。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

高原の秋

らいてう

つゞき

と同時に、主人が不在ならばいゝが、市の餌屋の方へ行つてゐればいゝがとの思ひが、ふと私の心を過ぎる。

丁度二週間ばかり前のことであつた。市に新に兵營が設置せられて、一聯隊の花々しい兵士は潮のやうにどつと入込んで、全市は沸き返るやうな御祭り騒ぎをした。赤や、青の電燈の目映い緑門は數ヶ所に立つた。提灯行列も通つた。山車も市中を引廻された。旅館、下宿屋はもとより、貸家、貸間の總てをあてゝもこのサーベル連中を入れるにはまだ足りない。俄造りのマッチ箱のやうな貸家で、暴利を貪らうとした金にかけては抜目のない手合も少なくはなかつた。

半里在の私の住居の繭仲買の離れ家さへ、役場からの命令て、或少壯士官の爲に一間を

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

分たねばならぬ羽目になつた。お上からの御命令で、御命令でとは家主の言ひ分だが、そこには利害關係があつたに相違ない。

もと、もと、私は外來の刺戟を出來るだけ避けて、靜思したい、と云ふ抑へがたい要求から、特にその土藏造りで、鐵棒のはまつた小窓一つしかない、灰色の四壁の、がらんとした廣間を撰んだほどなので、其所に引籠つてからと云ふものは毎朝日觀かた〴〵裏の流れへ行く外は、一歩も踏み出さぬほどの、極めて無活動な、內包的な生活に本來の純な自分を自覺することばかり樂しんで居たのだから、よし壁一重隔たつてゐやうとも、慓悍な軍人風情に占領されて、サーベルや拍車の音に、靜かな空氣を亂されることは堪へられない。實弟の家の座敷は屹度御氣に召さうと家主の親切顏に云ふところから、私は兎も角もと其所に引移ることにした。それが鯉屋で、實弟とはこの養鯉所の主人なのであつた。

數里東の山の中に養鯉池があるのだが、其方は養子夫婦に任せてあるから時々見廻りに行けばいゝのだと云つてゐた。こんな關係から私と主人とは已に相識の仲なのである。

信州人によく見る赤黑い、面高な、目鼻立のはつきりとした、隙のない細面の五十恰好の男だが、目に文字あり、法律の片端位心得てゐるので、何かと云へば村の總代に撰ばれたりするだけに、もう愚かと呼ばれる尊さはない。そればかりか、なまもの知りだから却て始末が惡い。彼は私を官吏の娘と知つてから急に待遇を改めた。膳に上るものは勿論、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

言葉遣ひまでも違つたのには、いかに地方人士に官尊民卑の觀念が强いか驚かざるを得ない。私はいやな氣がした。時には淺ましくなつて來た。

勳何等、何位、年棒何圓の官吏の令孃を御世話することは名譽だと云ふ。成程私は官吏の娘に相違ない。併し官吏としての父が生命として常に重ずる社會の感情や、名譽や、體面に私はどれほど損傷を與へて來たか知れない。その私は到底官吏の子ではない。子となることは出來ない。母は官吏としての父と私との間に立つて、父に對する手前と、私に對する愛情の爲に自分の生活を全く蹈みにぢられてゐるのだ。かうまで兩親の上に償ひがたいことをしながら、なほも自分みづからてありたさに、又もかうして、其悅ばない顏を見ながら、たつてこの山國へと、淋しい心持を抱いて、漂泊の途についたのではないか。さすがに母は停車場まで私を送つてくれた。プラットフォームの薄暗い灯の下に輝く淚含んだ母の眼と私の目とが出會つた刹那の思はいつ忘れられやう。私は母を憐れんでゐるのだ。そして世の中の母親といふものを皆んな憐れんでゐるのだ。私は無位無官の人間としての父の子と若しなることを許されるならばなりたいのだ。けれど、官吏の子ではない。父が官吏の故を以て惠まれる肉片にどうして舌を鼓することが出來やう。私は只の人の子である。赤裸々なる一個の女としての私に適當の尊敬と、好意を以て與へるものでなくてはいやだ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

三日目に私は其家を去つて、一里外の山麓の温泉宿に移つた。けれど、浴客――ことに日曜日に遊びに來る軍人達の馬鹿騒ぎにいら立せられて、遂と主人の乞ふまゝに、此人里遠い山中の養鯉所へといよ〳〵來ることにしたのである。それに主人は大方市の店に居ると思つたので。

私はかうした不愉快や、それから導き出される生々しい色々の苦痛や、惨ましい涙から主人を厭ふともなく厭つてゐるのだ。

やがて若者は同じ位な年輩の男を連れて歸つて來た。至つて好人物だが、腕はないと云つたやうな間伸びのした顔に當惑の色を浮べて、盲目縞の仕事着のまゝで私の前に突立つた。

「ためえ様か。東京のお客勉强にくるだと爺様云ふてたけんど、れら今日だと知らんもんだて。」

主人は不在であつた。

掃除する間を待つて、明っ放しの奥の座敷に通る。平生人も住まなければ、めつたに箒など入れたことはないらしい。まだ隅々に塵が積つてゐる。古木の上に强い翅を半開いて、今にも何か掴み執りさうな氣合を見せてゐる大鷹は養鯉所の此所に設けられた年、松林を越えて遠く、池の上に舞ひ下りたのを、瑞祥がつて若者逵が捕へたのだとか。小さな國旗と聯隊旗とを交叉したり、捕鷹を祝する月並の發句を書いたりしたのは子供らしく俗

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に見える。六枚の金屏風は其銹に、匂ひに先々代の先代を物語つてゐるが、日本畫の常とは云へ、平板的な、遠近法も何もない惡繪の山水の軸は縁先から眉に迫つてはいつてくる山々を遺憾なく侮辱してゐる。

山々は青葉色の裸形に柔かく起伏する。きらきらと輝く秋の午後の日を斜に浴びて、斜面一帶、穂芒の群落は其所彼所に白波を走す。悠々と天頂に浮ぶ乳色に縁どられた、ふつくりとした灰白の大きな雲の一群も山の面に影を投げては煙のやうに煤色に後から、後からと慌し氣に滑つて行く。

猛烈なやうで、力強いやうで、其奥に何ものか潜んでゞもゐるやうで、その癖ぢつと見詰めてゐると、人間の心に盡きぬ妄想のやうに、魂を汚す幻影のやうに底力のない、悲しい、はかない、遣瀬ない雲の影――山の面を滑る煤色の雲の影ほど漂泊の心をそゝるものはあるまい。

私は一體、この頼りない自然に對して何をしやうとするのだらう。何を求めてこんな山窪に來たのだらう。孤獨、々々、まあ、なんと孤獨なことか。

靜かな魂の底を分らぬほどの微かな霞ひが過ぎて、涙がにぢんでくる。過去の生活に伴ふ二三の男友達や女友達の誰れ、彼れに纒る埓もなく、果しもない思ひが心の上皮を渦巻きながら過ぎる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

……だが、私に友達があつたらうか。一人だつてほんとうの友達があつたらうか。只つた一人の人にさへ一度だつて、ほんとうの自分を語り得たことはなかつたではないか。始終大嘘を云つて居るやうな感じに苦しめられてゐたではないか。私は隠す氣はさらくないが到底自分の眞底を語るに堪へない人間に生れたのだ。又一度だつて、人の云ふことを心から信じて聴いてゐたことがあつたらうか、只つた一人の人の言葉さへ何時も嘘だ嘘だと思つて居たではないか。決して疑がふ氣はないのだけれどさう感じられてならないのだから仕方がない。どの道、私はほんとうの友達なんてものは有てないやうに生れ付いて居るのだ。社交によつて得られる安価な智識や歡樂が何だらう。社會我を發展させて行く……そんなことは私には理解されないことだ。私は人中に居る間に、人間の眼に浮ぶいろくの影を讀んでゐる間に心が瘠せるのだから、哀へるのだから……

山頂に四五本のひよろ松が立つてゐる――自在に吹き荒む風に瘠せこけて、傾いて、幹の少し許りの小枝もいぢいぢとしてゐる。

雲の影はなほ煙のやうに後から、後からと慌し氣に滑つて行く。人間の心に盡きぬ妄想のやうに、魂を汚す幻影のやうに強いやうで底力なく、悲しく、はかなく、遣瀬なく後からくと走つて行く。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

柿の盆が私の側に置かれてあつた。

荷馬車の通る路は餘程迂曲してゐると見えて、荷物の着くのは遲かつた。

僅ばかりの書物や、小道具を取片付けて、床柱に凭れながら、私は茫然と坐つてゐる。

縁側づたひに嫁がはいつて來た。

「お口にあひますかどうか、こんな田舍のこんだて、何もありませんで。」

琥珀色に澄む蜂蜜の瓶とコップとを置いて「これ水うんと混ぜてあるさけで、お茶のかはりに御飲みなさい。」

嫁は二十三四の色こそ黒いが、田舍者とも思はれぬ華車な、上品な、子供が出來ないと聞いたほどて、どこか虚弱さうな神經質の女である。

嫁の後を跟いて來た黒猫は四四の子に絡み付かれてゐる。まあ何と見れば見るほど、大きな胴の長い猫であらう。尾の長さも確に一尺はある。あの眞黒な中から薄鶸色に光る奇怪な眼はどんな不思議な世界を照してゐるのだらう。

子に乳房を慕はれて、仕方なさうに、横になると、長くなるか、ならぬうちに、もう四四とも埋もれるやうになつて一心不亂に吸ひ付いてゐる。親猫は時々首を振つて、薄桃色の柔かな舌でペロ、ペロと子猫の背中を甜めづる。子猫は一切御搆なしと云つた風で、上になつたり、下になつたり、潜り込んだり、潜り出たり、重なり合つて呑み續ける。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私は蜂蜜のことから、蜜蜂のことや、この邊の子供は野生の蜜蜂の巢を山から探して來ては、それを賣つて小遣をとるのだと云ふやうなことを聞きながら、何故か瞳をぢつと黑猫の上に凝さずにはゐられなかつた。

呑んだ蜜に心が浸つて、毛孔殘らずから、また吸ひとつた蜜は總身をめぐつて平和な思ひの中に融けて行く。

先刻から障子に止つてゐた大きな蠅が室中をぶうんと飛び廻る。

庭の小池で鍋を洗ふ手拭被りの女の怠い鼻唄が絡んで、寛ぎゝつた心の底から、今朝からの快い疲勞が輕く浮き上つて、私はうとうとして來た。忍び足に行く猫の鈴の音が微に、微に。――私は床柱に凭れたまゝ、いつか眠て仕舞つた。

犬と一緒に、稻の穗を扱く塵煙の黃色く立つ中を馳け拔けて、池の端の芒の丘まで來た時は日もいくらか傾きかけてゐた。

山間の大窪の底に暗綠に湛へられた湖は大自然の眼である。其水は秋の血潮である。活動によつて僅に目醒めてゐる凡人の心ではなく、かの靜的にして、しかも夢見たことのない智者のやうに、一點の曇りもなく、寂靜一味、默然として無爲、自から知足せるものゝや

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

うだ。偶々水の上に魚が跳ね上つて、銀色の弧を作るかと思ふと、幾重の柔かな輪波は水の面に描かれて、それから、それへと四周に傳はり、いつともなく靜かに消えて仕舞ふ。と一頻り呪れてもしたやうな不思議な安穩が續く。ずつと高く、額のやうに蔽ひかぶさる向ふ側の山は神々の住居のやうな赤松の老木の純林で包まれてゐる。其上を、飽迄青い空中を、幾羽の鳶は大きな輪を悠揚に描いて、いつ迄見てゐても絲にでもかけられたやうな翅は動きもしない。空中の游泳者よ、悠々たる蒼天の覇者よ、大自然の中の逍遙者よ、自由の使者よ、靑空の中に生れて以來、まだ一度としてゐるびれたことのない、あのゝんびりとした、ピンと張られた强い翅の上に私の魂をのせて見たい。

やがて、一羽がすうつと舞ひ下りて、水の面を掠めたかと思ふ間もなく、魚を捕へて舞ひ上ると、其所を中心にして、波紋は大きな輪を描いて水の面、一杯に廣がる。

池に臨んで、細長い小舍が只つた一つ、忘れられたやうに寂しく立つてゐる。其前で荷馬車から何斗ともないドキョ(蛹)を下してゐる。ドキョは養蠶の盛んな此邊での唯一の鯉の食料だと聞いたが、かうして近在から集めてくるのであらう。さう云へば今朝私の荷物を乘せて來た荷馬車もこれだつた。

煮られたドキョの幾筵は惡臭を放ちながら、西日に乾いて行く。投網でも干すやうに宙に懸けられた鼠色のフリダシ(ドキョにまだ幾分か付いてゐる絹繊維を集めたもので、後

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に紡績絲に製せられる。)は大きな古綿を展けたやうで穢らしい。

小舍に一歩踏み込むと、惡臭がぷんと鼻を突きぬく。薄暗い土間の中央の大釜から盛んに湯氣を吐いて、ドキヨは煮立つ。職人は棒で釜の中を掻廻してゐる。けれど惡臭に堪へないで、私はすぐ外に出たゝ

山腹の小徑を池畔へ下る。

環座の山々は四周から押迫つて、赤松の純林の頂は容易に仰がれない。遠い際から、がうと寄せて、どうと返す峯の松風は魂の底を洗つて、永遠の響に通ふ。長い尾を曳いて、何處とも知れぬ天の一角から笛のやうに鳶の聲が流れてくる、と耳がなくなるほどの靜けさ。何だか心が細々としてくる。

足もとのあけぼの草?は其昔犯したさゝやかな罪を白綠の小花に生涯懺悔してゐるやうだ。岸邊の雌竹、蘆、萩などの叢林は折々吐息を洩す。

私は朝な、朝なニンフとなつて、自から定めて、かたくなに守つて來た日課の水浴をこの湖でしたならば……と、水を掬んで見たが案外冷たくない。

池は今、餘程水が減つてゐると見えて、汀から數步のところ水の描いた曲線の雲形に出入するあたりを辿りながら、私は向ふ側に出た。小松林の丘陵を登り切ると、ぱつと目を射る落葉松の林は黃葉にはまだ少し早いのを斜に差込む日の洪水に照りのある金茶色を見事に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

染め出してゐる。林の奥まで明るく透いて餌を捜し歩く山鳩の影がはつきり見える。

孤獨そのもの丶やうに無心の心の底から響く山鳩の聲。やがて栴の大木に飛んだ時は二羽だつた。あの大木の幹の縱皺は自然と戰ふ生の辛苦を刻んだのであらう。

私は樹蔭に座を設けた。時計の磁石が指す東の方、丁度向ふの赤松林の緩い斜線が兩方から落ち合ふあたりに相對して、座を設けた。

在昔、世尊は王舍城の韋提希夫人に西方に向つて正座し、半眼にして、落日を凝視せよと訓へられたとか、けれど私は落日を愛すると共に、否、それよりも曉を、日出を愛する。水浴し果てた後、東天の太陽と合する私はこの身ながら、六合を貫く主宰者ではないか。

——ナイフで刈つた母子草や、蓬、根笹などを其儘敷物として横へた半疊たらずの座の中にぢつと座つて、萬象に耳傾けてゐると、私は頻りに青空を屋根とする戸外生活がして見たくなつて來た。

ふと思出されるのは、まだ小娘の頃、兩親と避暑してゐた或海岸地の松林の中に一輛の車を家として暮してゐた盲目の按摩父子のことである。彼等になくてならぬだけの家具一式は車の中に置いてあつた。勿論ふたりは其中に寢る。炊事は野天でしてゐた。土地での仕事が思はしくなくなると、目明きの息子は盲目の父を車に乗せて家共に引いて旅に立つ。二週間、三週間と經つと多少の銅貨をもつて、歸つてくる。私は此簡易な車上生活、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

無雜作な無錢旅行を幼な心に面白く思つた。不思議にさうした生活に對する憧れの心は歸京後、いつまでも失せなかつた。

この山間の池畔の松林の神厳な呼吸の中に同化して、刹那々々にぐらつく人間のくだらない、頼りない希望や、幸福を一切捨て果てゝ大自然のやうに純一に、剛健に生きられたならば……私はこの世に生れて多くの經驗を得やうとは夢更ら願はない。が、只人生の精髓だけ味ひたい。それで十分である。私をして泳ぎ手となすなかれ、地の底に潜らしめよ、天の奥に分け入らしめよ、そして、そこに自然と共に當に大實在であらしめよ。

目の前をミクロコスモスの秘密の美かと無色透明の小さな珠が、青空を背景に小紋頁沙のやうにいくつもく\珠數繋ぎになつて下へ、下へと降りて行く。かと思ふと銀砂のやうな無數の光體は光線の縞目に浮ぶ塵埃のやうに右往左往に飛びかふ。

人影が次第に大きくなつて來た。けどんな顔付でソクラテイスそつくりな鼻の百姓爺が私の前に立つた。今日の小春日和を松葉掻きに來たのであらう、大きな籠を背負つてゐる。

「どつから來ただい。おめえ様。」

咎めるやうな挨拶だ。

「私、そこから……」

「村の者ぢやあるまい。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「養鯉所にゐるのさ。」
「へえ――」長く引張つて「おめえ様が。」と私の袴姿を熟々見る。
「××の小學校の先生様かい。」
合點らしく獨り言を云つた。
「おら、畠の方、えらい忙しかつたもんたて、御無沙汰してゐるが、旦那によろしく云つておくり。おら〇〇だんね、葡萄畑の。」
葡萄畑と言つた言葉にそゝのかされて、暫くしてから爺の後を、落葉松林を拔けて峠の方へと行つた。
坂を登るにつれて、飛彈山脈は最高峯の頂から次第々々に覗き出して、薄すらと群る水蒸氣の帶のかなた、松本平を隔てゝ遠く、しかも眼の前に現れてくる。今朝のあの荒くれた褶襞も灰紫に包まれてこまやかに、ゆるやかに、物柔かい。
金覆輪の雲をわけて、靜かに沈む夕陽は空線間近に燒付いてくる〳〵と廻轉してゐる。あゝ日沒だ。だが、この近よることも出來ないやうな高熱に爛れながら、それてゐて、觸れてみると案外ひいやりとしてゐさうな、血色の、はては陰慘な氣さへ漂はす大圓は何ものだらう。
大圓は紫の山に呑み盡された。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

雨のやうに、半天かけて、光線は、幅廣の帶のやうに雲を透して四方に放射するかと、見る間にかはる火の大海、忽ち高く懸る東天の雲悉くに反射した。

打寄せる焰の波は紅に峯々を洗つて、磨きすました雪の脉管に血潮を流した。家の棟高く振りかざされた纏のやうな噴烟よ。今日といふ全きひと日の臨終を祝福して天地萬物は今、上氣したのだ。

一時かつと燃え上つた火の海も次第に和んで行く。ルビーを解して湛へたやうに深みがあつて、しかも底の澄んだ紅に、はては落ち付いた赤銹色にしづみ渡つて、大山脉のかなた遠く、遠く。果てもなく續く。

片々として金茶色にちらばる雲は浮島か。大きな深い灣を抱く雲の岬は方々から巨大な手足をさし伸して其奧にも、又其奧にもいくつかの灣が見出されさう。金波は岸に碎けてゐる。

あゝ、山の向ふには、海の向ふにはどんな國があるのだらう。飛彈の國！飛彈と云ふ國はどんな國だらう。どんな人が住んでゐるのだらう。屹度太古の森の中で、神の人が慰みにいちひ細工をこしらへて暮してゐるに相違ない。

山岳はいつか紫の色を增した。暮れ行く花崗の山の振袖の樣な濃紫の色――こんな優艶な色がこの世にあらうとは。殘んの光りは幻のやうに山の面を滑つて、谿々に夢を孕んだ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

刻々に移る山の色、空の色——色彩の變化が奏でる宇宙の音樂に私は恍惚として、瞬もなく峠の頂に佇んでゐた。

冷たい風が髮を吹く。

喪神した人のやうにもと來た路に引返した時は空は一樣の薄暮色に消え果てゝ、暗藍に横たふ連嶺は魔王の寢姿のやうに默然として動かない。いつ迄も焦茶色に殘つてゐた一抹の水蒸氣も灰色の中に吸ひとられた。空から覗きだした白い星の光が寒さうな。

近くの禿山は一段と褐色に、燒き拔いたやうに輪廓がくつきりと見えた。

急ぎ足に池畔の丘陵まで來ると、火事か、山燒きか、東の山の端、松林のかげが明るくなつて、梢頭は陰畫のやうに黑くすく。あゝ月だ。遠い國から今、月が昇るのだ。

あたりはもう暗い。萎れた花芒がほの白く暮れ殘るばかり。

漂泊のおもひが泌々と胸に迫つて來る。

圍爐裏の周圍は賑やかである。

大きな汁鍋から立ちのぼる湯氣の中で、一日の勞働を終へた若者達の横顏は火に燃えてゐる。

女中達は無遠慮な高笑を折々投げる。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私の部屋には置火燵がしてあつた。其上にお膳が上つてゐる。鯉の煮たのに、鰻のお汁だ脂肪て唇がいつ迄もぬるぬるする。

私は悲しい小ランプに暗く照されて、屏風の中に、ぢつと座つてゐると、盗人のやうに、障子の破れから黒猫が忍び込んで、私の側に蹲まる、眼ばかり燐のやうに黒暗に光つてゐる。追つても、追つてもいつの間にか又抜き足にはいつて來て、私の影の中に蹲まる。

ふたりの黒い影は重り合つて久しく動かなかつた。夜は更けて行く。

一頻り花が咲いた露骨な色話や、戦地での手柄話も圍爐裏の火と消えて、夜は次第に更けて行く。

庭の小池で鯉が折々跳ねる。

山國の秋の夜はまるで冬だ。もう風が家をめぐつて、森に鳴つてゐる。

—完—

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

一夜

物集和子

十一月末の旅は淋しいものだつた。馬關を六時何時分發の神戸行に乘つたお秋は、二等室の隅の方に、其の疲れた頭と體とを、絹ラッコを敷いた上にのせて、窓に身を寄せかけてゐた。車内の乘客は、大阪の商人らしい人が自分の前に腰掛けてゐるのと、新婚らしい人が廣く場を取つて、袋から蜜柑や林檎を出しては無遠慮に食べ乍ら、意氣作りなお秋を時々見て居る外は、銀行の頭取とも云いたい、五十格好の人が軍人を對手に時々話しをしてゐる許りだつた。

手荷物を傍へ置いて、兩手を謹ましく膝に組んだ儘、紺のスカーフで深く頤迄埋めてゐた。羞恥と慚愧と――お秋の頭の中ではくる〳〵と渦を巻いた。闇を只一直線に物凄い音して走る車に連れて、微かに搖れる體は、心地よく眠を誘つて、頭から微温湯でも浴せられたやうな、凡ての感覺が鈍つた。此の儘何處迄走る事だらう。燈火が僅かしかない淋しい驛を過ぎて、又元の闇に入る。硝子へピッタリ貌を押付けて覗いて見たが、只暗かつた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

吃驚りした時のやうに、急にハッとなつて、四邊を見廻した。明断した氣持に歸る。すると何となく張合も何も無くなつて了つたやうな、味氣ない心で、若い二人の樂しそうに笑ふのを見てゐた。わざと掛けた色眼鏡で、人には分らなくとも、恐らく其の人達を羨む心は、目にも貌にも現はれて居た事だらう。泣きたいにも自由に泣けない、傍の人が邪魔になつた。昨夜の今は、丁度田舎芝居を見てゐたのだと、幾等消さうとしても、昨夜の自分の憐れな姿がありくと目に浮ぶ。

奈何云ふ考へで彼の人に逢ふ心になつたらう。一寸した好奇心——機み、とも云へやう。旅の淋しさの遣瀬なさからとも云へる。何の爲めに逢ふ。二年の間に手紙さへ取りやりせぬ中に、逢つて何の事があらう、とは云へ自分は飽く迄逢つて見たい願だつた。

その人から敎へられた一里程離れた小さな町の、名指された旅館へ着いて、夕かた、持重りのするやうな着心のいゝ棒縞のお召に、同じ物の羽織を着て、髮は田舎では奈うせ難しい自分に氣に入る譯はないと諦めて、洗髮のハイカラにしたのが妙に似合つて、素貌と思はれる程な薄化粧で鏡に向つた時は、之を二十七とは誰が見やう、絹の重みで自然と撫肩になる肩の邊りから、立つた折の後姿迄映して、何日迄も飽なかつた。車が來たと云はれて漸つと鏡の傍を離れたが、幾度か見返りくした。凹凸のある、坂の多い、石塊道

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

をゴム輪てない車の音に何だか氣がひけ乍ら、十分程すると町外れになる永樂家と云ふ茶屋についた。來て居るかを危び乍らも、思ひ切つてもう閉めてあるくゞりの戸を開けると、

「お出でなさいませ」と女中に何も彼も呑込んだやうな挨拶をされて、馴れてはゐるもののヽカッとした。

「もう彼入つて」

「ハア先程から」と言葉少なに冬も雨戸を閉てないと云ふ坐敷の前の長い椽側を、草履でヤケに音をさして先に立つた。飛石や一寸した植込が外れの部屋から流れる薄灯に、その一廓丈が浮き出てゐた。外の風に冷え切つた椽側は、歩く度びに足袋の裏迄冷りと感じさせる、何となく霜夜と思はせる晩だつた。

「サア何卒」と女中は人らずに身を引いた。今更らよせばよかつたと云ふ後れも出たが、それでも思ひ切つてツイと中へ入ると、丸て後ろを向いて障子を丁寧に閉めて、振り向くと男と丁度貌を見合せて、

「久濶」と淑かに頭を下げた。

「御無沙汰をしつ了いました、ツイ旨く書けないもんてすから、始終お噂は家でしてるんですけれども、後れが出てねえ」と不意に逢ふのを斯うして如何にも思つて居たやうに見せかけたが、男が無言つて自分の貌を見てゐるので一寸照れて。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「大變に待つて被下すつたの」と胡麻化しに云つて持つてた半帕を揉みくちやにした。

「何有に其様でもないさ、寒いからズッと此方へ寄つたらいゝぢやないか」と落着いた物言ひて、吸つてた莨を前の火鉢にさして、腕組をした。

「奈うして國へ歸る事になつたの」と切り出されて、漸つと話の緒口が見付つたと。

「お母さんが死くなりましたから」とスラ〳〵と云つた。

「よく病氣だから困るつて云つてたつけね」

「否え彼れは小母さんよ、お母さんは年中ピンピンしてましたわ、それが急でね、眞の二三日しか病(かづら)はないんですよ、家には私の末の妹と二人限でせう。悪いつて電報を受取つた時は丁度宴會のある日で奈何しても手が拔けないから其の翌日(あくるひ)に朝の一番で新橋を立つたんでしたけれどももう無効でしたわ、最も電報を受取る直ぐに行つた處で無効は無効なんだけども、でも其方が思ひ切りがよくつてね。だから私が歸ると親類中してお通夜をしてましたつけ、妹が一人でうろ〳〵してゝ可愛想だつたわ、でももう何も彼も濟んで了いました」

「ぢやアもう此の儘國にゐて養子でもつて譯かい」

「豈夫、御笑談でせう、妹に許嫁がありますしお母さんの姉さんが妹を預かつて悉皆りやつて呉れるつてますから家は一時疊んで了つて、私しや元の家に歸つて前の通りなんですわ。その代り妹には養子が出來てるし、もう心配無しの身の上になつたと云ふ譯なんてす

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

よ」と強いて笑ひ乍ら云つたものゝ、男の顔に何處か自分を懐しむやうな、憐れむやうな色がと探したが、何處にもそれは見當らない程、落着いた、靜かな態度だつた。

二年前よりはずつと眞面目になつて、氣のせいか大變に老けて見える。奈うやら別の人に逢つたやうで、拍子拔がして、云はふと思つた言葉も張合がなく、無言つて手持無沙汰にその身なりなどを見てゐた。手紙の端に、ついでながら小生も彌々此度結婚致し候と何氣なくかいた文句が頭を離れない。大方其樣事だらうとは當りをつけてゐたものゝ、言葉丈の約束でも、自分は空頼みと知り乍らも的にしてゐた、何日か奥樣と呼ばれる身になれない事もあるまいと考へても居たが、何も彼も打捨つて了いたいやうな、話をするでもないと、味氣ない思ひがした。

「奥樣をお貰ひになつたんですつてね、お目出度う御座います、何方から、何とも仰在らなかつたから私しや初は嘘かと思つたんですよ、舁がれたのかとも考へたんですけれども、豈夫ねえ」とそれでも未練らしい云ひ方をした。

「笑談ぢやないさ、餘程知らせやうと思つたんだけれども何日かお前に知らせる人があるだらふからそれ迄と思つて默つてたのさ、又知らした處で」と途斷らしてまじ／＼顔を見てゐるのを被せるやうに、

「知らした處で奈何なの」と云つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「仕方がないぢやないか」と詮事無しに苦笑した。お秋も一緒に苦笑ひしない譯には行かなかつた。お嫁さんの事を聞きたいと思ひ乍らも、嫉くやうに思はれても厭だと、其儘押無言つた。這麼空な事を云ふ爲めに故々此處迄來たのかと馬鹿〳〵しい。止せばよかつたと云ふ言葉が頭の中で盛んに燃えた。自分の殊更ら笑顏の多い狎々しい調子に引替へて、男は其處に幾つかの滯を作つてゐるやうな物言ひをしてゐる。之ではもう三年五年と經つた後では、路傍の人としか――それよりも、逢い度くない人として二人は見合はなければならないのだらうと淺間しい氣がした。何日迄經つても何方からも物を云ひ出さない、お秋は少しズリ寄つて、火箸を持つた手で炭に男の名を書いては消し〳〵してゐたが、それも何だか故意と初心らしく作つてゐるやうで、堪らなかつたからよして火許り見詰めてゐた。而して順々に行儀好く並べられる敷島の吸殼を數へたりしてゐた。

「寒いこと、今夜は莫迦に冷えますね」

「此處等は雨戸を閉めないから餘計寒いんだらう」

「さうですつてね、何ぼ用心がいゝつても這麼に寒ければ閉てたらよさゝうなものだのに正直ね」と譯も無く笑つた、強いて笑つた貌は後からスッと笑が引込んで、又元の詰らなさうな貌になる。

「斯うやつてちや何だか拍子が拔けて可笑しいぢやありませんか、芝居にでも行つてみま

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

うか」

「あるかしらん」と首を捻るのを引取つて、

「あるんでせう、今日町ン中を拍子木か何か叩いて廻つてましたよ、其處等中の人がぞろぞろて來てみてましたもの、まア行てみませうよ」と云ふと氣早に立上つた。斯うやつてゐるよりはまだいゝ、此儘何時迄坐つてゐた處で照れる許りだし、之て歸るにしては餘り馬鹿げてゝ人にも云へないからせめて芝居にもと考へて、男が餘り進まないのを無理にも連れて行かふとした。

「穢いぜ、吃驚りしないがいゝ」と男は笑ひ乍ら立つて、外套と帽子とを持つた。

まだ八時と云ふにもうこの町は何處の戸も閉て切つて、軒灯の少ない、ともすれば石に跪(つまづ)きそうな道を、宿の女中が毛布と草履と提灯を持つて先に立つた。坂を一つ上るとその衝き當りの呉服や丈がまだ店を開けてゐて、硝子戸の內は、明かい電灯の元に、紅や青の多い友禪がこの町の若い女逹の胸をそゝるやうに飾り立てられてあつた。女中を先にお秋は男に倚り添つて步いた。口許迄蔽つたスカーフは熱い息にぬれて、冷たくなつた。霜に凍た道は、女中の日和下駄で跳ね返るやうな音がする。不意と此の時お秋はやゝよびへ始終來る銀行家の若旦那と、小まんと云ふ雛妓との戀仲を思つてゐた。若旦那の纖細な色白な貌と情の深かさうな目と、小まんの結綿に掛けた紅い鹿の子や、友禪の長い袂や、若い、心中も

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

仕兼ねないやうな二人の事を泌々考へた。これが緣を引くやうに自分と男との二年前も、小まんに劣らない深いものだつたと、段々後へ〳〵と考へが手繰られて來た。彼の時の情に燃えるやうな目や優しい口吻は、奈處を奈何探したら得られやう、果てしもない思ひから泪は止度なく頰を傳はつた。が急いて氣取られないやうに拭いた、男の歩く度びに外套を擦く音がシュウッ〳〵と鳴る。

二階立の家の障子が開いてゝ人が立つてゐるやうだつたら、女中は下から、

「お婆ア、お寒いなア」と怒鳴つた。

「お豊さんかい」と云ふと間も無く降りて來て、馳け出して女中と何か小聲で話し乍ら、四五間先の幟が二三本夜風にはためいてゐる芝居小舍の前へ出た。木戶の前には紙に大きく、忠臣藏大序より討入りまで、と書いてある。穢らしい人が出たり入つたりしてゐた。婆さんが先へ入つて、足袋や何かゞ汚れると云つて、揃へてくれた草履を突掛けて後へ續いた。粗末な棧敷に持つて來た毛布を敷いて、火鉢を持つて來るやらしたが、軈て女中は婆さんに賴んで歸つて行つた。舞臺では今判官樣の切腹の場だつた、男女とも正直に舞臺に心を引かれてみた。汚らしい、二寸程下の開いてる、その土地の魚屋だの小間物やの名が細かく並んだ幕が引かれると、ほつとしたやうに四邊を見廻した。二人の少し先に藝妓と半玉が五人程來てゐたが、その一人が男を見付けてお低頭をすると、後の皆んなも云ひ合せ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たやうに此方を向いて笑ひ乍ら頭を下げた。
「藝妓衆ね」と分り切つてゐながらも聞いてみた。
「あゝ、あの此方を向いて笑つてる、今頭へ手をやつた、あの娘が豆蝶つて此土地で一番好いんだ、鼓が上手でね」としきりに云つて居たが、お秋には只の田舍の藝妓としか見えない、その妙に上方言葉を使ふのもイヤだつた。幕間には今迄土間で見物してゐた人が立つて、飴やおこしを賣つて歩いた。その婆さんは蜜柑とおせんを持つて來た。外から吹込む風は寒いし、花道や其處らを歩く人が、幕が開いても引込むぢやなし、お秋は芝居を見てゐるより、斯うして男の傍にゐると云ふ考へ許りしかなかつた。蜜柑をむいてソッと男の膝の上にのせて、自分も大分は下を向いて食べるか、煙草を吸ふかしてゐた。
「一向芝居は見ないぢやないか、歸らふか」
「いゝぢやありませんか見ないだつて、只斯うやつて座つてる丈でも陽氣で好うございますわ」と云つて歸らふとは云はなかつた、斯うやつて時間の經つのを默つて見てゐたい。男も無言つて舞臺の方を見てゐたが、軈て時計をソッと出すと。
「歸らう」と立つた。
「さう」とお秋も素直に從いて、お婆さんに毛布を賴んで外へ出た。夜風は莫迦に冷たく貌に當る。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「提灯を借りてからうか」
「何故、好いぢやありませんか」と素氣なく云つて暗い道をつまづき〳〵歩いた。お酒が呑みたい。
「やよひも變つたらうね」と久濶くしてから男が聞いた。
「えゝ、悉皆り人は變つ了いました」
「黒田君のは奈何したらう、お藤とか云つたね、あの女は」
「お藤さんはもう疾つくに彼處を止してときわの方へ行つ了いました。それに黒田さんも何處かのお嬢さんと御婚禮なさつたし、お藤さんは貴方長く病つてたんですよ」と氣の無い云ひ方をしてゐる。お藤のやつれた貌から、女中頭の慾一天張りな、ガミ〳〵云ふ淺間しい年老つた貌がお秋の目に消えたり浮んだりした。
　何日となしに濃かつた思が、段々と薄絹を一枚一枚とはがして行くやうに冷めて行つたとは云へ、それでもお秋の目には只一人の男の顏しかなかつた。其の間に男には別な女の貌が何人あつたらう。藝妓――お酌――妻――先刻の豆蝶だつて、と思つておれ〳〵した。云ひ度い事の百も、憎まれ口の千も叩いて、男の慍つた貌を、冷やかに笑つてやりたいやうな氣持もした。もう此樣處には一分も居たくない、何なら今から汽車にでも乘りたいと考へた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「私之て歸りますゝと永樂家の門の處で立止まつた。
「一寸上つてつたら奈何てす」と義理に云つて、又時計を出して、
「九時半、僅た一時間しか見てなかつた」
「一時間見てれば澤山だ」と小聲で云つて、
「でも御目に蒐れてようござんした、之てお暇致しませう」
「ぢやア車を呼ぶから」
「否ぇ澤山、一人だつて奈何にか行ます」
「笑談ぢやない」と男は仕方なしに笑つた。
車の來る間、男は妙にそは〳〵してゐた、お秋も俯向いてみたり、それは間が拔けて極の惡そうな、成可く男と貌を合さないやうにしてゐたが、歸らふと云ふ時、男は紙包を何とも云はずにお秋の手に渡した、餘程押返さうとしたが、男の貌を見て之も無言の儘輕く會釋したなりで受取つた。而してこんなものと云ふ風に、氣にも懸けずに帶の間に入れた。車に搖られてゐる内は何に疲れたともなしに夢心地でゐたが、宿に歸つて一人になると、明らさまに今日の自分の間が拔けた役を見出したやうで恥かしい、何故自分から進んで彼樣事をしたのだらう、男の心にはもう疾うの昔しに自分と云ふものは消え去つたのに、今更らそれを取り戻したいやうに、種々物を云つたりしたりした自分が淺間しい、お金を取

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

るまいとした時に不安な表情をした貌から、お金を受取つたらホッとしたやうな樣子迄見逃さなかつたお秋は、男がもう之て縁が切れたと悦こんでゐるのだらう、と憎らしい、斯うしてお金で縁を切つたり、繼いだりするやうに思はれるのが口惜しい、

此處迄辿りついた時に、もうその事は考へるのも厭になつた、何も昨夜の夢と忘れやう、早く東京へ歸りたい、久濶く三味線にも太鼓の音にも逢はないやうで淋しい、早く歸つてあの急がしい夕方から夜へかけて、藝妓にさへ羨まれる意氣な姿で如才なく客を取りなそう、大勢のお客でも歸つた後は、餘計寂然(ひつそり)して了つたやうな氣持になつて、二階の欄干に凭たれてゐると、よく柳のさはりなどを彈いて來るのが、遠から遠くへ迄殘つて、目の下の河水にもその響きが何日迄も〳〵殘つてゐるやうに、落ちかゝつた二十日位な月の樺色のやうに濃いのが、キラ〳〵と水に映るのを眺めては、今歸つて行つたお客の噂をよくしたものだと、もうやよひの事ばかりが胸にあつた。と、今迄開けても見なかつた紙包を開いて、お召が一重ね出來ると一寸胸算用をしてみた。今朝出る時は寢不足で貌が莫迦に蒼かつたがと、窓硝子に映る横貌をみた。何日か其の儘窓に凭れて、薄明い、尾の道を呼ぶ頃ろはまだ夢の中にゐた。

——完——

冬籠

白雨

座せば足袋脱がん癖あり冬籠る

冬を爐に籠れば疎き艶話など

國寒し腹中の計半ば就る

木枯の大野吹きぬくや戻り獵

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

雪に逢ふ笑話の餘暇を稿つゞる

物いみて早寢せし旅雪に來て

雪嶺に土踏まぬ雷鳥と我と太陽と

熊追ふて深く入る山雪女

吹雪野に上﨟一人遲歩の難

野戰幾日雪に烽火のこゝかしむ

瀧に來て雪踏むも奧や山は紅葉す

黒猫

ポオ

今、筆を執らうとしてゐるのは最も荒唐不稽な物語であつて人から信じられやうとも思つて居なければ、また信じられるとも思つてゐない。自分自身さへ信用の出來ないものを人に求めるのは狂氣の沙汰であらう。もとより自分は發狂してゐるのでもなければ、夢を見てゐるのでもない。たゞ私は明日死ぬにのぞんで、今日この精神上の重荷をおろしたいと思ふところから、事の成行を簡單、明瞭に修飾なく、單に家庭內の出來事として世間に發表しやうとするのである。この出來事は自分に非常な恐怖や苦痛を與へ、自分といふものは全々破壞された。しかも猶自分はこの事件の解決を試みやうとはしない。これは自分にとつては胴震ひする程のことであつたが、大方の人々には barugues よりか怖くない位なものであらう。恐らく今後見出される智力に依りて、この幻想と尋常茶飯事に引下げられるのであらう——もつと冷靜な、もつと論理的な智力に依つて、今自分が非常な恐怖の

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

念をもつて書くところもほんの有觸れた必然の原因結果に外ならないと認められることであらう。

私は幼少の時から順良で、慈悲深い性質であつた。心の優しさと云つたら仲間から揶揄れる程で、殊に動物が好きであつた。両親から貰つた種々の種類の家畜と一所に一日遊び暮して、食物をやつたり、世話をしたりする時程樂しい時はなかつた。この性癖は年と共に進んで、成長の後迄も重な快樂の源泉の一つとなつてゐた。曾て忠實な、怜悧な丈を可愛がつたほどの人には、かうして得た滿足のどんなものであるかは説明する必要がない。動物の無我な犧牲的の愛情は、只人間の浮薄な貞節、賤しい友情を何度か味はされた人の心には泌々と感じられるものである。私は若くして結婚したが、幸にも、妻は私と性質を同じうしてゐた。私の家畜を愛する性癖を知つて妻も又出來る丈の親切を盡した。ふたりは鳥や、金魚や、犬や、兎や、小猿や、猫を持つてゐた。特に猫は大きな純粹の黑色が美しい上に驚かれる程利巧であつた。其智惠に就て語る時、妻は御幣かつぎの氣は微塵もないのだが、あらゆる黑猫を巫女の化けたのだと見做した古代一般人の意見をよく喩へに引きくした。

私の愛物であり、遊仲間であるプルートー(猫の名だ)は私獨りで飼養つた。何處でも私の行く處には跟いて來るのだから、市街を一人で歩かうと思へば容易のことではなかつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

併しこんな風で我々の友情は終りを告げた。言ふも恥づかしい次第だが、自分は不節制な惡魔に誘はれたのか、平生の氣質、性格は一變して、日增しに我儘に怒り易くなり、人の感情などは少しも思はず、妻に對してさへ、放言し、終には暴力迄加へた。勿論寵愛してゐた動物は皆自分の性質の一變した事に氣附いたであらう　自分は其等を大事にしなかつた許りか、隨分虐待した。兎や猿はもとより犬でさへ私を慕つて、或は偶然に側に來ることがあると、何の用捨もなく虐待した。たゞプルートに對してばかりは十分愛情が殘つて居たところから、殘酷に取扱はないやうに注意してゐた。私の病は益々募つて終りにはプルートでさへも——尤もプルートも年とつて多少怒り易くはなつてゐたのだが——私の癇癪を經驗するやうになつた。

ある夜、町中を彷徨ひ、大醉して歸ると猫が自分の目前を避けたやうに思つたので直樣引捕へた。餘りに狂暴な擧動に驚いたのか、其時猫は私の手を齒んだ。傷は些少であつたが、忽ち烈火のやうに怒つた私は前後も覺えず、本來の精神は何處へ飛び去つたやら、惡魔より怖しい殘忍、惡虐の念は滿身の筋、悉くを震はした。私は胴着の隱しから小刀を取出し開くが早いか獸の咽喉笛を摑み、狙ひを定めて、眼球を一つぐいと刳り出した——あゝこの憎む可き殘忍の所業を筆にする時、私の身は慚愧に燒かれ、身内は戰慄する。

朝になつて本心に返つた時、夜の間の亂飲のほむらを眠り拂ふた時、自分は罪を犯したと

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

云ふ半ば恐れの、半は悔恨の情を覺えた。が、それもつまりは薄弱な朦昧な感じで自分の心には觸れてゐなかつた。私は再び放逸に流れ、仕事で儲けた金を直ぐ悉皆酒にして了つた。兎角する内に猫も漸々癒つて、失明した眼の窩みも出て來、外見は誠に恐ろしいやうであるけれども、彼自身に最早や左程の苦痛を感じないやうに見えた。通常の樣に家の廻りを歩いてゐたが、勿論私の近寄るのをひどく恐れて逃げてゐた。一度は非常に私を愛してゐた獸に斯んな忌しい事をして憂き目を見せたので私は今迄の心持を棄てた。而してこの感じは軈て激怒に代つて、丁度挽回する事の出來ない最終の滅亡に至るやうに邪惡の心が起つて來た。この心に就ては哲學も決して何等の說明もしない。しかも自分は邪惡が人間の心の原始的衝動の一つ、即ち人の性格を導く分解することも出來ない第一の能力、若くは情感の一つであると信ずるよりも、私の靈魂の生存の方がもつと疑はしい。

自分が惡い事をした覺えがないからと云ふそれだけの理由で幾度もかく厭はしい又愚かしい罪を犯して、誰も自ら氣が付かなかつたのであらうか。我々は單に斯うなるだらうといふ事が解るので自己の意見に逆ふても法律を犯すと云ふ傾向を常に有たないであらうか。此邪惡の心が遂に私を滅するやうになつた。――我が精神自らを困らせ、その性質を攻擊し、單に惡の爲めに惡を爲す事を限りなく熱望してゐた。その心は遂に罪もない畜生に引續き害を加へて其上句には殺して了ふやうにまで私をさせた。或る朝私は冷たい心で猫の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

頸の廻りに輪索を嵌めて木の枝に懸けた。私は雙眼から泪を流し、この上もない慘ましい、悔の心を感じながら懸けた。斯うすれば罪――若しそんな事が出來得べき事であるならば最も慈悲深く最も惟敬すべき神の限りなき恵みの至らない彼方へ、自分の不朽の靈魂を危害にさらすやうな許しがたき罪――を犯してゐるのだと云ふ事を知つたから懸けた。

　此の殘忍な所業をした夜、私は「火事だ!」と云ふ叫聲に驚いて眼醒めた。寢室の窓掛は燃えて家中が焰になつてゐた。私始め妻も女中も火の中から逃げ出るのは容易なことでなかつた。破滅と云はうか、此の世に於ける私の富は全部呑み盡されて了つた。私が絶望に陷つたのは其時からである。私はあの殘忍な所業とこの災難との間に存する原因結果の關係を確めやうとする氣もない位に弱つてはゐたが、事實を次から次へと詳細に說いて、あつた事ならたとひ些少な事でも宜い加減にして置く事は好まない。火事の翌日私は燒跡を見に行つた。壁は皆落ちて了つてゐたが。唯一つ丈殘つてゐた。それは家の殆んど眞中にある餘り厚くない隔ての壁で、今迄私が寢てゐた寢臺のまうえだ。塗壁は此處で極力火に抵抗したのである。そのぐるりに人だかりがして口々に、「不思議だ」「奇怪だ」と云ひながら壁の一部をとみかうみ熱心に見詰てゐるので、自分も好奇心に馳られて近よつて見ると何とした事か、白壁の只中に、丁度浮彫のやうにあの大猫の姿が歷々(はつきり)と倂も大きく現れて首の廻りには繩さへついた儘だ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

初て此の幻像を見た時は勿論これを些細な事とも思はれぬので、自分は一方ならず驚きもし、怖れもしたが、種々考へた末漸く心を落着けた。猫を掛けて置いたのは家の側の庭であつたから、火事の騒動に人が寄り集り、その内の誰かゞ寐てゐる自分を起さうと、木に掛けてあつた繩を切りはなし、開けはなつた窓から自分の室の中に投げ入れたのに相違ない。私の殘虐の生贄は、他の壁が燒け落た時、何かの拍子で新しく塗つた壁の中に這入り、熖々たる猛火と死骸から發するアンモニヤの爲に石炭質が今見たやうな怪しい像を造へ上げたのだ。と　斯う容易く理屈はつけたものゝ、心からさう思つたのでないから、此の驚く可き事實は自分の想像に深い印象を與へて、其後數ヶ月間と云ふものは絶えず猫の亡靈に惱された。その頃若干優しい心が自分に立ち歸つたやうな氣がしたが、と云つて後悔の念ではなかつた。私は猫の失はれたのを悲しみ、何處か似通つた顏のがあれば代りに欲しいと、其頃通ひ馴てゐた魔窟へ搜しに行つた。

一夜穢しい魔窟に半醉ひ心地に座つてゐると、ふとこの室の主用品となつてゐるジンやラムの大酒樽の上に何か黒いものゝあるのに氣づいた。暫く其所をじつと見詰て居ると、驚いたてはないか、早や其處に居ない。で私は側に行つて觸つてみる、と黒猫だつた――丁度プルート位な、全く大きな黒猫で、よく似て居たが、只一つ違ふのはプルートは白い斑と云つては少しも無かつたのに、これは形にこそまとまつて居ないが、殆ど腹部全體に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

白い斑點があつた。

撫てゝやると直ぐ立ち上つて高い聲でゴロ〳〵唸り乍ら私の手に身體を擦りつけて、氣嬖かれたのを喜ぶやうな樣子であつた。これこそ自分が尋ねて居たものだから直ぐ主人に賣つてくれと賴むだが、別に金を望むでもなく、こんなものは一向知らなかつた、以前見たこともないと云ふやうなことであつた。

て可愛がりながら、自分が歸へる仕度をしてゐると猫も一處に行きたいやうな樣子をするので、爲たい儘にさせておいた。歸へつてからも直ぐ家に馴れて、妻の大變な氣に入りとなつた。

が豫想に反して、私はすぐそれを嫌ふやうになつた。何うしてゞあるか、又何故さうであるか解らないが、自分に對する猫の愛情を寧ろ厭はしく、煩はしく思つた　この念は次第に長じ、はては苦々しい憎惡の情となつて、成可く逢ぬやうに努めてゐた。性多少自分の心に恥ぢる處から、又以前の殘忍な所業を悔ゆる處から、肉體的の迫害は加へなかつた。幾週間の間は暴力も加へず、烈しい虐待もせなかつたが、次第に——極めて次第に云ひやうもない程憎さが增し、丁度疫病の毒身に觸れるやうな氣がするので、强めてその煩はしい姿から避けてゐた。

この猫を一層憎むやうになつたのは家に連れて歸つた翌朝のこと、プルート同樣に一眼

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

が潰れてゐるのを見つけたからであつた。然し妻はこれが爲猶一層この猫を可愛がつた。妻は前にも言つた通り非常に情け深い性質であつたが、これは以前私の性質て、あらゆる單純な純潔な快樂の源泉であつたのだ。

かく猫を憎むにも拘ず、猫の自分に對する愛情は增して、諸君にも解させることが出來ない程うるさく附纏ひ、坐れば椅子の下に這込つたり、膝の上に飛び上つてうるさく甘へたり、立ち上つて步からとすれば、足に絡み附くので轉ばされさうになる。長い鋭い爪を着物に引かけて胸に迄かき上ることもある。こん此時には一と打ちに打殺したいと思ふけれど、以前の行爲を思ひ出すのと、全く白狀すればその猫が怖くて堪らないのが主な原因でさうも出來なかつた。

この恐怖は別に肉體的の罪惡から起る恐怖ではなかつた。と云つて說明することもないが私はかやうな大罪を犯しながらも言ふことを恥ぢるが、猫が私をか程に恐れさせまた私の心を動したのはたゞ一つの幻想に過ぎないことは明白である。妻は一度ならず、以前に私が言つた腹部の白毛に就いて注意を與へた。その白毛こそはこの怪獸と以前私が殺したものとのたゞ一つの相違點であつた。白毛は大きくはあつたが、其形は不定であつたことは讀者も記憶せらるゝことであらう。ところが次第に、殆ど解らぬ位の程度に何時とはなしに一種の形を現して來た。久しい間、私の理性はそれを妄想として氣にしまいと努めては

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

居たが——あゝ云ふだに私は戰慄する。この上の怕るべきこと、厭ふべきことがあらうか、あの忌はしい、物凄い絞架(クビリダイ)の形をしてゐるのだ——恐怖と罪惡と、苦痛と死の悲しい怖ろしい器械の形をしてゐるのだ。

て、私は殆ど人間の困苦を越えて苦悶した。あの殘忍な獸物——曾て私が其同類を殺したあの殘忍な獸物は尊き神の形に造られた人間のこの私に仇をするとは……何たる許し難い禍であらう。あゝ晝も夜も休まることのない私の心！　晝は絕間なく獸に纒ひ付かれ、夜は殆ど云ひやうもない惡夢に、何ものかあつて自分の顏に熱い怒氣を吹きかけ、胸は絕えず重いものに壓付けられ、振り落さうにも力が萎えて、幾度となく切ない寐覺めを味はふのであつた。

こんな苦痛のため心中僅かに殘つてゐた正義の念も萎縮し、暗黑殘忍な惡心ばかりが唯一つのものとなり、あらゆる事物、あらゆる人類に對する憎惡の念ばかりが烈しくなつた。私は全く制御の力を失ひ、忽ち幾度となく、思ふ存分恐り狂ふので、愚痴一つ言はぬ妻は絕えず苦しみながら忍耐してゐた。

或日、何か用があつて、當時貧乏のため除儀なく住んでゐた古い建物の地下室に妻と一所に行つた。猫も私に跟いて、梯子を下りて來た。其爲私は危く眞逆樣に轉び落ちやうとしたところから、狂氣のやうに腹が立つた。これ迄子供らしい恐怖から、手を下さなかつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たことも忘れ、斧を振上げ、只一と打ちに打ち殺さうと狙ひすました。ところが、妻に遮ぎられたので、悪魔のやうに怒り狂つた私は妻の手、振放すが早いか、微塵になれと彼女の腦頭目かけて打ちおろした。妻は聲も得立てず其處に倒れた。

此の怖ろしい虐殺を爲終へて、直ぐ私は種々考へた末死骸を隠すことに取かゝつた。晝にしろ夜中にしろ近所の者に見附けられないやうに、外に持ち出すことの出來ないのは解つてゐた。で、種々な事を計畫した。一度は死骸を細かに切り離して燒いて了はふかとも思つた。また地下室の床下に穴を堀つて埋めやうかとも思つた。或はまた庭の井戸の中に投げ込まうかとも、商品のやうに見せかけて、運び出さうかとも思つた、最後に中世紀の僧が彼等の生贄をしたと記されてあるやうに地下室の壁に塗り込まうと決心した。

斯う云ふ目的のために地下室は最も適當な場所であつた。と云ふのはその壁は無雑作の組立てゞあつて、近頃粗塗りしたばかり、大氣中に含む濕氣の爲にまだ乾かずにゐた。それに一方の壁に煙突まがいのものか、爐でゝもあるらしい、何か入つてゐる突き出た所があつて、丁度地下室の別室のやうになつてゐた。其處の煉瓦をとつて死骸を入れ、以前のやうに圍つておけば、誰の目にも不審を打たれることのないのは確かである。

この推量は間違つてゐなかつた。鐵挺の力でわけなく煉瓦を動かし、内側の壁に死骸を恐る〳〵立てかけ、位置を正すと、以前の通りに左程勞することもなく組み立てた。あり

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

とあらゆる用心を出來るだけしてモルタルと砂と毛を混ぜて、私はもとのと寸分も違はぬ漆喰を作り、さて注意して煉瓦仕事に着手したが、造へ終つた時は自分乍ら何處として點の打ち處のないのに滿足した。壁は少しも動いた形跡は見えなかつたのである。

床に落ちた塵を奇麗に取り去り、得意に邊りを見廻して、まア之でよかつたと獨語した。

次に私はこんな大不幸の原因である猫を殺さうと決心して探し廻つた、その時もし見付つたら屹度殺したに相違ないが、狡猾な獸は自分の劍幕に驚いて。逃げたのであつた。いつも胸に掻き上つて來たあの憎い獸が居なくなつたと云ふことは、筆にも想像も及ばぬ程の深い喜で救はれたやうな氣がした。夜中も姿を見せなかつたので、あの猫を此家に連れて來て以來初めて、心地易く熟睡した。心に殺人の重荷を負ひながらも熟眠した。

二三日經つても、猶私の苛責者は來なかつた。て、私は再び自由な人間らしく呼吸をしてゐた。怪物は恐れて永遠に屋内から逃げ去り、二度と再び見ることはないと思ふと私は此の上もない幸福を感じて、犯した大罪も左程自分の心を苦しめなかつた。四五の審問もあつたが雜なく云つてのけた。一度搜索もされたが、勿論何にも發見せられなかつたので、自分の生涯は幸福なものと思つてゐた。

四日目に計らずも警官の一隊がドヤ〳〵と這入つて來て、再び嚴重な家宅搜索をした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

とは云へ、隱した場處の思ひもよらないのに安心して私は少しも困らなかつた。警官は捜索するのに一處について來いと私に命じた。彼等は隅から隅まで殘りなく搜して、終に三四度目に地下室に下りて行つた。私は筋一つ動かさなかつた。心臓は無邪氣にまどろむ人のやうに靜かに、鼓動してゐた。地下室の中を彼方此方と腕組し乍ら靜かに歩き廻つた。て警官も全く滿足して歸らうとした。自分は心中の喜びを禁ずる事が出來ず、只一言意氣揚々と述べて自分の無罪についての彼等の確信を更にたしかにしやうとばかり夢中になつた。警官が梯子を下りやうとした時、到頭私は云つた。

「諸君、私は、私に對する諸君の嫌疑の解けた事を喜び、此處に謹んで諸君の健康を祝ひ、尊敬を表します。時に諸君これは――この家は實に好く造られてあります。（何か穩かに言いたいとの物狂ほしい欲求から、私は何を言つたのか分らなかつた）「この壁は丈夫につぎ合してあります。」と得意になつて、持ち合せた杖で、丁度煉瓦仕事をした上のところを烈しく拍つた。我が胸に秘めた妻の死骸は其眞後に立てかけてあるのだ。

神よ、惡魔の爪より我身を救ひ、守らせ給へ！　私の撃つた反響が消えるが早いか、墓の中から聲が應じた。その聲は初めは子供の啜泣のやうに低く、途絶れ〱に聞えたが、軈て長く、大きく連續する叫び聲に張り上げられて、全く異常な、殘忍な地獄の苛責に苦しむ亡者と、永刧の所罰に雀躍する惡魔の咽喉からもつれ乍らに、出て來たやうに、半は恐

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ろしいやうな、半は勝利を得たやうな怒號——慟哭であつた。

自分の恐怖は言語に絶えて氣絶せん許り、思はずたぢ〳〵と此方の壁迄よろめいた。梯子の上の警官等も暫時は恐ろしさの餘り、身動きもせず突立つてゐたが、軈て、幾人かの逞しい手は壁を剝しにかゝつた。壁は容易に落ちた。もう大方腐れて血糊の凝つた死骸は衆人の面前に正しく現はれた。その頭上に、自分に殺人の大罪を犯させ、併も聲を上げて絞首吏に自分を渡したあの忌はしき獸は眞赤な口を大きく開いて、一眼を火のやうに凄く輝からせ乍ら、うづくまつてゐた。私は墓の中に怪物を塗り込んでゐたのである。

——完——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

高窓の下

加藤みどり

お房は今迄井戸端で隣のお神さんを捕へて自分勝手な話ばかりして、相手が手桶を下げた儘去り兼ねて居るのにも氣付かず喋舌りちらして居たが、漸く話の切目を見つけて逃れるやうにして去つたお神さんの後姿を見送つて、殘り惜しさうにバケツを持つて歸つて來た。狹い露路を身體を斜にして這入つて勝手にバケツをドンと置くと水が汚れた縞の前掛にかゝる、それも構はず破れた障子を外から締めて、玄關の格子を力一杯に音させて這入つた。下駄を脱ぎ捨てに、人一倍も大きな兩足に力を入れてヨイトコサと上に上つて六疊の小暗い座敷に這入つた。次の座敷との間の襖は堅く締められてある。左の高窓からと、玄關からと流れ込む光線もおぼつかなく、半古の疊と、敷紙を張つたやうな押入の唐紙とは一層此の室を陰氣にさせた。

お房は押入から大きな風呂敷包を出して、高窓の方へ向つて投げるやうにそれて置くと

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

同時に、大きな身體を疲れたやうに壁に投げかけて坐つた。暫く茫然と何を思ふてもなく窓の方を見ながら見苦しい取りたての珠子の質の明いやうな前齒をつゝいて居たが、軈て痛み出したかして、眉皺をよせて漸く口から指をとつて、風呂敷包を引きよせた、がそれでも直ぐ仕事にかゝらうとはしない。此の時誰も居ないらしく見えた隣の座敷でかすかに本のページをくる音がして、着物の摺れおふ氣配がしたと思ふと、お房は我に返つたらしく漸く包を開いて縫ひかけの羽織を出した。派手な大島絣は廣い膝を崩して座つた上にパッと亂れる。手先だけは奇用らしく、長い指が銀のやうに光る針を巧に運ぶ、赤い裏が色艶の惡いお房の顏を氣味惡くポーと染める。

次の座敷は至つて靜かである。折柄前の家から六段の琴の音が急にして來た。お房は此の琴の主人の未だ十二歳ばかりの可愛らしい下町風の娘を思つて居た。家は極めて狹く、生活もそれほど豐のやうでもないのに、娘二人には遊藝を習はせ、一人息子は遊び人風で、常に軟い衣服を裾長に着て、白足袋に麻裏を引つかけて居ると云つた風の生活も父親が江戶子風の鳶の頭だからだとそんな事も思つて見た。自分も十歳頃から三絃を習つたが祖父母の許に引き取られるやうになつてからふつと止められて了つた事、今では既う撥とる術さへ幾變遷の身の不幸に忘れて了つたとお房の常として又しても過去の悲しい身の運命のみ偲はれた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

電車の音が遠くする。隣の子供も學校へ行つたのか極めて靜かである。お房は斯うした靜寂の裡に居ると引き入れられるやうに自分の身の果敢無さが思はれて來る。はては手の方が留守になつて茫然と空を見て居る。そのうちに悲しい思ひ出も、自分の事も忘れて了つて晝の料理の事や、晩の事を考へて來る。それも別に深く思ふでもなく、今度は仕事の工夫――羽織を着物に仕立直す事や着物を羽織に縫ひ代へる事や、大きい着物を小さく直す事、洗濯や、張物のたまつて居るやうな事が急に氣になり出した。さうして天氣を危ぶむやうに窓を見上げると、此の時日影は窓から去つて、秋の風が立てつけの悪い障子の間からスーと忍び込むで來ると、半ば白くなつた亂れ毛の襟もとにひいやりと觸つて行く。あ曇つて來たらしい、洗濯も張物も今日は出來まいと思ふと漸くに責任から逃れたやうにお房の心の中はスーとした。すると既う何にも考へる事が失なつて安心して死んで行く人のやうにいつの間にか瞼が合つて手が膝の上に落ちて、引きつめた束髪に結つた長い頭がガツリガクリとしだした。果ては大きな口の締が湲んで來る。無心となつて遂に縫ひかけた衣服の上にお房の身體はのめつて了つた。

物音のなかつた外に人の足音がして木戸がギーと開いた。小刻みの下駄の音が忙しく格子戸の外に止まる。

『義姉さん居るかい。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お房は既う微な息吹をかいて居る。

『義姉さんは居ませんか？』

二言目にお房は跳ねられたやうに飛び起きた。其の顔には尠からぬ狼狽の色が見えた。障子を立つた儘からりと開ける。同時に格子戸が強く開く、

『あんたか。』とお房は二言目に直ぐ其の聲が弟嫁だとは知つたが斯う云つて子供を肩負つて突つ立つた相手の顔を見た。

『義姉さん。直ぐいらつしやいつて。』

お房は弟嫁の小さい顔が引き締つて、さらでだに強い目が、一層つり上つて、口元が神經的に震へてゐるのを見て、又何事か起つた事を知つた。

『什うしたの？』と心もとなげに怖々と聞いて見る。

『何でもいゝから直ぐにいらつしやいつて、昨夜から良人が癇癪起こして居て困るよ。』

『でもこれから秀子さんが英語にいらつしやるんだもの。』

『そんな事云つて居るから良人が腹を立てるんだよ。』

此の時次の座敷から靜かに出て來たのは二十二三歳の色白の澄んだ水のやうな顔をした女、油氣のない髮を無雑作に束ねて、黑い後櫛だけをさして居る。今迄目をつかつて居たらしく疲れたやうに二重瞼の目を瞬いて、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『あら叔母さんですか、お寄りなさいな。』と玄關口に出て來た。頰杖の跡が左の方について居る。

『有難う。』

『秀子さん、貴女これからお出になるんでせう？』とお房は兩方に氣を兼ねるらしく斯う聞いた。

『エヽ、行くけれど、什うかしたの？』

秀子はお房の弟嫁の樣子を見て常も乍らの事とて、又何事が起つのだと直ぐ感じた。

『義姉さん。私は歸るからね。直ぐ來ないと又打たれるよ。』と旣う出やうとする。

『でもお夏さん！』と困つたらしくお房はあわてゝ呼び止めた。

『お夏さん、お房さんに用事が出來たんでせう。』

『さうです。』

『それならお房さん行つて來るといゝわ、私今日は英語の方を休むでもいゝから。若し歸れたら今日早く歸つて來て下いな。私買物に行つて來なければならないから。』

此の言葉で漸く安心したらしくお房は内に這入る、弟嫁のお夏はいつになくツンケンして歸つた。

秀子は再び机の前に坐つたが、本を見る氣になれなくなつた。又お房の事で一騷動起つ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たと思ふと其の解決に困じ果てた。それに二月前十圓と云ふ金子を父の貯金の中から出してお房の弟に一時貸してやつたのが今に返して呉れない。それが故郷の父にでも知れると又眞綿で首を締めるやうな叱り方をされなくてはならぬ。百圓父が置いて行つたそれも今月で使つて了ふし、さうすれば是非とも十圓の金子の理由を明かにしなければならぬ。幾度もお房を通じて催促もして見た。けれど二三日の中にとのみ云つて的に少しもならなかつた。行けば下にも置かないやうな待遇をして、近頃の企を一々悉しく話して、今にも幾萬圓と云ふ金子が轉りこむやうな事ばかり云ふ。それも主人の身になつては空言や申し譯のみでないらしい、的にしきつて居るやうなので、其の小心で神經的な女のやうな主人の心が何となく哀れにもなつて今迄正面から催促もし得なかつた。尙ほお房を無給金で使つて居ると云ふ事が常に秀子の心にあるから強いて無理な事も云はれなかつた。がもとより禮はするつもりなので、斯う折々事件が起つたりするやうなら何とか方法をつけなければならぬと、秀子は一杯開けた狹い庭の方を見て考へて居た。

お房は心がせくらしく、胸がもうせいせい云ふ位にはづむで來た。涙が矢鱈目に湛る。汚れた前掛だけしめ代へて髮も解き上げずに襖を開けて、

『急いで行つて來ますから。若しおそくなりましたらね』と夜の料理の事を話して急いで外に出た。

日があたつて何となく暑苦しいやうであつたから、引き蹴つして毛繻子の洋傘を持つて出た。

江戸川へ出て、石切橋を渡つて電車道をつッ切つて神樂坂へ向つた。心のみはやつて餘り自由でない足が尙ほの事進まない。十足ばかり馳けて見るが、息が續かず又そろ〳〵と行く。殊に登りなので、常も右左を見て通る癖なのが、何ぞ一大事が自分の方にふりかゝつて來て居るやうな不安を覺えてそれどころではない。大きな體と、足の大きなのさへ重さうで人の見る目も苦しさうな皺のよつた廣い額には直ぐ汗が流れ出した。勝手着の裾や居敷の穢れた着物の儘で何構はず賑かな神樂坂へ來て矢來の方へ向つた。いつも立ち止つて見送るやうな美しい服裝の女も今日のみは目に止ならなかつた。矢來の靜かな道へ下りると少しは心も落ちついた。秋海棠が家の蔭の方に咲いて居たり、木犀の黃な蕾が開きかゝつて居たり、紅の薔薇が垣に咲いて居たりする趣ある道をお房は急いだ。

お房の家の脇には大きな松の樹がある。それを目的にお房は一步一步家に近接くのを知つたが既う四五間で一寸曲れば自分の家であると思ふと急に足が進まなくなつた。

噫！嫌いな家！自分の家ではあるが什うも永久に親しい家として居る氣がない。弟の顏——とお夏の顏——それをお房は心に描くと何か目に見えぬ怪物にでも迫られて居るやうな心持がして、目を掩ひ、振り拂ひもして其の厭な影から逃れ度いやうな氣がする、斯う

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

した心地を忘れ度い爲めに人の家に行つて自ら好むで働いて居るお房は其の平常も疲れて居るやうて茫然して居る心に自分の家と他人の家との感じが明瞭とうつゝて居る。殊に今日は自分に又降りかゝつて居る、厭な事があるのだと思ふので一層足の歩みが緩い。

お房は斯う迄家を嫌つて居乍ら三日にあげず此の道を往復するのである。少しでも家を遠去かると直く弟に叱られるからなので云はば御氣嫌伺ひに出入して居るのである。

木戸をギーと開けて急いで濕つた段を四つ五つ下りると格子戸をからりと開けて、其の儘馳けこむやうにして障子を開けた、開けると目の先に三歳になる男の子を抱いて立つて居るお夏の蒼い顏が電光を眞面に受けたやうにお房の心を射た。

『義姉さん、何だい騷々しい。少し靜かにしたらいゝじやあないか、見つともない。』

『急いだものだて。』と碌に口も利けなくつてお房はお夏の前へ小供を抱くやうにしてペタリと坐つて了つた。

『相ひ變らず騷々しい奴だな。』と玄關脇の二疊から弟の聲がした。

『又木戸を開けて來たね義姉さんは。金坊が出て行くじやあないか。玄關も明けつ放してさ。』

お夏の眉には深い深い癇癪が現れる。

お房は又狼狽して尻から先へ立つて木戸を締め、格子を締めて來る、其の姿を屹と見て

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

居たお夏は、

『義姉さんの髮は何だい、そりやあ、白髮を亂したところは丁度鬼婆見たやうだ。』

嘲罵をあびせかけられるので、一層お房はまごまごして了つた。

『結ひに來たらいゝじやあないか、義姉さん。』

『まだ結構じやわ。』

『何が結構だらう。なあ衣服だつて……』

小言を一々口に出して云へぬ程焦々するらしくお夏は二疊の襖を開けた。

お房の弟源三は紋の大きな黑木綿の袷羽織を引きかけて背を圓くして障子に面した机に向つて何か書いて居た。傍には靑い美濃紙の罫紙に美しい字が幾枚も書いてあつた。

『貴郎!』とお夏は背後から良人に聲をかけた。

源三は筆を捨てゝ身體を向けた。而して机の脇にあつた敷島の二三本殘つたのを引きよせた。

『姉さん。何して居るんだい。』

お房は何時の間にか勝手へ行つてコトコトして居る。

『又義姉さんは……』とお夏の甲高い聲がする。

お房は口をモクモグさせ乍ら弟の座敷へ這入つて來た。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『眞當に義姉さんは變な人だね。家へ來ると勝手を探し廻るんだもの。何もあんたの留守に贅澤なんかしやあせんぜ。』

『何さ、今金坊が欲しいと云つたからさ。』

金坊と云ふ子供が手に薩摩芋の煮たのを持つて這入つて來た。

源三は煙を吹いて姉をヂロヂロ眼鏡越しに見て居た。

『姉さんは袷がないのか。』とお夏の方を見た。

『ありますよ。』

『でも未だ單衣物じやあないか。羽織はないのか。』

『ありますてせう。義姉さん何故其麼風して來るのさ。』

『働くにやあこれでいゝよ。』と座つて後に手をやつて紋繻子の狹い丸帶を小さく引き結んだ上を叩いて居る。

『羽織でも着てくれればいゝじやあないか。義姉さん。』

『面倒だからさ。』

『面倒だつて姉さん、少しは弟の身分も考へて見るがいゝ。實家の事も考へて見るがいゝ僕が姉を奉公に出して、之加も乞食のやうな風姿をさせて居るつて故郷に知れて見ろ、親賊へだつて顏向けも出來ないじやあないか。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お房は大きな飛び出た目を障子の方へやつて兩手を帶の結び目にのせた儘茫然した顏をして居る。

『二八も今度東京へ來るつて云ふじやあないか。僕とは同じ兄弟でありながら一番仲が惡いんだから、又什麽事を云はれるやら判つたものじやあない。少し姉さん、貴女のやうな馬鹿でも考へたらいゝ。』

『二八が來るつて？』

『來るさ。』

『さうか。』

『貴郎、あの事は―』とお夏が何か云はうとするのを、

『姉さん、貴女に少し云ふ事がある、姉さんは何のつもりで秀子さんの家へ行つてるんだ。』

『何の積りつて？ 秀子さんの家だつて私が居なけりやあ困るからさ。』

『家にだつて姉さんが居なければ困るじやあないか。子供はあるし、それにお夏だつて唯の身體じやあなし、それに姉さんは、僕が今度信州へ行つた留守だつて家に歸つて居なかつたつて云ふじやあないか？ エ姉さん。あれほど僕が賴んで行つたのに、それでも姉さんは家を嫌つて花田さんへばかり行くのかエ？ 姉さん。お夏もお夏だ、默つて姉さんを歸すと

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

云ふことがあるか』
源三の見苦い程低い鼻から煙が太息のやうに出る。
『だつて貴郎！姉さんがどうしても歸るつて云ふのですものねえ。義姉さん！私はあんたの爲めに良人から、とんでもない疑ひをうけてしまつた。』
三四ヶ月になる小供をお腹に持つたお夏は窪むだ目のはたが黒くなつて、若い昔小町と云はれた顔にはそばかすが高い鼻頭の邊に一杯出て色艶が悪く、神經的に口も目も震へて居る。
『姉さんは他人の事となると一心になつて、家の事となると少しも構はない。僕が立つ時に言を分けてあれほど頼むだのをそれさへ聽き入れないんだ。』
『そりやあ義姉さんは花田さんに居た方がいゝからですよ。』
『いゝからつて家て困るのにそれも構はず歸してやるつて法があるか。何人も何人も僕を馬鹿にして居るんだ。もう知らん。お夏には暇をやるから今から出て行け。姉さんは故郷へ歸してやる。僕は、僕は下宿て勉强する！』
源三は堪へかねたと云つた風に立つて障子を開けて椽に出た。
『エエ、私、出ろとなら出ても行きます。けれど、こんな事て出て行かれたものじやあない！義姉さん。私はあんたの爲めに出されるのだ。え、什うして呉れる？義姉さん。』

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

齒をキリキリと喰ひしめて、破れさうに引きつゝた目には涙が一杯たまつて居る。お房はお夏に斯う云はれて急にオロオロと泣き出した。

『義姉さんが良人の云ふ事をきかないものだから……私は義姉さんを虐めて家を出して了つて、而して、彼のお隣の小宮さんを引き入れて居るんだつて……そ、それを楯に良人は私を出すんだつて云ふのだよ。義姉さん！私は、私は此の樣な耻しい事を云はれて小供を連れておめおめと故鄕へ歸つて行かれると思ふかい。』

『今更何を云ふのだ。電報を打つてやる、電報を打つて親父を呼んで引き渡してやる！』

源三は椽に立つて叫ぶやうに斯う云つて。

『源三！そ、そりやあんまりだ。私だつて故鄕へ歸られた儀理じやあない。』と大聲をあげて泣く姿をお夏は淚の目でさも憎く憎くさうに見て

『貴女などいゝさ、私が出たあとじやあどうでもなるから。』

既に晝近くもなつたらしく、椽に日影が餘程さして、三人の顏もほてつて來た、豆腐屋の笛の音も遠くに近くに高く、低く聽こえる。

源三は卷煙草の吸ひ殼を濕つた庭に叩きつけて這入つた。默つて机の前に二人に背を向けて坐つた。

源三は今年二十九歲である。此の齡になるまで全く學生生活のやうに暮して來たので、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

三年前お夏と夫婦になつた頃は神田の私立大學に學んで居た。而して辯護士の試驗を受けるつもりで居たのが、其の頃華族に務めて居た姉が歸り、子供が生れなどして毎月國から送つて來る金子たけでは到底足りなくなつたので、學校を退いて家で勉强する事になつた。がそれから一層生活難に責められて、果ては喧嘩の仲裁に口を利いたり、物の賣買についで相談の相手になどなつて、少しばかりの禮金など貰つた。がそれ等は皆的にならぬ少額の金子の事とて少しも生活の安全を齎らさなかつた　仕方なく手當り仕第に職業にあたつて居ると、或人が今度湯屋の釜を販賣するについて、それを株式にしたいから、貴君は學問のある方故、一倂引き受けて運動して與れないか。若し成功したら二十株は御禮として進呈しますからとの話を持ちこまれた。源三は三度迄試驗に不成功であつて稍失望して途方にくれて居た折柄、此の話を聽いて天が漸く自分を救つて與れたのだと信じて一言にも及はずそれを引き受けた。生活に苦しめられて休まる暇のなかつた夫婦は唯々その成功をまつた。その爲めにお夏の衣類は悉く犧牲になり、使物とか、俥代とか、又源三の衣類などゝなつて了つた。その話の初つたのは二月頃であつたが未だ今に種々の障碍があつて思ふやうに運ばないので源三は毎日此の頃は心か焦々して居る。金子の爲めに信州へも行つて來る。又花田の方からも借金して居る。其の他米屋、炭屋、八百屋などには二月も三月もたまつて居ると云つた風であるが、成功さへしたなら御用俥で馳け廻れるやうな空想

をして借金など氣にもかけなかつた。而して辯護士などゝちらてもいゝと捨てゝ居たのであつた。然し今の樣子では稍目的がはづれたやうな氣持なので、同時に試驗の方が急に氣になり出した。來年になると外國語が這入るとの事なので、英語も碌に出來ない源三は此の十一月にはどうしても受けなければならないやうになつた。

それを思ふにつけても生活に責められて爲かけた事業を思ひ切つて捨てゝ、一心に勉强しやうとまでは思はれない。何やかや源三の心は亂れて居ると共に少し智慧の足らぬ姉と足手まとひの妻と子が急に憎くらしく自分を苦しめる者の樣に思はれて來た。いつそ花田の方へ姉をやりつきりにしやうかとも思つても見るが、親戚や何やかやの手前、奉公にさへ出して居ると知られるのも厭に思ふので、思ひ切つた所置も出來ずに居る、何か口實を設けて姉を國に歸し、妻子を捨てゝ一人きりになりさへしたら……と云ふやうな氣にもなつた。

若い血汐に燃えた戀の姿は、女の色香と共に消えて、源三の心は貧に瘦せ、思ひに疲れて行く。妻からは遠く去つて、他の女の美しさのみが目に付くやうになつた。歸つては妻に向つて美人の噂をし、立居振舞、何事につけても叱り飛ばして暖い愛情を加へるやうな事は少しもなくなつた。

お夏は良人に斯うした情無い仕打を受けて口惜しいとは思ひながら既う最後まで自分の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

身を投げ出して置くやうな心持になつて明日の我身の程も強いて考へずに居る。

今更何と思つても仕方がない。良人の性質を知るお夏は既う此の頃は何かにつけて出て行けがしにする其の心もよく解して居る。お夏は出て行けとなら何時でも出て行く心持はあるが、其の度に良人の心が何となく疑はれて此の儘出て行くのも口惜しいやうな氣がする。それに兄の世になつた故鄉の家に歸る事も出來ないので、出るには相當の事をして貰はねばならぬとも思つて居る。唯々口惜しく、腹立たしいは義姉なので、馬鹿は馬鹿相當に人の同情をひいて、何でも人は自分が虐待するやうに思つて居るのが何より癪に觸つて居る。良人が何かにつけて姉を叱りながら又自分にも辛く當るのも、心から姉を嫌つて居るのでない事も知つて居る。

晝飯の膳に三人は默つて座つた。別々の考が皆の頭に渦を卷いて居る。

お房は別に深く弟の心も分らなければ又弟嫁の云つた毒々しい言葉なども何日もの事のやうなつもりで聽いて居た。唯自分が故鄉へ歸される――と云ふやうな事を考へるとたまらず悲しくなつた。二十年の昔の若々しい時に自分の一生の幸福を殺し、今のやうな情ない身になり果てた思ひ出の故鄉へはどうしても歸る氣はなかつた。母は三年前に死んだが父は未だ生きて居る。此の樣な自分の姿を見たらどんなに驚くかと思ふと其の泣き悲しむ老の姿を考へるのも辛い氣がする。それに昔の良人の噂――今は入牢して居ると云ふやうな

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

――其麼事を聞くのは何より辛く思ふので今花田へ行つてさへ居れば若い人達の中で氣も晴々して面白く自分の身の現在も忘れて了ふ位なので、お房は花田の家を去り度くはないのである。

お房は湯を飲みかけて不圖思ひ出したかのやうに、

『あゝ彼の秀子さんがなあ拾圓都合が出來たら返して呉れつて。』

他人に云ふやうにお房は斯う云つた。

源三はヂロリと姉を睨めた。お夏は良人の顏色を讀んで居る。

『フン拾圓？虫のいゝ事を云つて居らあ。』と源三は卓を隔れて、

『姉さんはお雪さんや、美代さん達に婆や扱ひにされてそれで良い氣になつて居るのかい。お前さんは花田さんへ行つて下女よりひどく使はれて居てそれで一文だつて貰つて居ないんじやあないか。一體姉さんは四月も九月も働いて居て前掛一枚貰いもせずそれで何とも思はないのかい。此の世の中で姉さんのやうな馬鹿はないぜ、婆やだの、女中だのと云はれてまで喜んで働いて居る姉さんは誰が見ても拔けて居る。』

『だつて秀子さんは何れ御禮をするからつて云つて居るわ。』

『其の「何れ」が分らないのさ。』

『でも借りたものは借りたものじやわ。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『馬鹿！未だ云ひくさるか。』

源三は拾圓の時借りを心にかけて居るだけに斯う云はれると息のつまるほど腹が立つて來た。姉があまりに心無いのがいかにも情ない、馬鹿と云はれやうが、お人好しだとおだてられやうが唯嬉んで働いて居る。と源三は見る影もない姉の有樣をつく〴〵見るにつけて急に花田の事が氣になつて來た。今迄姉が花田からどんな待遇を受けて來たか、其の報酬も一文たりとも貰はない事などが源三の心に浮むで來ると、秀子の常も愛嬌のある顏の何處かに人を冷笑するやうな所のある面影や、近づくべからざる強い所のあるのが女として憎くらしいやうな氣もした。

『既う拾圓などの事云はいでもいゝ。花田へなど行くな。行くな。花田の爲打は實に失敬じや。』

お夏は二人の樣子を見ながら、子供をだましたりして居たが、

『姉さんの羽織だつて彼のまゝですよ。』と口を入れた。

『髮も結ふ暇もなく、着物も其の態だ。羽織を穢されてそれも默つて居るなんて……』

源三は總ての事が解決出來ないので、手の出しやうも、身の動かしやうもないやうな焦々しさを感じてつと立つた。

机の上まで日がさして來て居る。開けた狹い庭には唯一本古い梅の樹が半ば枝を拂はれ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て木の葉も大方散つて淋しさうにして立つて居る。家より高い所にある竹垣の外を人の通る影が見える。土地の低い家は日あたりも惡く午後少しの間二疊の方が暖い位なので、濕りがちな家は殆ど一日中小暗く、陰氣なのである。

源三は筆をとつて乾いて居る穗を煙草で黑くなつた前齒で矢鱈にかみながら墨をすつた。其の心は未だ焦々して何かに當り散らして奴鳴つてやりたいやうな氣がする。

左の手文庫から卷紙を出して直ぐ筆を走らした。

薄色の洋傘と美しい帶と、白い足袋とが竹垣の間に見えて、輕い下駄の音が過ぎて行く。源三は額に垂れて來る分けた黑いチックの香のする髮を筆を持つ手で拂つて一寸女の氣配に氣をとられた。

お房は其の日は子供の小守などして過ごした。何かにつけてお夏の小言をきゝ、弟の癇癪聲をきいても餘り氣にならずさんざん泣いた後のやうに心の中が空虚(うつろ)になつて茫然して了つた。が折々思ひ出すは花田の事であつた。

姉妹が面白さうに勝手で働いて居る樣子も偲ばれた。此の陰氣な濕ぽい家に引き代へて愉快な花田の家を懷しくも思はれた。

お房は夜床の中に這入ると常もの癖で中々寢つかれない。務めをして居た頃から寢るのに中狹の帶をキチンと結ぶ習慣だつたので今でもそうして床に入る。とかく健康のすぐれ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ない身體の足は夏でも冷えるので、蒲團の中に小さく曲げて寢間着で包むで了ふ、それでも此の頃のやうに夜冷えのする時はぞくぞく寒くて眠られない。花田に居ると一番下の妹娘を抱いて寢る、その爲め寒さなど知らなかつたが時折自分の家で一人寢ると一層眠れない。とつい種々の事を考へてくる。忘れて居た過去の事、未來の心細さ。現在の境遇――お房は泣いたり悲しんだりして夜の更けて行くのが寂しがつた。

蟲の啼く音が身に染みる。幾秋を種々な悲しい思ひをして夜更けて此の蟲の音を聽いた事が朦朧と浮んで來る。十七の齡從兄の所へ嫁して十九の齡良夫の不身持の爲め強いて出されてから尼のやうな生活を祖父母の許でして居た事、それも矢張袷を着る今頃であつた。二十歲の時、家を飛び出して名古屋に逃げて、彼の天主閣の御濠に身を投げやうとした事、それも月の冷い蟲の音がお濠の堤の草の中からして居る頃であつた。而して心配苦勞の結果病氣になつて腦病院に這入つた事、彼の病院の看護婦も自分と同じやうな境遇だつた事、名古屋の妹は其の頃姑に虐められて泣いて居たが今では姑が死んで樂であらうと云ふやうな事、それから身體が全快して出京して××伯爵家の奧女中をして居た永い永い十二年間、弟が病氣の爲め暇をとつて下宿屋の二階で看病して居た事、お夏が來て家を持ち子供が出來ての此の三四年間。既に自分は四十である。腦を病むでから氣が變になる、頭の髮は眞白になつて染めなければ居られなくなつた事などをずうと想ふと全く自分一人

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

世にも不幸の者のやうな氣になつて果ては泣かずには居られなくなつた。弟夫婦と子供は六疊に眠つて居る。狹い二疊にお房は目を閉じて泣いて居た。思ふ樣泣いた結果旣に涙も出なくなつて今度は目を開いて茫然他人の事を思ひまはして居た。お房は常も自分の事を思ふかと思ふと直ぐ他人の事を考へて來る。「姉さんは他人の事となると自分を忘れる」と弟や弟嫁に云はれるほどに全くお房は人に馬鹿と云はれても他人に賴まれた事はどんな恥しい目、苦しい目をしても盡す、それを又お房は唯一の働きのやうに思つて居るのである。花田の家では自分が居なければ困るのだ、何と云つても自分は花田の家の監督者でもあり、世話人でもある、若し彼の若い娘さん達ばかりの家に自分が居なかつたら、世の中の批難もあらう。又秀子さんにしても什麼過失でもし出かさないとも云へない。今迄に何一つ世間の口の端にかゝらず立派にして來たのも自分が居るからである。とお房は時折人からも云はれ、自分でも自慢して居る事を又思ひ出した。それにつけても花田へ行かれないとしたら……お房はそれが何より悲しく思つた。

翌朝になつて源三は朝飯を濟ますと洋服を着て出て行つた。お夏は例のやうに金坊を抱いて門まで送り出した。旣う昨日の事は忘れて居るやうであつた。

源三が出るとお夏とお房は何となく親しい言葉をかけあつた。お夏も昨日のやうに腹も立てず今度の事について委しく說くやうに義姉に話した。

第一に良人は自分がお隣の小宮さんと親しいやうに疑つて居る。今度信州へ行つた留守義姉さんを花田へやつたのも何か理由のあつたやうに思つて居る、それが何より口惜しいとお夏は目に涙を湛めて云つた。

『義姉さん、全く私の心になつて見て下さい。今のやうに良人からは出て行けがしにされてそれでも斯うして働いて居るんだもの。私だつて女の意地として何でハイ出て行きますつて此の儘出られるかい。ねえ義姉さん。』

『さうとも、さうとも』とお房は何となくお夏を憐れに思つた。

『源三はああした性分な人だから、全く困るわ。』

二人は太息を合はした。

お房は晝飯を濟まして花田へ歸つた。今迄歸らなかつたのが何となくすまない氣がして急いて歸つたやうに飛び込むだ。

家では晝を濟まして後片付を姉妹してして居た。

『晩くなつて濟みません。さあさあ私がしますから。』と勝手へ出る。

『あら歸つたの。』と秀子が意外と云つたような顏をすると次の妹が、

『歸らないと思つたわ。』と姉と顏見合せた。

『今日は日曜ですか。』と家の中が賑かなのにお房は氣づいた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『今日は旗日よ。』

云はれて途々國旗の立つてあつた事に氣づいた。九月二十五日の秋季皇靈祭であつた。

お房は勝手元を片つけて洗物もし、水瓶に水を一杯充たして漸く安心したやうに常に自分の坐る高窓の下に來た。

座敷では姉妹四人と弟一人で何か小聲で話て居る。と下の二人の妹が風呂敷を持つてお金子の音をさせて勢よく戯れ乍ら出て行つた。間もなく、

『お房さん！』と秀子に呼はれてお房は急いで次の座敷に行つた。

秀子は自分の一貫張の机に向つて居た。弟の春雄は障子を開けて庭の方を見て居た。

秀子は常もの優しい顏も見せず、此の女の取りすました時の水のやうな顏をしてお房を見た。お房は直ぐ弟の昨日云つた詞をいろいろ思ひ浮べた。

『お房さん、昨夜ね、貴女の所の叔父さんから手紙が來たのよ。隨分慘い手紙！』

秀子は机の上にあつた半ば破れた手紙をお房の前へ突き出した。

『昨夜私が出た留守、春雄が見て半分破いてしまつたんだけれど…………何だつてあんな事云ふの。學問のある人らしくもない。』

お房は昨日弟が手紙を書いた事は知つて居たが別に氣にもかけて居なかつた。

『お房さんは既う來て下さらないと思つて居たわ。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『いいえね、弟がつまらない事ばつかり云ふので………』と狼狽て云ひ解かうとした。

『何も私、お金子の事でお房さんを虐めやあしないわ。叔父さんは全く惨い事を云つて居るんですもの。』

『拾圓のお金子も何れお返ししますつて………』

『そりやあね、お房さんの羽織にインキがかゝつてそれを腹を立てゝいらつしやるのももとより私の方が悪いんですから。』

『何構はないんですよ。』

『然し何も血染だの何だのつて仰しやらなくつともいいと思ふわ。』

『いゝえ彼麼羽織を着れないんですから。』

『お金子だつて私の方でも御禮は御禮としてしやうと思つて居るんですから、叔父さんに仰しやられるまでもなく私はお房さんに御禮もしないのを濟まないと思つて居るんですからね。』

『そ、そんな御禮なんて………』

『いゝえ、それは私の方が悪るかつたんですわ。羽織を血染にしたのも悪るかつたの。でも何も秀子先生だの、秀子女史だのなんて云はなくつたつて、お房さん叔父さんはそりやあ随分な事を云つてよこしたのよ。』

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

秀子には今更口惜しげに手紙の字を見た。

『私の方だつて叔父さんがお房さんを貸して下さらないと仰しやるなら仕方がないけれど……それも私の方でお房さんを下女扱ひにしたの、婆や扱ひにしたの、買物のお供をさせるのと……そりやあね、貴女の御故郷は何萬圓と云ふ財産家だつて叔父さんが仰しやるまでもなく知つて居るわ、ですけれどそれを今更何と云つたつて仕方がないもの。お房さんだつて私御氣の毒と思へばこそ何かと氣をつけて居るつもりだわ』

『そりやあもう分つて居ますわ。』

『で叔父さんは既う姉さんなど貴女のお宅へなどやらないつて明瞭とおつしやつておよこしなすつたんですからね、さうまで誤解やら何やらで今迄のやうに絶えず面白くない事を云はれてはね、私の方でも迷惑なのよ。私にだつて魂はあるもの。なんぼ女だつて昨夜のやうな手紙を受取つては默つて居られないのよ。』

『そ、そりやあもう弟が悪るいんですから、何卒ね、秀子さん……』

お房は秀子に斯うした種々の事を聽くのが辛いので、秀子の口を掩ふやうにして口を入れるのであつたが、秀子は常の秀子ではなかつた。

『でわ、お房さん。貴女も故郷に歸らせられるつて云ふのだからまあいいわ、何ぞ御禮をしたいけれど、御存じの通りお金子は一々父の方へ云つてやらねばならないんですからね

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

彼の十圓を御禮として差し上げますわ、三月半ばかりお賴みしたわけなんですけれど、」

お房は急に悲しくなつた。

『いゝえね、弟が馬鹿なんですから、そ、其麽事は……』

旣うお房は泣いて居る。常も云はうと思ふ事が口に出ない。

『私も氣持が悪いわ。私だつて何も……』

秀子はお房の境遇を十分同情よせて居るものゝ、彼の弟のする事が皆腹が立つ事ばかりなので、自然とお房にも小言も云ひたくなるのである。

お房は何を手紙に弟が書いてよこしたか知らぬが、秀子がこれほど腹を立てるのを餘程の事であらうと思ふと、日頃の秀子の情を知つて居る心に急に濟まない氣がして來た。

『どうぞ家へ一所に行つて下さい。而して弟の前で私云ひときますから。ね秀子さん。而して弟に謝らせますから。』

『でも叔父さんはあゝした方なんだから……』

秀子は旣う何も云はなかつた。

お房は泣きながら昨日の事を話し、而して秀子の同情を求めた。

妹達も歸つて來た。がお房を皆相手にしなかつた。何となく家內の一人のやうに取り扱はなかつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お房は今迄弟の家に居るよりも此の家の方が居よく思つて居た。それと云ふのも、皆お房を家内の一人として、若々しい樂しげな欒の中に入れて居るからなので、或時はお房は下の妹達と同じやうにはしやぎ切つて騷いて遊ぶ事もあつた。人も云ひ自分も此の頃顏色もよく肥えて來たと思ふやうになつた。

日曜の日は午前と午後に一度づつ茶菓子を買つて來て家内集つてお茶を飲んで語りあふのが常であつた。お房はそうした欒の中に入つて同じやうに若々しい話をして娘達を笑はして居たが、今日は其のお茶の時も皆の者から相手にされぬやうな氣がして非常に淋しく思つた、わざと暗い顏をして直ぐ高窓の下に來て仕事をし初めた。

夕餉の仕度をする頃になると、今迄あつた事も忘れたやうにお房は他意なく働き出した。夜は姉妹の復習の聲を聞きながら針を持つたが直ぐ無心らしく居眠りをし出して果ては打ち倒れてしまつた。

翌日もお房は朝早くから起きて姉妹や春雄を學校へ出して了ふと一人殘つて居る秀子と暫く高窓の下で話をした。而して幾度もくり返す今迄の自分の不幸を訴へるやうにして語つた。

秀子は默つてそれを聽いて居た。

お房はそれからも相ひ變らず弟の家へ出入して、花田の家の爲めに身をおしまず働いて居た。

――完――

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

自由劇場の二夜

しぐれ

十月二十七日は宮根にゐる私の妹が婚禮する夜であつた。私は其準備をすつかりしまつて、東京の家の留守番に殘されてゐた。この不忠實な留守番は、年に二度しかない、そして日に數へたら四日間しかない自由劇場を見落す事が出來なかつた。自由劇場の初演の時に感じた、俳優と觀客との引締めた、氣分の一致したこころよさを、いつても自由劇場で味はへるといふ欲ばかりでなく、私をどうしても留守番でじつとさせておかないのは、この二夜さの短い時間を應用して、横濱あたりから、日頃行違つて逢ひ兼てゐる、おまけに病のある友達が態々出てきてくれることにもなつてゐる。其外にも大概の知人には逢ふことが出來る樂しみがある。それゆへ自由劇場の二夜は、幕の明いてゐるまも嬉しく、幕の下りてゐる間も樂しく愉快である。二十七日の夜には、妹夫婦の行末に幸あれと祈りながら劇場へ車を急がせた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

前の夜は、私の手許へかなり長くあづかつてゐた、或る家の娘を送つて、上野のステーションから劇場へ廻つた。そして劇場の扉へ手をかけるまで、更にまた他人の許へ見習ひ奉公に、それも遠く奥州の山里へ行くのに、十一の時からひとつ所に起伏した人に見送られ別れるのに、涙もこぼさない若い娘の前途について考へて居た。ステーションの燈火は明るいようで暗く、黒いようで赤かつた。劇場近くの外濠のふちを來たときに、きらきら耀いてゐた燈火は、みんな青く紫ばんでゐた。月も出てゐなかつた、星の影も見かけなかつた。けれど曇つた空ではなかつた。

自由劇場は、場内の美て日本第一の劇場となつた、帝國劇場で催されたのである。それでもどこまでも自由劇場は、まだ試演のつもりであるとのことであつた。ことに今度演じた「寂しき人々」は、ヨハンネス、ヲッケラアトにはまる俳優がないので、此春も一回後へ殘された脚本である。これは新派の井上にさせたらといふはなしが、進んでゐたらしかつたが、井上の都合で自由劇場へ加入することが出來なくなつたらしかつた。左團次が自分の立場として、體にない役を引受けたのは氣の毒に思はれる。然乍ら俳優は、はまり役ばかり引受けてゐたのでは仕方がない。好くはゆくまいと思はれたのを、案外にこなしてこそ、其俳優の伎倆を示すことが出來るのであらう。左團次のヨハンネスは調子が強すぎて、惜いことに役によせる同情が半分以上減つた。お坊ちやん上りの自家の强い、我儘息子

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

く丈、淺ましさが氣づかはれます、萬一やうつろな魂ひを盛つた肉體であつたなら一年立つても二年たつても、其は徒勞と申すのみで御座いませう。

もう愈々今年もお名殘となりました。一夜明けてお目にかゝる次號はどんな體裁と内容とを備へて諸孃の前に現はれるて御座いませうか。此少さき女王の母となつてこの子の爲に御盡し下さる點に於て等しき責任と愛情とを自覺して居らつしやる大方の諸孃、如何に少さくとも私共丈の力で築き上げつゝある王國と其少さき女王との爲に御心をお傾け下さい。

木枯の風漸寒く、振ひ盡した淋しい木立に夕日の影の薄れて行く頃、

——十一月二十日——

いさゝか感じました事を。折角皆樣幸福な新年をお迎へ下さいまし、

本年の終刊に際し

（K）

社員諸姉へ

御報告迄

◎前號に豫告致しました通り、本號には、青鞜社一同の「人形の家合評」を掲載致す筈になつて居りましたが、發表後如何にも時日が短かいので、とても完全に纏め上る事が出來ませず、去りとて、だらしのない生半可な滅茶々々なものを載せますも徒らに體裁をそぐ計りで御座いますから此處一回丈け延しまして、來春の誌上に於て華々しく皆樣に御目に懸ること致しました、劇の主人公、解放せられたるノラが皆樣のお眼に如何に影じ、如何に反射して誌上に現はれるで御座いませうか、千姿萬態、折角御骨折り下さいまし、尚まだお出しにならない方は早速振つて御投稿を願ひます。參考書、紙數の事、評論の爲便宜上設けられた部類問題等は前號に委細掲載致して御座いますからそれに就て御一讀を願ひます。

◎尚、岡本かの子、永安初子、岡清子、小磯とし子、多賀巳都子、原田琴子の諸氏は今回新たに御入社下さいました、こゝに御紹介して、今後の御親しみを願ひます。

◎それから前號の誌上で一寸申上ました研究會の方も大分交渉は進みましたものゝまだ明らかに發表致すことが出來ませんので之又、來春のことゝ致します、それに本年も今月限りのせわしない折柄故、きまりよくお正月から開くと致した方か宜しからうと存じます。皆樣、何卒、此新らたに開かうとする研究會に就てな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

此度は背景の方は、一場へ力を集めたので大層な出來てあつた。演じる人達の方が敗けたやうてある。小道具の中て嫌てあつたのは、書棚にかけた幕の赤と黒とのきれてあつた。

初日には眞中の卓の小さい花瓶に、薔薇の花のさしたのが、ずつと其儘てあつたが、二日目には、幕ごとに異つた花が飾つてあつた。ちよいとした事ても、行屆いた注意が嬉しく思はれた。

初日には三田文學會の連中があつて、お揃ひの手拭が出來たとかて、學生の人達の中には頭にまいてゐた人があつた。二日目には美術學校の連中が、赤い帽子のお揃ひてあつたとかて、畫家のブラウン（猿之助）が其帽子を舞臺へかぶつて出た。樂屋かんざしをよろこんて揃ひにさす、娘達とちつとも違い はない。學生さん達も可愛らしいものだと思つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

編輯室より

本年の九月初めて此世の中の空氣に觸れて孤々の聲を擧げた青鞜も愈々此處に、九、十、十一、十二、と四ヶ月を經て來ました。其發育振は如何で御座いましたらうか？　大方の諸嬢が魂を含められた小供、眞實女の母達に依つて愛育せられ、其母達のみの手に依つて敎育せられ、開發せられて行かうと云ふ靈魂の上の小供はまだ中々笑ふどころでは御座いません、恐らく齒も生へますまい、生れて來る迄はあゝも斯うも、美しかれ、幸あれ、才あれと願はるゝ世のなべての母心に等しく樣々な望みを嘱した子供も、生れて見れば中々宙に畫いた空想の樣に美しくは行かぬと同樣、此小供も矢張世間一般の御多分に洩れず、飴をしやぶらせられると泣やみ、風車を見せられると笑つたりする平凡一樣のものとなつてたゞ肉體のみスク〳〵と延び立つて行くので御座いませうか。何にも特色のない――私は何より之を恐れます。萬一も生れて來なかつたと同樣であるならば、何の甲斐をもなすのでなければ――母達は何を物數奇に苦しんで之を生む苦痛を忍んだでありませうか？

唯女のみの知る天地、唯女のみの築き得らるゝ獨創の王國、無王國の女王たらんとする此小供に充分の誇りと充實せる力が漲つて居りませうか？　兎に角生れる迄は人並々以上の意氣をもつて望みを嘱した子供が漸々此世の中の浮薄な空氣にしみて行つて、はては魂迄他と何の撰ぶ處なき平凡化したものとなつてしまふのではないらしいと思ふと、生れねば兎も角、肉體がまづ〳〵安心に發育して行

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

く丈、淺ましさが氣づかはれます、萬一やうつろな魂ひを盛つた肉體であつたなら一年立つても二年たつても、其は徒勞と申すのみで御座いませう。

もう愈々今年もお名殘となりました。一夜明けてお目にかゝる次號はどんな體裁と內容とを備へて諸孃の前に現はれるて御座いませうか。此少さき女王の母となつてこの子の爲に御盡し下さる點に於て等しき責任と愛情とを自覺して居らつしやる大方の諸孃、如何に少さくとも私共丈の力で築き上げつゝある王國と其少さき女王との爲に御心をお傾け下さい。

木枯の風漸寒く、振ひ盡した淋しい木立に夕日の影の薄れて行く頃、

――十一月二十日――

いさゝか感じました事を。折角皆樣幸福な新年をお迎へ下さいまし、

本年の終刊に際し

（K）

社員諸姉へ

御報告迄

◎前號に豫告致しました通り、本號には、靑鞜社一同の「人形の家合評」を掲載致す筈になつて居りましたが、發表後如何にも時日が短かいので、とても完全に纏め上ろ事が出來ませず、去りとて、だらしのない生半可な滅茶々々なものを載せますも徒らに體裁をそぐ計りて御座いますから此處一回丈け延しまして、來春の誌上に於て華々しく皆樣に御目に懸ろことと致しました、劇の主人公、解放せられたろノラが皆樣のお眼に如何に影じ、如何に反射して誌上に現はれろで御座いませうか、千姿萬態、折角御骨折り下さいまし、尙まだお出しにならない方は早速振つて御投稿を願ひます。參考書、紙數の事、評論の爲便宜上設けられた部類問題等は前號に委細掲載致して御座いますからそれに就て御一讀を願ひます。

◎尙、岡本かの子、永安初子、岡淸子、小磯とし子、多賀巳都子、原田琴子の諸氏は今回新たに御入社下さいました、こゝに御紹介して、今後の御親しみを願ひます。

◎それから前號の誌上て一寸申上ました研究會の方も大分交涉は進みましたものゝまだ明らかに發表致すことが出來ませんので之又、來春のことゝ致します、それに本年も今月限りのせわしない折柄故、きまりよくお正月から開くと致した方か宜しからうと存じます。皆樣、何卒、此新らたに開かうとする研究會に就てな

り、又雜誌の上なり、御氣付きになつた點及御希望等は御遠慮なく本社宛に御申込を願ひます、決して之が誰彼の雜誌でなく、又誰彼の開く研究會で御座いませんんは!!!

◎面會日は從前の通り毎土曜日の午後よりと致して置きますから、社員の方々は本社へちとお話に御出かけ下さいまし。

◎社員の方々は毎月社費三十錢を其の月の十五日迄に御忘れなく本社に御納め下さいますやうに。

◎又皆樣方の玉稿は何にまれ、隨時本社宛に御送り下されば結構で御座います。

◎本社の爲特に御盡力頂いて居ります國木田治子氏は赤坂區田町七丁目一番地なる御私宅にて毎月一六の夜に松月古流生花、投入花、及千家表流茶道を松月古流家元藤城歷打瀨翁補助の下に指南せられて居ります、な ほ莪の中は三越吳服店の方に御出勤との事です、

◎加藤籌子氏の御作 又々御多忙の爲編輯〆切に間に逐はず、豫告にそむいて本號にも掲載致されないのは甚だ御殘り多いことゝ存じますが然し面目を改めたる新年の誌上には之また一しほの輝きを添えることゝ存じます。右樣故あしからず。

◎大分御號續けて戴せましたから青鞜社概則及名簿は今回は省きます、幾らか改めねばならぬ個所も御座いませうしつけたす處も御座いませうし致しますから、かたく新年の誌上に更めてかゝげます。何卒之迄の處は前號、前々號に就て御承知下さいまし。

◎本社の事業を永續し、其發展を計るには經濟上の基礎を鞏固にする必要が御座いますから、多少に拘らず基本金の中に有志諸姉の御寄附をお願ひしたいと存じます。

(11. 20)

本號編輯責任　物集和
木內錠

寄贈書目

三田文學(十一月號)	三田文學會
心の花(十一月號)	竹柏會
婦人の鏡(十一月號)	東京社
春夏秋冬(十一月號)	籾山書店
女子文壇(十一月號)	女子文壇社
朱欒(第一號)	東雲堂
スバル(十一月號)	スバル發行所
層雲(一ノ七)	層雲社
紅塔(十一月號)	紅塔社
新江戸(九篇)	新江戸會
月光と泡沫(二集)	白藻社
臺灣愛國婦人(二十六卷)	臺灣愛國婦人會
雛文(詩人クライスト記念號)	雛聲堂
蝸牛(十一月號)	蝸牛吟社

眺望佳絶

即席そば料理

菊そば

其他御好みに應ず

春は花見に
夏は朝顔
大瀧ありて納凉によし

四季の草花を陳列し御高覧に供す

秋は菊見に
冬は雪見に
四季共によろし

梅壽樓
團子坂中腹

菊そば本店
電下三八五七番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

斯道唯一の演劇雜誌

歌舞伎

毎月一回一日發行
一冊二十五錢郵税一錢五厘

六冊前金郵税共一圓五十錢
十二冊二圓八十錢

第百三十八號（十二月一日發行）

新無線電話（團藏―川上）……室田武里
「金毛狐」について……坪内逍遙
「野火」作談……江見水蔭
碁盤忠信……右田寅彦
幸四郎襲名……松木幸四郎
帝國劇場を見て……長谷川時雨
「邯鄲城」物語……松居松葉
「邯鄲城」について……藤澤淺二郎
歌舞伎坐評判記（芹影女、時雨女）……
羽左衞門「盛綱」の型……森ほのほ
「堀川」を見て……
歌舞伎座藝談（仁左衞門歌右衞門）……防風子

戯曲 手袋（東京俳優學校教科用）……森鷗外

「寂しき人々」の舞臺稽古……米太郎
「寂しき人々」の演出法……林和生
「寂しき人々」を見て……芹影女
大阪浪花座の「幸田幸村」……山紫紫紅
金泉丑太郎日記「川上の活動」……伊原青々園
五代目歌右衞門懷舊談……伊坂梅雪
南京町の芝居……山野芋作
故川上音二郎……青々園
成功者としての川上君……田村成美
十一月の脚本……川村花菱
劇談會―劇壇時事―劇界一覽……

歌舞伎發行所
本郷區湯島切通坂町 畫報社内
電話下谷二四八三 振替口座一八一〇六

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

飛ぶ鷺や時雨來る夜の膝頭　抱一

俳味

十二月號

吾身ながらも……（卷頭語）
初紅葉遊覧記……梵雲寒月
連句談……森山鳳羽
素人の見たる俳人……寺澤陽風
山村……鶉澤四丁
短日……（懸賞俳句）
私解芭蕉の發句……沼波瓊音
我を啓發せしめたる……（懸賞文章）

要目

新聞社の俳味……小倉鶴峰
通り雲……レモン法師
七部集總論（續）……風雷子
口繪（煤掃）……湖龍齋筆
妻の病……沼波瓊音
附録
太白堂史の一部……太白堂桃年
惟然坊句集……曙庵秋擧

毎月一日一回發行

定價
一部　金拾貳錢
郵税　壹錢
半年分前金　郵税共　金六拾八錢
一年分前金　郵税共　金壹圓參拾貳錢

發行所
東京市本郷西片町拾番地
俳味社
振替口座　東京參四參四番

心の花

第十五卷　十二月號　第十二號

古今集の歌風　吹田潤
閑是非　呉野湖音
刹那の感　青木正
前夜の嵐（小説）　岡部千代子
鵙が音　竹柏會同人
秋の三日　高橋月畔
北漢山の秋　大橋文之
維獄　前田利定
版畫展覽會見物記　盲人
總　石榑千亦
楠緒女史を憶ふ　佐々木信綱

定價一部十三錢●半年前金七十五錢●一年前金一圓四十錢●

東京日本橋區本石町一ノ一　竹柏會出版部

振替東京四三〇〇番

辱 皇后陛下御覽 皇太子妃殿下清覽 賜

臺灣愛國婦人

毎月一回 十二月號要目 一日發行

臺灣の事情を知るに唯一の雜誌也

外國の通俗教育 石川博士

アメリカの子供 小此木まつ子

クリスマスの話 小柴教諭

婦人の覺悟 有馬教授

冬來る 伊藤左千夫

歌留多の話 一撰手

秋より冬 與謝野晶子

短歌抄 左千夫

其他、南國雜記、園藝、料理、婦界記事等

口繪 晩歸 石川欽一郎氏筆原色版

其他彩色石版 アートタイプ數十葉

小說

宮子 與謝野晶子

女教師 加納幽閑子

漂浪 太田鳴鳳

貴族の子 中川蝶夢

紙數三百餘頁定價拾五錢 郵税不要

臺灣總督府構內 愛國婦人會臺灣支部發行

東京 賣捌所

神田區表神保町 東京堂

京橋區銀座三丁目 東海堂

女子文壇

十二月號要目 一日發行

定價金拾五錢 送料壹錢五厘

● 與へられたる婦人 …… 文學博士 福來友吉

● 意味無き反抗心 …… 山脇高女校長 山脇房子

▲ 峠より、麓より …… 横瀬夜雨

▲ 夜の女 …… 中村吉藏 吉井勇 兒玉花外 三津木春影 川路柳虹

● 新しき女優の覺悟 …… 松井すま子

● 女記者の地位 …… 澤田撫松

▲ 冬の夜語 …… 坂東太郎

▲ 名流婦人の愛讀書(二) …… 長谷川時雨女

▲ 裾野日記 …… 佐野天聲

▲ 盲人鄕 …… しづか

▲ 邂逅(小說) …… 小笠原貞

▲ 山より山 …… 平塚白百合

一月元旦號豫告

新年特別號

紙數例號二倍。定價參拾錢 送料貳錢五厘

創作は第一流の作家の筆、談話は當代の識者の說、思想の方面に於ては婦人雜誌中、最も進歩せる本誌の態度は、新年號に於て殊に其の全盛を極めんとす

東京市京橋大鋸町 女子文壇社出版 (振替口座東京第壹七貳九番)

十二月一日發行

スバル

價卅五錢
郵税二錢

十二月號

雁（小說）　鷗外
い君の話（小說）　松本泰
ゲスタス（小說）　山本禿坪譯
十一月（小說）　長沼重隆譯
澪（小說）　長田幹彦
ゾラの手法について　大貫雪之助譯
むく鳥通信　無名氏
——詩——
高村光太郎
佐々木好母
佐藤春夫
堀口大學
——歌——
吉井勇
萬造寺齊
三ケ島葭子
和貝彦太郎
長島豐太郎
——寫畫——

東京神田北神保町二番
電話本局四二六四番
發行所　昴

北原白秋氏著
象徴詩集 **邪宗門** 再版
定價金八十五錢

文藝雜誌

朱欒（ザムボア）

北原白秋氏主幹

十二月號

定價一冊二十五錢

若山牧水氏著
歌集 **別離** 三版
定價金七十錢

小山内薫氏著
演劇新聲 新刊
定價金八十錢

北原白秋氏著
抒情小曲集 **思ひ出** 四版印刷中
定價金九十錢

東京市京橋區南傳馬町三
東雲堂
振替一五六一四

最良髮油

みやけ油

登録商標

家庭重寶

專賣特許 一一二九八

粉末石鹼

發賣元

東京市日本橋區人形町通

木村三宅堂

電話浪花六二〇 振替口座八七五一番

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

六巻 四千頁 學界と文壇を通じて稀有の 大著

藤井紫影 笹川臨風 佐々醒雪 沼波瓊音 著

見本を要せば郵券貳錢封入申込る可し！

新釋源氏物語

第一巻

● 挿畫五十四面 コロタイプ版 梶田半古畫

● 體裁 總革布製金模様 二面金 箱入 —— 無比の美本

● 定價（第一巻） 金貳圓參拾錢 小包料拾貳錢

特價 四千部を限り 壹圓八拾錢 小包料拾貳錢

● 初版賣切 再版出來 ● 好評嘖々

東京麹町飯田町三丁目廿五番地 新潮社 電話番町二二三番 振替東京一七四二番

入會の最好機

女子手藝講義録

普通科

本會の講義録は現代婦女界に廣大の信用あり

本會の講師は東都にたける有名なる各學校の教師と都下に於て著名の各専門家とに依り成立せるものなり

講義

△裁縫科和服洋服
△手藝用圖畫科
△割烹科和洋
△手藝教授法
△組糸科 △袋物科
△編物科
△刺繍科
△造花科
△果實科
△細工物

會費（普通科）

壹ヶ月分……金參拾錢
半ヶ年分（割引）金壹圓七拾錢
壹ヶ年分（割引）金參圓廿四錢
△摘細工

高等科

課目

△裁縫科和服洋服
△手藝用圖畫科
△割烹科和洋
△手藝教授法
△組糸科 △袋物科
△絲繡科
△編物科
△刺繍科
△造花科
△果實科
△摘工科

會費（高等科）

壹ヶ月分……金參拾五錢
半ヶ年分（割引）金壹圓九拾九錢
壹ヶ年分（割引）金參圓七拾八錢
△課外講義數種

成功の捷徑は即刻入會するにあり

▲入會規定及内容見本申込あれば無料進呈▼

入會申込所
東京日本橋角
大倉書店
振替貯金口座東京二三八番
入會支部 全國各書店

學科 壹ヶ年修了

毎月一回 發行一日

雜誌規定

○毎月一回一日發行
○定價一冊金貳拾五錢　郵税壹錢五厘
○原稿〆切期日は毎月十日限とす。
○前金購讀料(四ヶ月分)壹圓(六ヶ月分)壹圓五拾錢
八ヶ月分)貳圓(十ヶ月分)貳圓五拾錢(一ヶ年分)參圓
○廣告料　(一頁)拾五圓　(半頁)八圓
○廣告は總て卷尾のこと、但し申込の順序に依る。
○振替貯金(東京口座一一六〇)に拂込まれたし
○郵券代用は一錢切手に限る(但し一割増のこと)

明治四十四年十一月二十五日印刷
明治四十四年十二月　一　日發行

東京市本郷區駒込林町九番地
青鞜社内
編輯兼發行人　中野初

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷人　島連太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所　三秀舍

禁轉載

發行所　東京本郷區駒込林町九番地　青鞜社
(電話下谷三七七六
振替東京口座一一六〇番)

發賣所　東京市神田區表神保町三番地　東京堂
電話本局一二四
三二八

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

53 126CO XL 405
04/09 30016-162 UR HF Group
University of Colorado at Boulder
U18304 6746123
Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PL
756
W6 S45
v.1
1911

青鞜第一巻第三號
明治四十四年十一月一日發行（毎月一回一日發行）
明治四十四年八月廿八日第三種郵便物認可

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

PASCAL
Dep P Mod 2 Ran 04 Sect 11 Shelf 21 Tray 09 Item 009
Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER